となりの魔王

ナチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
となりの魔王

【Ｎコード】
Ｎ４８６８ＢＴ

【作者名】
ナチ

【あらすじ】
ある日突然、我が家に自らを「魔王」と名乗る黒くて禍々しいのが訪ねてきました。手土産の蕎麦を差し出しながら「魔王」はこう言ったのです。「本日より隣人となるが故、挨拶に参じた」
それなりの田舎町に住み着いた魔王と隣の女の子の、普通なんだか普通じゃないんだかよくわからないご近所ゆるゆる物語。更新もゆるゆる不定期です。（※個人サイトからの転載です）

ご対面の巻（前書き）

短編として投稿していたものを連載として投稿し直しました

ご対面の巻

魔王が来た。

引っ越しそばを持って来た。

ピンポンとチャイムが軽快に鳴ったからと言って、不用心に扉を開けるものではない。

いくら警察が暇を持て余す平和な町内であっても、人生に嵐が起きない保証にはならないし、時としてそれは星の墜落のように考えられない形で降ってくる。

鈴木さんの畑が土佐犬に荒らされたのも、山本さんの裏庭で不発弾が見つかったのも、三枝さんちのおじいさんに隠し子が発覚したのも、思えば全ては不測の事態だったではないか。

世の中はとかく物騒に出来ている。いつ我が身に何が起きたとしても、おかしくはないのだ。

例えばそう、玄関前に魔王が現れる、とか。

なぜ魔王と判明したのかといえば、本人がそう名乗ったからであ

る。
　それはそれは子供からお年寄りまで、老若男女聞き間違えようのない確かな発声で告げられた。
　なるほど、全身に黒く禍々しいベールをまとい、肩にはカラスを乗せ、こめかみあたりから細い角らしきものを生やしたその姿は魔王以外の何物でもなく、納得と言えば納得ではあった。だがしっくりしすぎて、逆に違和感すら覚えた。
　語尾にアルヨを使う中国人のように、わかりやすく親切でこの上なく怪しい。
「本日より隣人となるが故、挨拶に参じた」
　見上げるほどの高い位置から、地響きを感じるような重低音。
「つまらぬものだがお近づきのしるしぞ」

ぞ。

　語尾に猛烈な異世界を感じつつ、差し出されるまま受け取った。
　そばだ。私は生まれて初めて引っ越しそばというものを手にした。生まれて初めての引っ越しそばと生まれて初めての魔王。初めて尽くし、と感想を抱くには後者の存在感が尋常ではない。
「はあ、これはどうも、ご丁寧に……」
　もっと述べるべき言葉があったような気もするが、この時は他に言いようがなかった。
　漆黒のベールの隙間からのぞく、切れ長の瞳がナイフをかざすように動いた。私の背後を伺ったのだと、ゆっくりと気付く。
「家族はおらぬのか」
「え、はい、出かけてまして、今おらぬです」
　ふざけたわけでもなく、ただ気圧されてつられてしまっただけなのは言うまでもない。
　魔王は特に私の崩れかけた言葉遣いを気にした様子もなく、ものものしく言い放った。

「ならば仕方あるまい。おめおめ戻って来た暁には、くれぐれもよろしくと伝えよ」

見下しているのか敬意を払っているのかまるでわからない。

ただその時の私は思考の焦点をどこに合わせていいものか完全に見失っていたので、蕎麦は何人前なのだろうかと下から数えた方が早いくらい低い優先順位の事項に意識が向っていた。

混乱を極めた時に脳が正常な判断から逃げる手段なのだと、薄ら気付いてはいた。色々と限界だった。

「ときに娘」

「は」

「このあたりは治安が良いとみえるが、留守を守る身でありながらやすやすと門を開くは感心せぬな。若い娘が警戒心の足らぬことよ。以後気を付けるがいい」

颯爽とマントを翻し、魔王は去って行った。

カラスの羽がはらりと舞うのを見ながら、玄関のドアを閉じる。

隣人？

閃光に遅れを取る雷鳴のごとく、放たれた単語が時間差で私に落ちてきた。

◆

果たしてこの白昼夢とも言える出来事を、いかに伝えれば事実として信じてもらえるものか、白い目で見られずに済むかとひどく頭を悩ませたが、母と祖母は話を聞くなり「あら、そうなの」と淡泊にもほどがある受け答えで私の煩悶を一蹴した。

ほんの少しは目を丸くしていたようだが、私が食らった鳩に豆鉄

砲との差を考えると億単位で豆の数が違う。もっと狼狽してもいいはずだ。少なくとも持っていた買物袋を思わず落とすくらいのリアクションは欲しい。

しかし二人とも落とすどころか卵が入っているからと普段より慎重に袋を抱えて台所へと向い、生ものから順に冷蔵庫にしまったかと思えば、てきぱきと夕食の準備を始めてしまった。

さては真面目に取り合っていないのかと疑ったがそういうわけでもなく、食卓に並ぶおかずの一品であるかのように、ごく自然に咀嚼するのだった。

これ少しかたいわ。そう?あ、おばあちゃん醤油はそこに。もう漬物なかったかしら。夏織テレビ少し小さくして。そういえばわざわざご挨拶に来て下さったのに、魔王さんに悪い事しちゃったかねえ。

その流れでこの会話。

漬物と同等に扱うには少々荷が重い話題と思われたが、受け止める側の母にも特に動揺は見られなかった。

それはさながら、親戚のじいさんの入院を心配する程度のテンションだった。

いつもと変わらぬ夕食のだんらんに飲み込まれつつ、私は箸を持ったまま母と祖母のやり取りを見つめていた。

「お隣決まって良かったわねえ」

「ずっと空き家じゃ味気ないもの」

それまで暮らしていたおばあさんが足を悪くして、遠方の娘夫婦の家に移り住むようになってから、一年ほどの間お隣さんは住む人もなく空き家のままだった。建物と建物が寄り添うように建つ都会と違い、私の住む町はたっぷりと土地を挟んで住居が並んでいる。

お隣さんと一口に言っても、田んぼ三つ分くらい離れていることなどザラである。特別資産家というわけではない。人口に対して土地が余っているのだ。

当の我が家もお向いは公園と言う名の空き地であり、魔王と反対側の隣はというと、祖母が趣味で手を入れている家庭菜園にしては大きな畑と草木生い茂る野生のガーデニングが隣接している為、住宅同士はそれなりに離れている。

実質、隣人と呼べる距離にあるのは魔王の邸宅しかない。

隣からすっかりひと気が消えて、なんとなく寂しいような気がしていたのは確かである。

そういう意味では空き家でなくなったことは喜ばしいニュースかも知れないが、諸手を上げて歓迎できる内容でもあるまい。越して来たのは気のいい若夫婦でもなければ、上品そうなおばあさんでもない。なにやら全体的に黒くてカラスを従えていた。

「一度改めてこちらからご挨拶伺ったほうがいいかねえ」

「でも却って負担になるかもしれないし」

「そうだけど、これからお隣さんになるわけだから」

「今度とれた野菜でも持って行ったら？」

祖母が目を細めて、そうねそれがいいわねと嬉しそうに手を合わせた。

「おかしな人が越してきたら色々ねえ、大変だけど」

「身元がしっかりしてるから安心だよ」

ほんとほんとと二人は和やかに、お喋りに食事にとせっせと口を動かす。

魔王の身元とはなんだ。公務員か。

このようなノリを目の前で繰り広げられると、私が考えている魔王と彼女達の言う魔王が合致しているのかも疑わしい。

いわく、身元のしっかりとした、安心の存在である、「魔王さん」が我が家に襲来した時のことを今更ながら思い返した。

見慣れた玄関の風景が、ラスボス襲来の図に置き換えられたこと。裾を踏むほどマントが長かったこと。律儀にもインターホンを鳴らしたこと。これまで聞いたことのない音を奏でてドアが開いたこと（確かゴゴゴと唸った）（うちのドアはどうなってしまったのかと

思った）

ただ、丁重に蕎麦を携えて挨拶に訪れたことは評価したい。手みやげが蕎麦である必要はないが、近所付き合いをスムーズにするには顔見せは必要不可欠な儀式だ。何だか知らない内にわけのわからないのが引っ越してきたと認識されるより、お互いの為になる。

うっかりそこまで考えて、脳内の映像を巻き戻して思いなおす。

待て待て待て。

「でも角生えてたんだよ」

釘をさすように少し強い口調で口に出すと、祖母も母もきょとんとした顔で私を見たかと思えば、声を立てて笑いだした。

「真面目な顔でなに言い出すかと思えば、当たり前じゃない」

「そりゃあ角くらい生えてるわよ魔王だもん」

やだわこの子ったらアハハウフフと互いに肩なんか叩き合っている。やけに楽しそう。

一つ屋根の下で長らく暮らしているが、ここまで疎外感を感じた記憶は未だかつてない。

確かに魔王に角があるのは不思議でもなんでもないだろうが、その魔王が隣に居を構えることは世の常識にてらして考えてみれば相当奇奇怪怪なのではないか。

「いやいやいや角がどうとかっていう以前にね？魔王だって名乗る人が隣に、ていうか普通に引っ越してくるって、おかしくない？」

「なに言ってんのいまさら」

「そんなに珍しくないでしょ、ここらあたりじゃ」

魔王遭遇以上の数の豆鉄砲を浴びた。

生まれてこのかたこの土地で暮らしてきたが、そんな話は聞いたことがない。

目を白黒させている私を見て、やだ本当に知らないのこの子と母は呟きながら、サーモンの塩焼きに箸を入れた。身をほぐすとほどよくのった脂が溢れ出し、芳醇な音をたてる。その横で長いもの漬物を噛んでいた祖母が、ようやく飲みこんで会話を追った。

「ここで暮らしてれば自然と耳に入るもんだと思ってたけどねえ」
箸を置くことなく、祖母は続けた。
「土地柄かね、昔から時々魔王さんが現れては滞在して行くんだよ」
語りかける口調は、まるで村長がいろりを囲んで聞かせる昔話のよう。竜にまたがった童子がでんでん太鼓をふりましながら脳裏をゆっくり過ぎて行った。
「何するわけでもない、ただ普通に暮らすだけ。何日間、時に何十年。それで用がすんだら地元にお帰りになる」
まあ地元ってどこか知らないんだけど、と祖母がカラカラと笑った。
「私も子供の頃一度だけお目にかかったことがあったけど、特に驚きもなかったわねえ。異人さんに会った時の方がびっくりしたぐらい」
その人にも角は生えていたらしい。
ただ長く上に伸びるタイプではなく羊のようにぐるりと渦巻くタイプだったそうだ。タイプって。
太刀打ちできない鷹揚さに投げかける言葉が思い浮かばず、一言「なんで？」と問うた私に、祖母は少し弱った様に微笑んだ。幼児のどうして攻撃に立ち往生している大人の顔だ。
「なんでって言われてねえ。そういうものだから」
しょっちゅうでは無いけど、このへんじゃあ当たり前のことだから誰も騒ぎ立てないの。
母もそうそう、と頷いて見せる。
もう、私に切れるカードは残っていない。
そういうものだという認識で成り立っている事柄に、なんでどうしては通じない。そういうものだからだ。
正月に餅を食べるのは当たり前で、そこに疑問を差し込んだことはない。急に何故だと問い詰められても、これまで真剣に考えたことがないので説明のしようもない。魔王の訪れもこの土地にとっては正月の餅と同じなのだろうか。

なんとなく納得せざる得ない気持ちと、いやだって魔王だよびっくりするよどういうことだよという消化しきれない思いが、味噌汁に溶け残ったとろろ昆布のように入り混じった。

「魔王さん町内会入るのかしら」

「入るでしょたぶん」

魔王と町内会という言葉のぶつかり稽古に、今更であるが味噌汁を噴きそうになる。というか、入るのかよ町内会。

町内会に入るとなれば回覧板が回る。我が家においての回覧板役は他でもない私だ。現在は空き家の為に飛ばしていたが、もし町内会に加入した場合、魔王に回覧板を回さねばならない。

味噌汁を飲みこむ喉が、大きく音を立てた。

良かったわね、と母が微笑みながら椀を置く。

「三枝さんのお宅まで回覧板回すの遠かったじゃない。ほら川もあるし。これからはすぐ横よ」

なるほど。

たったそれだけのことで、一瞬でも「それは助かる」とまんざらじゃない気がしてしまった自分の単純さを、私はどうしようもなく恨めしく思うのだった。

回覧板の巻

田舎の店じまいは早い。
年寄りの朝は早い。
そして町内会の仕事も早い。

次に回覧板が回ってきた時には、当たり前のように名簿には、かの名が連ねられていた。やはり、隣人はご丁寧に会費を納め、町内会に加わったらしい。昨今町内会や互助会などの面倒事を厭う若者が多いなか律儀なことである。年齢はおろか出身や戸籍もろもろ不詳であるため、おいそれと若者に分類して良いものかどうかは判断に困るところだが。

回覧板の回覧順は、基本的に住居の並びや距離に準ずる。そのルートに追加された新入りさんに、隣接した我が家が回覧板を回すのは順序としてごく自然なことではあった。ただ「三枝」や「鈴木」や「瀬野」の苗字に混じって「魔王」が肩を並べている回覧表については、自然と言い切って良いものかどうか。ちなみに「瀬野」が私の苗字だ。「魔王」はそのすぐ下で、同じゴシック体と思えぬ重厚な存在感を放っている。

昨日鈴木さんが運んできたおすそわけのりんごと回覧板を目にして、私は身構えた。先日、不意打ちで人の度肝を二つ三つ抜いていったあの魔王の巣に、ついに自らのこのこ出向く任務が発生してしまったせいである。母と祖母はあの通りなんの警戒心も抱いていない様子なので、こわいっす、気が進まないっす、と弱音をこぼしてもまともに取り合ってもらえないだろう。

他のご近所にしてもそれは同じで、町内会にスムースインしてしまったことからも伺えるように、のどかで刺激のない田舎町は騒然とするでも猟友会が動くでもなく、あら、空家じゃなくなったのね、めでたしめでたし程度の反応に終始し、狼狽の欠片も見当たらない。２４時間営業のコンビニが建った時の方がまだ湧いたものである。どういうことなんだ。おかげで、私ひとりが及び腰という実に理不尽な状況に置かれている。

昨日の夕方回ってきた回覧板を、今日のこの時間まで放置してしまったのもそういう事情からだ。誰とも分かち合えないまま孤独にビビっていた。しかしいつまでも回覧をせき止めているわけにはいかない。三枝さんを初め魔王以降のお宅にご迷惑をおかけしてしまうし、ここで握りつぶしたところで回覧板は滅びぬ。何度でも蘇ってくるのだ。いきいき健康・太極拳講座のお知らせとか。

すでに日曜は後半にさしかかっている。行くなら今しかない。魔王と名乗る相手の本拠地に、日が暮れてから伺うなんて、そんな蛮行まさか。失礼以前に、闇に乗じて魔界と繋がったり禍々しい儀式に行っていたりなどの恐ろしい魔属系イベントに巻き込まれそうでいやだ。

よし。行くぞ。行くったら行くぞ。行きたくないけど行くぞ。ようやく腹を決めた私は、夕方特有の気だるさを引き連れて家を出た。

魔王邸宅は一見するところ、至って普通の佇まいである。それもそのはず、ほんの一年前まで人の良い老婦人が手入れしのんびりと暮らしていた、まごうことなき一般住居。さすがに魔王の住処になったからといって、天をつく塔になったり、不気味な蔦に覆われたりという変貌は今のところ遂げていない。ただカラスが多いのが気になる。

不穏な鳴き声を耳にしながら、私はインターホン相手に一人相撲

をしていた。指を伸ばすものの、触れる直前で引き返してくる。数えて六回、さっきからこれを繰り返している。心の準備が我ながら長い。

正直ドアノブにでもかけて帰りたいところだが、そっと置き去り戦法が許されるのは留守の場合のみである。原則的に、一度は在宅を確かめるのがこの町内での暗黙の回覧板ルール。

結局、私の迷いに迷った指が、えいやとベルを鳴らしたのは、人様のお宅の前で繰り広げるにはそこそこ長い五分三十秒後のことだった。呼び鈴が響いてから数秒、どうか留守であれ～～不在であれ～～と心から祈りを捧げる。が、しかし、間を置かずして聞こえてきた扉越しの声によって、虚しく打ち砕かれた。

「誰ぞ」

鼓膜に直接囁くような低音は、一度聞いたら忘れられない。

居たのか……

落胆しつつも、私は軍の新入りのように背筋を伸ばした。

「あ、え、となり、隣の瀬野であります。隣の」

曲者ではないと伝えんとするあまり、執拗に「隣」をアピールしてしまった。蕎麦を手に挨拶に来たくらいだから、隣人の存在くらい覚えているはず、という希望にすがった。

ドアノブが回る。

ゴゴゴと、ドアはあの日のように穏やかでない物音を立てて動いた。魔王の手にかかれば、どの扉も分け隔てなく物々しさを帯びるのだろうか。しかしその重厚な演出とは裏腹に、ドアは１５センチほどしか開かなかった。

魔王、ドアチェーンかけてる。

田舎には稀な徹底した防犯意識。さすが初対面の人間に上から目線で用心を説くだけはある。警戒心の強い一人暮らしのＯＬか。

「何用か」

１５センチの闇から冷え冷えとした瞳が光った。ドアチェーンの関係上、片目だけしか見えないが、やはり異様な凄みがある。
「回覧板です」
「ほう……」
一体何が、ほう……なのかはわからないが、とにかく渡してしまえば解決だ。
回覧板というより機動隊の盾に近い格好で抱えていたそれを私が隙間に送り込もうとした時、前置きなく扉が閉じた。え、と思うが早いか、一気に大きく開かれた。
「ごくろう」
急に暗くなった視界に思わずのけぞった。さきほどまで１／３ほどしか見えなかった魔王が、今や３／３の状態でそこに立っている。夜の色をしたベールが波を打ち、吸い込まれるように見上げた。
魔力を帯びていそうな長い髪、目から頬にかけて真っ直ぐに走る傷、心持ち尖った耳は不吉そうな装飾品で飾られている。唯一肌だけは抜けるように白いが、身にまとう闇の装束がそれを極端に際立たせ、人ならぬ迫力を生んでいた。改めて見るとつくづく「魔王」たる風格である。平和な庭付き一戸建てではなく、地獄の玉座あたりを背景に据えなければとても釣り合いが取れない。そういえば今日は肩にカラスをのせていなかった。外で鳴きわめいている群れにでも混じっているのだろうか。
こちらの不躾な視線など意に介した様子もなく、魔王は渡された回覧板をじろじろと眺め、長い爪でバインダーにはさまれたお知らせの類をめくっていた。
似合わねえーと心中で感想をもらしていると、それを見透かすように鋭い目が私を刺した。
「この回覧板とやらは」
「えっ、はい」
「いかに始末するが望ましいか」
「始末！」

目を白黒させた私を見て、遥か高い位置にある魔王の目が胡乱げに動いた。

「余の手に落ちれば、その務めを終えるわけではあるまい」

「……え、ああ」

直後、この黒いのは何を言っているのかと瞬きを繰り返すしか出来なかったが、黙って私の言葉を待っている鋭利な美貌を見上げている内に、なんとなく理解した。このあとどうすればいいかと、恐らく尋ねているのだ。

「えっと、中身確認したら回覧した日付を記入して、次の人に回してください。魔王さんの場合、次の人は三枝さんになります」

回覧表を指差しながらそう伝えると、魔王は自身の顎に爪を這わせながら重々しく頷いた。

「成る程、よかろう」

さすが無駄に偉そうというか堂々とした受け答えではあるが、逆にどっしり構えすぎていて不安だ。念のため、三枝さん宅を把握しているか聞いたところ、やはりというかなんというかわかっていなかった。全然よかろうじゃない。

「あの川の向こうの、青い屋根が三枝さんです。犬が6匹いるんで気をつけて。噛んだりしないけどたまに群がってきます」

途中まで大人しく聞いていたのに、犬について触れた途端、魔王の耳はぴくりと大きく震えた。

「く、番犬とは片腹痛い。余の敵に非ず」

「はあ、いやまあ、事実敵じゃないんで……」

チワワだし……

三枝家の方角を向いたまま魔王は不敵な笑みを浮かべている。何が魔族の長に火をつけてしまったのか、人間の小娘風情には知る由もない。揉め事が起きなきゃいいなとこっそり案じた。それはともかく、使命は果たしたことだし、もう帰ってもいいだろうか。

そろりそろりと後ろ足で後退を始めた私は、魔王の背中に一言「それでは私はこのへんで」とおいとまの台詞を吐き、踵を返そうと

した。
「待て娘」
だめでした。
「へ、へい」
その場で足を止めて様子を伺うと、顔だけ振り向いた魔王が近う寄れとばかりに手招きするではないか。仕方なく私は渋々と巻き戻しの要領で下がった分だけ歩みを戻した。頭上に冷然とした声が降ってくる。
「芥のはからいについて造詣は深いか」
「は？」
盛大に首をかしげてしまった。意味を求めて見上げるも魔王の顔色は変わらない。
「あの、もうちょっとわかりやすく」
「察しの悪い娘だ」
「いや普通わかんないです」
「屑物の扱いを熟知しているかと質している」
回覧板の時といい、どうも言い方がまわりくどい。腕を組み、真剣に思案することおよそ１０秒。
「……ごみの捨て方知ってるかって話……？」
「そう述べている」
それならそうとストレートに言って欲しい。なんだよ芥のはからいって。
「ごみは半透明の袋にいれて収集所に捨ててください。必ず分別して」
「分別」
「燃えるゴミとか燃えないゴミとか」
「火炎魔法にかかれば大方のものは跡形も残らぬぞ」
「分別の基準は、燃やそうと思えば燃えるみたいな力技じゃないんで……あとそれ消防が飛んできます」
隣でボヤ騒ぎは困る。魔王はわかったようなわからないような曖

昧な表情をしていた。
「しばし待て」
玄関の奥に引っ込んだかと思えば、すぐに何かを抱えて戻ってきた。
「余の屋敷にはびこるこれらを見るがいい」
手にしていたのは潰した段ボール。
魔王、荷造りに段ボール使うのか。割と普通の引越しだな。
垣間見える生活感にもう少し注目をしたいところだが、魔王が確信に満ちた顔で「これは燃えるゴミに属すると結論づけて良いな」と語り出したので、私は首を振り「段ボールは段ボールゴミという分別です」と断じねばならなかった。魔王は敵に背後でも取られたように「なに……」などと呻き、たじろいでいた。確かに、よく燃えそうなこの厚紙が燃えるゴミとして括られないのは意外に思えることだろう。しかし家庭ごみの分別はそう単純にできてはいない。
「他にプラスチックとかペットボトルとか空き瓶空き缶とか、だいたい8品目くらいに分けられますね」
魔王の顔が途端に険しくなった。呼応してか、カラスの群れがいっせいに甲高く鳴きわめく。
彼の気持ちはわからんでもない。高齢者などはこの複雑な分別システムに未だ翻弄され、ゴミ箱の前で右往左往しているという。燃えるゴミ燃えないゴミの段階でつまづいている魔王なら尚の事、混乱しないわけはない。
「町内会入る時に冊子はもらいました？」
「打ち捨てられた残骸の末路を記した書か」
「壮大だなー！」
ゴミ収集の手引きをそう表現された日には、思わずタメ口にもなる。魔王はそれに気を悪くするでもなく、騒ぐカラスを一瞥し黙らせていた。
「ごみの分別方法とか収集時間とか、あの冊子読めば大体のことは書いてありますから」

「ほう」
「曜日によって捨てるゴミが違うので、収集カレンダー確認してください」
「覚えておく」
「ビンとか捨てる時はラベルは取って、開け口がプラスチックだったらそれも外して、それぞれ該当の処理を」
「なに」
「あ、粗大ゴミはまた別の手続きが必要です」
「……！」
　またしても魔王の顔が邪悪にひきつる。怒りではなく失望に近い。これがいわゆる、魔王のライフはもうゼロよ、という状態に違いない。段ボールはもとより、ビニールの類やクッション材に新聞紙など、引越しはとかく不用品が大量に出るものだ。しばらくは慣れないごみの始末に忙しく追われることだろう。髪の分かれ目から覗く白い額に指をあて、魔王は気だるげに息を吐いた。
「障りの多いことだ。ままならぬものよ」
「まあ一応ルールなんで。破るといろいろと面倒なことになりますし」
　軽い調子でそう言うと、魔王はわざわざ私に向き直り、ゆっくりと大仰に頷いてみせた。
「案ずるな。余は盟約を違えぬ」
　いちいち重い。
　たかだか分別するとかしないの話も、その顔と声で物々しく語られると血の掟のごとく響く。さっきまでリビングでところてんをすすっていたというのに……と日常と非日常の温度差を肌で感じながら、私は意味のない笑みを浮かべた。ははは。多くの場合、困惑のシーンは苦笑いがクッションの役割を果たしてくれるはずだ。下手な笑顔を貼り付けたまま、今度こそその場から離れようと背を向けた。
「娘、名はなんという」

振り返れば、いつ飛んできたものか、黒いベールの肩に止まったカラスが羽を畳むところだった。やはり覚えていないのかと脱力し、訪ねた時と同じように「瀬野です」と名乗ると、魔王は「そうではない」と言ってわずか目を眇めた。

「瀬野とは代々受け継ぐ一族の名であろう。そなた自身の名を申せ」

「あ、夏織です。瀬野夏織」

「カオリか。心得た」

地響きにも似た声が私の名の音を奏でる。果たして魔の者に名前をやすやすと告げて良かったのか。薄い唇からちろりと覗いた牙に漠然とした不安がよぎったが、もう遅い。自ら教えてしまったそれは魔王の舌先で転がされた。今になって相手が人ではないことを思い出した私は、慌てて身を翻す。

「カオリ」

逃げ足の一歩目を魔性の声が制した。

首筋にひやりと汗が。

「ごみ収集所とは何処ぞ」

再びUターンを強いられた私は、結局収集所まで案内し、カラスよけのネットを被せる講義までワンセットで行った。余の使い魔は残飯など漁らぬと不満げな魔王を説くのに思いがけず時間を要し、私の日曜は日暮れとともに消えたのだった。

スーパーマーケットの巻

「卵あったっけ」
「昨日使い切ったよ」
「コーンフレークはあったよね？」
「ない。今朝全部自分で食べてたじゃん」
「あ、ツナ缶安いわこれ」
「はい待ったーうちに3連パックが5個ありますー戸棚に入りきらないですー」
特売のツナ缶に伸ばしかけた母の手は素直に引っ込んだ。が、すぐにその手は真横に並べられていた同じく特売のトマト缶を三つほどつかみ、ガコンガコンと荒っぽい音ともに買い物かごに放り込む。ツナ缶を阻止したところで戸棚の扉は閉まらないと悟り、私は大人しく買い物カートを押すことに専念した。
母の買い物はいつも大雑把だ。あまり吟味してカゴに入れるということがない。基本的に「大は小を兼ねる」という思想の持ち主なので、必要量を上回る買い物が常である。
「夏織、あれなんだっけ。何とかっていう番組でやってた何とかっていうやつ」
「わからん。手がかり少なすぎて全くわからん」
「ほら、あれ、ホットケーキにみりん入れるとお店の味になるって」
言うが早いか、すでに窮屈そうにひしめいている買い物かごに、新たにホットケーキミックスが三箱投げ入れられた。お店の味はいいが何枚焼く気なんだ。

ここ、町で唯一のスーパーマーケット・サンダースは車で十分ほどの距離にある。
家電や衣類などサンダースでは事足りない場合、更に30分ほど

走らせて隣町の大型ショッピングモールに出向くが、食品や日用品をはじめとした日々の買い物はほとんどの町民がここで間に合わせている。ここらあたりの家庭の食卓はこのサンダースが支えていると言っても過言ではなく、行けば必ず誰か彼か顔見知りが買い物客として訪れていたり、同級生の親が店員として働いていたりと、知り合い遭遇率は極めて高い。ちなみにオーナーが三田さんなのでサンダースらしい。

「瀬野じゃん」

言ってるそばから早速知り合いとエンカウントだ。カゴから落ちそうなホットケーキミックスの箱を支えていた私にそう声をかけてきたのは、同じクラスの宮間くんだった。同じクラスとは言っても、田舎の高校なので二クラスしかないのだが。

「あら司くん、いい色に焼けたわねー甘栗みたい」

「おばさんこの前もおんなじこと言ってたし」

「あれそうだったっけ」

小学校の頃からの縁ともなると家族ぐるみでのお付き合いに慣れきっている為、双方あまり遠慮がない。

母と特に実のないやり取りを交わした宮間くんは片手にマヨネーズの入った買い物袋をぶら下げて、ちょいちょいと手招きをした。カートを母に預けて近づいていくと、宮間くんのつり気味の目があたりを伺うように注意深く動く。それから小声でこっそりと。

「なあ、お前見た？」

「なにを？」

宮間くんは更に声を落とした。

「ダースベーダーみたいな奴が店内ウロついてんだよ」

「ダッ？」

一瞬声が裏返った。このろくすっぽ娯楽のない町にダースベーダーが降臨とはにわかに信じがたい。

「ちょっとこっち来てみ」

宮間くんは有無を言わさず私の腕を取り、生鮮食品のフロアまで

引っ張っていったかと思えば、陳列棚の影に身を隠した。「ほら、あれあれ」と示される人差し指と目配せに急かされて視線を向けると、なるほど、彼の証言通りの光景が確かにあった。

ダースベイダー的な奴、精肉コーナーに現る。

買い物かごを手に、特売の鶏肉６８円の前で仁王立ちである。私達に背を向ける格好で立っているため後ろ姿しか確認できないものの、５がつく日はゴーゴーデー！　とかなんとか陽気な曲が流れているような店内では、ちょっと目を引くどころでは済まない風体だ。主婦を中心とした周りの買い物客と比べ、そこだけ格段に合成画像のごとく浮いている。

フードを頭からすっぽりと被り、黒魔術のようなマントを引きずっているその姿。確かに彼が言うようにダースベーダーに見えなくもない。しかし私には黒い壁と化した不吉な背中に心当たりがあった。

「あれ、ダースベーダーじゃないと思うんだよね」

「じゃあなんだよ」

当然の質問ではある。私は何故か、身内の奇行を目撃されてしまったような決まりの悪さを覚えつつ、ぼそぼそと口を開いた。

「……うちの、隣に来た、魔王」

「あ、あー魔王な。なんだ」

宮間くんは「はあ？」と問い返すでもなく、私の正気を疑う反応を示すでもなく、むしろどこかがっかりした気配さえ漂わせて、腑に落ちた顔を見せた。ダースベーダーには興味を示していたくせに魔王と判明した途端、幽霊の正体見たり枯れ尾花とばかりにテンションが下がる意味がわからない。一体何が違うと言うんだ。私にしてみればダースベーダーも魔王も同じくらい遥か遠い星の住人で、引き合いに出すのもおかしな話だが河童の方がまだ現実味がある。

私たちの声が地獄耳に触れてしまったか、突如、鶏肉を物色して

いた魔王の首だけぐるりと後ろに回転した。物陰に隠れることをとうにやめていたせいで、誤魔化しようがないほど完璧に目が合った。

強引に見なかったふりをしてスー……と陳列棚の奥に消えていくのも今更不自然でしかない。私は今さっきこそこそと観察していた不審さを笑顔の裏に押しやり、無難な挨拶を決めようとした、のだが。

「カオリ、そなた余をたばかったな」

ずい、と一歩を踏み出してきた魔王はそんなことを言ったのである。体躯に比例してその一歩は大きく、瞬く間に目前にまで迫った。つい飛び引きそうになったが、ちょうど私の背後に陣取っていた宮間くんが妨げとなってそれは叶わなかった。

「たばかったとは、一体なんのお話で」

心当たりはない。全くない。わざわざ一番厄介そうな相手を選んで陥れるわけがない。

魔王は冷たい刃を思わせる瞳をひたりと私に向けた。

「三枝の根城にそなたが言う獣などおらぬではないか」

「え？　ああ、犬？」

「屋敷に近づこうものなら番犬どもが束になって襲いかかるとそなたが申したのであろう」

三枝さんを訪ねるにあたっての心構えとしてそう忠告したのは間違いないが、少しばかりニュアンスが捻じ曲がって伝わっているような気もする。

「誰がいました？」

「女だ。若くはない」

「それお嫁さんですね。多分おじいちゃんが留守だったんじゃないかな。いるときは庭に柵立てて走らせてたりするんですけど、基本は室内飼いだから」

私がそう説明すると、魔王は憮然としたままとりあえずといった感じで頷いてみせた。その様子は剣呑というよりも、不貞腐れたような子供じみたもので、違和感を覚えた。

おや。これは。騙されたことに怒っているというよりも。
「へー魔王、犬見たかったんだ？」
呼び捨て！
ごく自然に会話に加わるだけで敢闘賞だというのに、こともあろうに敬称略してのけた幼馴染の蛮勇に目を剥く。こやつは鉄の心臓かとハートの震えが止まらない。
幸い魔王に無礼者を手打ちにする意思は見られず、顎に手を添えて問いに答えあぐねていた。いささか難しい顔をした魔王はひと呼吸おいて。
「……あの毛玉どもの手触りと愚かなまでの忠誠心は、まあ、悪くない」
なんだただの犬好きか。前回見せた妖しい笑みはワンワン天国に対する期待にテンションが上がり過ぎただけか。うっかり恨みでも買ったかと一瞬すくみあがった自分が虚しい。
魔王はというと、何事もなかったように顔つきを美しく整え、下々の者を睥睨する覇者の視線をもたげた。拍子抜けする間もなく、眼光が全身を照らしていく。ただ主な標的は私ではなく、呼び捨ての男・宮間くんの方だった。
「その者は瀬野の一族か」
無遠慮な視線をたっぷりと這わせてから魔王がそう口にしたので、思わず私たちは顔を見合わせた。宮間くんと私は顔のパーツひとつ取っても全く似ておらず、与える印象もまるっきり違う。生まれて初めて受けた誤解に、私たちはそれぞれ苦笑いで否定した。
「俺が瀬野の？　まさか」
「宮間くんは近所の友達です」
ほう、と魔王は大真面目に呟いた。
「カオリとそう変わらぬ身の丈ゆえ、さては弟と」
あ。
傍らの空気が冷える。私は真顔のまま青ざめた。
魔王が言うように宮間くんは男子にしては小柄な方で、私と同じ

くらいの背丈しかない。年齢を考えればこれからいくらでも伸びるだろうし、そう悲観するような時期ではないと思うのだが、男にとって軽視できない問題らしく、己の身長についてそれはそれは過敏になっているのである。ある意味禁句だ。今の発言はそこに手づかみで触れた。

場の空気を見事凍らせておきながら、魔王はどこ吹く風で更に暴言を重ねていく。

「年格好を鑑みるとそなたはどうも丈が足らぬようだが、何かの罰によるものか」

「おいこいつ殴っていいのか」

「いやそこはぐっとこらえて」

魔王相手にグーはまずい。

額に青筋を浮かせている宮間くんをとりなしつつ、せめてものフォローとして「悪気はないんだよたぶん」と小声で囁くと「悪気ないから手に負えねえんだよ」と忌々しく打ち返された。ですよね。

肩書きに「王」がつく存在に矮小な人類のナイーブな問題など伝わるはずもなく、魔王は人間で言うところの「きょとん」というべき表情で私たちを見下ろしていた。きょとんじゃないよ。板挟みの私のいたたまれなさも考えて欲しい。が、人里に降りたてほやほやの魔王に、言葉を選べる器用さなど期待できようはずもない。だからこそ初手からコンプレックスに塩をねじこむという荒業をやってのけたのである。恐るべし魔族の無神経。

と、その時、場にそぐわぬ軽やかなメロディが三者に割って入った。宮間くんの胸ポケットから奏でられたそれは、彼が手に取る前にほどなく沈黙した。宮間くんは面倒そうに取り出した携帯を開いて、それから「げ」と短く呻いた。

「やべーマヨネーズまだかって」

手にした買い物袋を思わず見やる。本人も忘れていたようだが、どうやらおつかいの途中だったらしい。にわかに慌てだした宮間くんは出入り口に向かって身をひねった。

「すげえキレてるっぽいし俺帰るわ。そんじゃな瀬野」
「うん気をつけてー」
「帰路を急ぐがいい、小さき者」
「覚えてろよてめえー！」
下っ端チンピラのような捨て台詞を残し、宮間くんは足早に消えていった。彼は足が早い。最近は落ち着いているが手が出るのも割と早い。過去には、渡り廊下ですれ違いざまにコマネズミみてえ、とのたまった先輩をぶん殴ったというホットな逸話もあるので、重々口には気をつけてもらいたい。私は溜息をついて魔王を見上げた。
「だめですよ宮間くん背が低いの気にしてるんだから……」
「解せぬな。小回りがきいて使い勝手がよかろう」
どこかで似たような言い回しを聞いたような気がすると思ったら、先日訪れた新車販売の営業マンが軽自動車について同じ評価を下していた。
「それ本人には絶対言わないでください」
怒髪天をつく予感しかしない。
恐らく半分も理解できていないであろう魔王は、否とも応とも返事せず、わずか首をかしげるだけにとどまった。そのまま頭部に手を伸ばし、漆黒の髪を肩に落としながらフードを取り去れば、顕になった白い肌と赤みを帯びた傷が爛々とした灯りを弾く。そこにはめ込まれた両目が何かを探し求めるようにして虚空を何度かさまよっていた。
「カオリ、小麦粉は何処で手に入る」
「あ、この先です」
方向を示しつつ先導すると魔王は大人しく私のあとをついてきた。

何の気なしに魔王の手元を覗くと、カゴの中には、先ほど選んでいたらしき鶏肉に玉ねぎや人参、カレールウが二箱。そのどれもが特売品であったり、値引きシールが貼られていたり、もれなくお買得な品ばかりで、うちの母よりよほどしっかりした買い物をしてい

る。買い逃しのないよう、チラシまで持ち歩くという徹底ぶりだ。
「今夜はカレーですか」
魔王はひとつ頷き、よくぞ見抜いたと口元に不敵な笑みを添えていたが、これほど推理しやすいラインナップもない。
「隠し味加えるとおいしいですよ」
「隠し味とは」
「うちはココアとかインスタントコーヒーを入れムホ」
途中で飛んできた白く平たいものによって、私の発言は呼吸ごと封じられた。魔王の手のひらは大きく、私の口はおろか目鼻すらたやすく蓋をしてしまえるだろう。カオリ、と牙を擁した唇が開く。
「警戒心が足らぬという余の忠告を忘れたか」
「ムホ」
覚えてはいるが塞がれているので答えようがない。
身をかがめた魔王は、その迫力の面立ちを息が触れそうな距離にまで近づけると、声に険しさを滲ませた。
「このような誰が聞き耳を立てているともわからぬ場で、軽々しく秘伝など口にしてはならぬ」
身を滅ぼすやも知れぬぞ、とまで言い添えられてしまった私のこの時の心境、果たしてお分かりいただけるだろうか。ひととき息苦しいのも忘れて、ただ「ＯＨ……」と異国の感嘆が抵抗なく口から滑り出す始末である。口が遮断されていたので外に出ることなく喉の奥に戻るだけだったが。
私は巻きつくようにして塞いでいる魔王の手を両手で剥がし、肩で息をしながら首を振った。
「秘伝ってほど、大それたものじゃ、ないし、どこの家庭でも、やってることなので、」
「まことか」
「まことです」
「奪われたが最期、四肢の自由を失うということも」
「ないです」

もう少しソフトな例え話をお願いしたい。

左様か、ならばよし、と尊大に胸を張った魔王から謎の許可が下りて、私はようやく先に進むことができた。なかなかどうして、生きづらそうな御仁である。

目当ての小麦粉（これも今日の目玉特売の品である）を無事かごに入れ、私は母と合流するべく、魔王は会計を済ませるべく、レジへと向かった。その道すがら、壁に貼られているチラシが目にとまり、私は咄嗟に会計待ちの列に並ぼうとしていた魔王のマントの裾を引いた。が、魔王が振り返る速度は遅い。王たる者のゆとりなのか、この人はいかな動作もやけにゆっくりである。普通の人の倍ほどの時間を要して振り返りきった魔王に、私は買い物かごの商品を指差しながら告げた。

「これ、カレー二箱買えませんよ」

指でバツのマークを作ってみせると、魔王は「む」と言って、眉間に皺を寄せた。

「なにゆえ」

「おひとり様ひとつみたいです」

魔王が折りたたんで手にしているチラシを目の前で広げさせて注意書きを見せる。目を落としてそれを確認した魔王は再び綺麗に畳んで脇に差し込んだ。眉間は未だ刻まれたままで、今ひとつ納得できない様子が見て取れる。

「一つなどと狭量なことを申すな」

「私に言われましても。一人でも多く買えるようにっていう店の配慮というかお約束というか」

「掟か」

「まあそんな感じです」

「ならば抗えぬな……」

苦悶の表情でカレールーに手を伸ばす様は、志半ばで撤退を余儀なくされた一国の将といった風情である。強き者の弱り落ちた姿は

人の心を惑わせるもので、もちろん私にも同じことが言える。やにわに湧いて出た同情心に丸め込まれ、我知らず助け舟を出していた。
「あ、いやでも、私もレジに一緒に並べば二個買えますし」
「そのような奇策通じるというのか」
「いけますってほら」
列の先では歩くのも覚束ない幼児を含む、三人の我が子を引き連れた母親がカレールウ四箱の精算をしているところだった。卵や油などのセールにはよく見られる光景である。それを心強く感じたのか、魔王の顔に余裕が戻った。
「ふ、なかなか知恵が回るものよ、人の子が小賢しい」
魔王は悦に入った様子でマントを大仰に翻した。それだけでも充分、他人のフリを決めたい気持ちにさせる派手な立ち振る舞いだったが、続けざまに「カオリ、余に従う影となれ」と結構な大声で命じられてしまったので、私はやや顔を伏せながらレジの列に並ぶ魔王の背後についた。

なんとなく予想していた通り、母の買い込んだ量は私がカートを押していた時より更に増えていた。
持参した数枚のエコバッグも音を上げる量に膨れ上がり、指がちぎれそうな思いをして抱えていたところ、魔王が手を貸してくれたので、車まで運んでもらった。
後部座席にみっちりと詰め込んで、勢いよくドアを閉める。いやはや助かったと母は満面の笑みだった。
「やっぱり男手があるっていいわね」
荷物持ちのような真似をさせて許されるのかと若干はらはらしてしまったものの、確かにこういう場面ではありがたい。
「もし良かったら乗っていきます？　どうせ帰り道は同じなんだし」
礼も兼ねてか、母は荷物でひしめき、あまり余裕があるように見えない後部座席を指して同乗を勧めたが、魔王はその申し出を辞退した。賢明だ。残りスペースを考えると魔王の体格では相当無理な

体勢を強いられるだろう。
「あれ、そういえば何で来たんですか？　車？　バス？　タクシー？」
まさか自転車か？　車輪にマント引っかからないか？
魔王はどれにも首を縦には振らず、毅然と答えた。
「余に乗り物はいらぬ」
途端、風が布を煽るに近しい音がして、私は束の間目を閉じてしまった。次に開いた時には、コウモリの羽を引き伸ばしたようなそれが二枚、黒光りしながら対となって、魔王の背中から伸びていた。一瞬にして生えたものか、それともベールの中に収められていただけか。どちらにせよ、もともと疑いようもない魔王の存在感に、更なる説得力が加わったのは間違いない。鬼に金棒、魔族に羽。ますます磨きがかった魔王らしさに膝をつく思いだ。
魔王だ。本当にこの人魔王だわあ。なんでサンダースの駐車場にいるんだろう。
「さらば」
魔王は出で立ちに不似合いな爽やかな青い空へと羽ばたいていった。その後をカラスが追うように飛んでいく。
半ば呆然と見送った私をよそに、車にさっさと乗り込んだ母は「エコよねえ」と感想をもらし、エンジンをかけた。

犬ころの巻

冷蔵庫を開けたらプリンと目があった。

母がよくサンダースで買ってくるような三連パックのそれではない。容器の瓶はずっしりとしており、蓋部分を覆う金で箔押しされた黒い和紙が、いかにも安売りを許さない高級感を醸し出していた。なんだか都会の匂いがする。わさび漬けやねぎみそなどがセンターを飾る瀬野家の冷蔵庫に紛れ込むにはややイレギュラーな存在感に自然と手が伸びた。

馴染みがないものの、パッケージそのものはどこか見覚えがある。いつだか放映された、お取り寄せグルメ特集の商品のひとつだ。夜の九時という小腹がすいてくる魔の時刻に天使のバームクーヘンやら漁師自慢の牡蠣の佃煮など、数々の目の毒をお茶の間に流し、私たちを大いに歯噛みさせてくれたものである。

なぜ、その件のプリンが今ここに。

誘惑に屈した家族が注文したのかとも考えたが、母は「おいしそう」を連呼する割に一晩経てば熱を失うタイプであるし、祖母は通販ではサメの軟骨以外決して買わない。首をひねっていると祖母が畑から戻ってきたのでプリンを手にしたまま居間へ問いかけた。

「ばーちゃんこのプリンー」

「うんー食べていいよー」

祖母の声が洗面台の方から響いてくる。

「誰が買ってきたのー？　あ、お土産とか？」

「魔王さんがねーさっき持ってきてくれたのー」

「えっ」

いわゆるスイーツと呼ばれる類の、しかもこんなシャレオツな品を魔王が。意外な思いでプリンのパッケージをまじまじと眺め、思い返してもう一度冷蔵庫を開くと、そこには同じものがあと二つ並

んでいた。家族の人数分おすそ分けとは心憎い気遣いではないか。記憶が確かなら、行列もできるほどの人気店だったはず。おいそれと口にできるものではないというお得感も手伝って、私は現金にも嬉しくなってしまった。魔王め、やりおるな。

プリンはおいしかった。とてもおいしかった。なぜか正座して目を閉じながら食べた。

「こんなハイカラなもの頂いて、何かお返ししないと」

流しで後片付けをしている背中に向かって祖母がそんなことをいったので、私はそうだねえ、と相槌を打ちながらも台所を見渡した。お返しといっても、いま我が家には母が焼きすぎて冷凍保存するしか道のなくなったホットケーキくらいしかない。味は悪くないものの、鍋敷きか何かかと疑う程度には形が歪(いびつ)で、自分たちの腹に入れるならまだしも、これを人様に差し上げるのはなかなかの度胸が必要である。

思いあぐねていると背中にまた声がした。

「また野菜でもと思うんだけど」

「あ、いいんじゃない」

私は祖母の提案を快く支持した。ひしゃげたホットケーキよりずっと格好がつく。

初日の挨拶で留守にしていたことをずっと気にしていた祖母は、少し前、自家製の野菜をいくつか手土産に魔王邸へと赴いた。その際魔王は自家製、特に祖母自身が育てたという部分にいたく感激し「老いさらばえた身で見上げた根性よ」と言い放ったという。ほとんど罵倒だと思うのだが、祖母は気分を害した様子もなく（なぜなんだ）「魔王さんは一人っ子なんですって」などと、果てしなくどうでもいいのか墓場まで持っていかねばならない機密事項なのか、受け止め方のわからない情報を携えて意気揚々と帰ってきたのだった。

魔王の言動に問題がある点については置いておくとしても、歓迎

されたのは事実であるらしいので、野菜なら迷惑になることはないだろう。
「夏織、玄関に置いとくから持って行ってくれる？」
「いいよー」
水道の蛇口を締め、適当に手を拭いながら、玄関に向かった。
まず祖母が用意したお返しに目が止まり、ついで足が止まる。
「ばーちゃん、これ？」
「うん」
「これ？」
「うん」
ビニール袋に十個ほど詰められた様を思い浮かべていた私は、積まれた段ボール二つを前にして、棒立ちになってしまった。おすそ分けを超えて、もはやこれは出荷。
「大家族でもない家にこの量はちょっと……どうかな……」
「少ないよりいいかと思って……」
「なにごともほどほどが一番だと……」
「魔王さんピーマン好きだって言ってたし……」
「そうなんだ……下手すると好きが嫌いになる可能性もあるねこれは……」
祖母の言葉尻は弱く、どうやら本人にもちょっと無茶をしたなという自覚はあるらしい。それにしても、祖母が一人でまかないきれる程度の菜園でこれだけ大量に実るものだろうか。魔王が好きだという噂のピーマンだけでも一ヶ月分はゆうにある。とそこまで考えて、気がついた。
「近所からもらっちゃったんだ？」
「うちでも作ってるからとも言えなくて……」
土地だけは広々と使えるせいか、農業を生業にしていなくとも、庭先に菜園を設けている家庭は多い。
肥料や土の違いはあれど、気候などの環境条件は変わらないため、育てる野菜はどこももろ被りだ。トマトきゅうりピーマン茄子、各

家庭ほぼ同じ時期に収穫を迎え、とれすぎてはそれぞれ持て余し、かといって廃棄するのも忍びないという心理から、好意と称して近所の玄関先に置き去りにしていったりする。鈴木さんと中村さんの家など、互いの留守を狙ってはナスの袋詰めを五回ほどラリーさせたと聞く。

うちは留守にはしていなかったが、祖母は人がいいので断りきれなかったのだろう。

「魔王さんとこは一人だろうし、食べきれる範囲の量にしてあげようよ」

してあげようよ、という言い回しもいかがなものかと思うが、今のこの場にはふさわしい。祖母はそうねえ押し付けちゃ気の毒よねえと頷きながら、袋にそれなりの数の野菜を詰め替えていた。お礼をしにいくのか厄災をもたらすのかわからなくなってきた。

「残りどうしよう」

「三枝さんち、今年から畑やめたらしいし持って行ってみようか？」

祖母は目を光らせて、段ボールまるまる一つ分を私に託した。三枝さんのお宅は現在三人暮らしなので、単身の魔王とは違い手加減は無用なのである。

魔王はやっぱりドアチェーン対応だった。

早々に瀬野だと名乗っているのに、開くドアの幅は頑なに１５センチ以下。すぐにチェーンは外されるので意味を全く感じないのだが、最初はグーのしきたり同様、最初はドアチェーンという魔王なりの出迎えの手続きがあるのかも知れない。

いくらか慣れたとはいえ、直接訪ねるのはまだ少し緊張する。チェーンを解き、玄関口に全貌を現した魔王はいつも通り威圧感を漲（みなぎ）らせていた。

「あの、プリンありがとうございました。これ良かったら」

差し出したビニール袋の持ち手を長い爪が引っ掛けるように奪う。
「よい心がけぞ」
老女は息災かと言いながら、魔王は目線は袋の中身をしげしげと伺っていた。
「おかげさまで。さっき一緒にプリンいただきました」
「施した甘味は口に合ったか」
「それはもちろん！　おいしかったです、すごくすっごく」
何度も首を縦に振り力強く答えれば、魔王はうむ、と満足そうに低く頷いて私を見下ろした。
「ならば再び授けてやろう。雁首揃えて味わうがいい」
「えっ、いやそんな、魔王さんの分がなくなるんじゃ」
すでに三つも頂いているのにこれ以上は。
「構わぬ」
両手を大きく振って示した遠慮の意思を重低音が遮った。
「仕損じて五個入り一箱の品を五箱買い付けた」

5×5＝25プリン

「……それは……大変ですね……」
「冷蔵庫の棚一段が占拠される由々しき事態よ」
鋭いばかりの切れ長の瞳に、今はうっすら悄然とした灯火が見える。ありがちなミスとはいえ、日持ちのしない乳製品2ダースは痛い。同情した。
それはそうと「買い付けた」という弁から、特に魔力でどうこうしたわけではなく普通に発注して取り寄せたいうことが明らかになったわけで、ごく当たり前の手続きなのだが角も羽も生えている相手なだけに不思議な気持ちになる。
「注文はあれですか、電話とかですか」
「ファクシミリぞ」
「へえ」

魔王からの口からさらりと出た横文字への動揺はなんとか噛み殺した。

「魔王さんもお取り寄せとかされるんですね」

スーパーで買い物に対しての堅実な姿勢を目にしているだけに、贅沢品とされる食品に興味を持つとは少し意外な気がしていたのである。それを思ったまま口に出したにすぎないのだが、散財を咎めたように伝わったのか、ふっと目をそらした魔王は言い訳がましく

「常に努めを怠らぬ己への褒美である」などと意識の高い女子のようなことを言った。さてはこの魔王、女性誌を購読しているな。

「すいません、まだこれから寄らなきゃいけないところがあるので、帰りにもらってもいいです？」

止める間もなく奥に引っ込んで、プリンと思われる白い箱を抱えてきた魔王にそう声をかけると、魔王は一瞬顔をしかめて、箱に貼られた賞味期限のシールを見た。

「二晩の内に戻るか」

「戻れなかったら困ります」

私にはつっかけサンダルにTシャツの軽装でそんな遠出をする思い切りの良さはない。

「三枝さんとこ行くだけなんで、五分もあれば」

魔王の片眉が持ち上がる。

「三枝に何用ぞ。回覧板であれば余が」

「あ、そうでなく野菜を」

足元に下ろして置いた野菜入りの段ボールを示す。魔王は「ふん」だか「うむ」だか判別できない、しかし威厳だけは感じる音で応じた。どうも歯切れが悪い。妙に感じて様子を伺えば、表向きは悠然と構えながらも、隠しきれない落ち着きのなさが端々に見えた。そわそわ。

ああ、犬か。犬だな。行きたいんだな。

せわしなく耳をぴくぴく動かすくらいなら素直に言えばいいのにと感じる一方、魔王ともあろう者がワンちゃん愛でに行きたいとは

言いにくいなそりゃ、という納得もある。
「学校帰りに見かけたから、たぶん三枝さん今日は家にいるんじゃないかと」
途端、魔王を取り巻くそわそわが倍ほどに膨らみ、そわそわそわそわ、くらいになった。
「あそこのおじいちゃん甘いもの好きですよ確か」
せめてものプリンの恩返し。私はサービスのつもりで絶妙なパスを出した。魔王はそれをスルーすることなく食らいつき、いい口実見つけた、みたいな顔でゴールネットを揺らした。
「ちょうど良い。三枝の本丸に挨拶方々奇襲をかけてやろう」
そう声高に叫び、魔王は私を差し置いて玄関から勢いよく飛び出していったが、五歩ほど進んだところで踵を返し施錠の為に引き返してきた。そのあとノブを回しての確認も抜かりない。うちは殆ど鍵をかけないので感心していると、そなたは警戒心というもの云々と延々道すがら説教を食らった。

昔このあたり一帯の地主だったという三枝さんの敷地は広く、古い作りの邸宅のほかに、平屋の離れや大小様々な物置や小屋が点在している。家の中でじっとしていられない性分なのか、雨や留守の日以外はだいたい野外であれこれ作業をしているような人で、今日もベンチに腰掛けて何かの部品を磨いていた。そのすぐそば、無造作に置かれた柵の中を、チワワの群れがちまちまと動いているのが見える。足音に気がついた三枝さんが顔を上げた。
「おう夏織ちゃん」
「こんにちはー」
「それ彼氏か？」
思わぬ角度からの被弾。
「なんだあ、照れて」

不意をつかれて咽る私に三枝さんは容赦がない。

田舎のお年寄りはとかく噂好きで、年頃の男女を見ればとりあえずデキてることにしたがるものだが、まさか魔王まで同じ扱いとは考えが及ばなかった。地獄の蓋が開きそうな出で立ちを前にして「彼氏」が真っ先に出てくる強靭な発想、見習いたい。

「朋子さんから聞いてない……？　魔王さん、最近引っ越してきた人だよ」

朋子さんとは、同居している息子のお嫁さんのことだ。三枝さんは、そうだっけな、なんだ夏織ちゃんの祝言かと思ったのにより、と飛躍した言を吐き、若干欠けた歯を見せて笑った。半分は冗談、しかし残り半分は本気なので油断ならない。

私が先制攻撃を受けて怯んでいるというのに、魔王はといえば小型犬ハーレムを前に気もそぞろな様子で、挨拶どころか一度も三枝さんの方を見ていない始末である。あからさますぎるだろう。わざわざ用意した顔見せという建前はどこに行ってしまったのか。

三枝さんから見えないように肘でつつくと、魔王はハッとして、ようやく目線を三枝さんに向けた。そしていつか私に蕎麦を授けた時と同じく、尊大に、ものものしく、上から目線で箱を手渡した。中身がプリンと知るや、三枝さんの皺の目立つ顔が更にくしゃりと笑み崩れる。

「おう、悪いな兄ちゃん。まあなんもねえ町だけどよ、困ったらなんでも言いな」

兄ちゃんて。荷物持ちを頼んだり呼び捨てにしたりと、魔王に対するフランクな扱いは何度も見てきたが、さすがに兄ちゃん呼ばわりする人はこれまでいなかった。いいのか、それでいいのか魔王。

「以後よろしく頼もう、三枝の老いぼれ」

と思ったら魔王も充分に無礼だったので、ああいいのかとそよ風が吹いた。

祖母から託された大量の野菜も無事受理され、一応の目的は果た

した。が、まだ帰還は許されない。魔王が目配せというにはあまりに鋭い視線を遣わしてくるのである。さあ言え、早く動くのだ、余に犬と接する機会を与えよと。

背中に穴が開けられそうな圧を感じつつ、私は自分に出来る限りの無邪気を装って、柵の中で転がるチワワに駆け寄った。私の演技力については、学芸会でワカメの役しか与えられなかった過去の実績から察して欲しい。

「ワア、今日もワンちゃん、毛艶が最高潮！　な、なで回してもいい？」

「ん？　いいも何もいつも勝手に触ってんだろ」

三枝さんの冷静な返答をほぼ無視する形で、私は足元に絡みついてきた黒いチワワをわっしょーいとばかりに抱き上げた。

「あーかわいいなーかわいいなー犬はかわいいなあーほらほら魔王さんもご一緒にどうですか」

猛烈な勢いで顔面を舐められるまま、魔王の期待に沿う誘い文句を放った。てっきりいそいそとやってくると思いきや、魔王はいささか躊躇う素振りを見せてから（わざとらしい！）歩み寄るなどして、あくまでお前が言うから仕方なく出向いてやるという姿勢を貫いた。

暇さえあれば近所の人がふらりと立ち寄る開放的な環境にあるせいか、基本的にどの子も人懐っこい。人を見れば誰彼構わず短い尻尾を振って飛んでくる。愛くるしいことこの上ないが、六匹もいると大騒ぎである。

しゃがみこんで一匹を撫でていると、背後からのしかかるように別の犬が。

「こら、えーと、マチコ」

「サト子」

「ああマチコはこっちか」

「夏織ちゃん若いのに物覚えがいまひとつだな。ほら来い、かおる」

今でこそ単なる犬好きのじいさんといった風情だが、祖母いわく三枝さんは昔なかなかの男前で、様々な浮名を流しては女を泣かせる、有名なプレイボーイだったらしい。数年前には隠し子も発覚し、ちょっとした騒ぎになった。

年老いた今、さすがに落ち着いたのかその情熱は女性ではなく犬に向けられている。ただ、チワワに与えられたマチコ、サト子、かおる、ふみ、菊江、ブレンダ、がそれぞれ過去の女の名前ということは公然の秘密である。

柵の隙間からお転婆なブレンダが逃げ出し、三枝さんが年を感じさせない健脚でそれを追いかけていった。

念願の犬だらけを魔王は満喫しているだろうか。

キャンキャンと足元に絡むマチコとサト子を踏まないようにして背後を伺うと、チワワを抱きかかえる魔王が目に入った。

お世辞にも微笑ましい光景ではなかった。

想像したワンワンふれあい広場とは一線を画した緊張感、強いて言うなら悪い子いねえがと凄む秋田の妖怪と固まる子供。

抱えられているのは他の犬に比べてもひときわ小さい薄茶色のチワワ（たぶん菊江）で、魔王が巨躯なだけにいよいよ小粒に見える。

菊江は小刻みに震えていた。チワワは普段から震え気味とはいえ、そんな生易しいものではなく、振動の細かさは電動歯ブラシのヘッド部分に近かった。

明らかに魔王に怯えている。

魔王を魔王と理解しつつも受け入れてしまう、度が過ぎた柔軟性を備えているのはどうも住人だけらしい。身の内の野生が反応するのか、動物は素直に警報を発している。

対して魔王は実に興奮のご様子だ。存分に犬を愛でることが出来て昂ぶっているのだろう、楽しい気持ちが振り切れすぎて、比喩ではなく目が輝いている。

普段、魔王の目は銀と灰を合わせたような色合いに落ち着いている。しかし今は万華鏡のようにいくつも入り混じり、緑がかった色に変化していた。それがＬＥＤライト並にビカーッと強烈に光るのみならず、にたりと底知れぬ笑みまで加わっているのだから、チワワでなくても怖い。

どちらにとってもこれは悲劇。

魔王に抱き上げられて寿命を縮めているチワワも哀れなら、とって食うわけでもないだろうに全力で毛を逆立てられてしまう魔王も気の毒だ。しかしこのまま菊江を見捨てるわけにはいかない。震えすぎてシェークになる前に助け出そうとじわじわ距離を詰めている途中で、魔王に気取られた。

「カオリ」

「ヒィ」

「何故この者共は余が触れると屍のごとく黙するのか」

跳ね回るチワワに囲まれている私への羨望の眼差し。さすがに様子がおかしいと感じてはいたようだ。正直に答えていいものかどうか躊躇ったが、本気と書いてマジと読む目力に押され、ごにょごにょと濁しつつ口を開いた。

「まあその、怖い……というか、なんというか」

「参謀として具体的な策を示せ」

「参謀でしたっけ！？」

いつから魔王傘下に……とたじろぐ反面、頼られると弱い。

「えー……せめて格好を変えてみるとか」

人は見た目が９割だと聞く。立場上、人畜無害な風貌では商売あがったりだろうし、端正なつくりながらも滲み出る悪役的な迫力はもう仕方がないとして、せめて装いだけでも柔らかくできないものか。

一旦チワワを私に預けた魔王は、己の黒装束をつまんで眺めた。

「この程度が畏怖を与えるか」

少なくとも私はこの格好の人に道は聞かない。
「黒くて面積も大きいし、小動物には警戒されるかも知れません」
「臆病な犬だからなァ」
振り返ると、捕まえたブレンダを小脇に抱えた三枝さんがこちらに向かって歩いてくるところだった。
「あー毛がついちまったか。兄ちゃんそのぞろっとした、ピアノカバーみてえな服脱いじまった方がいいわ」
言うが早いか、三枝さんは家屋に向かって何事か呼びかけ、出てきたお嫁さんに「ちょっとこの兄ちゃんにあいつの服着せてやってくれ」とそこらの坊主のような扱いで魔王を突き出した。魔王は抵抗することなく、それとも抵抗する暇もなかったのか、はいはいこっちねとお嫁さんの朋子さんに引っ張られて、あれよあれよと家の中に消えていった。
近所とはいえ、つい最近越してきたばかりの相手をつかまえてこの距離の詰め方、半端ではない。年の功すごい。
三枝さんは、あんなもん着て山入ったらよう、熊に間違えられて蜂に襲われっぞ、なあ？　と膝に乗せた犬に喋りかけていた。

ほどなくして魔王を吸い込んだ玄関が、控えめな音を立てて開いた。
先に姿を見せたのは朋子さんで、その背後から、白いTシャツとグレーのスウェットパンツを着せられた魔王がゆっくりとした足取りで現れた。
実に気の抜けた、寝巻きに近いファッションである。徹頭徹尾魔王らしかった時と比べ、威圧感は緩和されたと言えよう。が、首から上はそのまま手付かずの為、なにやらビジュアル系バンドの控え室みたいになってしまった。
チワワの震えは止まったが、今度は私が震える羽目になった。
うつむき加減で笑いをこらえている私に、朋子さんがふふ、と微笑みかける。

「おかしいでしょ、ズボンの丈が寸足らずになっちゃって。うちの人も体格いい方だけど、最近の若い人は手足が長いから」

そっかーズボンの丈かー。なるほどなー。

同じ間違い探しを見ていたとしても、答えが同じとは限らないのである。そもそも最近の若い人という仕分けで合っているのか。

「カオリ、獣を余に引き渡せ」

やたらラフな魔王が、ラフではない口調で私からチワワを取り上げた。イベントTシャツだったのか、胸元にプリントされた【わっしょい！　いか祭り】　の文字が目に入り、余計呼吸が苦しくなった。そろそろ許して欲しい。

「三枝、これの名は」

「菊江」

「ほほうキクエか。くく、キクエめ潤んだ目をしおって」

相変わらず魔王の顔つきは犬を愛でる好青年とはほど遠いものだったが、手加減を覚えたのか目が光ることもなく、先ほどより遥かにましだった。チワワの震えも携帯のマナーモード程度まで落ち着いた。いずれ粘り強く接して顔を覚えてもらえば、顔を舐めるくらいの歓待を受けるようになるかも知れない。道は長そうだが。

「犬見てえなら、いつでも来ていいぞ」

「だそうだぞカオリ」

「えっ、あ、私っすか」

「愚かにもそなたが、犬畜生と触れ合いたいと申すならばその時は余が供をしてやろう」

光栄に思え、と魔王はわっしわっしと菊江を撫でながら告げた。魔王だというのにやり方がこすい。しかし裏切りを許さない魔王の眼差しは強く、私は参謀として「へい」と仰せのままに従った。

働きが評価されたのか、帰りに魔王が私に持たせたプリンは二箱だった。この対価、安いと見るべきか高いと見るべきか、よくわからないがプリンはおいしいので嬉しかった。

洗濯の巻

「カオリ、ドライ洗いとは何ぞ」

よく晴れた日曜日だった。まだ朝の８時前だった。

休日の醍醐味といえば惰眠である。

いつもの時間に目覚め、そのまま飛び起きなくても良いと許された、心のゆとりと誰に対してかわからない優越感は人に安らぎを与える。その優雅な心持ち、もはや貴族と言っても過言ではない。おはようございます貴族です。

祭りでもない限り日曜の朝は穏やかに幕を開ける。今朝も変わらず人と車の少なさを裏付けるような静けさで、枕元の目覚ましを横目に、ふ、と上流階級の笑みで貴族は二度寝に沈もうとしていた。が、無粋な音がそれを妨げた。民衆の一揆だ。いや呼び鈴だ。

間の悪いことに、母は休日出勤、祖母は昨日から町内会の小旅行で留守にしている。対応するとしたらこの貴族しかいない。今朝の貴族は俗世と関わりとうないのである。

布団から出るのが億劫で、一度は目を閉じてやり過ごしたのだが、インターホンは繰り返し鳴った。

ピンポン。

ピンポーン。

ピーンポーン。

連打の激しさはないものの、伺うように間を空けつつ、押し方に

緩急をつけてくるあたり粘り強さを感じる。
根負けし、重たいまぶたをこすりながら玄関に向かった。
はいはいお待ちを、と着替えだけ済ませてドアを開けると、私が知る中で最も朝の爽やかさとそりの合わなそうな人が立っていた。魔王だ。
「おはようございます、どうしたんですか」
魔王はそれに答えるどころか険しげな表情でかぶりを振り、さっさと扉を閉めた。ドアノブを掴んだままだった私は、さして高くもない鼻を強打するところだった。唐突な行動に呆気にとられていると、扉の向こうから少しくぐもった音が聞こえてきた。
「いま一度挽回の機会を与える」
魔王の声である。続けてピンポンとインターホンが響いた。
仕切り直しを要求されているのは確実だ。よくわからないが、何か気に障ることを仕出かしてしまったらしい。これまでの経験から、あまり礼儀に頓着しない人だと思っていたのだが、三枝さん宅での参謀呼ばわりから考えるに、魔王の中で私は隣人ではなくすでに手下の一人なのかも知れない。だとしたら先ほどの私の態度は好ましいものではなかっただろう。
もっとこう、敬うべきか。魔王とその配下にふさわしい振る舞いを求められているのか。
猶予は与えぬとばかりに再度インターホンが鳴ったので、私は武将に戦況を告げる伝令のごとく片膝をついた姿勢で恭しく魔王を出迎えた。
「ご機嫌麗しゅうございます、魔王様」
「違う」
「えっ」
「違う」
違った。あげく何をしている膝を痛めるぞと冷静にたしなめられ、じりじり羞恥心が炙られる思いである。心の柔らかな部分が傷ついた気がした。

魔王は出来の悪い弟子を見るにも似た目つきでマントを払いながら腕を組んだ。

「用心が足らぬと再三戒めているのにわからぬ奴よ」

悪しき者か否かを改めもせず招き入れるなど愚かな、だとか、刺客であれば今頃八つ裂きぞ、だとか、物騒な文言を織り交ぜながら魔王はくどくどと説いた。

魔王の防犯意識が高いことは今までの言動から充分知り得ている。対して我が家は、というよりこのあたりの世帯は総じて警戒心が緩く、注意を払えと事あるごとに魔王から忠言を賜っていたものの、年寄りの昔話と同列に流して聞いていた。それについて今現在、本格的に咎められているらしい。今回ばかりはうんうん頷くだけでは済まされないようだ。

「理解したのであれば元の配置につけ。次こそしくじるな」

魔王はそう言って身を翻し、玄関から出て行った。そして即座に鳴り響くインターホン。あ、そこからまた始めるんですね？

私は魔王の語る用心を心に留めつつドアノブに手を添えるだけにして、扉に向かって誰何（すいか）した。

「どちら様ですか」

「余だ」

「魔王さんですか」

「うむ」

「本当に魔王さんですか」

「嘘偽りない」

そこで初めて私は施錠をとき、慎重にノブを回した。扉の向こうに見える魔王は未だ腕を組んだままで、沙汰を申し上げる奉行じみた厳格さが漂っていた。すっと手のひらが持ち上がり、大きく開く。ハイタッチを求めているように見えたので、出したり引っ込めたりと私の右手が迷走した。

「五点。なっておらぬ」

単なる採点表示だったので何事もなかったように右手を撤退させ

た。さっき一度滑っているのにこれ以上の事故は避けたい。
「何度も確かめたし、かなり気をつけたつもりなんですけど」
「余としか名乗っておらぬにも関わらず決めつけるとは早計」
一人称が「余」の知り合いなど他に見当たらないのだが。
「何より結界をはらぬなど愚の骨頂ぞ。禍を退けるは己の備え次第と肝に銘じよ」
魔王の手が「結界」の部分でドアチェーンを掴んだ。
ああこれ結界なのか……とぼんやり見ていたら「返事が聞こえぬ」と迫力の音声で凄まれてしまい、「ファイッ」と図らずも野球部の一年生みたいな受け答えになった。
指導はそこで終わらず、ドアチェーンを含んだ総さらいと称して、来客対応の心構え（魔王推奨版）を、それから二度も繰り返した。当然魔王のピンポンから始まる。今日ほどインターホンが鳴った日は、後にも先にも例がないのではないだろうか。
私はもうこの時点で若干ぐったりとしていたのだが、魔王にとっての本題ではなかったらしく、玄関口から去ろうとしない。訝しそうにしている私を遥か高みから見下ろし、魔王は改まった面持ちで冒頭の台詞を放ったのである。
「カオリ、ドライ洗いとは何ぞ」と。
日曜の朝、人を叩き起して投げかける質問とは思えない。脱力した。しかし魔王はお構いなしに畳み掛ける。
「水を用いずに洗う術か。答えよ」
「いや水は使いますよ、ドライとはいっても」
「だが水は出ぬ」
「水が出ない？」
つい先日洗濯機を買った。設置は昨日の時点で済んでいたが、干すにはあまり天候が思わしくなかったので使わなかった。今日は打って変わって抜けるような青空に恵まれている。早速洗おうと洗濯機に近づいた時、ドライというコースが目に入った。興味本位で押してみたところ、水が全く出る様子がなく困惑している。

以上が魔王の訴えの要約である。実際はもっと遠まわしかつ難解な言い回しの宝庫で、五回くらい聞き返した結果ようやく翻訳に成功した。

「洗濯機がない間はどうしてたんですか」

「それを生業にしている者に委ねていた」

「うわセレブ」

すべてクリーニングとは不経済も甚だしい。日々の堅実な買い物とプリン25個のお取り寄せ悲劇なども合わせて考えると、魔王の金銭感覚はどこかアンバランスだ。

それにしても水が出ないとはどういうことだろう。中古なら故障も考えられるが購入したのは新品だと聞いた。

「業者とかメーカーに問い合わせは？」

と尋ねてから気がついた。まだ時計の針は8時を指すか指さないかという時間帯である。販売店にしても電話窓口にしても受け付けているわけがない。当然と言わんばかりに魔王は首を横に振った。しかし魔王の否定は私の想像と少し異なっていた。

「まず参謀に問うが順序として正しかろう」

「参謀って家電の面倒まで見るもんなんですか」

実質ただの便利屋くらいの扱いと見た。

初っ端の防犯訓練のせいで眠気はどこかへ消えたものの、寝癖はついたままだし朝食も食べていない。更に言うとセーターなどの取り扱いが面倒な衣類は祖母が引き受けてくれるので、私自身はジャージや寝巻きくらいしか洗濯機を使っておらず、ドライ洗いとやらについて正直明るくないのである。

どう考えても私を頼るのはお門違いのような気がするのだが、魔王はじっと待っている。玄関を塞ぐようにして参謀がなんとかしてくれているのを待っている。プリンは二箱分、とうに腹におさめてしまった。義理と人情の合わせ技を前に、私が「NO」と退ける余地はなかった。

「役に立てるかわかりませんけど、ちょっと見てみましょうか……」

魔王は口角を引き上げて（怖かった）さっさと来るがよい、と腹から声を出した。いつもは開けっ放しだが防犯の鬼の手前、鍵をしっかり締めてからついていくと、そなたにしては上出来よとお褒めの言葉を賜った。

私なりに、魔王の住処に対してはイメージというものがあった。外観こそ何の変哲もないが、内側はさぞや縁起の悪い装飾が施され、日の入らぬ暗闇の中には燭台がずらりと並び、しゃれこうべのひとつでもあるだろうと。そこまで徹底していなくとも、絨毯やカーテンは最低、地獄の底のような色だろうと。

しかしその認識は足を踏み入れて一歩目、もこもことしたスリッパを勧められた時点で改めなければならなかった。

来客用の履物を用意するような家に、しゃれこうべはない。おどろおどろしい蝋燭もない。地獄の底どころかいくつもの窓から積極的に太陽光を取り入れるつくりになっており、言ってしまえばうちの物置の方がよほど暗いのである。カーテンも暗幕とはほど遠い、よく量販店に売られているような地味な格子柄だった。

普通だ。目立った個性も主張もないが、居心地の悪さも感じない、それはさながら親戚の家。

胸の内に少々ばかりあった「肝試し感」が早々に挫かれ、なんとなく肩すかしを喰らいながら魔王宅のリビングを通過した。

前を行く魔王が急に足を止めて振り返る。

「嫁入り前の娘がのこのこ男の巣に上がり込むとはどういう了見か」

「えー」

自らスリッパまで出して招き入れておいてそれはないだろう。それともこれすら防犯の講義の一環だというのか。

「じゃあもう帰ったほうが」

「余がそのような不埒な真似に及ぶわけがなかろう痴れ者が」

「ええー」

どっちなんだよ！　と心の中の山頂で叫ぶ私を顧みず、魔王は言いたいことだけ言って奥へと消えていった。残された私は言いたいことも言えず、孤独に帰ってくるやまびこを胸に黙って後を追うしかなかった。

幸い魔王の洗濯機は我が家で使っているものと同じメーカーで、型式にも大きな差はなかった。とりあえずドライ洗いのボタンを押してみたものの、魔王の説明の通り水が出る様子はない。

衣類を入れないと動作しない仕様かと思い、何か洗うものをと促すと、畳まれたTシャツを渡された。もしかしなくてもこれは三枝さん家で着せられた例のいか祭りTシャツ。

あの後朋子さんに返そうとしたところ、あと二枚あるからあげるわとそのまま譲られ、魔王の私物になったらしい。一時凌ぎではなく、本格的にいか祭りが魔王のワードローブに加わってしまったかと思うと落ち着かない気持ちになる。こんな時どういう顔をすればいいのかわからないの。

とにかく洗濯機攻略が先だ。いか祭りを洗濯槽に放り込み、再度ボタンを押したが状況は変わらない。蓋を閉めたり開けたりを繰り返しても水音が響くことはなかった。これほど頭を悩ませているというのに、水滴ひとつ落とす情けも見せず、全くもってドライな奴である。

「違うボタンは押してみました？」

「否」

「試してみていいですか？」

「許す」

許されたらしいので、試しに標準コースを押してみた。が、結果は同じ。水は出なかった。ほかにも毛布やデニムや弱洗いと様々なコースが用意されており、その一つ一つを確かめてみたものの、やはり違いはなく、ドライコース以外でも敵は一貫してドライな態度

を崩さなかった。いっそドライを通り越してクールと言ってもいい。困った。

「不良品かな」

「ぬ」

呟いた瞬間、背後の気配に不穏なものが混じったのを感じた。安くない金を出して不良品をつかまされた日には誰でも憤るだろう。それがよりによって魔王に売りつけたとなれば命知らず以外の何者でもない。もし私がクレーム担当であれば相手の目が光った時点で土下座する。果たしてカラスでつつかれるくらいで許してもらえるかどうか。

見知らぬ業者の末路を案じ、水〜水よ〜水よ来い〜と雨乞いの心境であちこち触っている内に、洗濯機の裏から伸びているホースにふと目が止まった。視線で辿らずとも、その先がどこに繋がっているのかくらい見当がつく。蛇口だ。

「……もしかして蛇口、開けてないとか？」

「いかにも」

「そりゃ出ないよ！」

蛇口を捻ると、これまでの沈黙を破るようにしてどっと水が出た。やった。やったぞ。

子供の病が癒えたわけでも引退試合にホームランを打ったわけでもなく、単に洗濯機から水が出ただけの話なのだが、不思議なもので、私は滝のように溢れ出す水にしみじみとした感動を覚えていた。魔王も後ろで「おお……」と奇跡に立ち会った民衆みたいな感嘆を漏らしていたので恐らく似たような想いに駆られていたことだろう。朝からこの充実感。良い仕事をした。

洗濯機はドライコース特有の静けさを保ちつつ、時折重々しい音を奏でて滞りなく働いている。この場に存在を許されているのは、動作音と水音、それからわずかな息遣いのみだ。

「あの、魔王さん」

「ん」

「見張ってなくても勝手に洗ってくれます」
「ほう」
微動だにせず、息苦しいほどの眼差しでその動作を見つめていた魔王は、ようやく洗濯機の前から離れた。

魔王宅の絨毯はふかふかである。スリッパの質感も似たようなものだし、そういえば犬に対しても魔王らしからぬはしゃぎっぷりであったし、さては毛足の長いものがお好みなのだろうか。
朝から長居するのも失礼かと思い（その朝に襲撃しかけてきたのはほかならぬ魔王本人ではあるが）すぐにおいとまするつもりだったが、労いかもてなしか、魔王は私にソファに腰掛けることを許し、ご丁寧にカルピスまで与えた。驚くなかれ、コースター付きである。誰だしゃれこうべがあるとかないとか言っていた奴は。
しゃれこうべの代わりと言ってはなんだが、通販のカタログがテーブルの片隅に積まれている。貼られたおびただしい数の付箋に、魔王に渦巻く物欲を見た。しかしそれも致し方のないことだ。近くにめぼしい店がないのだから。こちらから出向くのが難しいなら向こうから来てもらうほかないのである。
一冊開かれたままのカタログが置かれていたので見るとは無しに見ると、家庭用流しそうめん器の頁だった。商品に添えられた「おひとりからでもお楽しみ頂けます」の文言にいささかの切なさを感じてしまう。
家の主である魔王は私の向かいのソファに座って、先ほど発見した洗濯機の取扱説明書を並々ならぬ真剣さで読んでいる。巻末のＱ＆Ａに【Ｑ、水が出ません。Ａ、蛇口を締めていませんか？】という心当たり率１００％の例題が掲載されていたので、もっと早く目を通して頂ければ、恐らく私にお鉢が回ることはなかったと思われる。
どうでもいいが間がもたない。魔王が読書に勤しんでいるからといって、これ幸いと心ゆくままくつろぐわけにもいかず、私はテレ

ビのリモコンに手を伸ばした。リビングに据えられたテレビは、うちのものより大型だ。

「テレビつけてもいいですか」

「よかろう」

電源を入れると、目のキラキラした絵柄の女の子が映った。日曜の朝によく見られる女児向けアニメだ。

なんとなく見ていた私は、直後飲んでいたカルピスを噴きそうになった。

ちょうどクライマックスを迎えたらしく、ラスボスと思われる敵がえげつないほどボコボコにされていた。敵の男は黒いベールを身にまとったわかりやすい悪役顔で、肌は白く長身だった。角も二本見えた。傷もあったかも知れない。既視感を覚えるキャラデザインである。それが年端もいかない娘たちによってたかって惨たらしく足蹴にされたり叩きつけられたりしていた。若さゆえの無慈悲か、ほうほうの体で逃げ出そうとしていた背中に必殺のなんちゃらアタック。ぐえええと醜い悲鳴。更なる猛攻。

一分も持たず私はチャンネルを変えた。

恐る恐る伺った魔王の様子に別段変わった点はない。眉ひとつ動かさないところを見ると他人の空似で間違いなさそうだが、私を取り巻く気まずさときたら人生ランキングの上位に食い込むほどだった。今後あらゆるフィクションにおける悪役に対し、突き放した気持ちで鑑賞できる自信がない。

無駄に冷や汗をかいたせいか、突如響いた警笛のような高音に大きく体が跳ねた。立ち上がった魔王が台所へ歩いて行ったのを見て、やかんの音だと遅れて気がついた。

湯を沸かしたのは別に沸騰したお湯を私の頭にかける為とかではなく、コーヒーを飲むのだそうだ。私はすでにカルピスを頂いているので遠慮した。

魔王はずいぶんと人に沿った暮らしぶりを送っている。もうこうなると本当は魔王の皮をかぶった留学生か何かではないかと疑いた

くもなるのだが、普通留学生は飛ばない。しかし冷蔵庫に卵型のキッチンタイマーが貼られているのを見てしまったりすると、割り切るのが難しくなってしまうのである。そもそも私は魔王が魔術だか魔法だかを使っているのを見たことがない。

「あの」

台所でインスタントコーヒーをかき混ぜている魔王を私は座ったまま振り返った。

「洗濯とか料理とか魔法使えば早いんじゃ」

魔王は一度手を止め、それからまたかき混ぜる。

「浅はかな」

そう言ってから、湯気を立てたマグカップを手に悠然とリビングへ足を向けた。歩みが遅い。

「世の理（ことわり）が違う。律に抗い無闇に行使するほど愚鈍に非ず」

「え、使えないんですか」

期待はずれの気配が伝わってしまったか、やっとソファにたどり着いた魔王は眉をわずか持ち上げてから腰を下ろした。

「使えぬこともないが加減に手間取る」

最初、魔力で煮込みをしようとしたところ鍋ごと焼けてなくなったと魔王は語った。すごいぞ火炎魔法。男の料理の枠を軽々超えるダイナミックさだ。人間でも力が強すぎると握手で相手の手を砕くと言うし、魔王ほどの存在ともなると繊細な調整は不得手なのかも知れない。

「じゃあスケールの大きい術の方が向いてるんですね。山を割るとか」

「甚大な魔力は相応の代償を伴うものぞ」

代償の言葉に思わず息を飲むと、魔王はコーヒーを啜った。

「翌日の朝が堪える」

「二日酔いみたいですね」

近所のお年寄り連中がよく口にするこの年になると次の日しんどくてよ、の台詞が脳裏をよぎった。語り口から深刻さを計るならば

筋肉痛程度の負担のようだが、人ならざる力にもそれなりの枷があるらしい。

「魔法が使えたら勉強しなくていいかと思ったんですけど。英語とか苦手で」

はは、と冗談めかして私が言えば、魔王は「カオリ」と言いながら静かにカップを置いた。

「かようなものを拠り所にして労を惜しむとろくな人間にならぬぞ」

真面目に諭されてしまった。ひれ伏したくなるほど正論で反論の余地もないのだが、それを述べているのが魔王だと思うと素直に頷いていいものか困惑した。

ふと魔王の手がリモコンに伸びる。長い指がキーを押し、幾度もチャンネル切り替えた。その途中、画面が先ほどのアニメを映し「長い戦いの果て、ついに悪が滅ぶ時が来た！　次回・魔族の王死す！」と奇跡的なタイミングで流れた予告ナレーションのせいでまたもカルピスは逆流しかけた。可愛らしいアニメ声が視聴者に向かってぜったいみてね☆とお願いしてたが、申し訳ない、次回だけは絶対みない。

魔王は至って涼しい顔で天気予報にチャンネルを合わせ、頷きながら今日の天候を確認している。私一人が無駄に冷や汗をかいて湿っているのみだ。人は焦るとヘマを踏む。なんとか空気を変えようと躍起になり、自分を見失った結果が次の発言である。

「魔王さんはおいくつなんですか」

馴れ馴れしい上に脈絡がない。しかも相手の素性を考えると、魔王の存在そのものに相当踏み込んだ質問と言える。冷や汗は乾くどころか増えた。魔王は画面から目を離し、わずか首をかしげた。

「齢か」

「は、はい」

「そなたの節穴はどう見る」

なんだこれは合コンか。

不敬であると罵られるならまだしも、いくつに見える？　の返しが来るとは想定外である。どう答えたらいいものか、私は連写のような速さで目を瞬かせた。

接客の職を得て、去年の春上京した従姉妹の由美子姉さんはいつか云っていた。年齢を当てさせようとする相手は大抵若く見られたいものだと。あからさまに若く言っても嫌味に取られるから、実年齢より五歳くらい下の年齢を言うのが礼儀というものだと。

そのセオリーを魔王に応用しようとして、二秒で思考が凍結した。実年齢、いくつだ。

単純に顔貌だけ見れば２６、７といったところだが、目の前の御仁は魔王である。見た目などという人間の価値観で判断を下して良いのだろうか。若く見えても魔族の長、魔力が老化をせき止めているだけで実際５８才くらいのベテランかも知れない。いやしかしその体質を念頭を置いて考えれば、今年で１万２千才ですといった可能性だって大いにあるわけで、そうなるともう当たりのつけようがない。悩みに悩み、考えに考えたが、私の眉間が深く抉られるだけでひとつもまとまらず、結局迷宮入りした。

「見当もつきません……」

絞り出すように言って、グラスに口をつける。ふむ、と同じくカップを持ち上げた魔王は、呼吸のついでくらいの調子で答えた。

「齢十五である」

私は今度こそカルピスを噴いた。

「じゅ、じゅう、じゅうごっ」

体を二つに折り畳みながらごほごほと咳き込む。息苦しいのは息苦しいが、それどころではない。まさかの年下。

若く見られたいという由美子姉さんの助言が猛スピードで遠ざかり、そのまま星になって消えた。

「い、意外と……お……おお……おおお若い、ですね」

そう言うのが精一杯だった。激しく動揺した私に魔王は怪訝な顔をして、冷淡にも見える視線を遣わした。

「卑しい人の子と並べて数えるでない。そなたらの齢の概念が余と重なるとは限らぬ」

「あ、そうか、なるほど」

息が少し楽になった。

そうだ、これだけ人の理から外れているのだから時の流れも特殊と考えるべきだろう。犬猫ならいざ知らず、魔王年齢を人間に換算すればいくつになるかなど誰も教えてくれはしないし、想像もつかない。いやしかしそれにしたって１５。数字に意味はないとわかっていても１５。波のように寄せては返す１５の爪痕。

気管に入ったカルピスの後味も消えぬうちに、洗濯の終わりを告げるアラームが鳴り響く。いそいそと立ち上がった魔王（１５）にならって、私も洗濯機の元へと向かうことにした。衝撃の影響は大きく、咳はしばらく収まらなかった。

後に気づいたことだが、何もいか祭りＴシャツをドライ洗いにする必要はなかった。三枝さんが言うところのピアノカバーみたいな魔王のローブこそ丁寧で繊細なドライ向きだったなと風にはためく洗濯物を眺めながら思うのだった。

お迎えの巻

そういうつもりがあるなら、どうしてもっと早い段階で伝えて来ないのかと。なぜワンテンポ遅れて主張を始めるのかと。

熱を出すたびに私は自分で自分の体調を問い詰めたくなる。今日も体温計を脇に挟みながらひとしきり保健室で詰った。

疲労ではないだるさが体にのしかかり、頭がぼうっとしてきたのは確か三時間目が始まったあたり。測ってみれば熱は３８度ちょうどだった。時期外れの流行か、教室では咳をしている生徒も少なくなく、風邪を引いたのは間違いない。だったらこんな半端な時間に後出しするのではなく、朝起きた時点で頭痛鼻水咳喉発熱を総出撃させるくらいの本気を見せて欲しい。そうしてくれたら私だって、わざわざバスに３０分揺られて登校したりしなかったというのに。

よほどしんどそうな顔をしていたのか早退の許可はすぐさま下りた。それはいいのだが自力で帰れる自信がなく、私は母に一報を入れて、生徒玄関で迎えが来るのを待つことにした。

昼間だというのに、どこか薄暗くどんよりと見えるのは校舎の古さが理由の全てではない。単純に厚い雨雲に覆われているからだ。いかにも一雨来そうな気配だけは漂わせているのに、ただぐずぐずと横たわり空に蓋をするばかりで、このところすっきりとしない天気が続いている。思わしくない体調も併せて気が滅入った。

そろそろ迎えが来てもいい頃だが、一向に母は現れない。仕事を中抜けすると言っていたから、業務をひと段落させるのに手間取っているのかも知れなかった。こんなことなら何も固い床の上でなく、保健室で横になって待っていれば良かったと悔やんでも、今は立つことすら億劫に感じる。膝を抱えたまま、携帯を取ろうと鞄に手を伸ばした時、視界が暗く陰った。私はのろのろと顔を上げ、しばし

固まった。

学び舎では通常有り得ない姿がそこにあったからである。

夏も盛りのこの時期、そしておしゃれでなければ人に非ずという軟弱な風潮漂うこのご時世、べろりと裾まで黒く垂れ下がっているお召し物を羽織っているのは長ランを愛用する古き良き不良か、名前に魔のつく怪しいご職業の方くらいしか心当たりがない。この高校にも数人は生息すれども、そこまで根性の入ったヤンキーはいないので、該当するのは後者のみである。

その者黒き衣を纏い、鼠色の歪んだ床板に降り立つべし。

今日も我らが魔王様は引きずるほど長くたっぷりとしたローブを身に付け、私の視界を全て奪う形で仁王立ちしていた。

熱に弱らされていた為か、一瞬それを魔王だと判断できなかった私は、死神の到来か何かだとナチュラルに受け止め、違う意味で「お迎えが来た」と思った。

うまく私の中で繋がらなかったのである。魔王と校舎という場所が。おかげでしばらく、壊れたがま口財布のようにぱくぱくと口を開けたり閉めたりする羽目になった。

魔王が私を呼び寄せたり訪ねてくる時は何らかのトラブルや頼みごとを抱えていると相場が決まっている。犬であったり洗濯機であったり。最近では炊き上がった米が硬すぎたとか、さおだけ屋がいつまで待っても来ないとか、そういう案件まで参謀に持ち込まれるようになってしまい、なんだかよくわからないが結構忙しい。世の参謀と呼ばれる職種の方々の苦労が忍ばれる。

だから今この時も、魔王はこんな真顔で澄ましているが、もしかしたら私を頼らざる得ない状況なのだろうかと思い至った。

「もしかして迷子ですか」

「戯言を申すな」

魔王は表情を動かすこともなく一蹴した。

迷い込んだわけでもなければ、目的を持ってやって来たというこ

とになる。何の、と考える前に先日衝撃波をもたらした魔王の年齢を思い出した。

ちなみにこの件は口外せず、私の胸の奥の、墓場まで持っていくゾーンに押し込んである。特に口止めされたわけでもないが、もし知れてしまったら、ただでさえ敬いに欠けた住人による魔王への扱いが、更に雑になるのではないかと憂いた故だ。「魔王さん」どころか「魔王くん」とか「魔王ちゃん」とか「魔の字」とか、あまつさえ「マオタン」などと魔王の家臣が耳にした日には憤死確定の安さで呼ばれかねない。今のところ魔王の家臣らしき存在はカラスくらいしか見当たらないが。

とにかく魔王の年齢だけを人間の基準でとらえれば、通学していて当たり前の年頃。転入すると言い出しても、別段おかしくはないのだ。

あ、いや嘘。おかしい。おかしくはないのだと断言した直後に何だが、やっぱりおかしいな。

しかしいくら私がおかしいと連呼したところで、本人がオームのように目を赤く光らせ、余は目的の為に手段を選ばぬとか言い出してしまったら止める術も権利もない。学年も違うことだし。私にできることといえば、その背丈で後ろの席の生徒の視界を塞いでしまわないかと、ただ遠くから案じるくらいである。

それにしても、魔王のぶらり高校生活。

着るのか制服。

受けるのか期末考査。

利くのか学割。

想像力はもう限界を迎えていた。

「せめて校内では、瀬野先輩と呼んでくださいね……」

「先程から幽鬼のごとき顔を晒して何をわけのわからぬことを」

目の前を占拠する闇色の壁が動く。へたり込んだままの私を見下ろしながら一歩近づいた。

「こうして余が自ら回収に足を運んでやったのだ、有り難く思え」

見上げた唇の隙間から牙が見える。放たれた台詞を要領よく咀嚼することができず、回収、とオウム返しで呟くと、魔王は厳かに相槌を打った。

「ゴミかなにかの話ですか」

「カオリ、いくら愚かとはいえ、己を屑などと卑下してはならぬ」

「く、屑？　私？」

言ってないそんなこと言ってない。

一体どういう会話のデッドボールだと魔王の読解力を疑いかけて、すぐに話が自分に及んでいることに気がついた。魔王が回収しに来たものとは、もしかしなくても私なのかと。

「あっ、あの、母は？」

私のせわしない瞬きとは対照的に、魔王の長い睫毛はゆったり羽ばたく。

「峠で道を急ぐさなか、惨事に見舞われたと聞く」

「え！　事故！？」

ざっと血の気が引き、携帯を乱暴にたぐり寄せると、着信を知らせるランプが点滅していた。渦中の母から、メールが一件。

【山道走ってたら鹿が突っ込んで北　迎えは誰かに頼んでオクからちょっと待って天竺】

さすがに母も慌てていたのか誤った予測変換が入り乱れている。大きな事故ではなかったようなので、とりあえず胸を撫で下ろし、それから文面を二度見した。

迎えは誰かに頼んで――つまりこの「誰か」が「魔王」だと理解するべきだろう。

平日のこんな時間だ、頼れる相手は限られている。祖母は免許を持たないし、近所で親しくしているお年寄りの多くは、免許を持っていてもそろそろ運転自体が危ない。三枝さんの朋子さんなど、まだ５０も半ばだというのに田畑やガードレールに年に一度は必ず突

っ込んでいる。
そう考えると、お隣というご縁とお付き合いのある魔王にお願いしたのは不自然な流れではないかも知れない。が、実際、迎えにやってきた魔王を目の当たりにすると、やや呆然とするものがある。すごい代打が来たな、と。それから、うちの母さん図々しくないか、と。
魔王をパシリに使うとは、神経がしめ縄並みに太くなければできない所業だ。いよいよ魔王１５歳は秘しておくべきと決意が固まった。
「すいませんお手数かけて……」
弱々しい声で告げると魔王は目を眇めた。
「声まで蝕まれているではないか。死病を払い、延命にとりつかれた呪い師のもとへ赴くか」
「病院は今日午後から休診なんで」
保険証も持っていないし、何よりとにかく横になりたい。幸い薬の買い置きはあるので、飲んでしばらく眠ればいくらか楽になるだろう。
床に両手をつき、よろよろ腰を持ち上げかけたところで背後に声がした。
「瀬野、迎え来たか？」
担任の後藤先生だった。授業を終えたばかりなのか、教材を片手に、ぺたぺたと体重の軽そうな音を立てて玄関のほうへと歩いてくる。こちらが何事か口を開く前に、どうしたって注目せざる得ないであろう黒い大きな物体に気がついた先生は、一度目をぱちくりとさせてから私の方を見た。
「えーと、ご家族の方？」
「違います」
彼氏と誤解された時もなかなかどうして驚いたものだが、ご家族というのもまた味わい深い誤りである。ご家族にしては世界観が違いすぎるだろう、と思ってしまう私の器はやはり出来が小さいのだ。

人類と魔族を分ける境界線なんてものは、実はこの世にはないのかも知れない。それぞれの先入観や価値観の歪みが線を引かせているだけに過ぎないのである。ノーボーダー、ノーモアウォー。いい話だ。

おそらくだが、私はいま風邪のせいで正常な判断ができなくなっている。

「魔王さんはお隣さんです。母の代わりに私の迎えに」

「ああ、近所の人か」

そう言ってから、ちょっと弱った風に後藤先生は下がり気味の眼鏡を押し上げた。

「うーんそうなると送迎の申請がな……」

「あ」

車の騒音より蛙の合唱の方が遥かにやかましい田舎とはいえ、危うい年頃のうら若き男女を預かる場所である。風紀の乱れや防犯など、学校側も最低限の対策をとっており、送迎は事前に申請している保護者や関係者のみが許されている。早々に車の免許を取得した小ヤンキーが、浮かれて女子生徒を迎えに来るのを防ぐ狙いらしい。

「余では不服か」

進み出た魔王が顎を少し持ち上げて、睨むにも似た目つきを放った。後藤先生が別段小柄というわけでもないのに、魔王と比べるとその差は歴然だ。この迫力に凄まれれば腰を抜かしそうなものだが、先生の態度は一般的な父兄への対応とそう変わりがなかった。

「いえ許可書がないと基本的に生徒をお任せできないんですよ。瀬野、お母さん来るんじゃなかったのか」

「途中で鹿と接触したみたいです」

「そりゃ災難だったな」

後藤先生は考え込むように腕を組み、ちょうど通りがかった別の教師を見つけて駆け寄っていった。何やら特例で、魔王による送迎を今回に限り認めるか認めないかとを協議しているようだ。

「ほら特例ってあんまり頻繁に設けないほうがね」

「でも鹿と事故っちゃったんでしょ？　仕方なくない？」
「手の空いた教師が送るっていうのは」
「でも俺バイクだし、後藤先生はチャリ通勤じゃないっすかー」
国語教師の池田先生は少しばかり若いこともあって妙にチャラいのである。言動がピンポン玉級に軽く、とっつきやすいので人気はあるが人望はない。
ややしばらく、ああだこうだと言い合っていたようだが、話がまとまったのか、後藤先生が首だけで私と魔王を振り返った。
「自家用車での送迎っていう形でいいですよね？」
「異なことを。羽にきまっておろう」
「羽ェ？」
素っ頓狂な声を出したのは池田先生だ。目を丸くして顔を向けたかと思えば、納得したように二度ほど大きく頷いた。
「あーあーそっかそっか、魔王系のヒトね」
魔王系。すごい。軽い。ピンポン玉の真髄を見た思いがした。
衰えているせいで声にならなかったものの、ついでに私も池田先生と同様の部分で驚いていた。羽ェ？
忘れていたが羽である。魔王が人の乗り物などに頼るわけがない、一度目にしたあの黒い翼で羽ばたいて参じたのである。つまり、自動的に私も空経由で帰宅というコースを選択することになる。なるほど。熱が一度ほど上がった気がした。
「えー交通手段の項目、羽根……と。瀬野、これあとで保護者のハンコいるからな。大丈夫か顔色おかしいぞ」
「早く致せ。余の参謀が息絶える」
「参謀？　瀬野のことですか？」
「左様。右腕として召し上げてやった。誉であろう」
「なんだお前そういう進路に進むことにしたのか。先生聞いてないぞ。農協系狙いはやめたのか」
当人置いてけぼりのやり取りが頭上で繰り広げられているのを、私はぼんやりと聞いた。口を挟みたい気持ちはあれど、あまりにし

んどくて声を出す気力がわかない。あと農協は諦めてない。
紆余曲折を経て、仮の申請許可書が無事取り交わされたらしい。
魔王がペンを走らせた際、できれば日本語でお願いします等と書き直しを要求されていたので、何語でサインしたのか若干気になるところではあった。
「じゃあ、あとはよろしくお願いします。瀬野、気をつけて帰れよ」
「案ずるな眼鏡。この娘の始末は余が引き受ける」
言葉だけ聞くと山中に遺棄されそうな響きである。
よいしょと頼りなくも立ち上がって頭を下げると、眼鏡呼ばわりされた後藤先生は無理するなよと軽く手を振った。ピンポン玉こと池田先生は傍らで女子生徒にもらったクッキーをぼりぼり食っていた。

風邪は確実に私の体力を奪っていく。上履きを脱ぐことすらおぼつかない。手際悪くも何とか履き替えたところで、魔王の手が私に向かって伸びて来るのが見えた。無遠慮に腰の辺りをつかんで持ち上げた思えば、魔王はそのままひょいと私を抱え込んだ。小脇に。
パリジェンヌあたりがよくフランスパンをこんな感じで抱えていたような気がする。フランスパンはこういう気持ちなのかと初めて穀物に親近感を抱いた。
抵抗の意思もなくされるがままに身をゆだねていると、何かが開くような物音といささかの風圧が私の肌に触れた。魔王の翼の支度が整ったのだ。
「参るぞ」
一歩、魔王の足が外へと踏み出そうとしたまさにその時。ぐずついていた空がついに崩れ、雨粒を落とし始めた。しとしとと弱々しくも地面を打つ音がする。
足を止めた魔王は私を抱えたまま動こうとせず、悠然と天を見上げていた。やがて美しくも冷徹なかんばせが私に向く形で下りる。
魔王は言った。

「撤退やむなし」
雄々しい羽根が音もなく閉じた。

田舎のバスに利便性を求めてはいけない。一時間に一本走ればいい方で、３０分に一本なら上等、下手すれば次に来るのは二時間半後という場合もある。
通学に使うバスはスクールバスとしての役割も果たしている為、他の路線よりは恵まれているものの、最も利用客の多い朝と放課後を除いた時間帯となると、交通手段としては瀕死に近い。
あれから私は３０分ほどバスを待った。さすがに停留所で地蔵のようにじっと待つ根性は残っていなかったので、ぎりぎりまで玄関でうずくまって待った。魔王も一緒に待った。
「そなた一人ではあまりに心許ない、よかろう、命運を共にしてやる」
というのが魔王の弁である。もう私もだいたい察しはついていた。魔王も自力で帰るに帰れなくなったということを。
唐突な飛行の取りやめについて、魔力の流れがだとか大気を司るに相性がとか天の忌々しき横槍だとか、あのあと魔王は様々な理由を並べて小難しく語っていたが、つまるところ「雨水を含むと重くなって安定性やべえ」ということらしい。最近の携帯電話すらそれなりの防水機能を備えているというのに、魔王の羽よ、なんたる繊細さだ。その耐久性では紙飛行機とさほど変わらない。
無情にも羽根がたたまれてしまった時、空路であろうが陸路であろうがいち早く帰りたかった私は魔王にすがったのだ。小脇に抱えられるフランスパン状態のまま、どうしても無理ですかと。すると魔王は死の契約を促すにも似た低い声で囁きこたえた。
「不可能ではない。だが安全面は保証せぬぞ」
暗に墜落の可能性を匂わされ、地上に舞い降りた肉片になる己の

姿を瞬間的に想像した私は、へい、バスで帰りましょうか旦那、と素直に時刻表を取り出したわけである。

バスは予定時刻きっかりに停留所に滑り込んだ。古びた車体が水滴を纏い、てらてらと光る。

羽に頼っていたのだから当たり前だが、魔王がバスに乗るのはこれが初めてのようだ。先に行かせた私の一挙一動を観察し、それに倣うように慎重な動作でバスへと乗り込んでくる。

途中で「あ、」と気づいて振り返ったものの、もう遅い。

カァーン

魔王の長い角がバスの低い天井にぶつかって、乾いた音が車内に響いた。例えるなら木製バットのクリーンヒット。思いのほか良い音だった。

痛かったのか痛くないのか、魔王の不動の表情からは読めない。ただ一瞬動作が止まったので、まったく痛覚がないわけではないのかも知れない。

快音を響かせた魔王は慌てず騒がず、演奏を仕舞うトライアングル奏者のごとく、両手をおのおのの角にあて音色を止めた。代わりに甲高いブザー音が鳴り響いて、バスのドアはつつがなく閉じた。

中途半端な時刻のせいか、車内に乗客の姿はない。魔王と私、二人だけを乗せて、バスは雨を跳ね返しながら走り出した。

染み付いた習慣というものは恐ろしいもので、歩くのもふらふらと危ういのだから、乗り口すぐの座席を選べば良いものを、私はいつも通り二人がけの後部座席に吸い込まれるように腰を下ろした。

背もたれに全身を預けると、どっと気が緩む。一息つく心地と、疲労の蛇口が開く感覚の両方が入り混じり、知らず溜息を吐いた。

降りるまで少し眠ろう。そう思って私が目を閉じようとした寸前、

黒いベールが視界の端を横切った。間を置かずして座席が軋んで跳ねる。首をひねって確かめるまでもなかった。

なぜ。

全ての座席が空いているこの貸切状態の中、なぜ、わざわざ、隣に座る。

特に深い意味はないのはわかっている。初めて乗ったバスの作法を知るために、私の真似をしているだけなのだろう。見ず知らずの他人というわけではないのだから、お互い妙に離れた席に座るのもまた不自然ではある。

だからそれについては構わない。不快と感じる要素もない。ただ、純粋に狭い。

魔王は決してふくよかではなく、むしろ無駄なものを感じさせない体つきをしているが、いかんせん縦に長い分、骨格もそれなりである。二人がけとは言ってもそうゆったりとした座席ではないので、大型の魔王がどっしりと構えるとかなり幅をとられる。事実、私の半身を若干潰し気味だ。ローブの一部が暖簾みたいにそよそよと顔面に触れてくるのも落ち着かない。

もう少し向こうに寄って頂けませんかのう。

抗議の意味を込めて肘でやんわりつついてみるも、やんわり過ぎて伝わらなかった。気力を振り絞り体重をかけて押しやると、さすがに気がついたか、身じろぎした魔王が私を覗き込んできた。そのまま体をずらしてくれるかと思いきや、魔王の手はするすると伸びて私の鼻を掴んだ。

「やはり湿り気を感じぬ。そなたらは優れぬと鼻が乾くのであろう」

それは犬だ。

私が誤りを解くのを待たず、立ち上がった魔王が運転席へと言い放った。

「御者！　なにをちんたらしている、死力を尽くして駆けよ！」

「うわっちょっやめてください」
いっとき熱が吹き飛び、私は魔王をロープごと引きずりおろして席に戻した。翼を持たない私はこれからもこのバスに乗り続けねばならないのである。運転手同士の話のネタにされるのは避けたいのである。
幸い運転手は、ごめんね～定刻通り走るのが仕事だからね～と軽く受け流してくれるような気さくな人だったので命拾いをした。
一応引きずり下ろした後、魔王に説明はしたつもりだが、心身ともに余裕がない為か極端に語彙が減り「にんげん、鼻、関係ない、だいじょぶ、私、死なない」と来日2年目くらいの片言を繰り返してしまったので、きちんと理解してもらえたかどうかはあまり自信がない。

車内の喧騒をよそに、雨に濡れた風景が車窓を通り過ぎていく。
バスに揺られている内、節々が痛むようになってきた。私の体力はどんどんと減りつつある。ゲージで表したなら相当赤い。
隣にいるのが白い魔法使いならば回復の呪文でも諳んじてもらいたいところだが、あいにくどう見ても癒すより削ぐジャンルの方に造形が深そうだ。身内でもない相手を迎えに来てくれただけで御の字なのだから、これ以上の要求はすまい。
私はわずかでもと涼を求めて窓に頬を当てた。この季節ではガラスの冷たさなどたかが知れているが、それでも茹だった肌にはひやりと心地よかった。これなら眠れる。
「カオリ、あれは」
瞼を持ち上げると、魔王が外に向かって窓ガラスを割らんばかりに指をさしていた。その先に小さなプレハブの店舗が見える。
「……ああ、たい焼き屋です」
「たい焼き」
「中に餡子とかクリームが入ってるおやつです」
「ではあの店もか」

「いやあれはおやき屋。中に餡子とかクリームが入ってるおやつです」
「同じではないか」
「違いますよ形とか」
「ほう、ではあれも」
「あれはコイン精米所」
「それは何か」
眠れぬ。
普段高みから見下ろしている分、バスや車の目線での移動が新鮮なのだろうか。物珍しそうな魔王の素朴な問いは続き、なかなか瞼を下ろす機会は訪れない。
その内、魔王の関心は外界から逸れ、バスの車内の方へと戻っていった。吊り革の用途に首をひねってみたり、案内のアナウンスにいちいち「うむ」と律儀に頷いていたり、ひと睨みで蠅が滅しそうなご面相の割に好奇心は無限大である。ひとしきり観察して満足したのか、ようやく魔王の動向も落ち着いてきた。すでに眠るのは諦めかけていたが、やはり体のだるさには勝てず、私はぐにゃりと窓側にもたれかかった。
大人しくなったはずの隣から蠢く気配がする。見るとはなしに見れば、魔王の目線が私の頭上に注がれていた。そこにあるのは、古ぼけた紫色の下車を知らせるボタン。
「何の装置か」
「……次のバス停で降りますっていうのを運転手さんに知らせるボタンです。でも私達が降りるのはまだ先だから、」

ピンポーン

押しちゃったよ。
繰り返すようだが、乗客は他に誰もいない。私達のみである。普段ならばいざ知らず、今の健康状態で正直に次のバス停で降り、家

まで歩くのは苦行に近い。途中で行き倒れる未来予想図が脳裏に広がるばかり。

「なんでフライング気味に押しちゃうんです……」

「誘惑に抗うことかなわず。この魔王をたぶらかすとは敵もさるもの」

ニヒルな笑みを浮かべる魔王に対し、私には相槌を打つ気力もない。押したくなる気持ちもわかるが、なぜあと少し辛抱できなかったのか。

こうしている間に次の停留所は近づいてくる。すいません間違えましたと言うのは易いが、運転手に聞こえるようにと声を張るのは今の私にはかなり厳しい。後始末はよろしくと隣の黒い裾を引くと、魔王は任せておけとばかりに力強く頷き、再び立ち上がった。

「今のは敵軍による攪乱である。御者よ、惑わされず己が道を行け」

魔王による号令が響き渡った直後、私たちの意思に反してバスは停車し、開いた乗り口から、年老いた女性がひとり乗車してきた。しんと静まり返った車内を婦人がゆっくりと進み、時間をかけて座席に腰を下ろす。それを見届けるようにして魔王も静かに座った。私は寝たフリを決め込み、固く目を閉じてやり過ごした。

降りるときになって魔王が財布を持たずに来たことが判明し、バス賃を私が立て替えるなどのひと悶着はあったものの、うっかり寝過ごすこともなく、ボタンを再びフライングすることもなく、最寄りのバス停で無事下車することができた。

もともと弱かった雨足は更に控えめなものになり、傘を必要としない程度まで回復している。

ここから歩けば五分ほどで我が家だ。

それだけを支えに私は重たい体に鞭打って歩き始めた。当然颯爽とした足取りとは言い難い。機敏と対極にある魔王の歩みにすら遅れをとってしまうほどだ。歯がゆさを覚えてか三歩先の魔王が私を

振り返る。
「飛ぶか」
申し出に飛びつきそうになったところに、冷たい雨粒が落ちてきた。
「いや……雨が強くなるかも知れないし」
「ならば抱えるまで。そなたに合わせては日が暮れる」
魔王はのしのしと私に向かって歩いてきた。またフランスパン方式だろうと思い、持ち上げられるのをぼうっと立ち尽くして待っていたら、いつまで経っても魔王の手はやって来ない。よく見ると魔王が腰をかがめて背中をこちらに向けていた。
「どこからでも来るがいい」
いつもの私ならば、ぎょっとして後ずさるくらいのことはしただろう。魔王のおんぶである。レアさでいけば五つ星評価は堅い。
が、弱っている現在、運んでくれるならば魔王であろうが法王であろうが、遠慮も抵抗も芽生える余地はなかった。布団に飛び込むのとさして変わらぬ勢いで私は魔王の背中を借りた。
校舎にて苦もなく小脇に抱え込んだことから知れるように、腕力もまた魔王は並外れているらしい。私一人の重みなど塵に等しいのか、常と変わらぬ威厳と速度を保って魔王は歩いていく。最初こそ、どこにつかまればよいかと手がさまよったが、しがみつく場所を見つけてからは背中であることを忘れるほどの安定感に包まれた。ゆりかごのような心地よい振動が全身に伝わる。いつしかそれは睡魔となって、私の瞼を優しく撫で始めた。
「カオリ」
うとうとと溶けゆく意識に低音が混じる。
「それは手すりではない」
「……おお」
角だった。
とても自然な形で、私の手は角をつかんでいた。
朦朧としている中、ちょうど良いところに手すりがあると思って

しがみついていたのだが、バリアフリー設計でもあるまいし、魔王に手すりなどついているわけがなかった。

角か。そうか角だったのか。道理で握りやすいはずだ。

「今日だけ……手すりに鞍替えして……もらえませんか……」

「眠い」と「しんどい」が許容量を超え、もう自分が何を言っているのかわからない。角を手放すまいという常ならぬ意思の強さも、どこから来るのか謎といえば謎である。病は篤い。

魔王は「む」とか「ぬ」とか一言呻いてから「情に訴えるとは巧妙なやり口」などとぶつぶつ漏らしていたようだが、もうそのあたりから私は半分眠気に沈んでいたので、あまりよく聞いていなかった。ただ、ドライ洗いによる成果だろうか、顔をうずめた魔王のローブの肌触りが悪くなかったことは覚えている。

居間の鴨居に真新しい傷があるのを発見したのは、熱も引いたあくる日のことである。

あのあと魔王は私を送り届け、非力な祖母の代わりに家の中まで運んでくれたのだという。そしてその途中で角が派手に衝突したのだという。

祖母はしみじみと語った。カアーンとよく乾いた、甲子園みたいな爽やかな音色だった、と。

閑話・魔王と雨

長雨である。

雨雲がどっしりと腰を据えてしまったらしく、昼夜問わず、時に霧のごとく細く、時に嵐のように激しく地を打ち、太陽が顔を出す暇もない。

天の恵みとはいえど、過ぎたるは及ばざるがごとし。同じ天候が幾日も続けば頭痛の種は増えるものだ。例えば作物の出来だとか、河川の増水だとか、洗濯物の始末だとか。

いずれも悩ましい問題だが、このところの私の気がかりはそのどれでもなかった。長期的な雨が阻むもの、それは魔王の買い出しである。

背を飾る禍々しい羽根がその威風に反して雨水に弱いと知れたのは、私が風邪につけこまれた先日のことだ。飛行を断念せざるを得なかったあの日から、雨はずるずると続いている。

スーパーの袋をぶら下げ羽ばたく魔王の姿は、これまで何度も目にしてきたものの、思い返してみればいずれも青空も眩しい晴れの日ばかりだった。あれは偶然そうだったわけではなく、むしろ天候に左右されていたと考えるべきだったのだろう。道理で雨天時にあまり魔王の姿を見かけないと思っていた。外出叶わず、引きこもっていたわけだ。エコは地球に優しい分だけ己に厳しく、不便と隣り合わせである。

それにしても飽きずによく降る。さほど雨量の多い地域ではないので、こうまで続くのは珍しい。魔王が越してきてからは初めての長雨になる。

魔王の備蓄は、大丈夫なのだろうか。

様子を見るに独り身のようであるし、一度にどっさりと買い込む形ならばそう困ることもないだろうが、どちらかといえば、折込チラシのお買得品を中心に購入するというこまめな買い出しスタイルである。そろそろ食料が底をついてきたのではないか。最低、米と塩さえあれば食いつなぐことは出来るとしても、あまりにわびしい。せめていつものように野菜でもおすそ分けできければ良いのだが、このところの悪天候で育ちが思わしくないのである。

送り届けてもらったお礼に、祖母お手製のおはぎを持っていったのは確か五日前。以来、魔王の姿を見ていない。

い……生きてますよね？

縁起でもない考えを巡らしつつ雨模様の窓を見ていると、インターホンが鳴った。

もしや、とつま先を立ててドアの覗き穴を伺えば、私の中で生存が危ぶまれたその人の姿がある。祝・ご存命。

ひとまず安心し、ドアを一気に開けそうになったものの、直前でこらえて施錠をし、ドアチェーンを施した。来客の正体が知れてから扉を固く閉ざすのも本末転倒な話だが、魔王は時々抜き打ちチェックにやって来るのである。そこで無防備に迎え入れようものなら、防犯の鬼が降臨し、訓練が再スタートを切ってしまうので下手な前科者よりも警戒して当たらなければならない。私は受験にも似た気持ちで、慎重に、粘り強く、セキュリティレベル最大で臨んだ。

「そなたもようやく心得てきたな」

「おかげさまで」

及第点を頂けたらしく、ドアを開けた先に立つ魔王は満足げに口角を上げていた。その立ち姿は常と変わらず威圧的で、うらぶれた影もなく、面やつれするでもなく、餓えに苦しむ様子は見えない。が、その手には何故か一本の空き瓶が。

「わざわざ余がこのようなあばら家に出向いたのは他でもない」

「はあ」

「そなたの忠誠の証として、余に醤油を5匙ほど納めよ」

魔王宅の醤油、切れる！

速報が流れた。主に私の中で。

目の前に突き出された瓶に、持ちこたえられなかったか……と肩を落とす思いと、やっぱりな……という納得の感情が交錯する。

果たして醤油が切れたのはいつのことだったのだろう。今さっきならばまだしも、数日前からこの状況に置かれていたならこんな悲しいことはない。醤油すら底をつくなら、味噌も恐らく残量わずかと見た。

醤油もねえ、味噌もねえ、出前とるにも店がねえ、の三重苦の中、不便を強いられている魔王に食料をお届けする気の利く配下はいないのか。と、そこまで考えたところで、あれ私がその位置なんですかね、と気づいてしまい、行き場のない半笑いになった。

魔王にはなんだかんだとお世話になっている。瓶を受け取った私はそのまま台所に向かい、手下としての使命感ではなく、あくまでお隣さんの好意として、減塩醤油1リットルを一本引っ張り出した。

「5匙じゃ数日も持たないんで、これ使ってください」

未開封の醤油を前にして、魔王は珍しくたじろいだ顔を見せた。

「あ、うち買い置きいっぱいあるから大丈夫です」

事実である。たまに母は何を血迷ったか、箱で買ってきてしまったりするので、一本や二本惜しくはない。

「カオリ……そなたの忠義、よもやここまでとは。重く受け止めようぞ」

「普通に受け取ってください普通に。醤油として」

魔王は両手で仰々しく醤油を受け取り、器用にローブの袖の中へと隠した。味噌はあるかと尋ねると、味噌はまだあるが、味噌汁にする具がないという涙を誘う答えが返ってきたので乾燥わかめと油揚げ、それから冷凍食品やインスタントラーメンを袋につめて渡した。上京した子供にやたら食品を箱詰めして送る親御さんの気持ちが、今なら少しわかるような気がした。ちなみに買い置きしておいた食パンはカビに侵食されて全滅したという。食パンは冷凍した方

がいいという私の忠告に対して、「時すでに遅し」とこぼした魔王の憂いの横顔は悲しいものがあった。

「早く晴れるといいですね……」

外はまだ小雨がしょぼしょぼと降っている。長引く雨に頭を悩ませるのは魔王ばかりではない。かくいう私もこの蒸し暑さとしつこい雨雲にはそろそろうんざりしている。どこもじめじめとしているせいか、いくら乾かしても靴は水浸しになるし、と靴箱まで視線を下げた時、それが目に入った。

「魔王さん、羽根に防水スプレーかけてみます……？」

ぴんと来ないのか、魔王は不審そうな目つきで私が手にしたスプレー缶を見遣った。私はあえて口で説明せず、手品師よろしく大げさな動作でスプレーと母の革靴を交互に魔王の目の前に突き出し、よく振ったスプレーを革靴に噴射した。雨に濡らせば、当然のように玉となって弾く。

「……！？」

魔王は瞠目した。靴の上を真珠のように滑り落ちていく雨水を驚愕の表情で見つめたかと思えば、奇跡を見た信徒のようにスプレー缶に見入っている。別に私が開発に携わったわけでもないが、妙に得意げな気分になった。見たか人類の英知。

「カオリ、余に施すことを許すっ」

声自体は充分落ち着き払ったものだったが、惜しい。語尾の「っ」に隠しきれない興奮が現れている。

いつ広げたものか、耐水性に欠けると噂の黒々しい羽根が魔王の背中に伸び、さあやれすぐやれとばかりにこちらを向いていた。スプレーを振ってかけて、振ってかけて、時々むせて、を繰り返し、まんべんなく噴きかけ終わると、羽を広げた魔王はゆっくりと試すような足取りで玄関から出て行った。が、広げた羽根が扉に引っかかったので、一旦後退し、真顔のまま蟹のように横歩きで行った。

正直、革製品用が同様の威力を発揮するものか疑わしかったのだが、ほどなく玄関の向こう側から聞こえてきた「ものともせず…っ」

という感極まったような小声から察するに、効果に変わりはなかったようである。様子を伺おうと玄関から顔を出すと、小雨に濡れる魔王の姿があった。ばっさばっさと無駄に羽を動かし、水滴をばらまいている。水浴びしたあとの犬を彷彿とさせた。

「土砂降りはさすがに無理ですけど、この程度なら大丈夫ですね」

「うむ、まるで寄せ付けぬ」

魔王の羽ばたきはなかなかの風圧で、私の前髪が一本残らず巻き上がる。

「余の参謀としてふさわしい働きである。褒章を与えてやらぬこともない」

顎に手を這わせ、魔王は大きく頷いた。

「踏み入れる者を死に至らしめる呪われし毒の領地の一部をそなたに」

「お気遣い無く！」

ハッピーな要素がひとつもない土地を頂いても手に余る。

首を猛然と振って辞退すると、クク無欲な奴よ、と笑みを浮かべた魔王は一層羽を忙しなく動かした。突風。息が出来ない。

「カオリ、ご苦労であった。長らく舐めた苦渋も今日限りよ」

いざ敵陣！　とばかりに、魔王は勢いよく離陸した。雨を前に翼をたたんでいたのが嘘のような威勢である。飛び去った先は、恐らく街で唯一のスーパーマーケット。

弾丸のごとく天空に消えていった魔王に、私は伝えることができなかった。だが伝えるべきであった。拡声器を用いてでも伝えるべきであった。

今日は棚卸しで、サンダースは休業である。

戦果なく帰還を遂げた魔王に、私はせめてもの慰めと我が家の献立の肉豆腐を届け、下僕として忠義を示すのであった。

ひやむぎの巻

【いま家にいるか】

たったそれだけの簡素なメールが届いたのは、夏休みに入って間もない頃だった。

ちょうど煮立たせた麦茶をボトルにうつしていたところで、気づくのがいくらか遅れた。さして広くない台所は炙った薬缶の熱気と夏らしい暑気が充満して、吸い込む酸素すら暑苦しい。汗を拭いながら【いるよ】と負けず劣らず淡白な文面を返せば、画面を閉じるよりも早く鳴った。携帯ではなく、玄関の呼び鈴が。

「返信おせえよ」

「10分やそこらで遅いも何も」

私が出るまで二回ほどチャイムを追加してくれた宮間くんは憮然とした顔で佇んでいた。せっかちな面がある宮間くんは、いるかと問いかけておきながら、私の返信を待たずしてやってきたらしい。留守という考えはあまりないようだ。

「てか、すげえ暑いんだけど。麦茶飲まして」

「アッツアツのしかないけどいいかな」

「いいわけねえ」

もともと白い方ではない宮間くんの肌は、日差しの強さを物語るようにますます良い色に焼けていた。ほぼ毎日、熱心に野球部の練習に打ち込んでいるのだろう。この炎天下の中、打って投げて走るのだから純粋に尊敬する。実のところ本人はサッカー部を希望していたそうだが、生徒数が多くないこともあってまともに活動しているのは野球部とバドミントン部と囲碁将棋部くらいしかなかったらしい。

ちなみに私も一応という感じで、茶道部に籍を置いている。ただ、茶道室はないので特に茶道は学べていない。それでも部としての体

裁を保たなくてはいけないので、当初は週に一度、理科室でお茶を点てたりしていたものの、最近ではトランプタワーに傾倒するなどして完全に堕落の一途をたどっている。

「なんか用事あった？」

麦茶に三つほど氷を入れて、玄関口に立ったままの来客に手渡した。熱々ではなくなったが冷えてもいないそれを一気に飲み干してから、宮間くんは「なきゃ来ねえ」などと言って下げていた紙袋の中を漁り始めた。

「お前んち冷麦食うよな？」

首をかしげながらも頷くと「かなり食うよな？」と問いを重ねてきたので、そこは相槌を打たず「いやそんなには食べない」と正直に答えた。紙袋に視線を落としている宮間くんの口から、ちっ、と音がする。

「なんで舌打ち？」

「そこは食うって素直に答えりゃいいんだよ。まあいいや、これ残り全部やるから」

結局宮間くんは、紙袋ごと私に放って寄越した。中を見ると手をつけていない冷麦の束が大量に入っている。どうしたのかと袋を抱えたまま視線を向けると、宮間くんは決まり悪そうに、そのつり気味の眼をすいっと逸らした。

「お中元が全部かぶった……」

「なるほど……」

宮間くんの家は商売をしているので、お中元やお歳暮の数が比較的多い。これまでは果物やゼリーやビールなどそれなりにバラけていたようだが、今年は見えない力でも働いたかのようにことごとく麺類が届き、中でも特に冷麦の勢いすさまじく、宮間邸の一角は夏の麺まつりと化しているという。長く日持ちがするとはいえ量が量なので、長男の仕事として命じられた宮間くんが、知人宅に配り歩いているのだそうだ。

「八軒回ったけど、留守も多かった。吉田んちとか」

「ああ吉田くんサイパン行くって」
「まじで？　なんであいつがサイパンで俺が冷麦なんだよ……」
肩を落とす宮間くんを尻目に、私は袋の中身を物色していた。ずっしりと抱えるほどの量が詰め込まれており、引き受けるには少し手に余る。何しろ我が家には、買い置きをさせたら右に出るものがいない母という存在がおり、日に日に在庫を増やしているのである。当然、魔手が冷麦や素麺などの乾麺に及ばないわけがない。去年おとしに買い込まれたそれらが、今もシンク下で今か今かと出番を待っているのだ。
「宮間くんこれちょっと多い」
「多くねえって根性で食え」
「根性はもっと別の場面で使いたい派です」
「いいからとっとけ！　夏は冷麦だろ！」
「うちだって三シーズン分くらいの麺が眠ってるんだよ！」
主張するごとに押し付け合い、私と宮間くんは何度か紙袋を往復させた。夏は暑い。日当たりはよく扇風機の風も届かない玄関先はいよいよ暑い。こんな中、声を張りあげていれば汗も流れるしエネルギーも奪われる。つまり疲れる。四度ラリーを重ねたあたりで、埒が明かないと悟った私たちは徐々に語尾を弱めて、歩み寄る姿勢を見せた。
「まあ、半分……くらいなら」
「そう言わず全部引き取ってくれ……」
「えー……食べきれる気がしない……」
「うちにまだ何箱あると思ってんだ、親戚からきた分も含めて１５箱だぞ１５箱。大人ひとりが体育座りしてるくらいのスペースとってんだぞ」
「致し方ない……手を打とう」
正直うちの在庫も相当なものだろうが、切々と訴える１５箱に免じて折れることにした。武士の情けである。冷麦を袋ごと受け取ると、宮間くんはようやく肩の荷が降りたような安堵した顔を見せた。

ノルマを達成して気が楽になったのだろう。先ほどとは打って変わって、無理言って悪かったな、と殊勝な台詞までもがその口から出た。私は長男に課せられた責務の重さをしみじみと感じた。

と、その時またしてもインターホンの音色が響き渡った。すでに扉の内側にいる宮間くんの犯行ではない。そのままサンダルをつっかけてドアを開くと、そこに居たのはいつも回覧板を持ってきてくれる鈴木さんだった。親しげな微笑みの鈴木さんは、私の姿を見てゆっくり首をかしげた。

「あら、おばあちゃん留守？」

「あ、すいません太極拳教室いってて」

「まあそうなの」

じゃあこれ、みなさんで召し上がって。製麺工場に勤めてる息子からたくさん届いたの。

鈴木さんはそう言って、包装紙にくるまれた平べったい箱を三つほど私に手渡し、軽やかに去っていった。包装紙の紙質は薄く、目をこらせば中身の予測は容易い。うっすら浮かぶ三文字を注視すると、こう読めた。

手延べ。

鈴木さんはこう言い残していった。

製麺工場。

「……宮間くんに残念なお知らせがあります」

「聞きたくない」

「さっきの冷麦の件はご破産ということで」

「俺は嫌だぞ絶対持ち帰らねえからな」

再び面持ちに険しさを取り戻した宮間くんは強く拒んだ。が、瀬野家としてもこれ以上受け入れて、夏の麺まつりの二の舞は避けたい。冷麦に罪はない。素麺にも咎はない。しかし人は麺類のみで生きていけない。議論の余地はないという意思をこめて厳かに首を振って見せると、宮間くんはらしくない弱々しさで告げた。

「この冷麦をさばくまで家に帰れねえんだよ……」

そんなマッチ売りみたいに訴えられても困る。
かといって、知ったことではないわ出ておいきと窮した友人を冷たく突っぱねられるほど私のハートも凍りついてはいない。珍しく覇気のない宮間くんの姿に、つい、半分くらいなら引き取ってあげようかな……と仏心がもたげそうになったものの、両手に感じる素麺三箱分の重みが私を押しとどめた。
「誰かいないの他に」
「いねーよ。瀬野こそ他に回すとこないのかよ。隣近所とか」
「うーん……」
手の内の素麺へ迷う視線を落とす。おすそ分けどころか、隣近所の一角である鈴木さんには逆に頂いてしまったし、このあたりの友人は既に宮間くんが潰してしまっただろう。宮間くんが思いついたような声をあげた。
「あそこは？　元色ボケの。犬じじい」
「こら、三枝さんのことそんな風に言っちゃいかん」
「通じてんじゃねーか」
「やー三枝さんあんまり麺類好きじゃないからー」
刹那、鈴木さんを見送ったあと開きっぱなしだった玄関ドアの前を、白いものが通過した。出て行って拾い上げてみると、少しだけ湿ったTシャツが一枚。風で飛んできた洗濯物らしきそれは、胸に見覚えのある文字がプリントされていた。後ろから覗き込んだ宮間くんが冷静に読み上げる。
「わっしょいいかまつり？」
そう。居るじゃないか。おすそ分けに最適なお隣さんが。

思い立ったが吉日。すぐさま魔王宅へ向かった私達はTシャツと袋いっぱいの冷麦を手に、インターホンを押していた。幸い在宅だったようで、ほどなく魔王はいつもと同じように来客を迎えた。

「洗濯物落ちてました」
「よくぞ手にした。まずは褒めておこう」
差し出したTシャツを、するりと長い爪と長い指がさらっていく。洗ったということは着用しているということで、一体いつ着ているのかと心の片隅で好奇心が蠢いた。二言三言、魔王と言葉を交わしていると、それまで黙って傍らに立っていた宮間くんが私の肘をついた。
「なあ、もしかして近所付き合いこじれてんのか」
「なんで」
「ドアチェーンかけられてんぞ」
ここらあたりの住人にとっては、ドアチェーンなど飾りである。これまでの経験で私は慣れてきたが、宮間くんには魔王による警戒心フルスロットルの対応はやはり異様にうつるのだろう。ましてや顔見知りのはずの隣人を相手にしてこれなのだから、まあ普通に引く。
「いやこれはしきたりみたいなもんで……」
そのうち開くから、と私が付け加える前に、ドアチェーンの戒めが解かれ、魔王は禍々しくも高貴な姿を顕にした。扉のせいでちょうど死角になっていたのだろう、そこで初めて客が一人ではないと気がついた魔王は底冷えする眼差しを宮間くんに向けた。宮間くんは宮間くんで、臆することなく勝気な目尻を更に吊り上げてそれを迎え撃つ。
すっかり忘れていたが、スーパーでの一件を考えるに、この二人は相性があまり宜しくない。魔王は初っ端から青少年のコンプレックスを刺激し、宮間くんは宮間くんで呼び捨てにした挙句魔王相手に噛み付いた。互いの印象は良いものではないだろう。私がいささか不安を覚えた始めた時、魔王は重く口を開いた。
「誰ぞ」
印象以前の問題だった。
「え、えーほら、前スーパーで会ったことあるじゃないですか」

悪印象を抱いていないのは結構なことだが、まるで記憶にないのもそれはそれで失敬な話である。あの時のことを思い出してもらおうと私はあれこれ動作付きで伝えてみたものの、魔王の手応えは芳しくなく、そうだっけ、みたいな実に薄味の反応しか返らない。

「確かあれ、カレー2箱買った、」

駄目元でカレーの話を出すと、途端、手応えのなかった表情に閃きが浮かんだ。

「そうであったな。覚えがある」

値踏みするにも似た傲慢な視線が再び宮間くんに降り注ぐ。やがて魔王は記憶を抽出するように、ゆっくりと唇を上下させた。

「確か……ミヤマメといったか」

惜しい。

「てっめえわざとだろ！　絶対わざとだろ！！」

背丈を気にしてる相手をつかまえて豆呼ばわりはいけない。怒りに任せて魔王の胸ぐらをつかむという凶行に及んだ宮間くんだったが、身長差の関係でぶら下がるような格好になってしまい、あまり様にならなかった。傍から見ると、最低五人の腕を食いちぎっているであろうドーベルマンと喧嘩っ早いコマネズミ。勝ち目は薄い。

「ミヤマメじゃなくて宮間くんですよ宮間くん」

「大した差異でもなかろう」

ドーベルマンはコマネズミを胸ぐらにぶら下げたまま平然とそう言った。人間風情など歯牙にも引っ掛けない魔王たる余裕なのか、鈍い感覚、いわゆる鈍感という人種なのか、判断がつかない。のれんに腕押しと悟ったか、宮間くんもギリギリと歯ぎしりの音色を奏でながら一旦魔王から手を離した。良い判断だミスター宮間。友人の剣呑な気配を目の端に入れ、私は本題である冷麦の大量袋詰めを魔王に差し出した。

「これ宮間くんからなんですが、良かったらどうぞ。保存食にも最適です」

つい先日、魔王がセルフ兵糧攻めに苦しんでいたことを踏まえて

の発言である。案の定、魔王は保存食、という部分にピクリと反応して紙袋の中を覗き込んだ。

「ほう……これを年貢として余に納めると」

「えっ……まあ、うん、そうです」

そういうことにしておこう。

「冷麦とか素麺とかって普段食べます？」

目線を袋から私へと戻した魔王は首を横に振った。そしてすぐに「だが、」と付け加えた。

「いずれ遠からず食す腹積もりであった」

魔王は唇の端を持ち上げ、まさか己から転がり込んでくるとは飛んで火にいる夏の虫、とか、天の配剤も捨てたものではない、とか、ぶつぶつとよくわからない独り言を並べている。魔王の冷麦への妙な前のめりな姿勢に首をひねっていると、家の前に宅配のトラックが停車した。

通販を頻繁に利用している魔王はすでに運転手と顔なじみらしく、荷物を抱えたおじさんに「おっ、今日はチェーンかけてないんだね」などと陽気に対応されていた。受領書にサインを記し（ひらがなで「まおう」だった）荷物を受け取った魔王は「ついに来たか……」と重々しくもらした。覗き込むと、送り状の品名の項目に【家庭用流しそうめん】と書かれていた。

私はこのあと本屋に行くつもりであったし、宮間くんも用が済んだら帰ると事前に宣言していたので、冷麦を置いて早々に解散の予定だった。が、なぜか今、私達二人は魔王邸の中にいる。

我々を引き止めたのは、言うまでもなく、魔王のもとに届いた流しそうめん器である。

以前訪れた際、カタログに付箋が貼られていたのを覚えていたので、私は「あっやっぱり買ったんだ」と魔王の通販におけるフットワークの軽さに驚き、流しそうめん器の存在自体が未知だったらし

い宮間くんは「なんだよ流しそうめんって！」とトビウオ並の瞬発力で食いついた。

焚き火の焼き芋と同等のレベルで流しそうめんにはロマンがある。日本の国に生まれたからには一生に一度くらい流してみたい。逃げゆく麺に翻弄されてみたい、それを箸で追ってみたい。抗いがたきは流しそうめんの魅力。私たちは予定も憤りも一旦放り投げ、魔王から放たれた「そなたらもこの儀に立ち会うか」の誘いに乗った。

一応客の扱いということで、宮間くんの足にも例のモコモコのスリッパが与えられている。出された時は夏に履く素材じゃねえだろ、と文句を垂れていたが脱がずに履いているようだ。

台所では、もうもうと湯気にまみれながら、魔王が冷麦を茹でている。いか祭りＴシャツは例外として、魔王は常に黒いベールをまとって過ごしているので、見ているこちらが蒸し上がりそうだ。暑くないのかと聞いたところ、脆弱なそなたと違い余の肌は熱など通さぬと一笑に付された。

道理で室内が暑かったはずである。窓は締め切られ、クーラーも沈黙し、扇風機は羽を休めている。家に上がった瞬間、外気と変わらない温度に私も宮間くんも真顔になった。

なるほど、魔族は地球にやさしい。

しかし人類である私達はエコを優先させすぎると救急車のお世話になる羽目に陥るので、渋る魔王を説き伏せてクーラーを叩き起し、冷風を味わった。

冷麦の茹で時間など知れているというのに、落ち着きのない宮間くんはリビングをちょろちょろとしている。その内テレビの方へと近付いて細かく観察し始めた。ガラス戸の中まで無遠慮に覗き込んでいるので、思わず立ち上がった。

「ちょっ、人様の家のものをそんな漁るように、」

「おっＤＶＤボックスあるじゃん」

「えっ」

咎めるはずが好奇心が勝り、つい首を伸ばしてしまった。宮間く

んの言うとおり、奥の方に上等な箱におさめられたＤＶＤが堂々と鎮座している。その背に記されたタイトルは私もよく知るものだった。

徳川の八代将軍がちょっとどうかなと思うくらい派手に暴れまわる、国民的な時代劇である。１０人を超える刺客に囲まれても微塵も動じず、小悪党どもをなぎ払う様はまさに痛快。この上様ならば黒船すらも一太刀で沈めたであろう。魔王が先ほど口にした「年貢」のワードの出処はここか。なるほどと合点がいくのと同時に、とある懸念がよぎった。

「大丈夫なのかな」

胸に引っかかったものをそのままぽろっと外に出すと、宮間くんが「何が？」と振り返った。

「これでもかと勧善懲悪じゃん……」

悪は例外なく将軍の手に掛かり、完膚無きまでに叩き伏せられるのが定石。悪役代表みたいな立ち位置にある魔王が果たして心穏やかに鑑賞できるのか。

「公私は分けるタイプなんじゃね？」

「そ、そっか」

竹を割ったような回答を前に、ですよねーフィクションですもんねーと納得するしかない。単なるモデルとはいえ実在した吉宗公がフィクションで、魔王がノンフィクションという扱いの現実と改めて向き合うと知恵熱が出そうなので、流しそうめんに流すことにした。

居間のテーブルの中心に流しそうめん器は設置された。正確には流しひやむぎだが、この際流れる細い麺なら何でもいい。私たちはそれぞれめんつゆの入った椀を持って、中心に据えたそうめん器を三人で取り囲んだ。

「余が手ずから茹で上げた麺ぞ。心して食せ」

「持ってきたのは俺だけどな」

流しそうめん器とはいうなれば回りそうめん器である。回転寿司のようにぐるぐると水が回る仕組みだ。うまく水が回り始めたのを確認して、私はひとかたまり分の冷麦を流し入れた。それを見て宮間くんも同等の量を水に放った。魔王も倣うようにして投入した。

「流れねえ」

渋滞した。

「なんでいっぺんに入れるの……」

一気になだれこんだ冷麦が水中で立ち往生している。水流が完全に負けているのだ。全員でかき混ぜるなどして循環を促してみたものの、モーター音が唸るばかりで冷麦はその場に浮かんだまま身動きひとつしない。仕方ないので流れていない冷麦をすすって食べた。いくらか食べたところで電源を入れ直すと、ようやく流れの強さが数の暴力を凌駕したのかスムーズに麺が流れ始めた。

「カオリ、そなたに麺を扱う任を負わせる」

箸で人をさすな。

任命だけに飽き足らず、魔王は冷麦の入ったボウルを強引に預けてきたので、私は流れを目で追いながら冷麦を放流する作業に従事することになった。

育ち盛りの宮間くんは当然として、魔王も見かけによらず食欲は旺盛だ。箸の動きが早い。私もお昼は食べていないので、流すばかりでなく少し位はいただきたい。せき止めない程度の量を放って、箸ですくって食べて、冷麦を入れて、食べて、入れて、食べて、それを数度繰り返したところで気がついた。

「色付きばっかり食べてるのは誰だ！」

魔王と宮間くんの箸が一瞬止まった。

種類で分けるならば、魔王は「ぎくり」、宮間くんは「ぴくり」。宮間くんがサッと横の魔王に視線をやると、魔王は箸で持ち上げていた麺を隠すようにめんつゆの中に落とした。こんな時でもその顔色は涼しく毅然としており、手にしているのが欠けた割り箸とは到底思えない。

ピンクや緑の冷麦はひと束に一本ずつしかないレアな存在と言える。味は通常のものと全く変わらないのでどうでもいいと言えばどうでもいいのだが、お宝的な意味で見かけたら狙わずにはいられない。少なくとも私は狙う。冷麦を食べる際のお楽しみのひとつだ。

「さっきから色付き流れねえなーとは思ってた」

宮間くんも密かに機を伺っていたようである。私と宮間くん二人分の非難の視線を受けたところで、さすが魔王は動じない。めんつゆから手を離さない。

「たかだか麺の7本ごときで騒ぎ立てるなど愚かな者共よ」

「自白したぞ」

「数まで聞いてないのに」

開き直ったのか、魔王はずるりとめんつゆに秘していた冷麦をすすった。桃色の麺が魔王の口の中へと消えていく。魔王が語るとおり、たかだか麺なのである。私も目を釣り上げて憤るほどの子供ではない。が、黙って引き下がるほど大人でもなかった。

次は本気で行く。

決意をこめてそうめん器に向き合うと、正面の宮間くんと目があった。ただならぬ気配……奴もやる気だ。

「家と違って妹に譲る必要ねえからな」

幼い子ほどカラフルな色付き麺を好む。こう見えて長兄である宮間くんは立場的に普段は率先して拾えないのだろう。一人っ子の私は独り占めできるかと言えば、そう甘くはない。油断していると母が巧みな箸さばきで攫っていく。

「よい面構えよ。首を取る覚悟で来るがいい。手加減はせぬぞ」

悪そうな笑みをたたえた魔王は箸を開いたり閉じたりして私達を煽っている。

そう来るなら全力で仕掛けるのみだ。冷麦の塊を流れに放ち、その中心に見えた一筋の緑色めがけて箸を刺す。同様に、二人分の箸が襲いかかってきたが、緑の麺が選んだのは私だった。箸の先に絡まるやいなや、一気に水中から引き上げた……はずだったのだが、

気がついたら沈められていた。
　見れば魔王の箸が私の箸を上から押しつぶしている。そして強引に麺を奪い、引っ張り上げてしまった。
「ええー？　今のあり！？」
「これも策よ。脇の甘いそなたに非がある」
　ずるずると勝者の音を響かせながら魔王は緑の冷麦をすすり上げた。策というより単なる力技だろうあれは。早いもの勝ち、というルールを念頭に置いて挑んだのだが、それよりも更に無法地帯であるらしい。魔王は言った。戦の終結も待たず勝鬨を上げるなど愚者の振る舞いであると。

　次に放り込んだ冷麦には色付きは紛れていなかったので、諍いは起きず、皆不自然なほど静かに箸を動かした。心はすでに次なる冷麦へと向かっている。麺をすすりながらも、互いの動向を伺うような緊張感がそこはかとなく漂っていた。
　そのまま三回ほどレアなしの放流が続き、全員の警戒心がほどけかかった頃である。ピンク色の麺が塊の中から見え隠れしたのは。それにいち早く気がつき、誰よりも早く箸を伸ばしたのは宮間くんだった。先ほどの私の失態を学習してか、宮間くんは無駄のない動きで麺を掴むと、素早く水から引き上げて自陣（めんつゆ）へと持ち込もうとした。が、またしても魔王がそれを阻止した。
　手刀で。
「このやろう……」
　箸もろとも叩き落とされた宮間くんは手首を押さえながら、鬼の形相で魔王を睨んでいる。箸で邪魔されるくらいのことは想定できても、直接力に訴えてくるとは思うまい。規律を重んじる割に、今回に限ってルール無用すぎる。思わず私が、それはないだろう、という目で見ると、魔王は悪びれもせず胸を張った。
「手加減せぬと申したであろう」
「いやまさかここまでやるとは……」

大人げない、という感想しか出てこないのだが、これが現実なのだろうか。ぬるま湯のような日常を送る私たちには、欲しいものは手段を選ばず奪いに行く、というハングリー精神が足りていないのだろうか。大人しく待っていても与えられるとは限らない。かつて人類は獣を狩り、その生を繋いできた。そう、人には戦わねばならぬ時がある。やらねばならぬ時がある。それは今だ。

やや勢いで言い切ってしまったがどうなんだ。今なのか本当に。

とにもかくにも、度重なる魔王の暴虐にそろそろ一矢報いなければ気が済まない空気である。私も宮間くんも気合に満ち満ちていたので、ピンクと緑のダブルを目にした瞬間、フライング気味で箸を突っ込んだ。当然そこに魔王も乱入してくる。私も本当はこんなことはしたくないのだが、力では押し負けてしまうのが目に見えていたので、数で押すことにした。右手のみならず、左手の参戦である。

「瀬野お前……」

あきれ果てた宮間くんの視線が少々痛かった。

「ハンデということで……」

私の箸を宮間くんの箸が押さえつけ、宮間くんの箸を魔王がつぶし、魔王の箸を私の箸（左手）が封じる。箸と箸の取っ組み合いの隙間を白い冷麦があざ笑うように幾度もさらさらと流れていった。もはや何のために冷麦を食べているのか目的を見失いそうだ。いや、とうに見失っている気もする。箸はお互いの意地を示すように頑として動かず、誰かが身をひかないとおさまりそうもない。

「魔王さんはずっと独り占めしてたんだから引いてもいいんじゃないかな」

「そうだ遠慮しろ。そして箸よけろ」

「王たる者はやすやすと背など見せぬ」

口の端に薬味のネギをつけたまま何を気取っているんだ。

私たちの言い分など鼻にも引っ掛けず、魔王はちらりと横の宮間くんに冷たい眼差しを送った。

「引き際を知れミヤマメ。身の丈のみならず器も小さいとあっては

笑い種ぞ」
「名前覚える気ねえなこいつ……」
「目上の者に譲らぬか。そなたはその小さき身には余るほど充分食べたであろう」
「小さい小さいうっせえな！　俺だってお前くらいの歳にはもうちょっとデカくなってんだよ！」
数字の上では相手が年下だという事実は伝えない方が良さそうだ。魔王の年齢を知ったら憤死するかも知れない。
その後もしばらく引く引かないの不毛な諍いは続けられ、これは箸が折れるか心が折れるかの泥仕合になるかと思われたが、回りゆく冷麦が３０周に差し掛かったあたりで、ついに魔王が動いた。
「皆の者、一度箸を置け」
これまでの安い口論の時とは打って変わって、その声には逆らいがたい迫力があった。私は戸惑いながらものろのろと、宮間くんは渋々と箸から手を離した。それを確かめた魔王は、すっとその場に立ち上がる。遥か高みから下々の者を見下ろす様はさながら王の君臨。闇を纏いし王は、その声音に畏怖と威厳をたたえ申し渡した。
「これより拳を交えた三つ巴の邪法で勝敗を決する。異論は認めぬぞ」
計５回の死闘の末、チョキしか出さないと看破された魔王の敗北が決まった。

時に満腹感は遅れてやってくる。
食べ過ぎた。どう考えても食べ過ぎた。その場の勝負テンションに突き動かされて、明らかに許容量をこえた。それは他の二人も同じようで、ジャンケンで決着がついたのを境に、急におとなしくなってしまった。さっきまで山賊の如き威勢だったというのに、今や箸を持とうとすらしない。水をたたえたそうめん器がモーター音を響かせながら、沈黙の中をくるくると流れる。
「まだ食べる……？」

一応尋ねると、魔王と宮間くんは言葉なく首を横に振った。一番控えめに食べていた私が、腹を押したら口から出そうというレベルなのだから、さぞや二人の胃袋は大変な騒ぎになっていることだろう。三日分は食べたと思う。麺の洪水。押しも押されぬ大盛況。まさに夏の麺まつり。

そして、はちきれそうな腹を抱えた宮間くんと私がそろそろお暇しようかと腰を上げた時、それはやってきたのである。魔王宅のインターホンを鳴らしたのは先ほどとは別の宅配便。

――先日は【サンダース感謝祭・グルメ百選】にご応募頂きありがとうございます。厳選なる抽選の結果、セカンドチャンス賞「素麺・ひやむぎ詰め合わせセット」に当選いたしましたのでお送り致します。今後ともスーパーサンダースをご愛顧いただきますようよろしくお願い申し上げます。

魔王の口からおすそ分けの呪文が飛び出す前に、私と宮間くんはダッシュで家に帰った。

番外／魔王とハロウィン（前書き）

時系列無視のイベントものです。本編では夏の季節がまだ少し続きます。

番外／魔王とハロウィン

「余にひれ伏し糧を捧げよ。さもなくば死すら凌ぐ絶望を与える」

突如として重低音が襲いかかり、私の時間は停止した。

あたりは暗く、時は夜半。庭先から物音がしたので、はて野良猫かはたまたかさこじぞうの恩返しかと様子を見るべく扉を開けた瞬間の出来事である。

世は広しといえども、こうした重々しい物言いの知り合いは一人しかいない。一人いれば充分だ。

「余にひれ伏し糧を捧げよ。さもなくば死すら凌ぐ絶望を与える」

なかなか操作に踏み切らない客に案内を繰り返すＡＴＭのように、魔王は一語一句違わぬ文言を放った。いや別に私がしばらく反応できなかったのは聞こえなかったせいではなく。

「な、なにごとですか」

そして何なんだいきなり。

半ば参謀として取り込まれた身である。今更隷属せよと詰め寄られる何者もない気がするのだが、これ以上なにをお望みだというのか。また醤油でも切れたか。

ドアノブを掴んだまま頭上を窺うと闇夜に浮かぶ白い面が静かに答えた。

「魔が跳梁跋扈する収穫祭とやらの慣例に従ったまで」

私は脱力とともに納得した。今日は西洋のお祭り、ハロウィン。

日本に持ち込まれてから日が浅いこともあってか我が家では存在感がどうにも弱く、行事として根付いているとは言い難い。毎年、メディアや店の飾りから提供されるハロウィン的な雰囲気を味わうところで止まっている。クリスマスのようにケーキを買ってツリーを飾ればよいというものではないし、イベントとして楽しみ方が正直よくわからない。祖母に至ってはかぼちゃの祭典か何かだと思っ

ている。そういえば食卓にかぼちゃの煮物があった。瀬野家的には、ハロウィン、すでに完了であります。

「ハロウィンなんてよく知ってましたね」

「サエグサの老いぼれから聞き及んだ」

回覧板を届けに行った先で、三枝さんがカボチャをくりぬいて並べていたそうである。気が若くイベント好きな三枝さんのやりそうなことだ。そこで魔王はハロウィンの概要を学んだらしい。お菓子をねだるお約束とともに。

いくら私がハロウィンに思い入れの薄い人種であっても、トリックオアトリートくらい心得ている。第一声がそれならば、闇討ちもどきの行為にもおののくことはなかっただろう。が、あの言葉を投げかけられて、なるほどハロウィンってわけね！　と膝を叩く察しの良い人間はそういるものではない。

一瞬、ついに魔王が己の職務に目覚めたのかと思った。

「本来は扮装をするものと聞いたが、余には必要ないと」

「あー確かに」

魔王は今ひとつ理解していないようだったが、私は心からの同意を込めて頷いた。

着替える必要など何一つない、素の状態で優勝だ。いくら我々素人が趣向をこらし、本格的なメイクや衣装で吸血鬼やら魔女やら仮装の出来を競ったとしても、魔王の完成度には敵うまい。さすが本物は風格が違う。デフォルメされた愛らしいジャックオーランタンなど黙って道を譲りそう。

やがて魔王は暗闇から一歩踏み出し、扉の内側へとその身を滑り込ませた。そしておもむろに、私に向かってまっすぐ手のひらを突き出してくる。その振る舞いが余りにも堂々と、ご主人様然としていたので「お手」を促しているようにしか見えず、ホイッと反射で手をのせてしまった。さすがにワンの鳴き声は封じたのでセーフだと思いたい。

一瞬の沈黙ののち、魔王は実に丁寧に私の手をそっと取り払った。

私は私で、手を置いた瞬間に、あ、これ違うなと悟っていたので、そっと取り払われるのに従った。

仕切り直すようにして再び空いた手のひらが差し出される。

「糧を捧ぐより絶望を望むか」

魔王はハロウィンの一環でやってきたのである。伸ばされたそれがお手ではなくお菓子を要求しているのだと、私は遅ればせながら気がついた。

トリックオアトリート、お菓子くれなきゃいたずらするぞ！

シーツでも被った子供のお化けならば脅し文句さえも微笑ましいが、魔王となるといたずらというより報復といった凄みが伴う。集落に火の手が上がり逃げ惑う村人たちの図が私の脳内に挿しこまれた（※画像はイメージです）

「余にひれ伏し糧を捧げよ。さもなくば」

「わかったわかったわかりましたからそれ」

気安く死すら凌ぐ絶望など寄与されたくはない。魔王を玄関に放置し私はトリートに値するものを探しに戻った。とはいえ、母が買い出しに出たのは数日前、すでに甘味や菓子の類は粗方食べ尽くされてしまい、めぼしいものがない。まさか食べかけの柿の種をくれてやるわけにもいかず、ややしばらく台所や居間の戸棚を漁って回ることとなった。

「これで勘弁してください」

手に乗せられた三粒のこんぶ飴に対して、魔王は明らかに落胆の色を見せた。

「サエグサはチョコレート菓子の詰め合わせを余に奉納した」

「よそはよそ、うちはうちです」

魔王は手振りで空に四角を描き、もらった菓子の大きさを示している。非難か。待遇の差を責めているのか。

私だって申し訳ないとは思っているが、ハロウィンのハの字も頭になかったのだから仕方ない。ケチってるんじゃなく本当にそれし

か何もなかったんだと訴えると、魔王は渋々といった風情でこんぶ飴を懐におさめた。

「此度はこれで手を打つ。だが次の機会には支度を怠らぬよう」

「はっ」

来年は一反木綿みたいな巨大のしいかでも用意して迎え撃ってやろうではないか。打倒三枝家。

そのまま踵を返して去っていくかと思えば、魔王は我が物顔で玄関で仁王立ちをしたままだった。用が済んだはずなのに帰ろうとせず、黙したまま射るような視線を私に投げかけてくる。普段から魔王は口よりも目で語りかけてくる節があるのだが、表情豊かとは言えない為に何を語っているものか時々まったくわからない。言葉が変化球を通り越してボークな分、せめて目は口ほどに物を言って欲しい。

こちらを強く刺してくる灰色とも銀ともつかない切れ長の眼を、私も負けじとじっと見た。

もしかして、こんぶ飴がまだ欲しいのだろうか。しかしあれは祖母のおやつから失敬してきたもので、これ以上お年寄りのお茶請けに手を出すのは気が引ける。

困ったなと思っていると、それを否定するように魔の色を縁取る睫毛が羽ばたいた。

「早くせぬか」

「は？」

「そなたからの呪術を待ってやっているというのに何を呆けて」

魔王が言うには、このハロウィンのやりとりは単なるお遊びではなく魔除けの呪術であるらしい。生贄を要求し相手がそれに応えることによって魔に魅入られる隙を閉じる、というのが魔王によるトリックオアトリートの独自解釈である。そういえばハロウィンの仮装は悪魔を払う為との説もあるようだし、理にかなっているのかも知れない。

しかし魔除けを熱心に勧めているのがほかならぬ魔王。
蚊取り線香を蚊自身が宣伝しているような違和感が漂うものの、魔やら呪に関しては遥かに私達人間よりもエキスパートであろう魔王が言うならばこれほどの説得力もない。ご利益（？）がありそうである。
「えっとじゃあ、トリックオアトリート」
促されるまま私はそう声に出し、更にはお菓子のために手を出した。が、魔王は眉をしかめるばかりで何も与えようとしない。
「そのような形ばかりの文言に言霊は宿ると思うか」
地を這う声が私の困惑を払い落とした。安っぽい照明に照らされても白い肌を飾る生々しい傷の威厳は少しも損なわれない。
「そなた自身で語るがいい。借り物の言葉では意味をなさぬ」
「私自身って」
「余が申したであろう。あのように己の言葉を用いて恐れを生み、呪いに力を与える」
「お、恐れ？」
いかにもと相槌を打ち、魔王は語った。

曰く、恫喝の言葉を連ねよ。
曰く、恐怖という名の腸を引きずり出せ。
曰く、対峙する者を抉るほどの畏怖を。

ハロウィンってそんな凄惨な祭りでしたっけ？

「そなたに吐ける限りの悪しき言霊で余を脅かしてみせよ」
そう言われても、相手は親の仇でもなければ変質者でもなく存在がちょっと禍々しいご近所の人だ。悪意を抱いていない対象を罵倒するなんて生まれてこのかた経験がない。抵抗感を覚えるのは当然だろう。しかし若干腰の引けている私の様子などお構いなしに魔王はさあさあと詰め寄ってくる。

ええい、言えばいいんだろう言えば！

「美味なるものを寄越せ。でないと、貴様の家だけ回覧板飛ばすぞ」

魔王が一歩後退した。

「なんと惨たらしいことを申す娘か……」

「ちょっ！　なんなんですか言わせといて！　その被害者ヅラ！！」

散々煽っておいていざとなったら引くってどういうことなんだ。

こちらの努力も少しは汲んで欲しいものである。しかしこの程度にとどめておいて良かった。回覧板ごときでこの反応なら「根こそぎ羽根むしるぞ」などと口走った日には、何こそ言われるかわかったものではない。

「カオリ、ひ弱な小娘にしては存外の威力である。認めてやろう」

「なんかよくわかりませんがありがとうございます」

「確認するが、回覧板は」

「ちゃんと回しますって！　飛ばしませんって！」

ふむ、とどこか安心したように頷いた魔王は私の鼻先に爪を当てた。

「呪術を完成させた暁にはこれより先一年、病の憂いは断たれるであろう」

冬至のゆず湯と効能がかぶっている。

「では受け取るがいい」

魔王の懐から差し出されたのは、少し縦長の形状のもの。黒い上等そうな布にくるまれて中身はわからない。キャンディか何かをもらい受けるつもりだった私の手のひらは、思わぬ重みに戸惑った。どう見てもこんぶ飴とは釣り合いがとれなさそうな高級感に目を奪われている内に、玄関から魔王の姿は消えていた。しん、と秋の夜にふさわしい静寂と入れ替わる。

包みを開いてみると、中にはいつかの冷麦5束が入っていた。

トリックオアトリート。

ほんの一瞬、私は回覧板を飛ばすことを本気で検討した。

夜道の巻

パチ、と確かな手応えのスイッチ音とは裏腹に電灯に反応はなかった。

まあ気を抜いていたということもあるだろう、早くしたまえ、と紳士の精神で十秒ほど待ってやったが、いつまで経ってもトイレに灯りはつくことはなかった。

電球は夜に限って切れる。

それもとっぷりと日が暮れてから切れる。

これまでずっと、必要な時にこそ電球が切れるのは何故なんだと憤りつつも不思議に思っていたのだが、よくよく考えてみれば昼間殉職していたとしても気づくわけがないので、夜に判明するのは当たり前といえば当たり前なのだった。

ということで、私はいま夜に沈みきった田舎道を自転車で疾走している。

翌日まで辛抱できないこともないが、私や母ならともかく、祖母が転んで怪我でもしたらそれこそ大事だ。懐中電灯を用意したところで照らせる範囲は限られており、足元が頼りないのは変わらない。床にクッションを敷くなど、およそ名案と言い難い意見が出たものの、替えを買いに走ったほうがずっと建設的だろうとコンビニに向かった。

家から自転車で２０分。かっとばせば１５分。途中、短いながらも勾配のきつい坂道があり、下りになる往路は軽やかなばかりだが復路は若い力が試される。

すぐそこ、と言える距離ではないかもしれないけれど、夜６時を待たずにシャッターを下ろしてしまう個人商店や、車で数十分走ら

ねばならない隣町のコンビニを頼らざるを得なかった以前を思えば、充分身近でありがたい。こうして急な不便にも応えてくれるのだから。それに引きかえ、と思わず目が遠くなる。

あれだけいろいろと買い込んでおきながら、電球や蛍光灯の予備はないという母の買い置きセンスについて問い質したい。めんつゆ3本買ってる場合じゃないよ。大豆缶1ダースってなんの仕入れだ。

電球のついでに豆大福を買うくらいのご褒美はきっと許されるだろう。

夏をたっぷり含んだ風は夜といえども涼しさはなく、人肌のように生温い。坂道をのぼりきった汗ばんだ肌を撫でても、心地よさには至らなかった。私は息を切らしながらペダルを踏み続けた。

深夜というほどの時間でもないのに、人はおろか、車もろくに通らない。

田舎の夜道は暗い。

それなりに住宅がひしめいていれば家の灯りや街灯が夜の濃さを和らげてくれるが、一旦田畑が連なる区画に入るとそれらは極端に減り、星だの月だのの明かりに頼らねばならないという字面だけはロマンチックな道のりが待っている。ただ今夜は、薄い雲がべたりと空にはりついてどちらも望めそうもなかった。自転車のライトが先を照らす唯一の拠り所となる。

走れども走れども、夜道に溢れかえるのはわんわんと響くカエルの鳴き声。どこからともつかないくらいに大音量が生温かい空気を震わせている。

一帯が水田ということもあり今は耳に騒がしいほどだが、それは夏に限った話で、冬になれば一転、雪が音を吸い込んで静けさに凍りつく。以前、泊まりに来た都会暮らしの親戚が「自分以外みんな死んだのかと思った」とのたまったほどだ。

さすがにそれは言い過ぎと思うが、そう言いたくなるくらい人の気配が薄いというのは理解できる。眩しくもネオン輝く都会と違い、

この町は眠りにつくのが早い。厚くて重い帳がおりると、いかにカエルの声が響く賑やかな夜であっても、人が介入できる時間ではないような気がする。

ほら、夜になったら這いずりさんが出るよ。

こんな時に、いやこんな時だからこそなのか。忘れかけていた声が脳裏に甦る。

今でこそゴールデンタイムのテレビを見ながら眠りこけてしまう私であるが、子供の頃は宵っ張りで寝かしつけようとする母の手をずいぶん焼かせていたらしい。夜が更けてもなかなか布団に入ろうとしなかった私に、祖母は滅多に見せない険しい顔でこう言い聞かせた。

夏織、早く寝ないと這いずりさんが出るよ。這いずりさんは寝ない子を見つけて田んぼに引きずり込むんだよ。いいのかい？

私は震え上がり、潜り込んだ布団の中で亀のようになって寝たという。

這いずりさんとはこの土地に由来する妖怪でもなんでもなく、祖母がその場で作った完全オリジナルの産物にすぎない。祖母にとっては単なる出まかせだったのだろうが、思わぬ効き目に悪乗りした母が「水田から夜な夜な這いずり出てくる」とか「鬼火とともに現れる」とか「主食はセミ」とか次から次へと恐ろしげな設定を追加し、使い捨てに終わるはずだった這いずりさんは、結果瀬野家で最もメジャーな化物として地位を確立した。

芯から怯えていた私に這いずりさんの効果は絶大で、ことあるごとに脅されたものだ。嘘をつく子には這いずりさんが来る、いたずらをすれば這いずりさんが来る、つまみ食いしても這いずりさんが来る、とにかく何をしても這いずりさんが来るのだ。出前だってこんなに簡単には来てくれない。這いずりさん、実に仕事熱心である。

もちろん私もいつまでも子供ではないから、ただの作り話だとそ

の内に気がついた。
　が、罪深きかな幼少期の刷り込み。架空だと判明したところで、キャラとして立ち過ぎた這いずりさんの存在感が煙のように消えるわけはなく、幼い心を長らく脅かし続けた。地獄の閻魔様や歯医者などの強敵らを押さえ、揺るぎない恐怖の対象として堂々と私の中に君臨していたのである。
　しかしそれも中学に上がる少し前までのこと。成長するにつれて這いずりさんによる脅威は次第に薄くなり、今や他愛のない昔話として風化しつつあった……はずだった。

　慎ましい風に煽られて草木がざわめく。
　手に湿ったものを感じ、私はハンドルを握り直した。
　這いずりさんなんていない。這いずりさんは作り物。
　言い聞かせながら、さっきより強くペダルを踏むと顔に当たる風が強くなった。家へたどり着くにはまだ距離があり、横たわる暗闇の遥か先は安っぽいライトの光では届かない。普段なら気にも留めない葉の擦れる音や自分の息遣いが今はやけに耳についた。早く帰りたい。タイヤの回転する速度が知らず知らずに増していく。
――夜に寝ないような悪い子には這いずりさんが、
　悪い子じゃないです私はおつかいを引き受けたいい子です。
　かすかに、闇の向こうで水音がした。
――這いずりさんは夜な夜な田んぼから、
　今のは違うから！　かわず飛び込む水の音だから！
　一度意識がそちらに向くと、坂道を転げ落ちるように悪い方悪い方へと想像が働く。私を取り囲む夜の全てが得体の知れない何かに思えて背中が寒くなった。
　は……鼻歌でも歌おうかな！
　臆病風に吹かれると、人間なぜか歌いだす。とってつけたような陽気さで内なる弱腰を誤魔化したいのだ。しかし咄嗟に奏でてしまったのが何故か縁もゆかりも思い入れもないアメリカ国歌だったた

め、あえなく2フレーズで途切れて消えた。
失策である。気が晴れるどころか心細さが三割増しになった。
ぴちゃん。
再び水音が私の耳をかすったものの、視線を向けようという気は起きなかった。
いるわけがない。見えるわけがない。そこから首を出して腕を出して今にも身を乗り出そうとなんてしているわけがない。ましてや引きずり込もうなんて。
膨らむ嫌な想像を振り払うように、私は力の限り自転車を漕いだ。滅びよ我がイマジネーション。こめかみに流れる汗が、暑さによるものかそれ以外で吹き出したものかもう私にはわからなかった。
いつもなら速度を緩めるカーブも、今はブレーキに手をかける暇すら惜しい。勢いそのままハンドルだけで乱暴に曲がる。と、黒いばかりの視界に光るものが飛び込んできた。
民家の灯りとも違う、人工的な輝きよりももっと不安定な。宙に浮くようにしてそれはゆらゆらと燃えていた。

――這いずりさんは鬼火とともに、

「ギャー！」
咄嗟に握ったブレーキは車輪に極端な負荷をかけ、自転車を転倒させた。当然跨っていた私も放り出される形になったが、混乱の極みにあったせいなのか秘められた野生が目覚めたのか、忍者のように身を守りながら回転し、片膝をつく姿勢で綺麗に着地を決めた。
完璧だ。誰も見てないのが惜しいくらい華麗な身のこなしだった。
ちょっとかっこいい。いや今そんなことはどうでもいい。
鬼火が。さっき、確かに鬼火のようものがゆらゆらと。
そんなわけがない。そんなもの見えては困るのだ。きっと目の錯覚だ、怖がるあまりにバイクのライトでも見間違えたに違いない。
そう自分を鼓舞し恐る恐る視線をあげてみると、幻覚でも錯覚でも

なくはっきりとそれは見えた。数メートル先の闇の中、火の玉が揺れながら空気を食んでいた。

「ギャー！」

華麗な身のこなしの奇跡は一度きりだったようで、私は不格好にもその場に尻餅をついた。ギャー以外にもノーだとかワーだとか様々な悲鳴を上げていたような気がするが呼吸すらまともにまともに出来ていない有様なのでカエルの声にも劣る。それでも誰か聞きつけて助けに来てはくれないかと期待したが、そもそもこのあたりに民家などなかった。そして鬼火が気を遣って出直してくれる気配もなかった。むしろ、だんだんと、こちらに、近づいているような。

「ギャー！」

立って逃げようにもまともに力が入らない。そのまま海老のようにずるずると後ずさる。

ごめんなさいごめんなさい。ほんとうにすいませんでした。豆大福は家族でわけます。

何に対して謝っているのか自分でもわからないが、もう詫びて許しを乞う道くらいしか私には残されていない。その愚かさを嘲笑うがごとく、鬼火はゆっくりと距離を詰めてきた。ずるりずるりと地を這うような音を引き連れて。

這いずりさんは寝ない子を田んぼに引きずり込むんだよ。

冷や汗の先端まで凍りつく心地がした。

「夜更けに何を騒いでいる」

鬼火の炎に、見慣れた白い面が浮かび上がった。

「ギャー！！」

私は久しぶりに泣いた。安堵したせいではない。圧倒的に顔が怖かったのである。

「夜回り、ですか……」

「ヤマモトなる者が伴をするはずであったが腰を患ったゆえ」

余が単身でこの地を守護しておる、と魔王は答えながら、涙と鼻水によってぐずぐずに濡れた私の顔をローブで拭った。その手つきは拭くというよりもシャツに飛んだソース汚れを落とすに近く、若干肌に痛い。

もはや言うまでもないが、夜道に現れた白い顔は魔王である。そして私の腰を抜かした鬼火の正体は、果たして魔王が手にしていた松明であった。

防犯意識のゆるい町といえども、それらしい取り組みがゼロというわけではない。夏の時期を中心に、町内会の有志による夜間パトロールが行われていることは私も知っていた。が、その実態は週に一度、年季の入った役員の方々が一杯ひっかけた後に千鳥足で巡回している程度だとも知っていたので、こんな展開は想像もしていなかったのだ。

高齢化が進む町内会に若い男手を、ということで魔王にお鉢が回ってきたのだという。常日頃から、会費は一括払い、回覧板の中身もしっかり確認、町内清掃などにも参加など、魔王は町内会の活動に律儀だ。加えて魔王に絶大な影響を誇るであろう、犬を司る三枝さんも町内会と繋がりは深い。このあたりから打診を受ければ魔王も無碍に断れまい。

「そなたは何故そうも浅はかであるか」

一通り拭き終えた魔王は、燃え盛る炎を手に厳しい面持ちで私を見下ろした。

「年若い娘が夜道を一人歩きとは正気の沙汰ではない」

すでに見慣れているはずの面立ちも、松明の明かりに炙られながら闇夜に浮かび上がるという特殊効果のせいで、普段より遥かに禍々しい。軽く見積もってもその迫力は六倍増だ。子供の夜泣き間違いなし。なによりまず私が泣かされた。

「ちょっとコンビニまで行く用事があって……」

自転車は魔王の足元で倒れ伏している。よいしょとそれを起こしながら、私は電球が切れた旨を伝えた。魔王はふむふむと素直に聞

き入れていたが、表情から険しさは去らない。
「灯りを失うは不便であろう。が、解せぬ。なにゆえ四輪車を使わぬのか」
「それがお酒飲んじゃったみたいで。飲酒運転させられませんから」
通じないかも知れないと思いつつ口に出したが説得力を持って伝わったらしく、詰るような気配が少し緩んだ。それでも眉間にはまだ皺が残っている。魔王はわずかに松明を差し出し、その炎で私の全身を照らした。
「ならばそれ相応の支度をせよ。そのような心許ない……」
思わず私は自分の格好を上から下まで眺めた。Tシャツに膝が見える程度のショートパンツ、特別みすぼらしいわけでも露出度が高いわけでもなく、夏の装いとしては至って無難に思える。
「こんなもんじゃないですか普通」
「守りが薄い。襲撃に耐えられる程度の装備を固めよ」
あいにく防御力重視で服を買う習慣がない。
「季節柄あんまり分厚いのは……」
「鎧の類は所持しておらぬか」
「所持してるお宅の方が希少だと思います」
例え持っていたとしても、普段使いのワードローブとしてクローゼットに加わる可能性は極めて低いと思われる。備えの乏しさを嘆いたか、魔王は小さくかぶりを振った。
「世話の焼ける奴よ。特別に貸し与えるゆえ、有事の際には申し出よ」
と、魔王は自身がまとっているローブを指した。魔王いわく、ドラゴンの火を跳ね返し、光の刃を退け、獅子の牙も通さないそうである。すごい。耐久性もすごいが、それ以前に竜に襲われ斬りかかられライオンに噛み砕かれるという状況がすごい。借り受けるような機会が万が一にも訪れないことを切に願う。
倒れた時の衝撃か、自転車のライトが消えたまま戻らない。一度

派手に転倒していることだし、他に故障してないとも限らないので、乗らずに押して帰ることにした。自転車の電灯は頼れなくなったが、明かりに関しては問題ない。散々無用心だなんだと責めた魔王が私を一人で放り出すわけがなく、家まで送り届けてもらえることになった。ちょうど夜回りを終えて帰路につくところだったらしい。

「誰かと会いましたか」

「人っ子一人歩いておらぬ」

「ですよね」

私も魔王と遭遇するまで、カエルと虫の息吹しか感じられなかった。

「カオリ、そなたはどうであった」

「なんですか？」

「怪しげな輩は見ておらぬか」

見た。なんか夜道で松明持ってた。

とはまさか言えるはずもないので「特には」と返事をすると、魔王は相槌を打った。

「不届き者あらば成敗する心づもりであったが、何事もない」

魔王が落とした視線に誘われて私も目をやると、どこから出したものかその手にはすらりと長い得物が握られていた。近頃の通販の取り扱いは幅広い。多種多様なニーズに応えており、手に入らないものはないと聞く。

そう。

例えば。

三つ葉葵の家紋入り日本刀とか。

「ど、どうしたんですかそれ」

「護身用に取り寄せたまで」

私はいつか魔王宅で目にした時代劇のＤＶＤを思い出した。ボックス購入に踏み切るくらいなのだから好きなのだろうとは思っていたが、まさか模造刀まで手に入れてしまうとは想像以上のご執心。その内、白馬で町を駆け回り始めたらどうしよう。まあとりあえず

一度くらいは乗せてもらおう。
　しかしいくら何でもこの姿での徘徊はよろしくない、と私は横目で帯刀した魔王を見た。人気のない田舎だからいいものの、都市部であれば間違いなく三歩で職務質問、略して職質コースまっしぐら。
「あんまり持ち歩かないほうがいいかと」
「障りがあるか」
「まあ、ちょっと」
「徳川家が見過ごさぬと」
「いや警察が」
　少し残念そうな横顔はそれでも素直に頷き、以後改めようと呟いて得物をローブで隠すように戻した。
　腰に刀、片手に松明。本人は至って真面目にパトロールにあたっているのだろうが、アイテム選択を誤ったせいで不穏極まりない。どう贔屓目に見ても討ち入りか山狩りなのである。ただその分、威嚇としてはこれほどの適任は他にいないのも事実だ。たとえ夜道で出くわしたとしても、おそらく不審者の方が怖気づく。見た目はどうあれ、この町の平和が保たれるなら良いことなのかも知れない。
　ゆっくりとした足運びで歩く魔王は、低い声で冷麦について語っている。日々アレンジを加えて消費しているらしいがなかなか減らないらしい。その言葉の端々から、冷麦を引き取れという圧を感じたが全く出ていない月を見上げるなどしてやり過ごした。
　自転車で走っている時は心細いばかりだったのに、ごまだれと冷麦の相性を考える程度に私は余裕というものを取り戻している。やはり道連れが居るのと居ないでは、得られる安心感は天と地だ。
　その道連れが魔王ということについて改めて考えると、豪華というか贅沢というか無駄遣いである。本来なら衛兵や門番の仕事だろうに、不満を抱いた様子もなく粛々と夜回りをこなす当人の柔軟性も見逃せない。自身の仕事はいいのだろうか、と案じてしまいそうになったが、そもそも魔王として働く姿を一度として見ていない気がする。最近では庭でハーブなど育て始めているのである。この人

は一体いつも何をしているんだ。うらぶれた様子もないし、通販で買い物を楽しむなどそこそこ裕福な暮らしを送っているし、魔王（15・無職）ということもあるまい。

「魔王さんは、あのー……」

口に出してから、もしかして就活中という可能性がよぎり、つい言いよどむ。魔王はそれを許さず、威厳を持って先を促した。

「申せ」

「その、普段お仕事の方は……」

相手の口からハローワークの単語が出ないことだけを祈りつつそう告げると、魔王はなんだそんなことかとでも言うようにさらりと返した。

「休暇中の身ゆえ問題ない」

光に誘われた羽虫が身を焦がす音を立てて松明の中に消える。なるほど。休暇。私は急に会社員と話しているような感覚に陥った。

「休暇とかあるんですか」

「何者であろうと休息は不可欠。そうは思わぬか」

「はっ全くその通りで」

労働に身を捧ぐばかりが人生ではない。魔王にだってバカンスを満喫する権利くらいあろう。

労働形態などよくわからないものの、長期の休暇が可能とはなかなか福利厚生のしっかりした職場である。最近は社員に有給をとらせない企業も多いと聞くし、人の世の方がよほど修羅なのかも知れない。つい魔王配下への就職に揺らぐ。いや待て私には安定した農協系という道が。

私が将来設計に心惑わせているとも知らず、魔王は風にその長い髪をなびかせた。

「そなたも休暇のさなかであるな」

「あ、はい夏休みです。でも課題が結構あるから遊んでばかりもいられなくて」

進学校ほどではないにせよ、軽くこなせるほどの量でもない。無計画に遊びほうけていると、徹夜か級友に泣きつくか、もしくは仮病の練習のどれかを選ばねばならなくなる。誰とは言わないが休み最終日の宮間くんのことである。

重厚な声が私の耳に向かって語った。

「知を蓄えるに無駄はない。己の糧となるようせいぜい励むことだ」

前々から感じるものがあったが、今の指導的な物言いといい、さきほどの服装についての小言といい。

「なんかお父さんみたいですね……」

しみじみ言うと、大真面目な顔と口調がこう答えた。

「カオリ、余はそなたの父ではない」

「いやわかってますよ」

何でも真に受ける相手だと下手なことが言えなくて困る。

「時にカオリ」

ふと気がついたように魔王が声を出した。

「これまでそなたの父を目にしておらぬが」

「ああ、普段は遠く離れたところにいるので。毎年お盆には戻るんですけど、」

話している途中で、隣を行く魔王の歩みが止まった。ハンドルに手を預けたまま振り返る形で見上げると、高い位置にある美貌が痛ましそうにこちらを見ていた。

「つまらぬことを訊いた。許せ」

「え……？　あっ！？　ち、違います！　お盆に戻るってそういう意味じゃなくて！　死者として帰る的なことじゃなくて！　死んでない生きてる！　すごい生きてる！」

言い方が悪かったにせよ、また明後日の方向に伝わったものだ。放置するには過ぎた誤解なので、私は躍起になって打ち消した。父は仕事の関係で単身赴任を強いられているだけである。鬼籍には入っていないのである。

私の全力の否定を受けて、魔王の表情はようやく氷室を思わせる

涼しげなものに戻った。全く人騒がせな、とため息など吐いている。同感である。私も魔王よりいくらか控えめに吐かせていただいた。

闇の遥か向こうを小さな光が滑っていく。なんとはなしに目で追うと、何本もの先の道路を走る車のヘッドライトだと知れた。魔王以外の人の気配というものを、今夜初めて感じた。

「騒がしいのはカエルだけですね」

ぽつりとこぼすと、上から視線が降ってきた。

「そなたは青蛙よりも騒がしく無様であったが」

「うっ……」

思わぬタイミングで醜態を蒸し返され、私は言葉に詰まった。忘れたいし忘れて欲しい。

無様を晒すでない、とはあの時泣いた私へ魔王の最初の言葉である。高校生にもなって人前で泣くとは、確かにみっともなかった。しかもほろりと涙をこぼすような可愛いものではなく、子供が予防接種で泣き叫ぶような騒音系だ。これはまさに無様。しかしその無様を誘発した原因がそれを言うか、という気もしないでもない。

あの時さしもの魔王も唐突に泣き出されて困惑したのだろう、私に近づく際、倒れている自転車の存在に気づかず、したたかにスネを打ち付けていた。一瞬顔をしかめたものの、威厳を失うことなく即座に尊大な台詞を放つあたりはさすがの風格といえよう。どうでもいいが、獅子の牙は通さないのにスネへの打撃は通すローブの性能がわからない。

「孤独に耐えかね泣き喚くとは童子と変わらぬぞ」

「べ、別に普段からワンワン泣いてるわけじゃ、今回はその、事情があったというか」

「ほう。事情とやらを申してみよ」

説明したところで、くだらないと一蹴されることは目に見えていた。しかし一人で抱えて怖がっているよりも、冷徹なまでに否定された方が恐怖が和らぐのではないかと思い、私は魔王に這いずりさ

んのことを話して聞かせた。
胡乱げな視線を寄越すでもなく真顔で耳を傾けていた魔王は、しばらく考え込むように黙していたが、やがてゆっくりと口を開いた。
「……水場に引き込まれる前こそ要。出方を待たず迅速に討つが上策か」
やけに難しい顔をしているかと思えば、真剣に交戦のプランを練っていたのだった。
確かに田んぼに引きずり込まれる前に勝負を決めるべきだろうとは思う。魔王、水中戦弱そう。主に羽の問題で。
とはいえそれは、対峙する可能性があった上の話である。あくまで這いずりさんは架空の化物であって、現実ではない。それを見透かしたように魔王はその視線で私を刺した。
「作り事と片付けるは早計」
地鳴りのような声が囁いた。悪ふざけを欠片も含まない眼差しと語り口に、置いてきたはずの不安がえぐられる。
「な……何を言い出すんですか」
怯む私の様子など目に入らないのか、腕を組んだ魔王は淡々と言葉を並べ立てた。
「古来より、多くの物の怪は人の想像から産み落とされる」
「ややめてください怖い」
「根深き思念や妄想が沈殿し、やがておぞましくも魂を得るは珍しくもない」
「ちょ、ほんとにやめ、」
「ゆえにその這いずりさんとやらの存在を否定はでき」
「やめろお！」
咄嗟に体当たりを食らわせた私になんの罪があろうか。
子供の頃に這いずりさんに襲われる夢をよく見た。どろどろに溶けた手が私の両足をつかんで田んぼに引きずり込むという結構なレベルの悪夢である。が、あれは夢だからこそ何とか折り合いをつけられるのであって、実際起こりうる話として語られてしまったら心

の均衡が保てない。そんなリアルはいらない。
　魔王はさすがに頑丈で、小娘一人では到底威力が足りず倒れるどころかびくともしなかったが、手離したために自転車は倒れた。その際、ハンドル部分が魔王のスネに直撃したのは偶然にほかならない。魔王は打ち付けた場所をさすってから、憎らしいほどの落ち着きで私を見下ろした。その眼差し、躾のなっていない飼い犬を見守るがごとくである。
「カオリ、我を失ってはならぬ」
「だ、誰のせいで、」
「泣くな」
「泣いてまぜん」
「裾を踏むな」
「踏んでまぜん」
　反射で答えたものの、実のところ踏んでいた。洟をすすり上げながら足をどけようと、私が視線を落とした時である。
　風もないのに、がさり、と蠢く音がした。
　下を向いていたせいでどこから響いたものか判断できず、四方に視線を巡らせる。闇だ。視覚が機能するのは炎が佇む魔王の周囲だけで、あとは形として色として動作として何も私に教えようとしない。魔王も物音を拾ったのか、冷ややかな目の端にわずか警戒が見える。
　いくらか間を置いて、再び草木を分けいるような音がした。神経を尖らせていたせいで、田畑の反対側、木々が生い茂る森の方からだと知れた。虫や蛙ではこれほどは響かない。明らかに大きな音だった。犬や猫よりもっと、それこそ人くらいの重みを備えた何かが闇を移動している。
「――もしやカオリの言う這いず」
「ちがいますちがいます這いずりさんは田んぼから来るんです」
「セミを食すのであろう。ならば森に現れるも道理」
「やめてぐださいよお」

「泣くなカオリ。無様を晒すな」
無様を晒すまで追い込んでるのは誰なんだ。しかし今の私にとって魔王しか頼る相手がいない。皺になることも顧みず、死んでも離すまいとローブを命綱のようにつかむ。
「案ずるな。一閃のもとに討ち果たしてくれようぞ。首はそなたに譲るゆえ持ち帰るが良い」
「いらないいい」
えげつない申し出に早速ローブから手が離れた。すかさずその手に松明を預けられ、熱さも忘れてしがみついた。
不気味な暗い森はさらながら呼吸するがごとく蠢く。遠慮がちでさえあった物音は、今や己を誇示するかのような荒々しさで鼓膜を揺らしていた。どんどんと存在感を増して私たちに近づいてくる。迫る気配に私は息を飲んだ。
「地を這う虚ろな骸め。余と知った上の狼藉であるなら容赦はせぬ、今世の未練ごとかっさばいてくれよう」
魔王が腰の得物に手をかけた。
「見よ、血に飢えた妖刀が今宵も餌食を求めて鳴いておる」
たかだか通販の模造刀にそれは少し荷が重いのではないか。
松明の明かりが届くのは道路に面した木々のあたりまで。その群れが身震いするように葉を大きく揺らすのが見えた。来る。背中が粟立った。
次の瞬間、いくつもの光を引き連れ、暗闇を突っ切るようにしてそれは現れた。
私は言葉も悲鳴もなく、およそ人とは思えぬその姿に目を奪われた。
その身全ては毛で覆われ、
四本足で這いつくばり、
地を駆けるに長けたしなやかな体躯は、

どこか鹿に似ていた。

いや鹿だった。

大小二頭、こちらをちらちらと伺いながらも、慣れた様子で車道を渡っていく。そのまま畑を小走りで駆け抜け、獣は再び夜へ失せた。

意識から遮断されていたカエルの声が、思い出したように耳に鳴り響く。

「……親子……」
「……親子ですね……」
「……仔鹿と」
「こじか」
「仔鹿と目が合った」
「それは良かったですね……」

半ば呆然と立ち尽くしたあと、鹿相手に啖呵を切った魔王は刀をそっと鞘に戻した。鹿相手に涙目だった私もまた無言で自転車を起こす。田舎道の孤独を恨めしく思うことはあったが、今ほど人目がない事実に感謝したことはない。

今宵は月も星も慰めも見えない空である。

血に飢えた妖刀を以てしても、そこはかとなく漂う「気まずさ」という名の魔物を討つは難しく、夜風がさらうに任せるしかなかった。

家に着くと、電球は粉々に割れていた。

閑話／魔王と花火

押入れの奥で花火を見つけた。

つかんで引っ張り出してみると、子供向けの手持ち花火だけでなく派手な見栄えの打ち上げ花火もぎっしり詰め込まれたなかなかに豪勢なものだった。一瞬「ほう！」と盛り上がったが、すかさず疑問が背中を刺す。いつからあるんだこの花火。

夏に浮かれた大学生のサークルくらいしか買いそうにない、気合の入った大容量である。年寄り含めた慎ましい三人暮らしには似つかわしくない存在感だが、首をかしげるほど不思議でもない。どうせ母が勢いで買って忘れたのだろうと想像していたら、全くその通りだった。去年買ったという記憶はあるが、なぜ買ったのは覚えていないらしかった。

このまま捨てるのも忍びない。私は虫と蛙の鳴き声をＢＧＭに、処分をかねて庭で花火大会を始めた。一人で。母と祖母を誘ったのだが眠いだとか犯人が知りたい（※火曜サスペンス劇場）だとかであえなく断られてしまったのだった。

一年寝かした花火の鮮度やいかに。試しに束から一本取り出し、ろうそくの灯で炙れば、ほどなく先端から火が噴出した。

「おっ」

小さな置き型の花火も衰えはなく、見事な光の柱で夜を裂いた。

「おお」

続けて点火した打ち上げ花火がパンパンと小気味の良い音を立てて闇に熱の花を撒く。

「おおっ」

更に両の翼を広げた巨大な鳥の輪郭が突如現れ、華々しく夜空を覆った。

「おお！？」

そしてそれはまっすぐ私を目指しながら吠えた。

「敵襲か！」

魔王である。比喩ではなく魔王が飛んできたのである。

闇と同化した魔王が上空から降って来る迫力たるや凄まじく、尻もちだけで済んだのはほぼ奇跡と言ってよい。魔王耐性がなければ腰を抜かしていただろう。

私は尻部分の泥をはらいながら睨んだ。

「こんな時に魔王らしい登場しないでくださいよもう。心臓に悪い」

「破裂音が聞こえたゆえ戦かと急ぎ参じた。敵軍はいずこか」

「花火です」

「銃声らしき音も」

「花火です」

魔王はゆっくりと私が抱えていた大量の花火へ視線を下ろした。と同時に、臨戦態勢を示すように全開だった翼が、そろそろ折りたたまれていく。背から完全に翼が消えた頃、魔を帯びて血走っていた瞳は白々しいほどに澄ました色をのせていた。

「このような夜更けに火遊びとは神経を疑う」

「花火はふつう夜ですよ」

魔王は己の早合点を部下への叱責にすり替えることにしたようだった。気まずそうな気配を欠片も見せないあたりが魔王の魔王たる才覚だろうか。なんという悪い男。

「余の目を盗んでこそこそと火祭りに興じるでない」

魔王は堂々と詰るが、音が響き渡っていたくらいであるからして、結構大々的にやっていたのではないかと思う。

「古い花火だから早くやらないと湿気そうで」

花火を見せると、注意深く白い面が近づいて、私の手からそれを取り上げた。魔王はしばらく刃物めいた視線をパッケージに這わせていたが、やがて地鳴りのような声でこう奏でた。

「ちいさいお子様はおとなのひとと遊んでね」
顔も声も地獄の一丁目なのに口調だけが保母さん。
怖い。
急にどうしてしまったのかと一瞬凍り付いてしまった私に、魔王はその長い爪で花火に添えられた警告文を指してみせた。背伸びして目を凝らすと、先ほど魔王が口にした文言が記されていた。なんだ、そのまま読み上げただけか。
「理解したか」
「何がですか」
私が首をかしげると魔王は冷ややかな視線をよこしたあと、もう一度警告文を指さした。ちいさなお子様、の部分を叩いた指が私に向けられ、おとなのひと、の文面をなぞった指が自身をさす。そして、物言わぬまま私を見下ろした。
花火を魔王の手の内にある。臣下の地位を与えられて早数ヶ月。魔王が一体何を求めているか、わからぬ私ではない。私は魔王と花火を交互に眺めたあと、釈然としない思いを抱えながら口を開いた。
「一緒に、花火、やってくれませんか……」
魔王は「やむなし。半人前の監視もまた王たる者のつとめよ」などと言って口の端を持ち上げた。私は知っている。こういうのを茶番と呼ぶ。

まわりくどい手を使って参加してきた割には、魔王は大いに火祭りを楽しんでいた。
派手な火花を散らす花火を手にしては、燃えろ焼き尽くせと物騒に唱え、ネズミ花火が間近に迫っても一歩もひかず迎え撃ったりと、監視という建前が塵と消えるような勢いで大量の花火を次々と消費していった。
松明を片手に夜道現れた時も相当な迫力だったが、無数の火花ともうもうと立ち上がる煙越しに見る魔王もまたアトラクションの一種のようで現実味がない。整いすぎたかんばせが、光と影に演出さ

れ、大変に不吉な印象だ。ただそれは見た目のみを切り取ればの話で、たかだか家庭用花火に目を爛々と輝かせているさまは、先ほど魔王自身が揶揄していた「ちいさいお子様」以外の何物でもなかった。超エンジョイ。

お徳用だけあって種類も数が多い。おそらく私一人であれば、途中で飽きて作業的に花火をこなすことになっていただろうことを思うと、魔王を招いて（招いた内にはいるのだろうか）正解だったと、ひとだま型の花火を振り回して喜んでいる魔王をみて思った。

魔族の王様が手加減なしで楽しんでくれたおかげで、あっという間に花火はなくなった。

残るはあとひとつ。日本の花火の幕引きといえばこれしかなかろう。

これまでの派手さを前面に押し出した花火と比べ、地味なそれを魔王は怪訝そうにつまんだ。

「線香花火ですよ。シメはやっぱりこれじゃないと」

束から引き抜いた一本を、慎重な手つきで揺らめく火に食わせる。めらめらと燃え上がった炎はすぐに熱い塊となり、四方に火花を散らし始めた。最初は弱々しく、だんだんと苛烈に。そして精根尽きたように落ちた。

「儚い」

私の横でしゃがみこんでいた魔王は一言吐いた。

「そこがいいんじゃないですか。わびさびですよ」

成程、と重々しく納得したような声が返る。

「瞬き程の短い生を這いつくばって生きる人間どもが、己の脆い一世を重ねているわけか」

魔王は線香花火に手を伸ばし、その内選んだ一本をろうそくに近付けた。

火に舐められた先端が熱を蓄え始めると、目から興味ありげな色がすっと引いて、顔つきは真剣そのものに。微動だにせず、ひたと

火花を見つめる魔王にはただならぬ緊迫感があり、横で見ているだけの私も思わず息を止めてしまった。

線香花火は懸命に持ちこたえていた。小粒ながらこよりにしっかりとかじりついている。内に抱いた熱を吐き出しながら、その身を健気にも震わせて――と、その時、さわりとした柔らかな風が通り過ぎた。

ぽとり

「あー落ちちゃいましたね」

私が止めていた息を大きく吐き出すと、魔王は地に落ちてつぶれた塊を愕然と見下ろしていた。ただの花火に向けるにしては、いやに痛ましげな眼差しをしている。独り言のようにその唇が開いた。

「カオリの命運が尽きた……」

「今の花火、私だったの!?」

「余を庇いその身に流れ弾を受け、華々しい最期であった」

「忠義に厚いな!」

鉛の弾丸などで余の肉体は貫かれぬというのに愚かな奴、と魔王は悲しげな口ぶりで線香花火の残骸を水を張ったバケツで処理をしている。悲しいのは想像上とはいえ殉職を遂げた私の方だ。

「やめてくださいよ勝手に人の人生を花火に見立てるの」

「ふむ」

頷きながらも魔王の手は次の線香花火に伸びている。

「ならば次はサエグサとして」

「お年寄りはやめて! なんていうかシャレにならない」

とは言って止めたものの、再び魔王のイマジネーションによって私の一生をリメイクされるのは嫌だ。そうだ。

私は意趣返しのつもりで線香花火を一本引き抜いた。

「じゃあこれ、魔王さんのつもりでやります」

途端、魔王の顔色が変わる。

「無礼な。そのような粗末な紙切れを余と見なすか」
明らかに難色を示したが、無視して点火した。視界の端で魔王が目を見張ったのがわかる。炎に炙られた火薬の音ともに、どこか必死さを孕んだ声色の脅しともとれるアドバイスが耳元になだれ込んできた。
もっと用心深く握れ、丁重に扱え、みだりに動かすこと許さぬ。
「良いか、決して落とすでないぞ」
「無茶言いますなあ」
魔王のプレッシャーを受けながら膨れ上がった花火はこれまでのものより大きい。大きければ大きいほど存在感を増し火花も美しいが、その分散りやすくもある。わざと落とすつもりもないので、私は震えないよう手に力を込めて花火を支えた。
線香花火は四つの変化があるのだと昔祖母から聞いたことがある。最初が牡丹、派手な盛りを見せるのが松葉、衰えた火花がしな垂れる柳、最後はちり菊。
魔王に見立てた花火は燃え盛り、松葉の段階を迎えていた。松葉の激しさは長く続かない。やがて火の玉が萎びて火花も若さを失うだろう。
……が、いつまで経ってもその変化は訪れない。
未だ花火はバチバチと音を立てて輝いている。
ぶら下がる火の玉は丸々と肥えたまま。放たれる火花の威力も変わりない。
ずいぶんと長持ちする花火だ。
いや長持ちの一言が片付けるにはあまりにも。
くすぶる違和感を後押しするように、髪が巻き上げられるほどの突風が吹きつけた。花火は、びくともしなかった。
「……魔王さん」
横目で魔王を見た。
「魔力使ってますね？」
「知らぬ」

「こういうズルって大人げないと」
「聞こえぬ」

魔王の名を冠した線香花火は最終的に３８分という驚異的な記録を打ち立てた。３８分というのは花火が力尽きた数字ではなく、単に私の手が限界を迎えた数字である。花火はまだ元気に燃えている。
魔王は「不可解なこともあるものよ」と最後までしらを切っていた。

他の花火はともかく、線香花火だけは二度とこの人とはやらない。

来ちゃったの巻

最初、巨大なアルミホイルの塊だと思った。

よくよく見てみれば、人の形をしていたのだった。

そろそろ野菜が熟れた頃だろうから収穫しておこうとカゴを手にして踏み入れた庭に、それはいた。

夏の攻撃的な日差しを受けて、銀色に輝く大きな何かがうずくまっている。茶と緑で構成される自然な色合いの中で、見逃せという方が無理なくらいの威力で目立っていた。

訝しく思いながら近づいていくと、どうも眩しい銀色の正体は甲冑のようなものらしい。それが知れた時点で、私は足を止めた。

上下ジャージは定番だが、上下甲冑のファッションを着こなしている人はあまり見かけない。

いやボトムのみデニムなどの着崩しコーディネートテクニックを披露されてもそれはそれで感想に困るのだが、頭部からつま先まで全身甲冑の近寄りがたさ、圧倒的である。

もちろん、何を着るかは本人の自由であるし、警察のお世話になるほど大胆でなければいくら個性を主張しても問題はなかろう。が、我が家の庭先に現れたとなれば、これはいささか構えてしまう。なんか知らんが斬新なやつが来たぞ！　と警鐘も鳴るというものだ。

後ろ姿しか見えないものの、知り合いである可能性は極めて低い。誰なんだ。そして何をしているんだ。

謎の甲冑が座り込んでいる位置にはトマトの苗が植えられている。警戒心と好奇心の両方を携えて様子を伺っていると、気取られたのか銀の背中が突然翻った。

兜の目隠しは完全に上げられており、振り返った顔がよく見える。

まだ若そうな男だ。色素の薄い髪と生命力みなぎる空色の目がこの土地の者ではないことを物語っている。

男は、両手でトマトを貪り食っていた。

ぎょっとする暇もなく、そのぎらぎらとした青い色と目があった。何を思うより先に、私はかごを放り出して一目散に逃げ出した。

甲冑！　青い眼！　野菜泥棒！

目が青いのは別として、その場から離れる理由としては十分だろう。鎧兜で身を固めて、見ず知らずの他人の菜園の野菜をもりもりと食っているのである。しかも夜の闇に紛れるでもなく、あんな目立つ格好で昼間っから堂々と。

私は走った。とりあえず誰かに知らせる為に走った。

が、走ったのは私だけではなく甲冑も同じだったようで、ものの数秒で追いつかれた。ガッチャガッチャと重量感あふれる物音がすぐ背後に迫っている。

「待て！」

「うわー！　誰か！　おまわりさん！」

「待てというのに！」

後ろからがっしりと腕をつかまれて、もう逃れようがない。重苦しい見てくれのくせに、飛脚もかくやという瞬足だなんてそんな馬鹿な。鎧武者の動作と虫歯の進行はもっとゆっくりであるべきだ。

「何を勘違いしてるか知らないが、それは誤解だ！」

焦りを含んだ男の声が背中に響いた。

「だいたい俺が怪しい奴に見えるか？」

拘束された右手に引っ張られるようにして恐る恐る振り返る。男の口元は先程まで食べていたトマトの果肉がべったり張り付いてやたらと赤かった。自信満々のところ申し訳ないが、怪しい奴以外の何者でもない。

「すいません怪しいです」

「なに！？」
青い眼を見開き、男は驚愕の表情をつくった。
間近で見ると、思った以上に若い。上背もあり、ごつい甲冑に見劣りしない美丈夫なのは間違いないのだが、大人と呼ぶにはいささか未熟そうな雰囲気がある。
「一体なにが怪しいというんだ！　俺は何もやましいことなどしていないぞ！！」
肺活量を試すような大声が私の鼓膜を揺さぶった。片手がとらわれているので、耳を塞ぐこともままならない。
「何もって、勝手に野菜食べてましたよね」
「食べてない」
「えっ、口にこれでもかとトマトが」
「ああ、腹が減っていたところにちょうど熟していたのが目に入ったので頂いた」
「なんで一回嘘ついたの！？」
「嘘ではないぞ！　無断で食べてなどいない！　自然になっている実をごちそうになったまでだ！」
「あれうちの畑なんですけど！」
「そうかうまかった！　礼を言おう！」
男は親指を立てて、白い（今はトマトで赤い）歯を見せた。そこに邪気は感じられなかったものの、反省も限りなくゼロだった。
なんなんだこの人は。なんでこんなに生き生きと横暴なんだ。異国の人はみんな自己主張と自己肯定が強いのか。
幸いにも男が話す日本語は流暢で、言葉に関しては不自由なさそうだが、意思の疎通は期待しない方が良さそうである。あまり人の話を聞くタイプには思えない。

納車したての新車のように、その身にまとう鎧はぴかぴかと輝いている。私は甲冑なんてろくに眺めたこともない素人以下も以下なので、それがどの程度優れたものなのかはわからないにしても、コ

スプレや仮装で身につけるような薄っぺらい偽物には到底見えなかった。本物の騎士が身につけていてもおかしくない重厚な質感に目を奪われる。

体が気温を思い出したように額の際に汗がじわりと滲んだ。

暑い。何月だと思ってんだ、という思いがこみ上げてくる。

八月である。夏も盛りの八月である。どんな事情か知らないが、何も炎天下で着用しなくたっていいじゃないか。すでにこの時間、３０度はゆうに超えている。更に甲冑による照り返しが加わり、体感温度はますます高くなる。

「ところで」

逃げる意思がないのを悟ってか、甲冑はようやく私の腕に自由を与えた。そのままぐるりとあたりを見回し、力強く告げた。

「ここはどこだ」

迷子だった。

こんなに窮している様子のない迷子も珍しいのではないか。むしろ私の方が困惑している。

「き、記憶喪失とかですか」

「馬鹿なことを！　生まれた時から今現在に至るまでしっかりと記憶に刻まれている！」

「あのもうちょっと静かに」

男は私の話など耳を貸さず、ここはどこだと連発している。

とりあえずこの町の名前を出してみたが、ピンと来た様子はなく「わからん！」と堂々と胸を張られてしまった。どこから来たのかと尋ねても、聞いたこともない、舌を噛みそうな地名が返ってくるばかりで全く参考にならない。

「さすがに日本なのはわかりますよね？」

「ニホン？　さあ知らん」

「そこから！？」

これはちょっと私の手に負えるようなレベルではないのではないか。

日本にありながら日本を知らないのである。字面だけ見ると深い。己でありながら己を知らぬ、さて己とは何か？　と問いかける出口の見えない禅問答のようだ。

彼は果たして何者なのだろう。

このあたりには特に観光地もなく、異国の人がツアーからはぐれてさまよっているとも考えにくいし、服装も奇抜すぎるし、無意味に声は大きいし、素直に駐在所に連れて行ったほうが早いかも知れない。私の不審感たっぷりの眼差しを受けてか、男は腹から声を出した。

「なんだその顔は。俺は怪しい者ではないと言っているだろう！　むしろ逆だ！」

「逆？」

そうだ、と男は誇らしげに甲冑の胸をどんと叩いて見せた。この無尽蔵の自信と、見知らぬ土地にて心細さ皆無のメンタルの強靭さ、確かに只者ではない。

「どちら様なんですか？」

途端、私を見下ろしていた青い目が輝きを帯びた。自信に満ちていた顔はますます気力に溢れ、男は大仰に胸を反らす。

「よくぞ聞いてくれた。俺は世界を光に導く選ばれし勇者である！」

「ゆ？」

「勇者である！」

「ゆうしゃ？」

「勇者である！」

甲冑の表面が光を跳ね返し、その眩しさで私の目を刺した。

少し前であれば、ここでさっと無駄のない動きで携帯を取り出し１と１と０を押していたかも知れない。場合によっては１と１と９だったかも知れない。いずれにしても赤いサイレンに助けを求めていたのは間違いないだろう。しかし今の私は、瞬き三つほどで甲冑男の発言を咀嚼して飲み込んだ。

魔王が存在するのだから、勇者くらい居ても不思議ではない。む

しろ納得である。この現実感のない格好、温度の高い発言、朗らかなゴリ押しなど、勇者という立場を思えば合点がいく。

「とある仇を探していてな。そいつを追っている内に、いつの間にかここにたどり着いたというわけだ」

勇者（自称）は腕を組み、難しそうに眉間に皺を寄せた。

どこから来たにしても行くにしても、最低山はひとつ超えなければならない。屈強な勇者といえど楽な行程ではなかったのではないか。

「ここまでは徒歩で？」

「いや電車で」

最短ルートで来てた。

勇者をのせた乗客もまばらな鈍行列車がガタンゴトンと走る牧歌的風景が瞼の裏に浮かぶ。

「電車賃とか、大丈夫だったんですか」

「あいにく貨幣を持ってなくてな。まあしかし、そこは勇者ならではの、」

「ならではの？」

「身のこなしで突破した」

人はそれを、無賃乗車と呼ぶ。

やはりと言おうかなんと言おうか勇者には全く悪びれた様子がなかった。ダンジョンの仕掛けのひとつくらいにしか思ってないのかも知れない。廃線も危ぶまれているような寂れた無人駅の改札をかわすことなど、勇者にかかれば造作もなかろう。

しかしよくもまあ、町の名前もわからないのに電車まで駆使してやってこれたものだ。それを言うと、「勘だ！　勇者の！」と威勢の良い回答が返った。さすがは勇者。理屈じゃない。だがなんでも大声で言えばいいというものではない。

「で、勘に頼って迷子になったと」

「まだ迷子と決まったわけではない。仇討ちの途中だ」

「迷子ですよ現在地が不明の時点で」

だいたい仇って誰、と口にしようとして、はたと気がついた。勇者とは普通、平和を脅かす悪に立ち向かう者だ。それも小悪党ではなく、頂点に立つ存在の討伐を最終目標としている場合が多い。もしや、この甲冑の勇者が探している仇とは――

「にくき魔王の存在近し、と俺の嗅覚が告げているんだが」

予想を違えることなく、その名は勇者の口から吐き出された。

あ、いや、まあ、そうっすよね。

相手が勇者と知れた時点で見当がつきそうなものなのに、私はすっかりその個性に横っ面を張られて考えが及ばなかった。なんとも気まずい思いが一拍遅れでやって来る。

おそらくですが、にくき魔王とやらにわたくし心当たりがあります。

これは言いにくい。うかつに口に出せない。

「魔王の根城について何か知らないか？」

こちらの複雑な胸中を知る由もない勇者は遠慮なく切り込んできた。

「どんなささいな情報でも構わん！　例え他愛ない噂でも手がかりにつながる場合もある！」

真っ直ぐな眼差しに対し、私の目は泳ぎに泳いだ。

手がかりどころか、すぐ隣に見えている閑静なお宅が魔王の根城とやらです、と告げれば目の前の熱血漢はどんな顔をするだろうか。

「なるほど……魔王について口にすることを禁じられているわけか」

思わず目を逸らしてしまった私の反応をどう捉えたのか、勇者はしたり顔で頷いた。

「しかしもう恐れることはないぞ！　俺が来たからにはもう魔の影に怯える暮らしも終わりを告げる！」

「痛い痛い痛い」

興奮気味の勇者に力強く掴まれた両肩が悲鳴を上げた。痛いほどに、というか本当に冗談抜きで痛い。激痛。声量と同じく手加減というものを知らない。

幸い骨を砕かれる前に私は解放された。自身を抱きしめるようにして肩を労わる私とは対照的に、勇者は伸びやかに手を広げ、舞台役者のように朗々と雄々しい台詞を続けている。

「なに心配はいらない、俺が必ず討つことを約束しよう！　そう、この聖剣に誓っ……」

勇者の手がその腰に伸びたとき、声高らかな演説が途切れた。見下ろすと、勇者の手は空を掴んでいた。何もない。武器らしきものは見えない。

バカに見えない特殊な魔法でもかかっていない限り、勇者の腰に剣はない。

一瞬の沈黙を挟んだのち、甲冑の中をまさぐったり脱いだ兜を振ってみたりと勇者は猛然と捜索を開始した。その焦燥に満ちた俊敏な動作、携帯を失くした人とよく似ている。

一通り探し尽くした勇者は、口を押さえながらうつむきがちにもらした。

「……落とした」

勇者、聖剣失くす。

事件である。私も勇者も思わず黙り、ひととき通夜のような静けさに見舞われた。

聖剣がいかほどのものかわからないが、そう手にできない希少な武具であることくらいは予想がつく。少なくともバレたら親に怒られる程度では済まなそうだ。

「いつ落としたんですか……」

「わからん……全く気づかなかった……」

さっきまであんなに賑やかだった勇者からすっかり覇気が失せ、今や語尾に「！」をつける元気もないようだ。耳には優しくなったものの、テンションの落差に息切れを覚える。

「どこだ……？　どこで落とした…？」

その精悍な顔をこわばらせて勇者はぶつぶつと繰り返していた。
やがて面をあげて、家出るときは持ってたよな？　などと同意を求めてきたが、今さっき会った私が知るわけがないのである。そもそも家ってどこなんだ。
「湖でもない、神殿でもない、森……の時は持ってたな、木の枝をなぎ払ったし、」
「電車に乗るとき持ってました？」
「……うん？　確かあったはず……はっ！　そういえば降りる時にはなかったかも知れん……！」
電車やバスで傘を紛失する者は多い。勇者の場合聖剣だが、使わない時の存在感のなさといい細長さといい、まあ似たようなものだろう。勇者は頭を抱えた。
「そうだ、あのとき網棚に放り投げて……！」
案外、聖剣は雑に扱われていることが判明した。

問い合わせたところ、幸運なことに聖剣は遺失物として届けられていた。
まだまだ世の中捨てたものではない。親切かつ豪胆な人もいるものである。私なら怪しすぎて手を伸ばすこともしないだろう。
最寄りの駅は無人のため、預けられているのはふたつ先の駅だという。それを伝えると勇者の表情は一度明るくなったが、すぐに不可解そうに曇った。
「あれは、選ばれし者しか手にできぬ伝説の剣のはず……！」
俺以外にも勇者としてふさわしい者がこの地にいるということか……！？
と、勇者は熱く苦悩している。どうやら人を選ぶ剣のようだ。勇者でなくては持つこともままならないというのだが、その理屈で行くなら、届けた人はもとより、預かっている駅員の人も選ばれし者

ということになる。置き去りにされたとはいえ、剣も捨て鉢になりすぎではないか。節操がない。

「でもほら、とりあえず見つかって良かったですね」

そう励ますと、勇者は少々割り切れないような表情をつくりながらも相槌を打った。

「まあそうだな」

「早く取りに行かないと」

一定期間預かってはくれるものの、価値を考えると急いだほうが良さそうだ。地元に伝説の剣があるというのもまた妙に落ち着かない話である。

私の言葉に勇者は素直に頷いた。そして立ち上がり、元気よくこう言い放ったのである。

「よし、行ってくれ！」

「は？　私！？」

「そうだ！　頼んだぞ！」

当然と言わんばかりの熱量で返され、私の目はひたすらに丸くなった。

「やですよ！　なんで私が！」

気の毒に思って剣を探す手伝いはしたものの、そこから先の面倒まで見る義理はないはずだ。しかもふたつ先の駅とはいっても、歩いてせいぜい数十分などという都会の距離とはわけが違う。行けと言われて気軽に行けるものか。

しかし剣の発見により、本来の自信と図々しさを取り戻した勇者は簡単には引き下がらない。

「俺は魔王を探すという任務が残っているからな」

彼方を眺める騎士の立ち姿は一枚の絵のように様になっている。が、今の状況では見とれるどころか腹立たしいばかりだ。

あさっての方角を向いていた勇者の首がぐっとこちらに動く。

「だから聖剣についてはお前、村娘その一に任せようと思う！」

「お断りだ！」

村娘その一ってもしかしなくても私か。

こんな頼み方で相手が応じてくれると信じて疑わない思い込みが怖い。

困っている人がいたら助けになってあげなさい、と祖母は口癖のように言って私を育てた。その教えに背く気はない。が、今回に限っては除外させていただきたい。「困っている人」ではなく「困った人」だろうこの場合。

そもそもさっき自分で語っていたばかりの「選ばれし者しか手にできない」とかいう神々しい設定はどうしてしまったんだ。万が一私が取りに行って難なく剣を運べてしまった場合、選ばれし者という触れ込みで成り立っていた勇者の立場が危うくなるのではないか。それとも駅員も選ばれし者だった時点でどうでもよくなってしまったのだろうか。

「自分の聖剣くらい自分で取りに行ってください。選ばれし勇者なんでしょう？」

はらわたの底から溢れ出る溜め息を私は惜しみなく吐いた。すると勇者は信じられないといったように空色の眼を大きく開いた。

「そうは言うがふたつ先だぞ！？　遠くて行ってられん！」

私は生まれて初めて人を殴りたいと思った。

「なっ……こっちの台詞だよ！　見ず知らずの聖剣のためになんでわざわざ！」

「よしわかったじゃあ電車賃を貸せ！」

「うわあ厚かましい！　人に頼む態度じゃない！　お前に貸す現金はねえ！」

「俺に歩いていけというのか！？　村娘その一！」

「自転車なら貸してあげますよ！」

「俺は補助輪がなければ乗れんのだ！」

「知らんがな！」

勇者が投げてくる無礼千万の礫を打ち返すのに忙しく、私はすぐには気づかなかった。自然のものではない風が背後から忍び寄って

いたことに。

やがてそれはゆるく編まれた三つ編みのひと房を揺らし、羽ばたく物音をも携えて私と勇者に存在を知らせた。忙しなく動かしていた口を閉ざし、どちらともなく振り仰ぐ。

鳥のような、しかし鳥とは比べ物にならない大きく黒い塊が、悠々と上空からおりてくるのが見えた。

その手に、見慣れた買い物袋をぶら下げて。

ああ、そうだった。今日は卵が安い日だった。

勇者と魔王の巻

風と羽音をまといし魔王は普段通りに自宅前へ降り立った。
見た目とは裏腹にその所作は大人しく、小石を放るより軽やかにその身を大地に下ろす。足音もない。左右に伸びた禍々しい翼が扇を閉じるにも似た優雅さで、主の背に隠れていく。
勇者は呼吸を忘れたように魔王の一挙手一投足を見つめていた。彼が一体誰を追っていたのか、聞かずともその険しい表情が物語っていた。

上空から私たちの姿が見えていたのか、それとも目に入ってはいなかったのか。
物言わぬ魔王の視線がようやく持ち上がり、こちらを向く。最初その静かな視線は私をとらえ、次にもう一人へとスライドするように滑っていった。
途端、空気が変わったのを感じた。
魔王の銀の目が急速に凍てついていく。もとより冷えた色ではあったが、それがいかに手ぬるいものだったかわかる。粉雪と氷河だ。まるで比べ物にならない。今や両の眼は、胃がすくむような、震えが来るほどの冷気と鋭さを帯びていた。
べたりと肌にはりついていた暑さは一瞬にして霧散し、緊迫感が輪郭を撫でる。
闇色のローブを揺らし、魔王は一歩近づいた。
「――貴様、勇者か」
地獄の底を思わせる低音は聴く者すべての五感を揺らす。気圧され、つい後ずさりそうになる足に力をこめた。
選ばれし者としての矜持か胆力か、勇者にひるんだ様子はない。ひとしき飲まれたことを恥じるように、背筋を伸ばして吠えかかっ

た。

「やはり近くに居を構えていたか……悪の化身、魔王め！　ようやく我が前に姿を見せたか！」

騒がしいばかりに思えた大声もこの状況においては勇者としての役者を際立たせるにふさわしく、切り裂くようによく通った。

魔王は冷気を湛えたまま、うるさそうにそれを払う。

「痴れ者が。勇者風情が足を踏み入れて良い地ではない。早急に立ち去れ」

「血眼で探した仇を目の前にして誰が引き下がるか！　まさか城を離れ、こんな場所に逃げ隠れているとはな！」

勇者に向けられていた銀色の目が、すう、と細くなった。

「……城に押し入った挙句この狼藉か、度し難い。去ね。言葉だけの警告では済まぬぞ」

「望むところだ！　その呪わしい体に流れる魔族の血ごと絶やしてくれる！」

熱を生む勇者と冷気を孕む魔王が真っ向から睨み合う。視線の上で炎と氷が衝突した。

「消し炭にされたいか」

魔王の口が聞き取れない言語を囁き出すと、呼応するように空間がゆがみ出した。どす黒い霧のような粒にあっという間に染め上げられていく。勇者も何事か謎の祈りの言葉を唱えては、魔法陣らしきものを宙に描いた。空がうねり、雲が波打つ。殺気を煽るかのように風が下から吹き付けてきた。熱いのか冷たいのか、どちらともつかない感覚に皮膚がひりつく。

私は風で転がってきたホウキを拾い、その柄で両者の脇腹を猛然と突いた。

「人んちの庭先でやめろ！！」

当然手加減するつもりだったし、本気でやるわけないし、まあちょっと大げさな術だったのは悪かったと思ってる。

というようなことを魔王は脇腹をおさえながら淡々と述べた。

カッとなってやった、全力でやるつもりだった、反省はしていない、なんで邪魔した。

というようなことを勇者も脇腹をおさえながらキレ気味に語った。

私はもう一度勇者をホウキで突いた。

「うぐっ」

さっきまで世紀末のように不穏だった町の空は穏やかさを取り戻し、夏らしい日差しがじりじりと私たちを炙っている。守った。私が守ったのであるこの町の平和を。魔王と勇者のドンパチから。

「そういう物騒なことは地元でやってください。いやもうマジで。開戦なんて人の町内でやることじゃない」

剣と魔法の世界のいざこざはそちらで片をつけてもらいたい。よその家の上空で気軽に召喚獣を呼び出すなどもっての外だ。

「魔王を滅する千載一遇の機会を見逃せというのか！？」

脇腹から手を離し、勇者は甲冑をきしませながら立ち上がった。先ほどより幾分か気勢が削がれているものの、依然として目の色は煌々と正義に燃えている。

「三日と半日かけて探した仇だぞ！？」

「割と簡単に見つかったもんですね」

期間としてはちょっとした小旅行といえよう。苦労として第三者に訴えるには少しばかり浅すぎる。

頭上から影が落ち、視界が陰った。太陽を背負う位置へ魔王が回り込んだのだと気づく。

「ここは魔王の保養地。本来勇者などが侵せる領域ではない」

保養地だったのか。初耳だ。宅配ピザ屋すらない寂れた場所が、ディープな界隈で重宝されているとは世の中わからないものである。

これまでずっとなんの変哲も特色もない町だと信じていた私の１６

年とはなんだったのか。
　向き合っていた勇者と私の横に魔王が陣取り、三角の形を成した私たちは主婦の立ち話のような位置関係になっている。そのすぐ脇を軽トラがエンジン音を奏でながら通り過ぎていった。
「保養地だろうが知ったことではない！　死に場所が選べる立場だと思うな！」
　声でかい。
「もうちょっと大人しく喋ってください近所迷惑です」
　ある程度住宅が離れているので普段なら少々の騒音など問題にならないが、このボリューム感、さすがに気になってくる。
「そう！　魔王を滅ぼすことこそがこの身に課せられた使命！」
　声量は控えめになるどころか増した。相手の話なんか聞く気ゼロだよこの人は。
　ここまでひどくはないものの、時折魔王も私の話をナチュラルに聞き流したり都合のいいように解釈したりと、そういう面では共通点が見られる。あちらの人たちの耳には蓋でもついているのだろうか。
「虐げられていたこの村の民も、悪が倒されたと聞けば諸手をあげて喜びにわくだろう！？」
「いやどうかな……虐げられた覚えもないし」
「哀れな！　村娘その一！　そのように魔王の顔色を伺う必要などない！」
　間近に迫られ、耳がキーンとした。
　滑らかそうな枯葉色の髪を振り乱し、若い剣士は更に吠えている。これは休日早朝の選挙カーよりやかましい。やむを得ず、ホウキの柄で勇者の脇腹を抉る。頑強な甲冑も魔王のローブ同様、地味な打撃には耐性が弱いようでなによりだ。
「声を落としてください。難聴になります」
　できるだけ低い声でそう告げると、脇腹を抑えて身をかがめていた勇者は目尻を跳ね上げた。

「村娘その一！」
「その呼び方やめてもらえませんか……」
「さっきからお前は勇者である俺に対してあまりに敬いに欠けている！　歓迎どころか疎ましさすら感じさせる態度ではないか！　よもや魔王の肩を持つわけではあるまいな！？」
あるまいな！？　と詰め寄られても。
私は首をひねりながら、魔王と勇者を見比べた。
これまでの魔王の行いを思い返してみれば、引越しの挨拶に始まり、プリンおすそわけ、早退の迎え、町内会の夜回りなど、良き隣人として感謝することはあれども恨む要素は浮かばない。それに対して勇者はというと、無賃乗車、野菜泥棒とすでにこの短時間で少なくとも二件の犯行が判明している。しかも初対面の女子を顎で使おうとするなど、印象としては良くない。というか最悪の部類だ。殴りたいとまで私を駆り立てた相手である。
「どっちの肩持つかって言われればそりゃあこっちですよね」
迷いなく魔王の方を指差すと、勇者は大げさに目を剥いてのけぞった。
「その一！」
ついに省略された。面倒になったのかも知れないが、なら呼ぶなと言いたい。
「正気か！？　俺は光に導かれし勇者で、あれは悪逆非道の頂点に君臨する魔王だぞ」
「いやなんていうか人間肩書きじゃないかなって……」
勇者と魔王という文字だけが並んでいれば、恐らく勇者を選んだだろうが、人品を知ってしまった以上、勇者を支持するのは難しい。こんなに人の精神を削ってくるバイタリティの持ち主もなかなかいない。
「惑わされている！　奴の卑劣な手に操られているのだお前は！　目を覚ませその一！」
大きく上下に視界が揺れる。地震ではない。勇者が私の肩をつか

んで力まかせに揺さぶっているのだ。勇者このやろう。こんなことならもっと強くホウキでついておくべきだった。

「貴様の無作法は目に余る。配下を解き放て」

耳の奥に響いた重低音とともに、私の視界は安定を取り戻した。危なかった。プラモのパーツの要領でぷつんと首から取れるところだった。首の後ろを両手で抑えながら勇者から距離を取る。引き剥がされた手をだらりと下げ、勇者は呆然とこちらを見ていた。

「配下……？　どういうことだ」

「参謀の地位を授けた」

私の代わりに、魔王がこともなげに答えた。

「あがこうとも無駄。この娘は貴様にはつかぬ」

ローブをはためかせながら仁王立ちで宣告する様は、クライマックスで主役を陥れる悪役といった風情で、こう言ってはなんだがよく似合っていた。買い物袋さえ持っていなければ完璧だった。

勇者の顔面が驚愕の色に染まる。左右に大きく振った頭に手を添え、絞り出すような声で私を詰った。

「く……お前は魔王側だったのか……！　この女狐め！　よくも裏切ってくれたな！」

「裏切った覚えは特にないんですけど」

信頼関係を築く段階にも至らなかったと思う。知り合いっす、と前もって言わなかった私も悪いとはいえ、彼の感情が全方向に振り切れすぎてて追いかけきれない。

私の声などとうに届かないようで、勇者は「くそ、くそ……！」と呻き、頭を抱えながら膝をついた。そのまま固めた拳で地を殴りつける。舗装されたアスファルトがえぐれるのを見て、人間離れした破壊力に肝が冷えた。道理でつかまれた時、肩が恐ろしく痛かったはずだ。

「魔王、一体どれだけ俺から奪えば気が済む……父も母も……マリアンヌだって、お前の手にかからなければ今頃……！」

勇者は嘆きにも似た激情を吐露し、尚も拳を打ち付ける。その憂

いを背負った姿はとても庭のトマトを盗み食いしていた輩には見えず、哀れを誘った。

魔王といえば絶大なる魔力やその邪悪性で人々を脅かす存在である。

私が知っているのは割と平和に暮らしている隣人の姿だが、元の世界でまっとうに魔王として君臨していたのであれば、心温まるビジネスに従事していたとはとても考えにくい。魔の玉座に恥じない、それなりの行為に手を染めていたことだろう。もしそれなりの行為の中に、人類との血なまぐさい諍いが含まれていれば、魔王討伐を掲げる勇者とは様々な因縁があったとしても無理からぬ話である。普段は語られぬ、凄惨な逸話が二人のあいだには横たわっているのかも知れない。

視線の置き場に迷い、窺うように私は魔王を見上げた。自分でも無意識に、何らかのフォローを魔王に対して求めたのである。が、その顔色に目立った反応はなかった。

ばつが悪そうな様子もなく、蔑んだ笑いを見せるわけでもなく、苦々しく唇を噛むでもなく、ただ冷ややかな気配が漂うのみで、しいて言うなら、わずか寄せられた眉に鬱陶しそうな色がうっすら見える程度。それでも表情としては薄く、温度としては限りなく低い。流しそうめん器を見つめていた時の方がよほど生き物として血が通っていた。

今は木枯らしもかくやである。熱の塊のような勇者との温度差に、結露が生まれそうだ。

手応えのなさに業を煮やしてか、地に伏していた勇者が噛み付くように魔王を睨み上げる。

「なんだその取り澄ました顔は！　何かいうことはないのか！」

「ない」

即答。

一刀両断に、勇者はおろか私までたじろいだ。

勇者の言い分からすると、魔王が何らかの形で彼の家族やマリア

ンヌという女性を奪ったということになっているのだが、それについて魔王は一切触れようとしない。興味も関心も示さず、ましてや心当たりがある素振りも見せない。一貫して他人事のような態度を取り続けている。クールな態度だとは思っていたが、ここまで来ると凍えるほどにコールド。南極の地において生きのびるダニでさえも恐らく凍てついて死ぬ。

「いかに無様に叫ぼうとも喚こうとも余には届かぬ。矢なき弓を射るな」

「身に覚えがないとでもいう気か！」

「そう言っている」

若さを宿す青い目が憤怒に燃え盛った。ゆっくりと立ち上がる甲冑の肩がわなわなと震えている。唇の不自然に端が持ち上がって笑みの形を作っているのは、感情が振り切れたせいだろうか。

「なるほどな……人間などお前にとっては記憶にも残らない、ものの数にも入らない、虫けら以下に過ぎないということか」

ほんの小さく独り言のように呟いた勇者はその拳を強く握った。

「やはり生かしておくべきではない！　今ここでこの外道に天誅を下す！」

止める間もなく勇者は踊りかかった。仇敵を害するべく放たれた拳は届くことはなく、あっさりと魔の手にとらえられる。敵意に歪む若い面立ちを魔王は笑みもせず睥睨した。

「威勢の良さは認めるが、それのみで魔の頂きたる者を屠れるなど思い上がるな小僧。身の程を知るがいい」

「ほざけ！　お前だけはこの身と引き替えにしても殺す！」

「無益なことよ。いかにしても余を倒すことはできぬ」

勇者の発した声はもはや言葉として成していなかった。

獰猛にその胸ぐらをつかみあげられても、魔王の冷然とした佇まいは崩れない。美しく整った魔性の形が、ぞっとするほど静かに、荒々しさの欠片もなく、薄い唇を開いて牙を見せた。

「哀れで愚かな勇者よ、よく聞くがいい」

貴様は、

「余の管轄ではない」

「えっ」

「えっ」

一つ目の「えっ」は勇者、二つ目の「えっ」は私。ほぼ同時に発した。

えっ。

管轄？

「いまなんて」

「余の管轄ではない」

問い返すと、生真面目にも同じ台詞を魔王は繰り返した。繰り返されても理解には程遠い。

突然放たれた事務的なワードに戸惑いを隠せないのは勇者も同じらしく、胸ぐらをつかんだまま、睫毛が飛び立つのではないかというくらい瞬きを繰り返している。

「いやあの、管轄ってどういう……」

「余が司る区画の勇者ではないと申しておるのだ」

さも当然といった顔つきで語られても話が通じているのは本人のみで、私と勇者は完全に置いてけぼりだ。ニ、三巻飛ばして読んだ漫画の展開くらい、ついていくのが難しい。私は乱雑に散らかされた頭の中を必死で片付けて回った。

管轄外の勇者。

区画の異なる魔王。

「……担当が違うってことですか？」
魔王は頷いた。
「勇者が探してるのは別の魔王？」
魔王はこれも頷いた。
沈黙がおのおのの肩にふりかかる。
ローブの表面に皺の波を作っていた勇者の拳からは徐々に力が抜けていき、ついには魔王を手離した。
真上に位置した太陽が下界の茶番を見下ろしている。引導を渡すかのように正午を知らせるサイレンが唸りを上げた。
「魔王違い……」
私が呆然と呟いたのを合図に、勇者は膝から崩れ落ちた。

「夏織ちゃーん？」
背後から場違いにのんきな声がして、はっと振り返るとお隣の鈴木さんが遠巻きにこちらを伺っていた。手にしたダイレクトメールのようなものをひらひらと振っているのが見える。慌てて駆け寄った。
「これうちの郵便物に混じってたみたい」
「すいません、ありがとうございます」
「あの、それとね……」
郵便物を渡したあとも鈴木さんは立ち去らず、何か言いたげな表情を見せた。
鈴木さんはおっとりとした人で、普段から微笑んでいるような印象がある。しかし今日は珍しくどこか不安そうに顔を曇らせていた。鈴木さんは人目をはばかるようにその声を潜めて。
「余計なお世話かもしれないんだけど……大丈夫？」
「はい？」
「魔王さんと夏織ちゃん、おかしな人に絡まれたりしてない？　おばさん警察に連絡しようか？」
そっと鈴木さんが目配せをした先にはうずくまった勇者の姿が。

「なあにあれ、鎧みたいなの着て……チンドン屋でもあるまいし……」

魔王が町内会に加わった時、私の家族同様、鈴木さんはすんなりと受け入れていた。まあお一人でこちらに、ご近所のよしみで頼ってくださいね、などと朗らかに。今の鈴木さんの警戒心もあらわな視線はそれとかけ離れている。親しみの欠片もない。ちょっと怖い。

真相を告げていいものかどうか迷い、私はもごもごと言い添えた。

「あーえーと……魔王さんの知り合い、みたいで……」

「あらそうなの、夏場は妙な人が出て来るっていうからてっきり。気をつけてね」

鈴木さんはいくらか安心したように、それでも少し気がかりな様子で、自宅へと戻っていった。その後ろ姿と入れ替わって、自転車に乗った中学生が向こうから走ってくる。勇者当人は気づいていないが、通り過ぎる際、不躾なくらいじろじろと物珍しそうな視線を甲冑に這わせていった。そういえば、さっき通った軽トラの運転手もおかしな顔で勇者を見ていなかったか。

浮いている。勇者は町の風景に溶け込んでいない。

これまで誰ひとりとして魔王を奇異な目で見るものがいなかった。おおらかな土地なのだと、そう解釈していたけれど。

――魔王の保養地

おおらかなのは対魔王限定だ。分け隔てなく受け入れるわけではないのだ。

残念だが勇者よ。

地元では選ばれし者であろうとも、この地では招かれざる客だ。

もう一人来ちゃったの巻

魔王と勇者が覇権をかけて対立する世界は一つではないと、魔王の口から語られた。

近くもあり遠くもある、いくつもの完成した世界がそれぞれ魔王と勇者を擁し、交錯することも干渉することもなく、並行するように成り立っている。

誰が偽物というわけでもない。すべての魔王がその世で唯一の魔王であり、また勇者も無二の存在である。魔王であり勇者であることに違いはないが、管轄が同じでなければ、どれほど死力を尽くしたとしても互いに命を奪えない、と。

だからこそ魔王は勇者に繰り返し告げていたのだ。倒すなど無駄なことだと。

いやでも、魔王さんも結構な術とか繰り出そうとしてましたよね、というようなことを言ったが綺麗に無視された。

「勇者さんの様子だと知らなかったみたいですけど」

「殆どの人間どもは知らぬであろうな」

「なぜに」

「必要がない」

なるほど。自分の知らぬところに世界がいくつもあったとして、自由に行き来できるわけでもなく、影響を及ぼすこともないならば殆ど意味を感じない。それより日照りが続くとか今月分の給料の手取りとか、現実的な方へと関心の天秤は傾く。

魔王は続けた。

「勇者なき時期は凪（なぎ）、勇者が生まれ落ちれば時化（しけ）と呼ぶ。余の治める地は凪を迎えたばかりに等しい」

ゆえに余を討とうと立つ勇者のはずもない。

だが、と声を一層低く響かせた。
「管轄外の勇者であっても安寧の地を荒らし、余の参謀を手にかけたこと許しがたい」
「死んでません」
「本来なら敷地を跨がせるも我慢ならぬところだが……二度はないと肝に銘じよ」
ソファに浅く腰掛けた魔王はじろりと睨めつけた。その正面にはうなだれつつも、どこか不貞腐れたような若い男の姿。
まとっていた鎧を脱げば、その下は革のベストに簡素なシャツとズボンといった素朴な身なりで、彼に勇者たる威光を与えていたのは物々しい見栄えによるところが大きいと改めてわかる。今の風貌では小奇麗なアルプスの羊飼いにしか見えない。
ここは勇者風に言うなら忌まわしき魔王の根城の玉座の間。
一般的に表現するなら魔王宅のリビング。

あの後、勇者の目立ちっぷり凄まじく、路上にいるだけで人目を惹きまくった。
面倒事に関わるまいとする回避性能に優れた都会と比べ、田舎はスルー力が極めて低い。珍妙なものを目にすると、二度見三度見は当たり前、中には戻ってきてまで確認する物好きもいる。そんな目ざとい輩が、こんな耳にも目にも騒がしい異物を見逃すわけがない。
当然、好意的な眼差しはほとんどなく、どれも怪訝な、不審や不安をありありと物語る視線だった。大して通らない車の運転手は皆例外なく振り返り、家に戻ったはずの鈴木さんはやっぱり心配そうに様子を伺っていて、散歩中の犬は勇者に噛みつこうとした（魔王は撫でようとしていたが犬が怯えた）
その内いずれ遠からず本当にパトカーがやって来そうな気配が漂い始め、私は正直「それならそれでもいいんじゃね」という思いも

あったのだが、魔王がそれをよしとしなかった。
　こんなもん引き渡された警察の方が困る、というのが魔王の言い分らしい。確かに言葉は通じるが常識が通じにくい相手である。謎の熱意と意味不明な供述に手を焼くお巡りさん姿が目に見えるようだ。仕方なく、これ以上人目につかないよう、魔王邸に引き入れ、今に至る。
　ちなみに買った卵は割れるまではいかずとも2個ほどヒビが入っていて、魔王は少し悲しそうだった。

「聞いているのか」
「……聞いている」
　大人しくなったものの、どこか反抗的な姿勢を崩さない勇者はそっぽを向いた。構図だけ見ると呼び出しを食らった生徒と担任教師の指導室だ。片方、一介の教師と見るには迫力がありすぎるけれど。
　ソファの背にもたれかかり目を合わせようともしない勇者の態度は傍目にも好ましいものではない。が、心情的にわからないでもない。
　勢い込んで殴りに来た相手が人違いと知れ、拍子抜けしたものの、引っ込みがつかなくなったのだろう。区画違いとは言え、魔王には変わりはない。いきなり手のひらを返したように悪いこととしたなへイブラザーと握手する気にはなれないが、かといって敵意を丸出しにするわけにもいかず、狭間でゆれながら意地を張っているというところか。
　聞けば、何人（なんぴと）も受け付けずに固く閉ざしていた聖剣を抜き、勇者として誉を受けたのはつい一週間前のことだという。
　ああ、と特に驚きもなく納得が先行した。無駄に前のめりの姿勢や、力みすぎての空回りも、そう考えれば頷ける。
　つまり勇者といってもデビューほやほやなのだ。危うい。免許取

り立ての若者がハイウェイをかっ飛ばしたくてウズウズしている感じを受ける。やってしまうのだ、こういう時期は。浮かれて過信して、峠とか攻めたくなってしまうのだ。町内の磯山さんの息子さんも免許を取って間もなく、納車したての新車ごと谷底に落ちかけ、三年分くらい老けたと聞いたことがあるし、痛い目を見ることが多い。血気盛んな若人に、刃物とスポーツカーを与える際はくれぐれも慎重に。

「魔王の座にあるものでなければ、この地を訪れるは容易ではない。如何にして踏み入れた」

尋問を横目に、私は冷えた麦茶をすすった。テーブルには三つグラスが並べられているが、勇者の分だけコースターがない。魔王と勇者という立場上の線引きともとれるし、単なる嫌がらせともとれる。おもてなしの心を尽くす魔王にしては意外といえば意外、地味すぎてどうでもいいといえばどうでもいい。

勇者は明後日の方向を向いたまま渋々答える。

「……魔王の居場所へ届けてくれと神殿に捧げた」

何を、と私と魔王が視線で促すと、ぎこちなく口だけが動いた。

「一生に一度のお願いを」

「安い！」

思わず声を上げてしまった私に、勇者は初めて振り向き、ぎらりと青い目を光らせた。

「安いとはなんだ安いとは！　一生に一度だぞ！」

「やっすいですよ！　きょうび小学生でも言わない」

そして大抵、その文言を使う輩は一度では済まない。月刊くらいの頻度で伝家の宝刀を抜いてくるのである。

しかし祈っただけで転送のサービス。神殿とはごねた子供の泣き言のような願いをやすやすと聞いてくれるようなお気軽なスポットなのだろうか。そんなハードルの低さで人々の望みを叶えていたら、世の中誰も働かない気がする。私もたぶん寝て暮らす。怠惰な心中を読み取ったか、魔王の横顔が正面を向いた。

「祈れば叶うなど凡夫の世迷い事に過ぎぬ。理を覆すほどの神気や執念ならば稀に成すこともあろうが」

理を覆すほどの……？

私は思わず勇者の顔を見やった。一旦は引いていったはずの生気が息を吹き返すように、かの瞳に力が戻る。

「そうだ一心に祈れば何事も通る！　この思いの強さこそが希望となり勇者として奮い立たせるのだ！」

「ああ……うん……」

急に元気になってしまった勇者と反比例してこちらのテンションは下がる。なるほど、思い込みの強さは随一だ。【一念岩をも通す】の諺がぼんやりと浮かぶ。そして同時に【無理が通れば道理が引っ込む】も浮かんだ。この並外れた、根拠無き自信が世の摂理という鍵を開かせたと思うと感心すべきなのか戦慄すべきなのか迷う。

「勇者ってみんなこんなのなんですか」

だとしたら夢も希望もない。向かい側には聞こえないように耳打ちすると魔王は小さく首を振った。

「そうであれば人の世は跡形もなく滅びておる」

辛辣。

「……勇者として立つ者はそれぞれ秀でた才を持つ。知略しかり人徳しかり」

魔王は冷ややかな声で告げた。

この者の場合は、

「天運。これに尽きる」

ですなあ、全くですなあ。私は大きく頷いた。

パラメーターをグラフで表示すれば、さぞや偏ったレーダーチャートが出来上がることだろう。勇者は複雑そうに眉をしかめた。

「なぜか褒められている気せんな」

「でしょうね！」

褒めてないしね！

しかし天性とも言える運と思い込みで超えるべきでない境界を超

えたものの、やはり裏技は裏技。正規ルートではない。精度は低く、目的とは異なる魔王の元に飛んだというわけだ。

一週間前に勇者となり、その数日後にはショートカットで魔王近くに下車。

勇者の足取りを追えば追うほどに残念な気持ちが押し寄せる。私が考えていた勇者の旅と違う。スピーディに鬼退治を片付けた桃太郎だって、旅の途中で仲間を募ったりとそれなりに展開があったというのに、この勇者の物語性のなさときたら。

麦茶に沈んだ氷が溶け、グラスの中で涼やかな音色を奏でる。

勇者はそれを飲み干し、ごりごりと音を立てて氷を噛み砕いた。

図々しくもグラスを差し出しておかわりを要求している。魔王も魔王で何故応じる。宿敵のグラスに麦茶を注いでる場合か。

水をついで回る店員のように私のグラスにも麦茶を注ぎ足し、ポットを冷蔵庫におさめた魔王は再びソファに腰をおろした。

「事情は読めた。去れ」

端的な言葉にグラスに口をつけていた勇者の動きが一瞬止まった。

「貴様のあるべき場所ではない」

魔王の言う通り、勇者にとって意義のある地ではない。探し求める敵はなく、ついでに言うと味方もない。魔王に柔軟な土地柄ということは、勇者には風当たりがきついということだ。アウェイと言わずしてなんと言おう。

黙した勇者はグラスを大人しく卓上に戻した。その健康そうな肩と澄み切った目をわずか落として。

「……らん、」

「え？」

「帰り方がわからん……」

帰れないと言われても帰っていただかねば困る。リビングに勇者

を残し、台所でこそこそと私と魔王は今後について模索した。
「魔王さんの魔力やら術やらで帰せないんですか」
魔王は首を振った。己の管轄内に送ることはできても、他の魔王が司る領地は侵せないらしい。
炙られた薬缶が湯気を吐きながら唸る。
暑さに喘ぎながら火を止めた時、ふと置き去りにしてきた疑問が首をもたげた。
「……ていうか実際のところ、何人いるんです魔王とか勇者とか」
正確な数は知れぬが、と前置きした魔王は沸騰した薬缶を持ち上げてポットに注いだ。
「余が知る限り十はくだらぬ」
「うわー結構いるー」
勝手な意見と自覚しているが、魔王や勇者という立ち位置を特別視していた身としては、唯一とは言わずとも、できれば三人以内程度におさえて欲しかった。当日限りという触れ込みの商品が毎日店頭に並んでいるのを見てしまったような気持ち。ありがたみに欠ける。
センチメンタルをよそに、魔王は私に背を向けて製氷機に水を足すついでに冷凍庫の整理をしている。これが最低あと十人いるのか……と不思議な思いでその後ろ姿をまじまじと見ていると、振り返った魔王は何を勘違いしたのか、やれやれといった顔で冷凍庫から何かを出した。アイスクリームだ。
「欲しければ欲しいと言えばよかろう。匙を持て」
「いやそうじゃなくて、でもいただきます」
確実に的外れだったが断る理由はなく、私は尻尾を振って飛びついた。高い室温に触れたアイスクリームはすでにスプーンを難なく受け入れるほどに柔らかい。行儀が悪いと知りつつも私は台所で立ったまま食べ始めた。バニラとチョコが半分ずつ入っているのが嬉しい。二口ほど味わったところに、どたどたと荒い足音がした。
「なんだ！　なにを食っている！」

勇者に見つかってしまった。居間からは見えない位置に立っていたつもりだったのになんという目ざとい奴。
「俺の分は！」
「ない」
冷凍庫より冷えた声は当然ながら魔王のものである。この状況で自分の取り分を要求できるその精神力だけは評価したい。
魔王にすげなくあしらわれた勇者は、私の手元のアイスに狙いをつけた。思わず隠すように両手で抱える。
「くれ」
「や、やだ」
「全部とはいわん」
当たり前だ。
「半分くれ」
「……ください」
「ん？」
「半分ください、でしょうそこは。最初から思ってたけどお願いする時の態度があまりにもひどい！　勇者っていうより山賊！」
強くスプーンで指し示すと、勇者は面食らったのか口をへの字に曲げた。それから視線をさまよわせて魔王の方を見たが、援護を得られるわけがない。結局勇者はきまり悪そうに肩をすくめた。
「……半分ください」
「よろしい」
溜飲が下がる思いでアイスのカップを譲り渡した。
いくら常識を踏み抜く暴走勇者とはいえ相手も獣ではない。真摯に訴えればきっと伝わる。私はうんうんと頷き一人で悦に入っていたが、それがいかにアメリカの菓子より甘い考えであるか、ほどなく思い知らされる。
「あー！」
愕然とした。戻ってきたアイスクリームは、チョコ部分が全て食べ尽くされている上、１／５ほどしかカップには残っていない。

半分って。半分って言ったのに。この男の半分の概念とは一体。
糾弾の意思を込めて睨めつければ、勇者は何を責められているのかわからないといった訝しげな目で見返してきた。だめだ。根本的にだめだ。
「魔王さん」
「カオリ」
「妖刀を貸してください」
「落ち着かぬか。つまらぬ者を斬っては徳川家の名折れ」
「止めないでください口で言ってもわかんない奴ってのはいるんです吉宗だって許してくれます」
私が羽交い絞めにされているのを振り払おうと夢中になっているその時である。カツコツと何かを激しく叩く音がした。見れば、魔王の使い魔であるカラスが嘴で窓枠をつついていた。
「戻ったか」
家に入る前、魔王がカラスをどこかに差し向けていたのを思い出した。
迎え入れられた小さな配下は従順に魔王の腕へと降りた。言葉を解しているのか、別の形で意思の疎通をはかっているのか、物言わぬカラス相手に魔王は何ごとか呟き頷いている。
「ご苦労。羽を休めるがいい」
一度頭を垂れるようにして、黒い翼は窓から飛び立って消えた。
それを目で追う前に遮ったのは魔王の重い声。
「件の魔王と渡りがついた」
「え」
「所在が割れれば上々と睨んでいたが、首尾良く運んだと見える」
魔王は勇者と私を順番に眺め、気配を舐めるように言った。
心せよ。
――間もなく来る

ピンポーン。
来た。本当にすぐ来た。
軽やかなチャイムとは裏腹に空気が張り詰める。誰もが動かない中、何故か魔王に目配せされた私が玄関に進み出ることになった。深呼吸してからドアノブに手をかける。回す直前、背後から咳払いが飛び、慌ててドアチェーンをセットした。自分で出ればいいじゃない。
「どちら様、でしょうか……」
「あー？　俺俺」
軽い。しかも想像以上に声が年老いている。
「俺って言われてもわからないので。名乗っていただかないことにはこのドアは開けられません」
こんな状態で開いたら後ろに控えている黒い人にきっと怒られる。
「ん？　おめえさん誰よ。兄ちゃんじゃねえな」
「いやいやこっちが誰かって聞いてるんですけどって、兄ちゃん？」
その呼び方と気安い物言いから連想される人物は一人しかいなかった。私は猛然とドアを開いた。
「三枝さん！？」
「お、なんだ夏織ちゃんか」
チェーンの存在を忘れていたせいで開ききらないドアに激突しそうになる。隙間の向こうで見覚えのある顔が訝しげに私を見ていた。
「なんでこんなとこに。やっぱりデキてんのか」
「もうその話いいから」
身構えた分、どっと気が抜ける。タイミング的にすわ襲来かと決めつけたものの、魔王が暮らしに馴染んでいる以上、宅配やご近所さんが訪ねてくる可能性だって大いに考えられるのだった。緊張して損した。私は肩透かし半分、安堵半分の息を吐き、扉に手をついた。
「魔王さんに用だよね？　ちょっと待ってて」
チェーンを解こうと一旦閉じかけた扉に三枝さんの声がかぶさる。

――いや俺が用あるんじゃなくてよォ

次に開けた時には、目の前の光景がすっかり変貌していた。壁だ。三枝さんだったはずが濃い紫色の平面に取って代わられている。眼前でカーテンを閉じられたような閉塞感から逃れたくて一歩後ずさると、高い位置に顔らしきものが見えた。褐色の肌に光る目は赤く、頭部の両側にぐるりと角が曲線を描いて。およそ人から外れた、その姿はどう見ても。

「魔王と申すが、魔王はおるかな」

私の知る魔王とは異なるものの、明らかに魔王の形をした男は、産毛を嬲るようなしっとりとした低い声を出した。陽光を受け、無造作に垂らされた金の髪が輝きを放つ。

「お、おおお、おります」

目の前にも家の中にもおります。私は目を白黒させて呼吸を飲み下した。金髪の魔王が後ろへ首をひねり、壁にしか見えなかった紫のベルベットが揺れ、壁ではなくローブだとようやく知れた。

「サエグサとやら、先導ご苦労。慣れぬ道に難儀していたが、いやはや助かったわい」

「いやァ俺も郵便局行くついでだったからよ」

景色に取り込まれて消えたと思われた三枝さんの朗らかな声がした。どうも道に迷いかけた魔王をここまで案内してくれたらしい。すぐそこにいるようだが魔王が目隠しになって姿は見えない。

「しばらく来ないうちに様変わりしたのう」

「いうほど大して変わってねえよ。まあ墓石は増えたけどな」

会話だけ聞いてると老人会の集まりのようだ。片方は年寄りではない、というより人ではないが。

「んじゃ俺はここで。パチンコ行ってくる」

夏織ちゃん兄ちゃんと仲良くなーという誤解を招く台詞を吐き、見えないまま三枝さんは去っていった。郵便局行く予定はどうした。

ふと気づくと三枝さんを追っていたはずの赤い目がひたりと私を見下ろしていた。息苦しさを覚えるような視線を浴びせたあと、金

の髪を持つ魔王は口を開いて一言。
「デキとるのか」
「デキてません」
今そんなこと心からどうでもいいのである。身を包んでいた緊迫感が高速で遠のいた。
「とりあえず入ってくださいどうぞ」
招き入れる為、私は一歩下がった。改めて見ると本当に縦に長い。見上げ続けると首を痛めかねない長身の魔王よりも、更に体格が良いのではないだろうか。
大丈夫か。入れるか平均的日本人設計のこの家屋に。巷でよく耳にする、買った家具が大きすぎて家に入らなかった事例がよぎる。
「おう久しいな。邪魔するぞ」
猫背気味で玄関をくぐった魔王が、私ではない位置の目線で薄く笑った。振り返ると奥に引っ込んでいた魔王の姿が背後にある。
「のこのことよく来たな」
応じる魔王に微笑みはない。いつも通り冷淡な表情が張り付いている。親しさからかけ離れた面構えだが、交わす言葉から察するに面識はあるようだ。
大きな体をかがめ、魔王（大）はこちらが何か言ったわけではないのにブーツらしきものを脱ぎ、育ちの良い娘さんのようにきちんと揃えていた。土足のまま上がろうとしてひと悶着起こした勇者を思うと、その差は歴然である。
「よくも厄介事を持ち込んでくれたものよ」
「そう言わんでくれるか。我も寝耳に水でな」
ぺたぺたと音を立て、足に合わないスリッパで先を進む魔王と魔王が居間の扉を前にして足を止めた。巨躯が二体並ぶと、さして広くない廊下がいよいよ狭苦しく見える。
「勇者はこの先ぞ。考えの足りぬ若造だがそれゆえ何をしでかすかわからぬ」
魔王が扉の奥にいるであろう勇者を視線で示すと、赤い目が揺れ

動いた。
　魔王の血は勇者を知る。誰に教えられずとも猫が鼠を狩るように、相容れない敵であると本能的に悟るのだという。
「保養地であることをゆめゆめ忘れるな」
「承知の上よ」
　釘を刺されてか、黄金色の魔王を取り巻いていた闘気は散った。平静を語るように風を孕んでいた髪がローブに沿って流れ落ちる。木製のドアとは思えぬ重厚な音を響かせて、紫のローブが居間の敷居を跨いだ。
　ゴッ
「そこは低いゆえ気を付けよ」
「先に言ってあげるべきでは」
　来客が頭部を打ち付けた後の忠告はあまり意味をなさない。頭をさすりながら、なびく金髪はリビングの奥へ吸い込まれていく。すぐにその後を追おうとしたが、黒い魔王が引き止め私に何かを手渡した。細長く、ずしりとした重みが正体を語る。これは先ほど私自身が貸せと騒いでいた徳川家の模造刀ではないか。
「今のみこれを授ける」
　手の内の、三つ葉葵の紋を眺めて息を飲む。もしかして。
「き、斬れと」
「違う」
　魔王の鋭い目線が居間の方へと投げられる。
「あのうつけが我を忘れて暴れるようなことがあれば、先ほどと同様脇腹を突け」
　ああそういうことか。勇者にとって真の仇の登場だ。目にすれば頭に血が上ってまたしても同じ過ちを繰り返すかも知れない。しかし魔王にとっても勇者は宿敵。管轄外の魔王でさえも一瞬臨戦態勢に陥ったくらいだ。同じ領域の魔王ならは尚更血が騒ぐのではないだろうか。
「魔王側の方も暴れたりとかしませんかね」

「あれは魔王として在位も長い。出し抜けに出会えば刃も交えようが、事情を知った上でそれはなかろう。あしらいくらいは心得ている筈ぞ」

その口ぶりから、かの客が魔王より年嵩であることが伺える。魔王界の年齢事情については未だ謎のベールに包まれているため正直よくわからないが、在位が長いならば経験も豊富だろう。生き急ぐ未熟な勇者の正義の暴力も、きっとベテランの魔王がうまく諌めてくれる。いくばくかの安心感を覚えて、私は魔王とともに居間へと足を踏み入れた。

「よく吠える小僧よのう、その口二度と叩けぬようにしてくれようか！」

「やれるものならやってみるがいい！　光を守護とする勇者の俺に忌まわしい魔の刃など届くものか！」

デジャヴかと思った。

リビングを舞台に魔王と勇者が全身全霊でいがみ合っていた。

その光景は、魔王が入れ替わった以外は先ほど庭先で見たものとほぼ同じであり特筆すべきこともないので詳細は省かせていただく。

とりあえず私は魔王の指示に従い、両者の脇腹をえぐるように強く突いた。

勇者と魔王（二人目）の巻

勇者を気絶させてしまった。

抉り過ぎた私が悪かったのか、突く寸前に振り向いた勇者が悪かったのか。

鞘で突いた瞬間、魔王は脇腹を抑えてうずくまるに留まったが、勇者はふぐっと息を吐いてそのまま白目を向いて倒れた。どうも思い切り鳩尾に入ってしまったらしい。

違う、違うんだ。個人的な恨みを妖刀（※通販にて入手可能）に込めたわけではないんだ。力加減に差はなかった。本当に。偶然の事故である。誓って他意はない。

そもそもだ、相手は腐っても勇者ではないか。甲冑を脱いでいるとはいえ、たかだか村娘その一に昏倒させられるとは不甲斐ない。攻撃力に関しては申し分なさそうだが、防御面に不安要素がありすぎる。

倒れ伏してピクリとも動かない勇者を見てさすがに私は青ざめたが、金色の魔王は平然としたもので、よし静かになったとばかりに、さっさとソファへと移動した。黒い方の魔王は、招かれざる客といえどそのまま放置するのは気が引けたのか、仰向けに倒れている勇者にシーツらしき布を被せた。布団のように着せかけるのではなく、人目から隠すように全身覆い尽くした為、遺体みたいになってしまった。

部下（私）がやってしまった不始末を、上司がもみ消そうとしている図に見えないこともない。申し訳ないことをしたなと思う反面、少し大人しくしてもらった方が都合が良いのも事実。被害者の身の上となった勇者を絨毯の上に残し、私も二人に遅れて椅子に腰におろした。

「どうも勇者と対峙するといかんな。ついカッと頭に血がのぼる」
危うく家に穴を開けるところだった、と魔王は出された麦茶を豪快に飲み干し、コースターの上にグラスを戻した。さきほど勇者が腰掛けていた場所に、今は魔王が陣取っている。二人がけソファの向かいに魔王、隣にも魔王。事情を知り得ていなければ悪い夢にしか思えない。
「それゆえ余が忠告したではないか」
家主である魔王が私の隣で不服そうにもらした。賃貸契約であろう住まいを半壊させられそうになったのだから無理もない。とはいえ自分も場をわきまえず勇者とドンパチ始めようとした一人である。魔王も自覚があるのかそれ以上詰らず、諦観にも似た息を吐いた。
「あれは不相応にも本陣に押しかけたと聞いたが」
「たまたま我が留守の時でな。戸締りもろくにしてないもんで入り込んで大暴れよ。衛兵や手下どもを締め上げて我がいないと知るや喚き散らして出て行ったらしいわ」
いろいろとひどい話だ。
勇者の猪突猛進ぶりに呆れるべきか、魔王城の警備の手薄さに驚くべきなのか、気持ちの重心が揺らぐ。
「魔王ともあろうものがなんと愚かな」
視界の端で闇の色を模したローブが揺れた。
「施錠や警備を怠るなど城を預かる身としての自覚が足らぬ。己が城を空けるなら尚更ぞ。長き凪で骨の髄まで錆び付いたか。平和ぼけも甚だしい」
こんな穴だらけのセキュリティを耳に入れて、警備の鬼が黙っているわけがない。そりゃもう、ここぞとばかりに吠えるのである。
この人が越してきてから私も幾度となくこの手の説教を喰らってきた。金の魔王も同じなのか、明後日の方向を見ながら髪をいじるなど態度の悪い女子高生並に聞き流している様子である。いや私はともかく勇者に踏み込まれた当事者としては、もっと真摯に受け止めたほうがいいと思う。

「しかし聖剣が勇者を選んだと聞いたはつい先日だぞ？　１０日やそこらで城まで攻め込んでくると思わんだろ普通」

褐色の肌を持つ魔王は傍らへ目線を送り、大きく頭をかいた。つられるように私と魔王も床に横たわる勇者を一瞥する。

普通の発想ではやるまい、そんな強行日程での魔王城攻略。

確固たる約定はなくとも、勇者と魔王の戦いといえば人類にとっても魔の者にとっても運命を左右する一大イベントだ。それゆえに暗黙の了解というか、お互いそこそこ年数をかけて準備を整え、悔いの残らない形で決戦の日を迎えましょう、というようなドラマ性を尊重する空気がある。恐らくこれまでの歴代の勇者達もそれを踏襲してきたのだろう。

が、そこへ革命児登場である。誰もがそれはない、と断じる弾丸ツアーを実行に移した、わびさびのない男がいたのである。おかげで管轄内外の魔王に保養地をも巻き込んでのこの顛末。

「だが早々にそなたと話がついたは不幸中の幸いと言える。連れ帰ってもらおうぞ」

「気が進まんが致し方ないのう」

黒い魔王が詰め寄ると、心底気が重そうに赤い目を伏せた。

首を振る扇風機が私達三人をなだめるように弱々しい風を浴びせてゆく。魔王宅のクーラーは古い型のせいか利きが悪い。扇風機が奮起してはいるが、力及ばず、申し訳程度に空気をかき混ぜているに過ぎない。喉の乾きを覚えてグラスを手に取るも、とうに空だった。麦茶をもらおうと私は半分腰を浮かせた。

「すいません魔王さん」

呼びかければどちらも振り向く。無理はない、どちらも魔王に違いないのだ。私は慌てて横に腰掛けている黒いベールの魔王を指した。

「いやあの、こっちの、黒い方の」

ややこしい。魔王が増えた時点で思っていたことだが、実にややこしい。

そんな私の困惑を見て取ってか、前から声が差し込まれる。
「名がなければ不都合よな。娘、我のことは黄金（こがね）と呼ぶがよいぞ」
黄金と名乗った男は砕けた微笑みを寄越した。
凍てついた眼差しが常の、感情の機微が読みにくい隣人と比較すると、彼は人間臭いというか表情豊かだ。顔立ちの印象も随分と違う。どちらも整ってはいるものの、氷を切り出したような鋭利な黒髪の魔王に対して、金の髪の魔王はその肌と彫りが深さが暑い国を連想させる。ラテン系とでも言えばいいのか。
「魔王が集う場では皆そのような通り名で呼び合う。番号でも良いが味気ないもんでの」
黄金の魔王はさらりと告げたが、魔王が集う場というのが既に不思議だ。どういう状況なんだ。定例会議とかか。それともパーティーか。どんな集まりにせよ、参加者が全員同じ苗字と考えれば、確かに不自由極まりない。
互いをあだ名で呼び合う和気藹々の魔王達の会談を思い描き、私は置物のように座っている隣を見やった。
「じゃあ魔王さんにも通り名が？」
本人ではなく黄金がこれに応じた。
「こやつの今の通り名は傷の魔王」
褐色の長い指が頬をなぞってみせる。魔王の傷を揶揄するような仕草だが、当人に気を悪くした様子は見えない。それに少し安心して正面に向き直る。
「今のってことは、前は違う通り名だったんですか」
にやりと唇の端が上がった。
「傷を負う前は、八重歯の魔王と呼ばれていたな」
「八重歯！」
ずいぶんかわいいな！
驚きついでに声を上げると、傷の件では無反応だった魔王が不本意そうにそっぽを向いた。
過去の二つ名は彼にとってはあまり歓迎すべきものではないよう

だ。まあ確かに、魔王という職業の足を引っ張りかねない呼び名ではある。物々しく闇を背負い破滅を掲げて現れたところで、魔王（通称・八重歯）のテロップが流れた時点で畏怖が薄れるのは間違いない。

しかしそうか。時々唇の隙間から見える尖ったものを、牙として受け止めてきたがこれからは八重歯と思えばいいのか。じろじろと横顔を舐めるように見ていると、手のひらでつかむように顔面を塞がれた。

「そのように無遠慮に見るでない」

やんわりとしたアイアンクローをお見舞いされ、痛くはないが視界が暗い。

「ところで傷の。その娘はなんだ」

「参謀として召し上げた」

「ほうそれは拾いもんだ。休暇のついでに人材確保とは抜かりない奴だの」

背もたれに体を預けたのか、ソファの軋む音がした。

「やはり保養地はよいな。空気もうまいし骨休めには最適よのう。このところ小競り合いやら何やら、僻地と城を行ったり来たりで寝る暇もない」

「戦か」

「いや低位の魔族同士の揉め事でな。会合にあいつだけ呼ばれたとか呼ばれないとか、上座だ下座だとか」

「三流ほどつまらぬ悶着を起こす。余の領地においても頭痛の種であったものよ」

「まったくだ。おかげで翼の艶が思わしくない」

「疲労は抜け羽の元凶ぞ」

「勘弁してくれ。ただでさえ湯に浸かる度、排水溝が詰まって手を焼いてるというに」

「湿気も忌まわしいが過度の乾燥にも注意を払わねば」

「椿油試したことあるか？　悪くないぞ」

「あんず油とやらも良いと聞く」
さすがどちらも魔王。立場を同じくする者でなければ成り立たない会話である。共感はできないにしても興味がないこともないので、魔王あるある合戦、大いに結構なのだがそろそろ手を離してもらえないだろうか。
ふとその時、願いが通じたのか、ほどなく顔全体に加えられていた圧迫感が去り、視界に光が戻った。眩しさに目を細める暇もなく、私の耳は誰のものかわからぬ舌打ちを拾った。
「もう少し寝ておれば良いものを」
見れば、寝かせておいた場所に勇者の姿はなく、白い布が抜け殻のように散らばっている。いつ目覚めたものか、いつの間にか絨毯を這いずり黄金の魔王の足元に到達していた。弱々しくもその手が魔王へと伸びる。
「一撃で失神とは不覚……よくもやってくれたな魔王め……」
「我ではないぞ」
あっさりと足で払いのけられ、勇者は力尽きたのかその場にうつ伏せで潰れた。それでもまだ何か恨み言を連ねているらしく、もごもごと言葉にならない声を一途に床へとぶつけている。黄金の魔王は眉をしかめて憂鬱そうにそれを一瞥した。
「なんだってこの若造は初っ端からこんな士気旺盛なんだ。厄介だのう」
「勇者さんが言うには仇だとか家族の恨みだとか」
傍若無人な振る舞いで忘れがちだが、彼の言葉を信じるならば、魔王によって幸せを奪われた薄幸な身の上だ。こうまで好戦的であるのは、勇者としての役割みならず恨みによるところが大きい。ただでさえ冷静や熟考を母体に置いてきた気性であるようだし、仇敵を前にして慎ましくせよというのは無理があるのかも知れない。
「そうだ！」
潰れていた勇者が大声とともに腕立ての要領で飛び起きた。手負いの獣のように険しく瞳をぎらつかせて、魔を帯びた赤い目を見据

える。
「お前が俺の管轄の魔王とわかった以上、どうあっても討ち果たす！　復讐を遂げる！　心当たりがないとはもう二度と言わせんぞ！」
「もう二度と？」
「さっきうちの前で一回やってるんですよこのくだり」
ね、と目で問いかけると、横で魔王も頷いた。
「そりゃすまんかったの」
黄金の魔王が大きな肩を竦めてみせた。詫びているものの、あまり悪いと思っていないであろうことはその声色から明白だ。友人間でよくある、遅刻しちゃったわりーわりー程度の重みしか感じない。その軽々しさは、勇者の神経を逆撫でするに十分だった。
「その見下した態度、我慢ならん！　お前のせいで俺の家族や恋人がどうなったと思う！」
猛々しい感情に押されてだろう、飛びかからん勢いで勇者は立ち上がった。が、威勢が良かったのもそこまで、瞬く間によろめき目の焦点が合わなくなったかと思えば、そのまま崩れ落ちた。
「くそ、魔物どもめ卑劣な術を……！」
「立ちくらみですよそれ」
ずっと寝ていた人間が急に立ち上がればそうもなる。
聞いているのかいないのか、朦朧しているだろうに勇者は尚も立ち上がろうとしていた。甲子園の砂を拾う球児のように膝と手をつき、声というより息を吐き出す。
「……父を、マリアンヌを……返せ、」
音は掠れてか細いが、言葉は重く、空気を深く抉りとった。
たまたま巻き込まれる形になってしまったが、管轄が違う私達はしょせん部外者に過ぎない。これより先は世界と過去を共有する勇者と魔王の問題だ。私も魔王（八重歯の方）も口をつぐんで、ただ成り行きを見守るしかない。
ソファで足を組んでいた黄金色の魔王はやおら肘置きに体を預け、頬杖をついた。床に這い蹲る勇者をまじまじと眺めて、その口を開

く。

「何を言ってるものかわからんのだが」

黄金の魔王は全くぴんと来ていない様子で八の字に眉を描いている。とぼけているわけでも勇者を試している風にも見えなかった。

「また魔王違いだと逃げるつもりか！　もうその手は食わん！」

身を起こした勇者は今度は一気に立ち上がらず、膝立ちの姿勢をとった。少しは学習したようだ。

「お前たちのこれまで悪行の始末、その命で購ってもらうぞ！」

「坊主、お前なにか勘違いしとらんか」

小石を指ではじくように、黄金の魔王は平坦に応じる。

「人が人の世を生きる為足掻いてるのと同じく、こっちはこっちで忙しいのよ。わざわざ人間どもの土地に足を伸ばして荒らす暇なんぞあるか。特にこのところ内輪もめが続いて、どこの魔族も身内に目を光らせるのに躍起になっとる。こんな時期に人間なんぞに構う奴がいるなら、そいつはただの阿呆だ」

魔王によるまさかの内情ぶっちゃけに、勇者は怯んだ。

ついでに傍から見ているだけの私も怯んだ。

気の向くままにその邪悪性を発揮して、人を襲い困らせ苦しめるのが魔の者の生きる道かと思いきや、そういうわけでもないようだ。人が思うほど魔物も自由に非ず。この広い世の中、どこに行っても世知辛い。

つかの間言葉を失っていた勇者はすぐに我に返った。首を大きく振って、正義を曇らせる疑心を払い落とし、己を奮い立たせるように声を振り絞る。

「だが！　現に父は女と逃げた！」

その叫びはリビング全体に響き渡り、聞く者全てを同じ顔にさせた。

きょとん。そう、きょとんだ。

それよりふさわしい反応は他にない。

「……お父さん、亡くなったんじゃ？」

おずおずと私が尋ねると勇者は凛と背筋を伸ばした。

「死んだとは一言も言ってない」

「ええー……あの感じだと普通そう思うじゃん……」

血のにじむような熱量を孕んだあの訴えは一体なんだったのか。

「で、その話と我がどう繋がる」

誰もが感じていた当然の疑問をそろりと口にしたのは黄金の魔王。

返事を促す三つ分の視線を受け、勇者は厳しい面持ちを返す。

「父に魔が巣食ったのだ。父の弱い心に魔物が囁いて……夜な夜な町に繰り出してはよその女と散々火遊びに興じた挙句、出て行ってしまったと母が」

魔族関係ねえ。

勇者の父が存命と判明したあたりで、ろくな話ではない予感はしていたが、やはり裏切ることはなかった。できれば裏切って欲しかった。こんな時空を超えてまでやってきた人の口から、ただの言いがかりなど聞きたくなかった。

勇者はついに立ち上がり魔王を真っ向から睨みつけた。

「お前ら魔の眷属が父を惑わし、母を愚痴っぽくさせたのではないか！」

「知るかたわけ！　家庭内のいざこざまで我らのせいにされてはたまらん！　単にてめえの親父の下半身に節操なかったんだろうがよ！」

「なんだと！　父は節操がなかったのではない！　その猛勇を身の内に秘めておくことができなかっただけだ！」

「それを世間じゃ節操がないっつうんだ小僧！　己のムスコの手綱も持てねえ夜の豪傑なんぞ、酒の席では誉でも所帯持ちとしては恥さらしよ！　盛りのついた畜生にも劣るわ！」

「そなたら自重せよ。嫁入り前の娘に聞かせる話ではない」

いかにも不快そうに魔王は眉をしかめた。先刻から私の耳は魔王の手によって塞がれている。が、添えられた手の位置が微妙にずれており、気遣いも虚しく下劣な会話はほぼ弾かれることなく耳に流れ込んでいるのだった。

「とにかく我には関わりないことよ。勇者に狙われるは宿命とはいえ、身に覚えのない罪まで被ってやる義理はない」

「待て、ならばマリアンヌの件はどうなる！」

早々に幕を下ろそうとした黄金の魔王に勇者は食い下がった。しかし既に茶番を繰り広げた後では、まともに取り合ってもらえるはずもなく。

「マリアンヌとやらはなんだ？　魔にそそのかされてマグロ漁船でも乗ったか？　それとも賭博で身を滅ぼしたか？　これ以上ガキの戯言に付き合ってられん」

「父の時とは違う！　マリアンヌは、マリアンヌは……恐らくもうこの世には……」

頼りなくなった言葉尻に、背を向けていた魔王は金の髪をうねらせて振り向いた。ふっと火が消えるように喧騒が遠のく。勇者は目を伏せた。

「将来を、誓い合った仲だった」

ぽつりと言葉が落ちる。

「同じ町で生まれ、同じ町で育った。マリアンヌと同じ色を持つものは沢山いたが、あれほど美しい瞳は彼女のほかにない」

懐かしむような過去を惜しむような声だった。

「勇者になったら結婚しようと、幼い俺の求婚に彼女は応じてくれた。１０年前に彼女が遠くの町へ引っ越し、離れ離れになってしまっても絆が揺らぐことはなかった。俺は頻繁に手紙を出し、思いの丈を伝え続けたし、近況報告も欠かさなかった。あまり返事は来なかったが」

……うん？

「返事が来なかった？」

「全く来なかったわけではないぞ、１０通に１通くらいの割合で届いた。きっと忙しかったんだろう」
「お、おう」
雲行きが怪しくなってきた。
「しかし俺はあの日の誓いは一日だって忘れたことはない。だから、勇者に選ばれた日すぐに手紙を書いた。約束通り迎えにいくと」
そうしたら。
勇者はぐっと拳を固く握り、面を上げた。その瞳はうっすら涙で潤んでいる。
「魔王が伝染病を町中にばらまき……それに感染してしまったと。致死率は高く、治す手立てもない。あなたが感染しては困る、だから来てくれるな。きっとこの命も数日ともたないから、どうか私のことは忘れて欲しい、と」
唇を結んだ勇者は懐から手紙のようなものを突き出した。私がそれを受け取り、魔王二人が後ろから覗き込む。
和紙に似た手触りの表面に流れるような異国の文字が連なっている。
何が書かれているかまでは判断できないものの、か細さの欠片もない筆跡を見る分には、とても今にも死にそうな病人のものとはとても思えない。紙の上を走るその太く濃いインクは躍動感に溢れており、雄々しさすら感じる。全文黙読した魔王いわく、忘れて欲しい、という文言が三度に渡って記されているなど、全体的に必死さが伺える文面だったという。
「魔王が伝染病……」
つぶやきながら見上げると、黄金の魔王は心外と言わんばかりに首を振った。
「知らん」
「この期に及んで言い逃れとは見苦しいぞ！　その手紙が動かぬ証拠ではないか！　恋人を奪われた苦しみ、冷血な魔物どもにはわからぬか！」

勇者は例のごとく勝気に喚いたが、今度は誰も応戦しようとはしなかった。むしろそれとなく目線を方方にそらし、衝突を避けてさえいた。その時思ったことを素直に口に出すのは、なぜか憚られるような気がしていたのだ。

扇風機の羽が重い空気を波立たせて回る。

担当という責任感がそうさせたのか、わずかな沈黙を破ったのは黄金の魔王だった。

「……ならば問うが、その病で死者はどれほど出た」

静かな問いかけに、勇者はぐっと言葉に詰まった。

「詳しくは知らん、だが」

「そもそも町ひとつ脅かすほどに悪辣な病が猛威を振るっているならば、騒ぎにもなろうし、噂のひとつでも流れてこよう。被害によっては町ごと封鎖だ。お前、一度でも耳にしたか？」

声音には威厳と落ち着きが溢れており、すでに魔王というよりも小僧を諭す長老さながらである。噛んで含めるように説かれた勇者は目を瞬かせて、考え込む顔つきになった。

「いや……そんな話は聞こえてこなかった。商売であの町と行き来している連中はいくらでもいるのに、誰も病のことなど」

言葉を切って勇者はうつむく。それからゆっくりと、閃いたように口を動かした。

「……伝染病など、なかったということか？」

いかにも、と相対する魔王は目だけで応える。自分で口にしておきながら、勇者は愕然とした表情を浮かべた。

「なぜだ！？　ならば、なぜマリアンヌはこんな真似を！？　嘘をつく必要がどこにあった？」

思わず私と魔王二人は顔を見合わせた。口には出さずとも、胸に抱えている思いはみな同じである。

私たちは無言を守りつつ、お互いアイコンタクトで「お前言えよ」「いやお前が言え」と散々牽制し合っていたが、やはり魔王らが放つ目力たるや凄まじく、人の子が敵うべくもない。結局私にお鉢が

回ってきた。
答えを待つ勇者の眼差しは、火種になりそうなほど熱い。それにじゅうじゅうと炙られ、私は何度か口ごもった後、残酷な事実を伝えた。
あのですね。
それはたぶん。
「振られたんですよ」
「……なっ……」
勇者は絶句した。

将来を誓い合った恋人を偽りの手紙一通で裏切ったマリアンヌ。
概要だけ聞けば、なんと血も涙もない女かと非難の思いが湧くところだが、この件に関してはそう単純な感想では済みそうもない。
何しろ10年前に離れ離れとなって以来、お互い一度も会っていないのである。もちろん世には遠距離恋愛というものが存在するし、一度の恋を生涯のものとする一途な方々も沢山いらっしゃるのだろうが、返事もろくに来なかったことを考えると、明らかに二人の情熱には開きがある。マリアンヌが筆不精なたちだとしても想い合ってる相手との文通ならば、もう少しまめに文に認めてもよさそうなものだろう。10通書いてやっと1通って。無骨な将か。
こう考えると、二人が本当に「恋人」という間柄だったのかも怪しい。あまり推測でものを言いたくはないが、勇者だけが一方的に思い込んでいただけなのではないか。
「将来を約束したのは確かなんですよね……？」
世界を救う勇者がストーカーでは聞こえが悪い。
「もちろんだ。校舎裏に呼び出し、大人になったら結婚しようと求婚したんだ、忘れるはずがない」
「で、マリアンヌさんはなんと」
「照れていたのか何度も返事に詰まったあと、あなたが勇者になったら、と」

本当に照れていたのかそれ。違うと思う。絶対違うと思う。

しかし凶器にさえなり得る超級ポジティブを備えた勇者にかかれば、むき出しの困惑も、照れおって愛い奴め、に変換されてしまうのだろう。

そもそも、あなたが勇者になったら、というその返事。

「勇者が選ばれる頻度ってどのくらいですか？」

私は二人の魔王を振り返った。

「ふむ、一概には言えぬものだが」

「おおよそ人の世であれば何十年に一度ってところかのう」

宝くじどころの当選率ではない。可能性はゼロではないとはいえ、限りなくゼロに等しい。そんな現実的ではない条件を、好いた男に叩きつけるものだろうか。普通はすまい、本当に結婚したいと望んでいたら。

つまりマリアンヌは、男達に無理難題を吹っ掛けたかぐや姫よろしく、遠まわしに求婚を拒んだのだ。

「なんだ。どういう、ことだ」

私達のやり取りに秘められた真意に気づかないのか、はたまた気づきたくないのか、気の毒なほどに顔色を失くした勇者が、ぱくぱくと口を動かしている。居たたまれなくなって、私は目をそらして答えた。

「勇者になるとは端から思ってなかったって、ことです」

心臓を射抜かれたごとくに凍りついた顔が視界の端に見えた。

勇者として剣に選ばれた時、彼はさぞかし喜んだことだろう。

そして、それ以上に知らせを受けたマリアンヌは驚き慌てたことだろう。

私と結婚したければ龍の首の珠を差し出せと退けたはずの相手が、本当に持ってきちゃったのである。まじかよ、と気が遠くなったに違いない。幼少期から共に過ごしていたのであれば、彼に生半可な断り文句など通用しないことは骨身に沁みているだろうし、かと言って下手に直球を投げて、愛が憎に反転した元幼馴染に首を狙われ

ることになっても堪らない。その果てに生み出された苦肉の策が、伝染病にてマリアンヌ死す、だったわけである。魔王はまさにとばっちり、病に説得力を持たせるちょっとしたエッセンスとして体よく名を使われた過ぎない。

「マリアンヌとやらは傷を負わせることなくうまく断ったつもりだったんだろうがなあ。しかし勝手に名を使われてはたまらん」

「所詮は小娘の浅知恵よ。切れ味の悪い刃物など百害あって一利なし。ひと思いに楽にしてやれば良かったものを」

片方の魔王は倦んだ色を隠すこともなく金髪を乱暴にかき回し、もう一人は冷ややかに腕を組んで牙にも見える八重歯を覗かせている。巨塔二つを中心に生み出されるうんざりとした空気が、肩を叩くように脱力を誘った。

暑い。忘れかけていた喉の渇きが鮮明に蘇る。許可を得るのも面倒で、勝手に麦茶をもらおうと私は足を踏み出した。その一歩目に何かを踏んだ。

勇者だった。彼は体育座りで泣いていた。

１０年を超える初恋が、ただ一人の味方もない世界の田舎の片隅、しかも担当違いの魔王邸リビングというわけのわからない舞台において儚くも酷薄に散ったのだ。いくらダイヤモンド級の彼のメンタルをもってしても跳ね返すことは難しかろう。膝に押し付けているせいで表情は伺えないものの、くぐもった恨みがましい涙声が途切れ途切れに聞こえる。

「ううう……何故だ、何故だマリアンヌ……俺の何が気に入らなかったというんだ……」

嘆く姿はあまりに惨めで湿っぽい。一から十まで迷惑な男とはいえ、その盲目的な純情を思うといくばくかの同情の火が灯る。せめて慰めのひとつでも、と背中に手を伸ばしかけた。

「俺達の仲を引き裂こうとした君の兄と決闘して圧勝したのも一度や二度ではないし、誕生日には欠かさず俺の大事なヘラクレスオオカブトを大量に贈って祝ったし、家畜には全てマリアンヌと名づけ

る程の愛を示したのに」
「そういうところだと思いますよ」
慰めの言葉は途中で蒸発した。

お引き取りの巻

失恋の痛手は大きかった。

勇者はすっかり大人しく、というより萎れてしまい、梅雨の部屋干しにも劣らぬじめじめとした雰囲気をあたり一面にまきちらしていた。傲慢な態度はなりをひそめ、無闇に魔王に食ってかかることはなくなったが、受け答えには覇気がなく、身にまとっていた勇者たる輝きも今やくすんでいる。死にかけの虫の方がまだ元気だ。

惨状を見かねた黄金が「女なんか他にもいるだろ」とか「若いんだからこれからいくらでも出会いが」と片手間に声をかけても、ハートブレイクの若者にはひとつも響かず「マリアンヌは一人しかいない」「俺はもう誰も愛さない」などと酒と自分に酔い潰れたような台詞を吐いて、またびしゃびしゃと泣くのであった。そういうのは深夜二時くらいの客もまばらな場末の飲み屋でやって欲しい。

今も絶えずすすり泣く、世の湿度を一点に集めたかのような陰気な物体を一瞥した。ソファに座ることすら拒み、リビングの一角で膝を抱えた姿が目に入る。ぼそりと黄金の声がした。

「使いもんになるのかあれ」

「さあ……」

明らかに勇者としてのモチベーションが下がっている。暴れ馬にも似た荒々しいテンションにも手を焼いたものだが、落ち込めば落ち込んだでこれまた鬱陶しい。極端な男である。彼が備えているのはオンかオフの二種類のみで、微調整を受け付ける機能など望むべくもない。

「熱しやすく冷めやすい典型例よな」

黄金の魔王は頬杖をついたまま通販のカタログをめくった。ひと

拭きで驚異の吸水力を誇るドイツ製クロスのページに目を留め、折り目をつけている。私も携帯を取り出しメールに目を通すことにした。

「魔王さん、母がお米頂いたんでいかがですかって。いま精米所にいるらしいです」

「ほうでかした。奉じるがいい」

「じゃ、いるって連絡しときますー」

画面に目を落としたまま応じた。

ようやく嵐が収まったと思ったら、今度は勇者による葬式が始まってしまったので、皆何となく手持ち無沙汰の状態に陥っている。隣人の魔王などは、これ以上関わりたくないのかそれとも構うのも飽きたのか、リモコンを手に時代劇のＤＶＤを鑑賞し始めてしまった。自由だ。まあ彼がこの家の主であり、客のメンツを考えると手厚くもてなす義務もないので、どう振舞おうが勝手といえば勝手なのだが。むしろ叩き出さないだけ寛容といえるだろう。

それはそうとＤＶＤが増えている。以前はＢＯＸがひと箱置かれていた棚には、同じシリーズものとおぼしきタイトルが行儀よく並んでいた。魔王はひっそりと着実に、コレクションを蓄えているようだ。

ふと横目で覗いてみれば、画面を観る鋭利な横顔は真剣そのもの。そういえば主役である将軍の一人称も魔王と同じく「余」であるし、親近感が湧くのかも知れないとぼんやりと思った。そして思っている内に、気づけば私も無鉄砲な将軍の活躍に夢中になってしまい、腹の黒い藩主が紙細工のように斬り倒されるクライマックスはもちろん、下町に平和と笑顔が戻る清々しいエンディングまで見届けてしまった。型通りとはいえ、安定感のあるスカッとした展開は実に気持ちがいい。お年寄りが安心して楽しめるはずだ。上様かっこいい。

時計の長針がちょうど一周した頃、ぽん、と張りのある音色が鳴った。積んである通販の雑誌に一通り目を通したのか、黄金の魔王

が最後の一冊を閉じたところだった。そのまま片付けるかと思いきや、魔王を手招きして「これ三つ買っといてくれんか」とさっき折り目をつけていたカタログを広げて見せている。魔王という生き物は、どうしても通販に物欲をくすぐられる性なのだろうか。

「さてと」

黄金の魔王は昼寝から目を覚ました猫のように伸びをして、居間の一角を振り返った。

「いい加減もう帰るぞ小僧」

「……ああ」

放置されている間に落ち着いたのか、勇者の涙は止まっていた。目は赤く血走って、瞳に生気は戻っていないものの、手を貸さずとも立ち上がれる程度には復調したようだ。が、脱いだ鎧をおぼつかない手つきで装着する姿はどうにも頼りない。こんなにも弱った人に未来を託しても大丈夫なのかと他所の世界ながら不安になり、手にしたせんべいの封をあけそこねた。

紫色の布を引きずりながら近づいた黄金が、その高い位置から宿敵である若者を注意深く見下ろす。

「忘れ物はなかろうな」

お父さんか。

それに反抗するでもなく、虚ろな目で勇者は頷きかけた。

「多分ない……あっ？」

短く声を上げた勇者はそれまでの鈍い動きとは一転、目を見開いて勢いよく俯いた。いや俯いたのではなく、見下ろしたのだ。身軽すぎる己の腰を。

「ああ聖剣！」

「うわあ聖剣！」

勇者が気がついたのとほぼ同時のタイミングで私も思い出した。ある。あるじゃないか。これ以上ないくらい存在感の忘れ物が。

私と勇者が揃って青ざめたのを見て、魔王二人は訝しそうに首をかしげた。本当にどうかと思うのだが私も勇者も今の今まで聖剣に

ついて忘れていたため、どちらの魔王にも伝えていない。
電車に忘れて駅の遺失物預かり所に届けられた旨をかいつまんで説明すると、両者は揃って片手で顔を押さえた。頭が痛い、とその表情が如実に物語っている。
「だから早く取りに行けって言ったのに」
「そのあとすぐに魔王が現れたのだから仕方ないではないかっ！」
悄然とした気配はどこへやら。勇者が声を張り上げたところに低い声が割って入る。
「聖剣を置き去りにしては帰れんぞ」
「当たり前だ。誰が勇者の証を置いていくか」
厳かな銀色を湛えた魔王に睨めつけられ、勇者は肩をいからせた。忘れたまま帰ろうとしていた奴が吐く台詞ではない。腕を組んだ勇者は渋い顔をつくってみせた。
「ただ取りに行く手段がな……」
「手段？」
聖剣が待つ預かり所は二つ先の駅だ。それを告げると魔王は片眉を上げた。
「歩いてたどり着けぬ距離でもないが」
「徒歩は断る！　遠い！　日が暮れる！」
「うるせえよてめえが失くしたのが悪いんだろうが」
黄金は勇者の頭にげんこつを食らわせた。本格的に親子みたいになってきた。
「だが時がかかりすぎるのもまた事実よ」
土地勘のない勇者一人を向かわせるのもまた不安ではある。行く先で住民に迷惑をかけないとも考えられないし、かと言って従者よろしくついて歩くのも釈然としない。
自然と、私と魔王の物言いたげな視線が黄金のもとへと集まった。
「わかったわかった、我が運べばいいんだろうよ。ああ、くそ、厄日だな全く」
苦々しく言い捨て、骨ばった指が荒々しく金色の髪をかき上げる。

たぶん、勇者の尻拭いを魔王が請け負うのは根本的に誤っている。だが悲しいかな、この場で最もふさわしいのは誰かと考えた場合、受け持ちの魔王以外に見当たらないのだった。

もちろん駅に向かうのだから、電車という交通機関も選択肢としてはある。しかし利用客の少なさもあって本数は乏しく、バス以上に待たねばならない。と、そこで私はもう一つ引っかかっていたことを思い出した。

「そうだ、無賃乗車した分のお金払ってきてください。ちゃんと謝ってきて！」

強く訴えると、衝撃が走ったかのように魔王達の顔色が変わった。それぞれ目を見開き、無賃乗車だと？　と言葉なく私と勇者を問い詰める。それに頷き答えると、聖剣を忘れたと伝えたと同じくらい、いやそれ以上に顔面を歪ませた。

「人の保養地でなにしてくれてんだお前……」

「うつけと思っていたがよもやここまでとは」

うわあ……とばかりに、魔王が勇者に注ぐ目つきは蔑みに満ちている。引いている。いわゆるドン引きという態度である。古くからこちらの土地に馴染んでいるだけあって、魔王は物事の道理を心得ているようだ。特に隣人として暮らしている魔王の方は掟や約定を重んじる傾向にある。マナー違反どころではない犯罪行為を到底許すはずもなく、今にも斬って捨てると言い放ちそうな眼光を湛えている。

「軽率にして悪質。勇者の選別を仕切り直すべきではないか。世が荒れるぞ」

「な、なぜそこまで言われねばならん。それほどの大罪か？」

勇者は本気で困惑していた。魔王らによる屑を見るような反応が理解できないらしい。

聖剣が選んだくらいだ、恐らく勇者も悪い人間ではない。ただ、彼の価値観と常識が、私たちとは少し噛み合わないところにあるのだろう。それらは脆く不確かで、育った環境によって大きく変容す

る。正義とは何か答えが出ないように、一概にどちらが正しいとは言えない。

が、今この場所は日本なので日本のルールが一番正しい。

「お金も持たずに電車に乗るのはアウトです。みんなちゃんと運賃払って乗ってるんですから」

「しかし悪気があったわけではない。たまたま持ち合わせがなくてだな、」

むっと勇者は口を尖らせたが、私は構わず続けた。

「それでも立派な犯罪です。罪に問われますよ」

「罪人の扱いを受けるのか！？」

「そりゃそうですよ」

「勇者でもか！？」

勇者は仰天したようにのけぞった。

「勇者でもだよ！　なにその特権階級！」

私も仰天してお茶請けを手の内で砕いた。

元の世界では知らないが、こちらでは勇者の顔パスなど無効だ。

勇者だろうが武者だろうが運賃は平等に請求されるし、よそのお宅のトマトの盗み食いもいけない。

お互いカルチャーショックを受けている私と勇者の横で、魔王二人はちゃりちゃりと音を立てて小銭のやりとりをしていた。

がま口財布から取り出された１００円玉が、褐色の手のひらへと渡ってゆく。

「細かいのがないならとりあえず６００円でいいぞ」

「待て、このようなこともあろうかと密かに硬貨を蓄えていた。貸し付けてやろう」

「おう、５３０円ちょうどか。助かるわい」

運賃５３０円。勇者が貨幣を持っていない以上、魔王が立て替えるしかない。

決して高額ではないが、工面するのがあの勇者の為だと思うと、たかが５３０円、されど５３０円である。

小銭を懐にしまいこんだ黄金は、勇者の首根っこを掴んで「あとで絶対返せ」と凄んだ。

◇◆◇

駅を目指して羽ばたいた二人が戻ってきたのは、大型テレビに映し出される将軍の活躍が2話目に差し掛かる頃、そして私が二個目のアイスを空にする頃だった。

双方、ぐったりとしていた。

最近艶がなくなってきたという羽で勇者を抱えて飛ぶのは心身ともに負担が大きかったようで、黄金の疲労の色は濃い。一方、運ばれていただけの勇者も溌剌とした気力は見えず、なんとも浮かない顔付きをしている。今、その身に鎧はない。土地柄、勇者だと知れては都合が悪いので、さほど人目を引かない羊飼いスタイルで送り出した。

おかげで白い目で見られることはなかったが、あら？　魔王の従者さんかしら？　という好意的ではあるが勇者としては屈辱極まりない扱いを駅員や乗客らから受け、勇者だと自己主張しようとする度に黄金の魔王にげんこつを食らったという。完全に保護者の仕事だ。無賃乗車についても魔王が保護者スキルを発揮し、勇者の頭を押さえつけながら丁寧に侘びて、なんとか穏便に済ませることが出来たらしい。事前に「ハイ」「ゴメンナサイ」「ニホンゴ、スコシダケ」しか喋るなと徹底されていたのも功を奏した。

預けられていた聖剣も、必要な手続きを取った以外特に咎められることもなく無事手元に戻った。疲弊する道のりではあったとはいえ、万事解決である。

安堵による緩みが垣間見えても良さそうなものだが、なぜか表情

にかかった霧は晴れない。特に勇者は思いつめたようなほの暗さを身に纏っていた。

ソファに浅く腰掛け、出されたカルピスに口をつけようともせず、勇者は吐露した。

「……聖剣の様子がおかしい」

勇者は目線を落とした。その膝の上に、布にくるまれた長い得物が眠るように横たわっている。年頃の娘でもあるまいし、剣の様子がおかしいと言われたところでピンと来ない。

「おかしいって」

何が、と私が身を乗り出そうとしたのを、背後からの声が遮る。

「光らないんだとよ」

壁にもたれかかった黄金が、うっそりとした顔で告げた。

「……そうだ、沈黙したまま光らない。手にしても、以前のような覇気を剣から感じない」

聖剣が勇者を選び、選ばれた勇者に魔王を封じる力を与える。握ればあらゆる祝福をもたらし、掲げれば闇を切り裂く光を生むとされる。だが、その奇跡とも言える力が今や細くしか感じられない、と勇者は深刻な面持ちで語った。

俯き、大きくかぶりを振って。

「故障だ」

「ワオ」

聖剣は故障しないなんて信じていた時期が私にもありました。

勇者も大概だが聖剣にもがっかりだ。本当にがっかりだよ。

そうそう不具合が起きないからこそ、聖剣であり伝説なのではないか。魔王の首を取る前に、故障や刃こぼれで何度もメンテナンスが必要になるならば、それはもはや聖剣ではない。聖剣に似た類似品と言っていいだろう。

「カオリ、真に受けるな。聖剣が故障など聞いたこともない」

カルピスと氷が入ったグラスを手に、黒い魔王が参上した。カラカラカラカラと盛んにマドラーでかき混ぜながら台所からやってく

る。魔王が言うには、氷が溶けるのを視野に入れて濃い目に注ぐのが、最後までおいしく味わうコツなのだそうだ。なるほどなるほど。少なくともこの状況でする話ではないことはわかる。

「俺が嘘を言っているとでも？　ではなぜ剣は黙したままなのだ！」

勇者が布を掴んで剥がすと、古びた、けれど息を呑むほど精巧な細工が施されたひと振りの剣が現れた。刃の厚みは薄く繊細で、眩しいほどの光を放つ甲冑に比べると輝きは鈍い。が、時を経た重みを感じさせる老練かつ厳かな佇まいが、例えようもない神聖さを醸し出していた。

管轄内魔王としての本能だろうか、顕になった聖剣を前に、黒い魔王は眉をしかめる程度の反応に留まったが、黄金の方は忌まわしそうに顔を背けていた。自分の命を脅かす存在そのものなのだから無理もない。

「故障のようにはとても見えませんけど」

「見た目はな」

勇者はおもむろに柄を握り、すっと天に捧ぐように頭上に掲げた。

「我に光あれ」

唱えた勇者は、剣に何の反応もないことを確かめると、大きく息をついてそれを下ろした。

「通常こうすると刃全体が輝きを放つのだが、この通りだ。まるで手応えがない」

本来ライトセーバーのように光る仕様であるらしい。いかにもファンタジックな様を拝んでみたかったので私は少し残念に思った。何せもう二度とお目にかかれないかも知れない、５０年に一度の薬師如来坐像の御開帳といった代物である。故障という疑いをかけられて、急速に暴落しかけてはいるものの、その価値は計り知れない。つい、そわそわと好奇の目を向けてしまう。

「ちょっとだけ持ってみてもいいですか」

そう口に出した途端、横槍が入った。

「カオリ、そのようないかがわしき得物に触れるなど」

「さっき私に妖刀預けた人が何を……」
あれは由緒ある徳川のなんとか、と魔王はマドラーを手にぶつぶつ言っていたようだが、意外にも勇者が丁重に扱えといいながらあっさり聖剣を寄越したので、私は手のひらをTシャツで拭ってから恐る恐る握った。
「わっ軽い」
驚くほど重みがない。最初に聞いた、勇者でなければ手にすることもできないという大前提が塵となって消えていくほどの軽さだ。おもちゃの剣を振るっているような気になってしまう。この扱いやすさは、喜ばしいというより不自然だ。聖剣としての稀少性を考えるなら、勇者以外がたやすく扱えるようでは塩梅が悪い。
軽いとは言っても剣には違いない。そのまま振り回すわけにもいかないので、私は軽い気持ちで、それこそ特撮ヒーローを真似る子供のように、先ほどの勇者と同じく剣を上に掲げた。
「我に光あれー」
突如、剣が唸るように震え、あたりに眩い光が満ちた。その雷のごとき閃光の中「目があー」と黄金の呻き声がした。眩しさに瞑った目を開くと、聖剣は神々しい姿を晒していた。光っている。見事に光り輝いている。夜であれば、さぞや多くの虫が寄ってくるであろう。その後、数十秒にわたり輝きを振りまいた聖剣は、やがて線香花火にも似た儚さをもって消えた。
光とともに物音すら消えたのか、沈黙が訪れた。
聖剣は私の手の内で再び眠りについている。私は先ほど光を放ったそれに釘づけになっていたのだが、魔王や勇者は違うものを注視していた。剣ではなく、それを手にしている者を。つまり私だ。刺さるほどの視線を全身に感じる。
「剣が……応えた……」
「カオリ……まさかそなた」
「いやいやいやないないそれはない」
呆然とした勇者と動揺に揺れる魔王を前に、私は顔だの手だの、

とにかく振れるところは全て振って否定した。しかし二人の目の色はありありと語っている。お前が、お前が勇者なのかと。ちなみに黄金は一人、両目を押さえたままソファに隠れるようにうずくまっていた。さすがは伝説の剣、光るだけで管轄の魔王にダメージを加えるとは。

「家臣が主に牙を剥くとはな……身の内を食い破られる思いぞ」

魔王は鋭い眼光で私を見据えながらも、自らの胸ぐらをかきむしり苦しげな息を吐いた。

「だから違うって」

「そなたが余の明智光秀となるか……敵は本能寺にあり……！」

「意外と日本史詳しいですね」

一体どこでそういうのを覚えてくるんだ。

感心するのも束の間、警戒も顕に後ずさる魔王の姿が目に入った。だからそうじゃなくて！　と慌てて二歩ほど詰め寄る。参謀の地位に見合うだけの働きとは言い難いものの、それなりに忠誠を尽くしてきたというのに裏切りの汚名をきせられるとは心外だ。

「勇者になる気もないし、明智になる気もないですってほんとに」

「だが剣はそなたを選んだ」

見下ろす魔王の目つきは疑わしい。腹立たしくなって、私はつい両手でローブを掴んだ。

「なんですかなんですか！　私よりどこの馬の骨ともつかない聖剣を信じるっていうんですか！」

「む。そういうわけではないが」

魔王は決まり悪そうに目を眇めた。

「そもそも魔王は瞬時に勇者を見抜く的なこと言ってたくせに」

勇者を判断するは見た目ではなく血であると、キメ顔で語っていたのは他でもなく魔王自身だ。ローブごと揺すってそう詰ると、魔王は睫毛をはためかせて一度瞬きを見せた。それから感じ入ったように大きく一度頷いた。

「然り。そなたから勇者の波動は微塵も感じぬ」

「でしょう!?　勇者さんが言うようにきっと故障に違いないですよ、これ」

ほら、と私はこともあろうに勢いにまかせて聖剣を押し付け、魔王は魔王で軽はずみにもそれを掴んだ。

「ほほう、羽の如き軽さ」

魔王は感嘆し、無造作に得物を構えた。区画が違うせいだろうか、剣にも魔王にも互いを拒むような気配はない。おかげで聖剣を振るう魔王という盛大な違和感がここに誕生した。

感触を確かめるように二度ほど持ち替え、意匠や刃先などをしげしげと観察していた魔王は、誰に言われるでもなく自然な動作で剣を頭上にかざした。そしてさらりと例の語句を。

「我に光あれ」

光った。聖剣は私の時と同様に一切躊躇なく強烈な輝きを放った。黒く禍々しい魔王の個性など一顧だにしない、文句なしの光量である。

「光った……」

「光りましたね……」

聖なる光の安売りにリビングはざわついた。

再び目を痛めつけられたらしき黄金は、お前らふざけんなと目を覆いながら憤っていたが、私たちはそれに構う余裕はなかった。

いま、起こってはいけないことが起こってしまったのではないか。

どう見ても人選ミスにも関わらず聖剣は応えてみせたのである。伝説の剣のご乱心。なんらかの影響で、勇者とそうでない者をもはや認識できなくなったとしか思えない。

勇者もそう考えたようで、魔王から聖剣を奪い同じように掲げてみせた。が、さっきまでビカビカと景気よく輝いていた剣は嘘のように沈黙し、何の変化も見られない。おや？　と私達が首をかしげている中、肩を落とした勇者が苦悶に満ちた声で呻いた。

「なぜだ……」

勇者が手離した聖剣を拾い、念のためもう一度同じことを試して

みる。私も魔王も、剣は光った。
「なぜだ……？」
その時たまたま家にやってきた郵便配達（男性：働き盛り４５才）の人にも持たせてみた。光った。
「なぜだ！！？」
テーブルが勇者の拳に打たれ、カルピスの水面が揺れた。
もはや、誰が持てば光るか、という問題ではない。誰であっても大体光る。おそらく三枝さんに持たせても光るだろうし、チワワの菊枝に持たせても光るかも知れない。ただひとり、勇者を除いて。
誰彼構わず無差別に委ねているように見えて、その実、勇者だけを聖剣は弾いている。
勇者の頭からつま先まで値踏みするように眺めた魔王は、ふんと鼻を鳴らした。
「見たところ、勇者の地位は剥奪されてはおらぬ」
勇者は勇者のまま、けれど聖剣は応えない。故障かと思えば、勇者以外には大サービスで光り輝いて見せる。
ああ、これは完全に。
「あてつけであろうな」
これまで尊重され、神聖視され、数々の勇者とともに死線をくぐり抜けてきた伝説の聖剣様である。その辺の無機物とは違い、気位もプライドも高くそびえているだろう。物言わぬだけで、電車に置き去りにされたことを相当根に持っているのではないか。
魔王は容赦ない口調で続けた。
「引き取りに来たからといって一時でもぞんざいにされた禍根は残る。縁を切らぬまでも、何か報復をしてやらねば気がすまないといったところか」
かろうじて関係は続いているものの、話しかけても返事が返らない程度にはこじれているわけだ。例えるならば溝の深くなったカップル。よほど彼氏、いや勇者が挽回しなければ破綻は近い。
「聖剣がへそを曲げるとは今期の勇者はハズレもいいところよな」

ソファの影から顔を出した黄金の魔王が、ひとまたぎで背もたれを越え、投げ出すように体を預けた。どこから出したものか、その顔にはサングラスが装備されている。この短時間でライトセーバー対策を講じるとは伊達に在位が長くない。

「無駄にびかびか光らせやがって……人の目ェ潰す気か」

「あ、サングラス似合いますよ」

「やかましいわ」

憮然とした様子の黄金は卓の上のお茶請けに手を伸ばし、ばりばりと封を破いて食べ始めた。どこか投げやりにも見える粗雑な所作はやけくそといった風情が漂う。彼にとって今日は忘れがたい一日になることだろう。

一方、柄が悪くなってしまった黄金の風体にも気に留めることなく、勇者は呆然と立ち尽くしている。常に剣と心を通わせる一心同体が正しい姿なのだとしたら、今の状態は片手落ちだ。己の半身に裏切られたに等しい。

「そんな……」

声というよりも吐息に近い。勇者はぱくぱくと息苦しそうに口を幾度も開閉し、聖剣を、魔王を、そして私を見た。

「俺は……俺はどうしたらいいのだ」

ふんぞり返っていたお山の大将が一転、捨てられた子犬の瞳で助けを求めている。母性を持つものなら、多少くすぐられてしまうかも知れない。実際、私の内に秘めている良心の最北端あたりが一瞬うずいてしまった。

しかし、これは他でもない彼自身が招いてしまった悲劇なのである。散々黄金や現地の魔王に迷惑をかけてきたのだから、聖剣に関しては己で始末をつけるべきだろう。もういい大人なんだし。落ちぶれかけても勇者は勇者なのだし。

「聖剣に認めてもらえるよう、心を入れ替えて、真面目に一から頑張るしかないんじゃないですか」

まさかこんな下手人を諭す刑事みたいな台詞を勇者に吐く日が来

るなんて思いもしなかった。
勇者は頼りなくしおれさせていた顔をさっと強ばらせた。空の色を含んだ目には、いくらかの期待と大いなる疑念が渦巻いている。
「心を入れ替えるとはいっても、今更別の人間にはなれん」
「まるっきり違う人格になれって言ってるわけじゃなくて、できることからコツコツとですよ。一日一善みたいな感じで」
腑に落ちないのか、勇者は眉間に皺を寄せて首を捻っている。
「例えば、ええと、後片付けをやるとか」
私がテーブルに置かれたいくつものグラスを指差すと、明らかに不満そうな声が返ってきた。
「なんで勇者である俺が」
物言いは実にふてぶてしい。私がもっと気が短いたちなら、この時点で頭突きくらいかましていることだろう。
「ほら！　そういう態度がだめなんですよ！　あとこんなこと言いたくないけど、いくら勇者だなんだっていってもいまは二軍みたいなもんじゃないですか」
別に二軍が悪いとは言わないが。少なくとも一軍落ちという自覚は持っておいたほうがいい。
勇者は何か言いたげに口元を歪めたあと、結局言葉を成すことなく渋々とトレイを手にして食器を下げた。シンクに置くだけで戻って来ようとしたので、グラスを洗うジェスチャーを示して追い返した。
顔中に不本意と書かれた勇者は、のろのろと後始末を終え、私に疑いの眼を向けながら剣を手に取った。やる気のなさそうなかけ声とともに聖剣が掲げられる。
「あっ」
「ちょっと光った」
言うなれば蛍の光。
昼間では見逃してしまいそうなぼんやりとした明かりが刃先に灯った。閃光には程遠く、手応えとしては控えめではあるが、相手に

もされていなかった先ほどを思えば進展と言える。剣をかざしたまま二度ほど瞬いた勇者は、思いつめたような面持ちでゆっくりと腕を下ろした。

「お前の言う通り、俺の心がけ次第ということか……」

「そうみたいですね……」

仄かな光はすでにない。もと通り物言わぬ古びた姿となった剣を、勇者は疲弊したような面差しで眺めた。

とりあえず、魔王を倒すのは後回しである。

まず地道な善行を重ねて徳を重ね、聖剣との仲を修復するのが勇者に課せられた第一の試練だ。単騎で敵陣に乗り込むようなせっかちで派手を好む勇者にはさぞや我慢と忍耐を強いられる地味な作業であることだろう。しかしこれをおろそかにすれば、魔王を討つという本懐を遂げることもままならぬのだから、避けては通れない。

うつむきがちに剣を見下ろしていた勇者はおもむろに天井を仰いだ。だらりと人形のようにぶらさがっている右手は緩やかに開き、聖剣が抜け落ちる。

「やってられるか！」

絨毯が刀身を柔らかく受け止めたのと同時に、勇者が声を上げた。

「光明が見えたとはいえ、先が長すぎる！　魔王を倒す前にじじいになるぞ！　だいたい勇者は悪に鉄槌を食らわす英雄であって、みみっちい奉仕なんぞするべき人間ではない！」

ヒステリックな音が耳をつんざく。そのままわめきながらこちらに向かって踏み込んできたので、胸ぐらでも掴まれるかとつい身構えたが、勇者は眼前でその歩みを止めて椅子に腰を下ろし、髪を乱暴にかき混ぜ始めた。

「ちくしょう、なんでこんなことに」

身から出た錆、の格言を謹んで彼に贈りたい。

私はひとつ咳払いをして、絶望の淵に立つ勇者の注意を引いた。

「今は混乱して考えがまとまらないでしょうし、その、帰ってからゆっくりと身の振り方をですね」

頭かきむしっていた両手が止まる。勇者は抱えていた頭部をのっそりともたげ、ちょうど見下ろす格好になっていた私を薄暗い瞳で見上げた。

「……俺は……戻らんぞ」

え、と思わず荒んだ横顔に目を投じる。彼の頭に添えられていた手が離れ、拳の形を作った。それはすぐに振り下ろされた。

「マリアンヌにも聖剣にも見限られた地に帰りたくなどない！」

拳が叩きつけたのは彼自身の膝だったが、私も一緒に殴られた思いがした。

今、この男は、なんと言った？

「はあ？　なに言って……」

帰りたくない、などという台詞は可憐な女子の口からこぼれてこそ華があるというか魅惑的なワードとして成り立つのであって、アスファルトをもねじ切る脳筋の勇者（仮）から放たれたところで可愛くもなんともないのである。帰って欲しい。一刻も早く帰って欲しい。

そう願っているのは私ばかりではなく、不本意ながら住居をたまり場にされている魔王も同様だ。切れ長の目が剣呑な光を帯びている。

「血迷ったか、はたまた記憶する脳すら持たぬか。ここは貴様にふさわしい地に非ずと余が再三申したはず」

「魔王の息がかかった忌々しい土地でも、恥をさらしに故郷に帰るよりましだ」

居直った勇者が荒々しく鼻から息を吐くと、後ろから黄金が頭を小突いた。押し上げられたサングラスから赤い目が睨む。

「馬鹿言ってんじゃねえぞ。向こうじゃ勇者でも、ここじゃ何の後ろ盾もない甘ったれのクソガキ、いや、住所不定無職だ」

住所不定無職。改めて言葉にすると凄みがある。

しかし勇者は黄金の言葉に耳も貸さず、ソファに浅く腰掛けたまま自信ありげに言葉を発した。

「住むところに関しては、あてがある」
心なしか、勇者の視線が魔王に向いている気がする。
おいおいまさか……
気色ばむ私達の様子を察してか、勇者はひらひらと手を振った。
「いや、魔王の家においてくれとまではいわん」
さすがにそこまで図太くはないか。
安堵したのも束の間、勇者の顔の向きが変わった。勢いよく目が合う。一瞬にして全身に嫌な予感が走った。
「村娘その一」
「いやです」
「まだ何も言ってないぞ」
聞くまでもない。
「言っておきますけど村娘の家に勇者を養う余裕はありませんから」
経済的余裕も心の余裕も、ついでに言うとスペースもない。
彼がもう少し人間として厚みがあり、勇者の称号に恥じない立派な青年であれば、便宜を図ることを考えたかも知れないが、目の前の美丈夫の中身は直進ですべてをなぎ倒す野放しの猪である。なんの義理もない猪の面倒を請け負うなど、礼金を渡されてもまっぴら御免だ。例え札束で頬をぶたれたとしても、まあ、その、ちょっとばかり悩むけど、やっぱり御免だ。
私が冷ややかな顔でぴしゃりと断ると、勇者は転がるように椅子から降り、すがりつく勢いで這いつくばってきた。
「俺とお前の仲ではないか！」
「なんの仲だよ！　悪いけど他人以下だよ！　うちには入れん！　絶対に入れんぞ！」
大黒柱である父の不在時は長女として私が瀬野家を守らねばならぬ。
「置いてくれればなんでもする、家の仕事やそのほか、手足となって働きお前の助けとなろう」
「先に聖剣との関係修復を頑張るべきですよね」

だいたい、と私は台所に目線を投じてから吐き捨てた。
「食器片付けるのも文句垂れるような人が役に立つとは到底思えません」
我が家は勇者の更生施設ではないのである。暇そうに見えるかも知れないが、私も短い青春の真っ只中の色々と忙しい身なので、そうそう人の脇腹ばかり突いてられない。
だが、信念という名の思い込みの強さで勇者となった男はあきらめが悪い。靴裏に張り付くガムより粘り強い特性を発揮し、いくら拒絶しようとも執念深く足首を掴んで離そうとしなかった。これほどめざましいガッツを秘めているなら、別れ間際のみっともない彼氏みたいな真似ではなく勇者として正しい方向に使いたまえよ。
歯を食いしばる顔つきは鬼気迫るものがあり、その表情に恐れをなした私は蹴っ飛ばすようにして振り払った。一旦尻餅をついた勇者は這うように引き返して。
「頼むこの通り！　一生に一度のお願いだ！」
「出たー！　噂の一生に一度！　重みゼロ！」
やはり思った通り安い。そして考えが甘い。一度限り有効のクーポンが何度でも使えると思うなかれ。
諦めの悪い勇者が私の右足をめがけて、尚も手を伸ばそうとしたその時だ。
「控えよ」
ずしりとした緞帳にも似た声がそれを制した。終劇を知らせるように、マントという名の暗幕を引きずり、魔王は勇者の前を横切ってゆく。
「貴様は知らぬようであるから、この際教えてやろう。一度しか言わぬゆえ、その足りぬ頭と塵のつまった耳をしかと開いておけ」
勇者の前を通り過ぎたところで足を止めた魔王はゆっくりと彼に向き直った。放たれる厳粛な空気に、勇者は戸惑いながらも神妙な顔をつくった。
「勇者はこの地に根を下ろすを許されぬ。無論、我々魔王ゆかりの

地であるゆえではあるが、それだけではない」
私の視界には肩が見えるのみで、魔王の顔色まではうかがえない。夜を溶かしたような低い声だけが耳に届く。
「この土地に長らく住み着き、守護するもの……畏怖と尊厳を兼ね備えた、もはやこの土地の意思そのものと言っても良いかもしれぬ……その神にも似た存在が、集落全体を掌握しておるのだ」
少しの間を置いて、魔王は言った。

「その名を……這いずりさんと呼ぶ」

「ブッホ」
むせた。
「そうだな、カオリ」
間髪入れずに魔王が私を振り返る。それは悪ふざけとはまるで無縁な真面目な顔だった。この世の底を思わせる深い目の色が、私に向かって静かに雄弁に語りかけている。
「な、なんだその這いずりさんというのは」
たじろいだ勇者の顔には、困惑と動揺がありありと浮かんでいる。それを見て、私は魔王の言わんとしていることを察した。むせている場合ではない。乱れた呼吸を嚥下して、短く息を吸い込んだ。
「……我々は這いずりさんに監視されています」
我ながら絶妙に不気味な声が出た。
「這いずりさんには逆らうべからず、這いずりさんには何人も抗う術持たず……贄として目をつけられたが最期、どこまでも追い詰められ、最後には世の果まで引きずり込まれるのです」
いつか祖母が私を脅かしつけたのと同様、吐息はおどろおどろしく、顔面には不吉をのせて、私は死神のように勇者に迫った。
「何を、ば、馬鹿なことを」
対峙する声音が震え、怯えに染まってゆくのを確認して、私は一歩また勇者に近づく。

「いいですか、這いずりさんは水田から現れ、どろどろに溶けた体を引きずって迎えに来るんです。道連れにする生贄を求めてずるりずるりと。そして這いずりさんが好んで引きずり込む生贄は、」

一層低い声で囁いた。

「夜寝ない子と、畑を荒らす勇者です」

眼前の男が顔色を失くした。

「好物はセミと勇者の目玉ぞ」

魔王による追撃の一言は、完全に悪ノリといって差し支えなかろう。秘められていた邪悪性がようやくせこい形で牙を剥いたといったところか。私はそれを耳にしながら、頭の片隅でぼんやりと思っていた。

ああ、大人になってしまった。

這いずりさんが身内らの作り話であると気づいた時分、子供のピュアさにつけこんでひどい、大人って汚いよ、と怒りで拳をかためたというのに、気がつけば自分もそっくり同じ、汚いとされるその手段を用いている。騙される側から騙す側へ、戒められる立場から戒める立場へ。知らず悪事に加担したような、成長の引き替えに純粋さを喪失したような、物寂しい心地である。人の業というものを身に刻みながら、今日私はひとつ大人の階段をのぼった。

魔王にたぶらかされた勇者は怯えた表情のまま凍りついている。

彼は聖剣に選ばれ、神殿が屈するほど思い込みの強さを誇るが、嘘を見破る才は絶望的だ。その特異とも言える、信じたものを疑わない一途かつ頑なな気質は、恐れを植え付けるのに向いている。

私が幼少期の自分を裏切ってまで与えた畏怖と不安を、水分を含む高野豆腐のように、しっかりと身に吸い上げたことだろう。すでに頭の中では這いずりさんでいっぱいに違いない。想像力の限りを尽くした凄まじい姿の這いずりさんが跳梁跋扈しているに違いない。

いつかの私がそうだったように。
嘘っぱちだと見抜いているはずの黄金は、途中一度も口を挟むことはなかった。ただわざとらしく整えられた神妙さで私たちの作り話に頷いていた。それがいよいよ場に説得力を持たせ、覆いかぶさるように沈黙が重たく垂れこめてゆくのを手伝った。

魔王家のリビングの窓は道路に面しており、私の位置からは庭先の様子がよく見える。
その風景に見覚えのある車が一台滑り込み、魔王の家の前に停車した。ほどなく、蝉の声とは種類の違う妙な音が混じって聞こえてきた。
ずるり……
ずるり……
重い何かを引きずるような地面の摩擦音。
外の様子を目にしていた私と魔王は、その正体について当然承知していたが、窓に背を向けている勇者の耳にはもっと別の想像をかきたてる物音として響いただろう。例えば、頭の中を支配しているおぞましい何かが地を這う音であるとか。
物音は緩慢かつ確実に接近し、やがて玄関付近でぱたりとやんだ。乾ききった唇を開いた勇者が短く息を飲むのも待たず、インターホンが何者かの来訪を告げた。

そこからの展開は早かった。

まずインターホンの音にひっくり返った勇者がそのままゴムマリのように窓まで転がり、逃亡を図って閉まっているガラス窓に顔面から激突した。しかし混乱の勢い衰えず、鼻血を出しながらテーブルの下にもぐったりカーテンに巻きついて身を隠したりと大の大人としては醜態と言えるレベルの取り乱し方を見せ、黄金のマントに潜り込もうとまでしていた。

そうこうしている間にインターホンは再び鳴り、飛び上がった勇者が「帰る帰るマジで帰る」と叫びながらまたも窓に体当たりし始めたので、この機を逃すまいと「早く帰らねば目玉をしゃぶられるぞ」などと一層の脅し文句で緊迫感をデコレーションしつつ、私達は台所の奥にある裏口へと勇者を手引きした。裏口を開けるが早いか、勇者は飛び出した。先ほどの帰らない宣言がゆめまぼろしに思えるほどのスピードで駆けていった。そのあとを遅れて黄金も追っていったが、裏口付近で「この借りはいつか」とか「通販頼むな」とか魔王同士手短に挨拶を済ませる様は、発車間近の乗客と見送る側といった駅のホームでのやり取りに似て、威厳も何もあったものではなく、妙に気ぜわしかった。そして別れもそこそこに魔王も消えていった。時間で言えば、一分にも満たない出来事だった。

客は去った。町の平和を脅かし、猛威を振るった台風は去った。取り戻した日常を祝福するように三度目のインターホンが鳴る。玄関ドアの向こうには、精米された米袋を引きずった母の姿があることだろう。

魔王はゆっくりと裏口の扉を閉め、厳重に施錠した。

どちらともなく目を合わせ、互いの健闘を称えるように無言で頷きあった私たちは、母を出迎えるべく玄関へと向かった。足取りは長い戦を終えた老兵のそれであった。

老兵に戦う気力はもう残っていない。

それゆえ、リビングの一角に残された勇者の甲冑一式については見なかったことにした。

後始末の巻

夏場は冷凍庫の陣地争いが最も白熱する季節である。

アイスクリームや保冷剤等、この時期欠かせないアイテムが幅を利かせるのはもちろん、計画性なく買い込まれた冷蔵食品が傷みやすいからという理由で移民のごとく大量になだれ込み、領土を圧迫するせいだ。もとより余裕のない庫内はいよいよ狭苦しさにあえぐことになる。

それでも冷凍庫は昨日まで、私と祖母による、並べて重ねて無理矢理に押し込むテクニックで、なんとか凌いでいた。一度動かせば二度と再現できないパズルのような危うい完成度で成り立っていた。

だが本日、そのパズルは無邪気にも冷凍うどんを持ち込むという母の蛮行を前にもろくも崩れ去った。すでに満員御礼で、タタミイワシですら滑り込む余地などないのである。入るわけがない。入るわけがない。なんでどうして五食入り。

いくら手を尽くそうとも、限界というものがある。

結果としてアイスキャンデー二本が弾き出された。

私は途方に暮れた。

まさかこうなるとは思ってもいなかったので、先ほど食後のデザートとしてカップのアイスを平らげたばかりだ。いくら暑くても、いかにも冷え冷えとしたそれを二つ一つぺんに腹に入れるのは抵抗がある。とはいえ、このまま見殺しにするのも忍びない。

行き場をなくしたアイスを両手にぶらさげて彷徨い歩いていると、外の様子が目に留まった。季節感を無視した黒い塊が蠢いているのが窓から見える。

私はアイスを携えて慌ただしく玄関を出た。

魔王は庭に君臨し、悪い魔法でも施すような面持ちで水を撒いていた。声をかけると、持ったホースごと振り向いたので危うく水責めの洗礼を受けるところだった。

「ちょっ、水とめてください」

体をひねりながら訴えると、魔王は、はいはい、とでもいうような薄いリアクションを示し、特に急ぐでもなく水を止めた。急いでいるのは私の方だ。

「魔王さんアイス食べませんか食べましょう」

返事を待たず、押し付けるにも似た強引さで魔王にアイスを渡した。熱気にあてられ、早くも溶け始めているのが袋の上からもわかる。魔王はそれを指でつまみあげ、しげしげとパッケージを眺めた。

「氷菓子か」

「三時のおやつです」

「ふん。そなたにしては気が利いている」

魔王の肉体は暑さ寒さを受け付けないと聞いた。その割りに麦茶や風鈴といった風物詩は好んで取り入れているように見える。気温の移り変わりに左右されない分、視覚や味覚で四季を感じることに貪欲なのかも知れない。

盛りの時間を過ぎたとはいえ、暑さは依然として容赦がない。悠長にしていたら、あっと言う間に溶け落ちてしまう。かろうじて見つけた日陰に腰を下ろした私たちは、その場でアイスの封を切って食べ始めた。

表面こそしんなりとしていたが、芯の方には十分な歯応えが残っている。柔らかくなってしまっては本来の味わいを楽しめない。思い切りソーダ味に歯を立てる。そのままガリゴリと噛み砕くと、頭痛を招きそうな清涼感が突き抜けていった。

夏だなあ。

こうして日差しから逃げつつ涼を堪能していると、暦の上ではすでに晩夏とは信じがたい。次の季節の気配はまだ遠く、夏の隆盛は

まだまだ続くように思える。
　修行僧のように無心でかぶりついたせいか、私のアイスはあっと言う間に半分になった。対して魔王の方はというと、減ってはいるもののあまり進んではいない様子だ。溶け出した雫が滴り落ちるのも構わず、親の仇のごとき眼差しで件の品を見つめている。魔王の冷凍庫にアイスがあったのを覚えていたので当然食べるだろうと決め付けていたのたが、思い返してみれば入っていたのはバニラなどのクリームタイプのものばかりだったような気がする。もしかしてこの類の食感は不得手だったのだろうか。
「口に合いませんでしたか」
「そうではない」
　眉間に皺を刻んだ横顔が青々とした色の氷菓を食む。
「噛みしめるたび亡者の断末魔が響くのだ」
　歯を立てるやいなや、魔王は忌々しげに手のひらを頬に当てた。表情としては乏しいが、痛みに耐えているのだと仕草でわかる。

「あ、知ってますそれ。知覚過敏っていうんですよ」
「……チカク、カビーン……？」
「なんで急に日本語が不自由に」
　今までの流暢な喋りはどこに行ったのか。
「なんか冷たいものがしみるっていう歯茎の病気……とかなんとか」
　曖昧に答えながらアイスキャンデーに噛み付いた。砕かれた氷の粒が口の中に凍てついた冬を運ぶ。最後の一口を放り込んで隣を伺うと、まだ魔王は半分以上残っているアイスを一口ずつ慎重に食べ進めていた。ゆっくりと咀嚼してから、怪訝そうに私を睨めつける。
「脆弱なる人の子の病など患うわけがなかろう」
「なかろうも何も現にキーンと来ちゃってるじゃないですか」
　魔王は何か言いかけたようだが、その拍子に奥歯で噛んでしまったらしく口を閉ざした。しばし黙り込んだのち、重い声を吐き出す。
「……人の病に苛まれるはずもないが、厄を被れば障りが出るのは

魔の血筋とて同じこと。翼が摩耗する者もあれば、その肌に煩いがあらわれる者もある。余の場合はそれがたまたま歯であったに過ぎぬ」

見た目ではわからないが、どうやら魔王は不調のようだ。

「歯、弱いんですか」

「弱いというほどではない」

「あ、だから八重歯が」

「黙らぬか。これは牙である」

「ふご」

八重歯呼びは禁句であるらしい。すかさず飛んできた手のひらに口止めを強いられてしまった。私としては八重歯の通称は親しみやすくてなかなか可愛らしいと思う。しかしそんなことを言った日には発言どころか息の根も止められかねないので大人しく従った。

魔王の歯に痛恨の一撃を食らわせ続けていたアイスはじきになくなった。溶けたのではなく全部魔王の腹におさまった。

食べている間ずっと地雷を探るような緊張感をみなぎらせていたので、そんな無理しなくてもと口を挟んだのだが、天地までも屠らんとする魔の王が氷菓ごとき、などと壮大な言を吐きながら懸命に噛み砕いていた。私はその鬼気迫る形相にやや恐れをなしながらも、悪いことをしたなと思った。

「馳走になった」

「いえ」

むしろダメージを与えるだけの行為になってしまったことを心からお詫びいたします。

「礼をせねばならぬな」

「そんな大げさな、たかがアイスの一本や二本」

そもそも処理に困って押し付けたに過ぎないのである。しかも痛めつけるだけの結果となった今、後ろめたさが加速する。だから一応、お構いなく、という意思は伝えた。しかし時々魔王は人の話を

すまし顔でスルーするところがあり、今回も例にもれずスルーされたようだった。
「そなたに褒美をとらせよう」
「褒美！？」
アイスの見返りに出る話じゃない。目を剥く私を見下ろしながら、魔王は大仰にローブを揺らして波を立てた。
「先日の勤めに見合う褒章もまだであろう」
「先日……ああ、あの勇者の」
思わず目が遠くなる。この夏一番の、心のアルバムに貼りたくない思い出である。あれは大変だった。本当に大変だった。あのトラブルメーカーを追い返す為にかなり頑張ったといえよう。しかし最も頑張っていたのは、黄金の魔王だった気がする。
「よくぞ片腕としての役を果たした。今こそ働きにふさわしい代物を与えん」
「な、何をいただけるんで」
思わず喉を鳴らす。期待もないわけではないが、相手が相手なだけに不安も大きい。
「そうそう手に入らぬ、世にも珍重な品ぞ」
「そんな珍しいものを？　いいんですか？」
「かまわぬ。余が持つべき品ではない」
一瞬魔王の表情に陰りが見えた。どこか倦んだような力のない眼差し。しかしそれはすぐに失せ、再びいつもの冷然とした容貌に戻る。
私はその態度に引っ掛かりを覚えたが、魔王はそれを覆い隠すかのように距離を詰めて迫った。
「カオリ、いつかそなたは無用心にも軽装で夜道を闊歩していたな」
「え？　はい」
「あの時申しておっただろう」
「はあ」
「鎧の類は所持しておらぬと」

私は脱兎の如くに逃げ出した。閃きが逃げろと私に告げたからだ。悪い予感がする嫌な予感がする！

魔王が寄越そうとしているのは多分、きっと、

「何故逃げる」

「ギャー！」

閉めた扉にもたれかかる暇もなく低い声が襲いかかる。施錠は間に合わず、追いかけてきた魔王にドアを開けられてしまったが、寸前で施したドアチェーンに救われた。魔王直伝のドアチェーン戦法が魔王自身を阻むとはなんとも皮肉ではある。

「カオリ」

「ひい」

隙間から覗く瞳が禍々しく光る。

「戒めを解け」

「い、いやです」

「楯突くつもりか、面白い。己の身が可愛くないと見える」

邪悪に口元を歪ませ、開けろ開けろと魔王はわずか開いたドアをガタガタと揺らした。半分だけ晒された闇に染まる凶相も相まって、身の毛もよだつ光景である。

私は扉を押さえながら、音楽の授業で繰り返し聴かされたシューベルトの『魔王』を思い出していた。

お父さんお父さん！　魔王がいるよ！　僕をつかんでつれていくよ！

絶望的な旋律を盛り上げんばかりにドアの軋む音がする。ここにも魔王がいるよ。私をつかもうとしてくるよ。あまつさえドアを破ろうとしているよ。

曲中の坊やもさぞや恐ろしかったことだろう。こんな不吉な魔の化身に背後をぴったりとマークされれば怯え震えるのも無理はない。

「このような板切れ、吹き飛ばすは造作もないこと」

脅し文句とはいえぎょっとする。家が半壊しかねない。私は扉に

かけた手に力を込めた。
「そんな手荒な真似したらあっと言う間に知れ渡りますよ。村八分になりたいんですか」
魔王がわずか怯んだ。機を逃すまいとしてすかさず畳み掛ける。
「田舎の噂はそりゃもう早いんです。速達どころじゃない」
ましてや悪い噂ならば音速を超える。
「カオリそなた、主を脅迫するつもりか」
「どっちが先に脅してきたと思って、」
「見苦しい。先だ後だと論じるは無駄の極みよ」
勝手な人だな！
「そもそもこのような暴挙に出たのか解せぬ」
切れ長の目が眇められると同時に、扉越しにため息が吐かれた。
「何を思い違いをして吠え騒いでいるか知らぬが、早合点も甚だしい。わざわざ臣下に害をなす主人がどこにあろうか」
呆れ果てた声だがそこに偽りは感じられない。私はおそるおそる隙間を覗き込んで魔王の顔色を伺った。
「厄介事、押し付けようとしてません？」
たわけたことを、と応じた魔王はそのまま続けた。
「甲冑をそなたに贈ろうというだけだ」
「やっぱりね！！」
なんら思い違いでも早合点でもない。そう来るだろうと察したからこそ逃げたのであり、結果として私の第六感は正しかったのである。
「甲冑ってあれですよね絶対、ていうかあれ以外にないですよね？」
然様である、とばかりに魔王は悪びれもせずに頷いた。
「つつしんでお断りいたします」
「なにゆえ拒む」
「逆になんで拒まないと思うんですか」
魔王が熱心に私に譲り渡そうとしているのは、言うまでもなく先日勇者が置き去りにしていった甲冑一式である。それなりに貴重で

はあるものの、その価値は唯一無二の聖剣には遠く及ばず、あれから特に勇者側から連絡が来るわけでも引き取り手が現れるわけでもなく、そのままリビングに放置されているらしい。

魔王が暮らす邸宅は外装内装ともに平均的な日本のお宅といった風情の為、甲冑がもたらす違和感たるや相当なものだろう。場違いな個性で楚々とした他インテリアを圧倒しているに違いない。しかしそれは我が家に持ち込まれたとしても同じことである。いらない。

「甲冑なんてもらっても困ります」

「よいかカオリ、年頃の娘を狙う不届き者はいつ現れるか知れぬ。出歩く際に欠かさず着用すれば、そのような輩から少しは身を守れよう」

田舎道をガッシャガッシャと音を立てて徘徊する甲冑の姿を脳裏に思い描く。うん。うんうん。身を守る以前に私が不届きな輩として通報されるなこれは。

「いやいや」

大きく頭を振る。

「無理、絶対無理。だいたいあんなでかい置物受け入れるだけの場所ありません！　そっちの方が断然スペースに余裕あるじゃないですか。魔王さん一人住まいだし」

魔王宅と我が家は広さだけでいえばさしたる差はないが、家族の数が違う。暮らしている人が多ければ比例して物は増え、しかも処分もままならず、よくわからないものがよくわからないまま自由に溢れている。おかげで父の書斎はすでに物置だ。甲冑など持ち込んでる場合ではない。

「余をなんと心得るか。闇を統べる魔王であるぞ」

チェーン越しに見える冷徹な美貌がぐっと近づいた。

「その中枢である住処に、どうして忌まわしき勇者の装備品なぞ飾れようか」

管轄違いとはいえ勇者と魔王。言われてみれば確かに一番あるべき場所ではない。

「やっぱり勇者にまつわるものは置いてあるだけで何かダメージが？」

「あのような抜け殻などに脅かされる何ものもないが、目障りでかなわぬ」

実害はないけど視覚的になんかやだ、というわけだ。

自宅の居間にある以上、普通に過ごしていればどうしても目に触れる。微々たる不快感でも、積み重なればストレスになるだろう。

もしかしなくても魔王の不調の原因はこれか。

受け持ちではない勇者に翻弄される魔王を気の毒と思いはすれども、冷麦とはわけが違う。軽い気持ちで引き取りましょうとは安請け合いはできない。

来れば厄介、去っても迷惑。勇者よ、お前はどこまで面倒な奴なんだ。

「いっそ捨ててしまえば……」

ついそんなことを口走った私に、魔王の面持ちは厳しい。

「そなた何も知らぬのか」

ならば教えてやろう。

薄い唇が厳かに開いてゆく。

「粗大な屑物の廃棄……無償に非ず」

そう告げた魔王の顔があまりに神妙だったので、私もつられて「ほほう……」と同等の重々しさで応えた。天地を屠ると豪語していた割にはスケールが小さいような気はしないでもない。が、それよりも魔王の成長に感慨深さを覚えてしまう。段ボールの分別でつまづいていたというのに、よくぞ粗大ごみの処分まで到達したものよ。

「それゆえ、カオリ」

「ＮＯ」

気を緩めた瞬間に話題の矛先が変わった。続くであろう言葉を察して即座に遮断する。うちはだめだめ無理無理と魔王の顔をまっすぐ見ながら何度も首を横に振った。

「勇者の祟りとかあったらやですもん」

「あれにそのような力などあるものか。夜更けに時折不審な動きを見せる程度よ」
余計いらねえ！
いよいよ引き取るわけにはいかなくなった。

「どこからどう見ても邪魔ですねえ」
甲冑はあの日と変わらず部屋の隅に脱ぎ散らかれ放置されていた。艶やかな細工も勇壮な意匠も厄介者となった今、どこか虚しい。私の隣に立ち、同様に甲冑を見下ろしていた魔王は、いっそ獄炎にくべてやろうかと恨みがましく呟いていた。
あれから私は頑なに断り続け、折れる気配がないと悟った魔王もやがて諦めた。それまでがゴリ押しとも言える強引さだったので「断念しよう」という素直な魔王の言葉を信じきれず、本当に？　本当に？　隙を見せた途端甲冑が運ばれてきたりしない？　などと何度も聞き返しては念を押しに押したため、しつこいと怒られた。
めでたくも魔王による押し売り計画は破綻したわけだが、話はそこで終わらなかった。私が断ったせいで宙に浮いた甲冑の処遇についてである。
魔王にも我慢の限界というものがあり、うまく押し付けられなかったとしても、これ以上家に置く気はなかったらしい。私の立場は一応、参謀ということになっている。特に給金は頂いていなくともその肩書きはしっかりと生きており、引き取らないのであれば代わりに手立てを考えろ、という主のお触れに従って私は魔王城に舞い戻ることとなった。

「そなた、誰ぞ心当たりはないか」
銀色の表面をカツカツと爪で弾りながら、魔王は白い面をこちらに向けた。
「なにがです」

「卑しくも鎧兜の蒐集に明け暮れているような輩よ」
そんな都合の良い知り合いはいない。
心当たりはないことを告げると、魔王は鼻白んだ様子で再び甲冑に向き合った。
改めて室内を見回すと、本当に甲冑だけが異物としてくっきりと浮いている。初っ端から世界観を狂わせている家主については言いだしたらキリがないのでこの際目をつぶるとして、落ち着いた佇まいの空間に西洋の鎧一式が死骸のように捨て置かれている様は、やはり唐突で、刺身にデミグラスソースを垂らしたような不自然さである。和洋折衷の衝突事故だ。
二人並んで甲冑を睨んでいても埒が明かない。魔王から一歩下がってなんとはなしに目線を泳がせていると、視界の隅に見覚えのあるものを見つけた。棚の上に無造作に置かれている。回覧板だ。確か一昨日届けたはず、と思い起こしながら手に取った。
「まだ回してないんですね」
失念していたのか、振り返った魔王は回覧板を目にしてひとつ瞬きを見せた。陶芸教室だのゆるキャラ募集だの書かれたぺらぺらの用紙をめくってから閉じる。
「まあ特に大したこと書いてないから大丈夫か」
今回に限らず大したことが書いてあったためしはない。回覧板を魔王の手に渡す。
「伝達を滞らせるとは不覚。のちに必ずや、」
言いかけて、何か気がついたように魔王は途中で言葉を切った。
「魔王さん？」
私の呼びかけに応えてかそれとも己の閃きに感じ入ってか、魔王は二度頷いた。一度目は短く、二度目はゆっくりと。その後に発せられた声は確信に満ちていた。
「カオリ、サエグサだ」
「は？」
「サエグサの老いぼれに委ねる」

「三枝さん？　な、なんで？」
　魔王は冷淡な眼のまま口角を少し持ち上げるという悪役を極めたような顔つきで言い放った。
「あの死にぞこないが申しておったではないか、困ったことがあれば何でも言えと。その誓い、今こそ果たしてもらおうぞ」
　魔王の前で下手なことを言ってはならないと心に刻んだ瞬間である。言ったが最後、誓いや契約といったヘヴィーさを振りかざしてこちらを追い詰めてくるであろう。
　完全にその気になってしまった八重歯の王を止める術はない。というか、先ほど手一杯抵抗したので、すでに私の気力は尽きていたのだ。決して、標的が三枝家に移ったからといって安堵して手を抜いているわけではない。ただ、三枝さんのお宅は魔王や我が家よりも敷地は広いし土地は余っているし、まあ良いではないか良いではないかという考えがよぎったのは事実である。
　行き先も定まり、さっさと出向くかと思いきや、魔王は甲冑の前に再び陣取り、考え込むような仕草を見せた。行かないんですか、と私が後ろから覗き込むと、魔王は振り向くことなく、むう、と唸るような返事を返した。
「そなたなら如何にして持ち運ぶ」
　魔王の指は鈍い銀色の塊にまっすぐ向けられていた。
「え、いきなり持っていくんですか」
　交渉成立する前に？
「一度応じたとしても人は移り気なもの。いつ反故にすると言い出すか知れぬ。気が変わらぬ内に置いて帰るが上策よ」
「悪徳業者みたいですね」
　すでに瀬野家で失敗している分、妙に慎重になっている。
　やり口はともかく、まず甲冑を確認してもらうことについては賛成だ。引き取ってもらうならば、言葉で説明するよりも実物を見せるのが最も手っ取り早い。
　足元に転がっている腕の装甲を、私は戯れに持ち上げた。ずしり

とした重量感がある。
「うお、結構重いですよ」
魔王の手が横から伸びて、あっさりと奪っていった。
「貧弱な。この程度重い内に入らぬ」
私が両手で抱えていたそれを、魔王は紙風船でも扱うように片手で弄ぶ。
「それよりもこの形状よ」
魔王の顎で示した先には、持ち主に見放され統率を失った頭部や脚の部品が床に散らばっている。ばらばらに壊れた超合金のようだ。身を守る防具にふさわしく、いずれもどっしりと重厚でそれなりの大きさを誇る。ひとつにまとめようにも甲冑がおさまるサイズの紙袋などあるはずもなく、持ち運びには難儀しそうだ。
「着てしまえば運ぶ手間も省けますけどね」
深く考えることなく私は見たままの感想を述べた。
「……然り」
思いがけず同意が返ってくる。意外に感じて見上げると、魔王もまた視線を私に寄越した。

「サエグサ、邪魔するぞ」
この炎天下の中、三枝さんは庭の草むしりに精を出していた。私たちの姿に気づくと、麦わら帽子を持ち上げて笑った。
「お う誰かと思えば」
汚れた軍手を脱ぎながら三枝さんは来客を気さくに出迎える。
「暑かったろ、なんか飲んでけ。兄ちゃんと、えーと……？」
「夏織です」
三枝さんは面食らったように目を丸くした。
無理もない。この姿を見て看破できる方が奇跡といえよう。
今の私はほぼ勇者である。誰の目から見ても西洋の騎士である。
ふらりと現れた頑強な鎧兜である。吾輩は甲冑である。もらい手は

まだない。
　軽い気持ちで発した甲冑を着るという案が思いがけず採用されたものの、着用するのは魔王ではなかった。魔王は甲冑のパーツを拾い集めたかと思うと、子供に着替えをさせる母のごとき手早さでそれを私に着せていったのだ。抵抗の暇も余裕もなかった。何しろ重い。過度な動きは封じられる。
　何故私が犠牲になったのかというと「余では身の丈が釣り合わぬ」だそうである。勇者と魔王の体格の差を思い返せば尤もな主張ではあるが、勇者と私にもまた体格の差は存在する。なんとか着たものの、いわゆる服に着られている格好になった。それでも魔王は満足げで、「なかなか似合うておるではないか」などと珍しくもお褒めの言葉まで飛び出したのだが、一切の私の外見的要素が隠れている状態で評価されても喜ぶに喜べず、不格好な置物として佇むしかなかった。

「夏織ちゃんかァ……いやたまげた」
　三枝さんはいささか呆然とした様子で、首にかけたタオルで汗を拭った。
「ちょっと見ない間に女の子は変わっちまうもんだな」
「三枝さんあのね」
「いやいや俺らみたいな年寄りには、最近の若い奴のファッションてやつはわかんねェからよ」
「とりあえず話聞いて」
　これが私服だと思われたら死ぬ。
「サエグサよ、この代物をどう見る」
　前置きなしに、魔王が私の頭部をたんたんと叩きながら三枝さんに切り込んだ。会話に加わるのが遅れたのは、庭に犬の姿がないか確認していたせいである。
　唐突な問いに三枝さんは一瞬きょとんとして、それから首をかしげた。

「どうも何も。立派な鎧兜だとしか思わねえよ」
「立派だと、そう思うか」
繰り返し問われ、三枝さんは訝しげな顔をしながらも、ああ、と頷いた。
世間話としては不自然である。企みに向けて魔王が助走段階に入ったのは明らかだが、私は重さと暑さでかなり弱っており、手も足も口も出す気にはならなかった。むしろ一秒でも早く脱ぎ捨てたかったので、三枝さんが犠牲になる瞬間を待ち望んでいたと言ってもいい。
そうとも知らず、三枝さんは私が身にまとっている甲冑の細工に目を留め、細けえ仕事してんなあ等とのんきに褒め称えていた。蜘蛛の糸に獲物が吸い寄せられてゆく。もうひと押しでその羽を死の糸が絡め取ることだろう。三枝さんすまない。許せ。
身をかがめて防具の隅々まで一通り眺めていた三枝さんは、やがて晴れがましく顔を上げた。
「でも欲しいかって言われたらいらねえな」
蜘蛛の巣、一刀両断。
予期せぬ強烈なカウンターアタックに、私も魔王も二の句が告げない。まさか心を読まれてしまったのだろうか。今日ほどポーカーフェイスに自信がある日はなかったのに。
ならば貴様にくれてやろう、と言い放つ機会を伺っていただろう魔王など、追っていたフリスビーがいきなり消えた犬みたいな顔をしている。
「な、なんで欲しくないの？　欲しいよね？　ちょっとくらいは興味あるよね？」
すがりつく勢いで（実際は微動だにしてないわけだが）そう呼びかけると、私たちの期待をばっさり斬った三枝さんは、同じ調子でばっさりと言った。
「いやいらね。役に立たねえし」
それによ、と親指で家の方を差した。

「うちの犬っこが怖がっちまうだろ」
横の魔王がそれを聞いて小さく身じろぎした。効いている。かなり効いている。無意識に違いないが、三枝さんは魔王を黙らせるに最も強力な一打を放った。
この翁……できる！
敵の攻め手をかわすのみならず先んじて封じるとは。かつてこのあたり一帯で浮名を流し、夜の三冠王の異名をとった男はさすが一味違う。
もはやねじ込む術はなし。潔く負けを認めよう。そもそも大将である魔王が犬の一言に戦意を喪失した時点で、一介の兵卒が奮起する何もない。それはいいとして、またしても甲冑が行き場をなくした今、私はどうしたらいいのだろうか。この甲冑の中の人という立ち位置からいつ抜け出せるのだろうか。せっかくだから着て帰れば、なんて流れになろうものなら、私は魔王の家の前にまきびしを撒く。
「なんだ、なんか困ってんのか？」
私たちの様子に何か感じるものがあったのか、三枝さんは顎をかきながらそう言った。
困っている、困っていますとも。思いを込めて頷いたが兜のせいでおぼつかない動きになり、目隠しがカチャカチャ鳴るだけに留まった。
「へえ、これが勇者のねえ」
三枝さんは好奇心を交えた眼差しで、まじまじと甲冑（私）を眺めた。夕方に近づき、いくらか日が陰ってきた。帽子を脱いだ三枝さんは、よっこらしょといいながらブロックに腰掛けた。
「大変だったなあ。勇者っつったら兄ちゃんの敵（かたき）だろ。言ってくれりゃあ除雪車で突っ込むなりして加勢したのによ」
事情を知っても三枝さんはあまり驚いた様子は見せなかった。むしろ黄金の魔王と顔を合わせていることもあり、もしかしてあの時か、とすぐに合点がいく察しの良さである。

少し垂れた目で魔王を見上げてから、ふうん、と三枝さんは腑に落ちた顔で頷いた。
「なるほどな、それで厄介払いしたいわけか」
「一刻も早く手放したいが叶わず」
「出処が勇者の持ち物じゃあ、古物商に持ち込むわけにはいかねえしな」
下手に鑑定されて、この世界では有り得ない金属だの物質だのと妙なことになっても面倒だ。
三枝さんはひとつ息を吐いて、哀れそうな目で私を見た。
「どっかやるとこ見つからねえと夏織ちゃんずっとそのまんまなんだろ？」
真顔でとんでもない事を言う。
「そんなわけ、」
「然様」
「さよう！？」
「ゆえに急を要しておる。勇者の呪縛から解放せねば」
なんだその設定は。横目で睨んだところで、視線はむなしく兜に遮断されるのみ。
もしかして、私は魔王に騙されたのではないだろうか。運搬の効率化などという口車に乗せられたのではないだろうか。無理やり着せて身に馴染ませた末、押し付ける気なのではないだろうか。ふつふつとそんな疑惑が炭酸の泡のように湧いて出てくる。
古びた軽トラが颯爽と滑り込んできたのはそんな時だった。
下着にも見えるランニングにパジャマのようなズボンというラフにもほどがある格好をした年配の男性が運転席から下りてくる。彼は三枝さんに向かって手を上げた。
「よお、ちょっと早かったかな」
「おうタケさん。まだ誰も来てねえよ」
タケさんと呼ばれた男性は人懐っこい笑みで歩み寄ってきた。知らぬ顔ではない。彼は竹田さんという。近所と呼ぶほどの近さでは

ないので親交が深い訳ではないが、長く町内会に尽力していて、その関係で何度かうちに訪ねてきたことがある。
「家に居ると飲んじゃうからさ。早めに来ちまった。あ、来客中かい？　魔王さん、と……誰だ」
竹田さんの表情は先ほどの三枝さんと同じものだった。

「甲冑の処分に困ってる？」
竹田さんは三枝家でたびたび開かれる麻雀大会のメンツであるらしい。事の背景を知るや、気が抜けるくらいあっさりとこう言った。
「なんだ、そんならあそこ持ってきゃいい」
「あそこってどこよ」
ぐっと身を乗り出した私たちの代わりに、尋ね返したのは三枝さんだ。
「ほら、寄り合い所のな」
あァ、と三枝さんは得心した声を出した。
「前置いといた鹿の剥製あったろ？　あれ博物館だかなんだかに寄贈してから、どうも殺風景になったっつってよ。なんかねえかって探してたところでさ」
天の助け。
その申し出に、私たちが一も二もなく飛びついたのは言うまでもない。
果たして甲冑が風景に花を添える役を担えるかはそれぞれの感性に任せるとして、望まれて貰われていくならこんなめでたいことはない。だまし討ちみたいな手口の片棒を担いで、後ろめたさを覚える必要もなくなった。
私もホッとしたが、魔王はもっとホッとしていただろう。目を爛々と輝かせ、手をとらんばかりに竹田さんに感謝を述べている。
「よくぞ申したタケダ。老い先短いそなたの献身、忘れはせぬ。往生した際には死に水は取ってやろうぞ」
感謝を述べているはずである。

竹田さんは鷹揚に笑ってから、私の着ている甲冑を見た。
「そんでこれ、いつ引き取るよ」
「兵は神速を尊ぶ。すぐにでも持ってゆくがいい」
「じゃ、ちょっと行ってくるか。まだメンツ集まんねえよな？」
おう行ってこい行ってこい、と三枝さんは手をひらひらと振ってみせた。
「良かったなァ夏織ちゃん、学校にそれで行くなんてことになったら大変だもんな」
「バス通学はちょっと厳しいね」
その前にまず制服が着れないしね。
しかしそんな憂いはもう絶った。やっと呪縛から解放されるのだ。

万歳、と手を上げたつもりだったが、重みで上まで至らず、前ならえのポーズに終わった。
その矢先、ひょいと体が浮き上がる。
あ？　と思う間もなく着地した。
浮いたのは魔王が後ろから持ち上げたせいで、着地したのは荷台の上だと私が気づいた頃には、軽トラは速やかに走り出していた。
魔王と三枝さんの姿が景色の中で小さくなってゆく。
私は出荷される牛の気持ちをその日初めて知ったのだった。

我が家に回覧板がまわってきたのは、それから約二週間後のことである。
ゆるキャラ決定と題されたお知らせに、見覚えのある甲冑が、ゆるキャラ『ナイト☆くん』として紹介されていた。

父帰るの巻

「もういいんじゃない？」
「まだ艶が足りない」
「手が疲れたよー」
「なら左手を使いなさい」
「うへえ」

へこたれる私を尻目に、力強く団扇をあおぐ父の手は止まらない。ただ一点を見つめ、職人のような手つきでひたすらに風を送っている。その厳しい面持ちに甘えを許す気配はなく、私は渋々と団扇を手に作業を再開した。風に煽られた酢の香りがつんと鼻を刺激する。桶の中の酢飯はあおぐたびにつやつやと輝いた。

私には物心ついた時から与えられていた仕事が三つある。ひとつは回覧板、それから食器の後片付け、そして酢飯をうちわで扇ぐ役だ。どれも仕事と呼ぶには他愛ない。恐らく家族の助けというより躾の意味合いの方が強かったのだろうが、長年続けば習慣となり、その三つに関しては誰に命じられずとも自然と体が動くように刷り込まれている。寿司桶イコール出番だ。私と、そして父の。

単純作業とはいえ幼い子どもの力だけでは炊きたての米の熱を奪うのは難しい。なので、父に手を貸してもらう形で私はいつも任務を遂行していた。母と祖母が支度をしている傍ら、父と二人で酢飯を扇ぐのは楽しい仕事のひとつだった。それは手を借りる必要のない歳になった今でも変わることがない。酢飯は父と私の共同作業と決まっている。そのせいなのか定かではないが、父が戻ってきた日は手巻き寿司と決まっている。

父はここ数年、単身赴任をしている。頻繁に帰って来られない分、盆と正月だけはまとまった休みをとって帰省していたのだが、今年は担当していた工場の工場長が突然失踪したおかげでお盆どころで

はなくなってしまい、ようやく休暇がとれる程度に落ち着いた頃には夏は過ぎ去っていた。

ちなみに工場長は自分探しのためにインドに行ったらしい。ターバンをバックに微笑む絵葉書が届いたのを最後に音信不通となったという彼の安否が気遣われる。もとより肉付きが薄いというのに、久しぶりに見る父の頬は更に削げ落ちていた。

「ところで夏織、ちゃんと勉強はしているんだろうな」

「まあぼちぼち」

「苦手な教科だからといって手を抜くんじゃないぞ、算数とか」

「数学ね数学」

家を離れた時分、まだ小学生だったせいか、どうも父の中で私の年齢の更新がうまくいっていない。最低年に二回は顔を見ているにもかかわらず、帰って来るたび「そんな大きかったか」と欠かさず愕然としている。昨年など、お前ももう高校生か、としみじみしながら赴任先に去っていったというのに、クリスマスにサンタのブーツを送って来る始末である。この調子だと今年も送られてくるだろう。

「よし。そろそろいいだろう」

ようやく父の納得のいく酢飯が出来上がり、私は団扇から解放された。やれやれと一息つく私とは対照的に、父はてきぱきとしゃもじや団扇を片付け、作業をしていたテーブルに布巾までかける働きぶりである。せっかくの休みなのだからゆっくりくつろげば良いものを、根っからの几帳面な性格がそれをさせない。腰を下ろす間もなく、台所の戸棚を漁り始めた。

「何探してるの」

「海苔なんだが……見当たらないな。買い置きしてないのか」

「そこじゃ入りきらないんだよ」

食器棚の裏から大量に詰め込まれた紙袋×3を引っ張り出して見せると、父はぎょっとして、なんでこんなに溜め込むんだ、リスか、と問いただしてきたが、むしろ私が聞きたいくらいである。おにぎ

りを握れども握れども一向に減らぬ海苔地獄。他にも片栗粉地獄とか、味噌地獄とか、ミートソース缶地獄とかその種類は多岐にわたる。台所に点在するストック地獄から遠ざけようと、私は居間へ父を追い出すことにした。

「あとの支度は私たちがやるから、荷物とか整理したら」

「そうだな。じゃあ頼むぞ」

素直に応じた父は居間に置いたままの荷をほどき始めた。広げたスーツケースから取り出したお土産を淡々とテーブルに積み上げてゆく。自分の荷物より土産の方が多いのが常とはいえ、今回はやけに量が多すぎるのではないか。

私の心情が伝わったのか、父は菓子箱をひとつ手にしながら首を振った。

「いやこれは隣近所に。ほらお隣さん挨拶がまだだろう」

「あ、そうか」

空いていたお隣が埋まったと報告だけはしてあるものの、まだ顔を合わせてはいない。帰ったら一度ご挨拶しないとな、と真面目な父は電話口で語っていたのである。柱にかけられた時計を見上げ、父は土産を手に立ち上がった。

「こういうことは早い方がいいな。夕食前に行ってこよう」

そう告げると父は鏡を覗き込んで身だしなみを軽く整えてから、玄関から出て行った。

と思ったら、数分も経たない内に戻ってきた。それもバタバタと珍しく足音を荒立てて。

「もう帰ってきたの？　早くない？」

家に滑り込んだ父は私に背中を向けたまま両手でドアノブを握っている。

「もしかして居なかった？」

「居た」

端的に返した後、猛然と鍵という鍵をかけドアチェーンまで施した父は青ざめながら振り向いた。

「黒ずくめの悪魔みたいな奴が居たぞ！」

手巻き寿司は自由度が高いだけに具の配分が難しい。つい欲張ってまぐろの上に山盛りのいくらを乗せたら、巻ききれずに海苔からこぼれてテーブルに落ちた。いくらの輝きは無機質な卓上に無様に転がっても尚うつくしい。もちろん拾って食べる。行儀が悪い、とお小言を言いそうな父が隣に控えているというのに、何のお咎めもない。その代わり母が私に釘を刺してきた。

「夏織ったらいくらばっかり食べて。イカ食べなさいイカ」

「えーイカ噛み切れないんだもん」

「噛めないなら飲めばいいのよ飲めば」

食卓が少々豪華であること以外を除けば、流れる時間はいつもとなんら変わるところはないように見える。父を除いては。みな食欲旺盛で、寿司を巻いていくスピードも速い。父を除いては。

いかにも団欒な風景に抗うかのごとく、父はひとり深刻な空気を纏っていた。注がれたビールにも手を付けず思いつめたような、混乱を隠し切れないような、およそ寿司桶を睨むにはそぐわない表情をのせて。

「これは悪い夢だ働きづめで疲れてるせいだそうだ心が肺炎を起こしかけて」

「お父さんたらまだそんなこと言ってる。いいから海苔取って」

「どうしてお前達は落ち着いて寿司なんて食べていられるんだ。魔王だぞ。隣の家、魔王なんだぞ」

父の拳は重々しく音を立てて卓を打った。が、母は動じる様子を見せるどころか、けろりと手を伸ばして海苔を急かした。早く海苔とって。

挨拶に行くと出向いたものの、父は魔王宅にたどり着くことはなかった。

玄関を出てすぐに目撃してしまったからだ。隣の住居へ入ってゆく、羽を伸ばした黒くて禍々しいおよそ人とは思えない何かを。田舎の景色にミスマッチにもほどがある、その非現実な造形に呆気にとられ、しばし呆然と眺めていたが、頭に角らしきものが見えた時点で我に返って引き返したのだという。

何を呼べばいい。警察か、軍か、それとも牧師か神主か。

父は真顔で慌てていた。

どちらかといえば冷静な人なので、腰を抜かしたり喚き散らしたりなど醜態こそ見せなかったが、めったやたらに眼鏡を押し上げる仕草に狼狽が現れていた。

私はいつか、ダース・ベイダーが来た！　と勘違いをして騒いでいた宮間くんの件を思い出し、父の肩を優しく叩いた。

お父さん大丈夫、あれ魔王だから、と告げながら。

そう宥めるのが最も効果的だと私はこれまでの経験から学んでいた。魔王だと一言告げれば、丸く収まるように出来ている。なんだまったく、人騒がせな。安堵の息とともにそんな言葉が吐かれると信じていた私に、大きく瞬きした父はしかし憮然と言い放ったのである。

お前は一体何を言っているんだ、と。

今度は私が大きく瞬く番だった。

そう、父は魔王を異物として扱ったのである。母も祖母も近所の誰もかれもが見せた、度を超えた柔軟さなどその強張った表情には欠片も見当たらなかった。困惑と混乱をさっくり混ぜ合わせたような、およそ正常とはいいがたい色しか浮かんでいなかった。

本来ならば、その反応が当たり前であり真っ当なのだ。魔王ね、はいはい、という薄く平たい対応ばかり目にしていたせいで私もいささか見失いかけていたが、かの人は魔王なのである。よく見かける虫か何かではない。

父は決して間違ってはいない。
だがこの世は多数決こそが正義。
平和にして狂ったこの町の正義を父に教えたのは、私ではなく買い物から戻ってきた祖母と母で、彼女たちはわいわいと夕食の準備に取り掛かりながら「隣？　魔王さんだけど？」「それがどうしたの？」と父の横面に軽いジャブを食らわせ、早々に戦意を削いだのだった。いっそ清々しいまでのあしらわれ方は、魔王と遭遇したいつかの自分と酷似しており、しみじみとした懐かしさを覚えたものである。この道はいつか来た道。

伏せがちだった顔を上げた父は、酢飯の上に魚卵を敷き詰めんとする母を厳しい面持ちで見た。
「なぜ私に黙っていた。今の今まで魔王が転居してきたなんて知らなかったぞ」
「隣に人が来たって言ったでしょ」
「人だとは聞いたが魔王だとは聞いてない。常識的に考えてみなさい、人の括りに魔王は入らない」
「ほんと細かい人ねえ。いいじゃない二足歩行なんだし人と同ジャンルで」
のれんに腕押しと言おうかシャドウボクシングと言おうか、まるで相手にならないのである。父の拳は空を切るばかりで母をかすめもしない。
「まあまあごはん食べなよ、全然手つけてないじゃん」
適当にとりなす私を父は眼光強く振り返った。
「夏織」
「うん？」
「食べながら話すんじゃない」
「はい」
もっと他に言うべきことがありそうなものだが、父の内部もいろいろと散らかっているのだろう。平常心を立て直すにはそれなりの

時間がかかるものだ。肉親の険しい横顔を視界に入れつつ、私は牛のように大人しく酢飯をもぐもぐと噛みしめた。代わりに向いの祖母が微笑みの形のまま口元を開く。

「春彦さん、そんなにピリピリしなくても大丈夫よ」

鋭利な空気を削ぐような声の調子はあくまでゆったりと。義理の親という遠慮もあってか、父の語気がいくらか弱くなった。

「しかしお義母さん」

「こんなのよくあることじゃないの」

「よ、くある……？」

かろうじて握られていた父の手から片方の箸が落ちた。

「このへんじゃ普通よ普通」

母の追い打ちで残された片方も遅れて落ちた。フローリングの床の上を仲良く二本転がってゆく。乾いた軽い音が父の混乱に拍車をかけた。

「よくある？　普通？　この町はどうしてしまったんだ？　私にわかるようにきちんと説明をだな、」

父は完全に立ち上がっていた。いつになく興奮気味で捲し立てる父に、手巻きを楽しむ母と祖母からの明確な回答はない。食卓のわさびが切れたというプチトラブルに二人の興味が持っていかれてしまったのである。あらあら大変などと口走っている様子を見れば、その重要度は一目瞭然であろう。魔王くわさび（チューブタイプ）

孤立感漂う父にデジャヴを覚えながら、転がった箸に手を伸ばして拾い上げる。私には父の気持ちがよくわかる。経験者として痛いほど理解できる。眼差しに哀愁とねぎらいを込めて私は父へと告げた。

「ふわっとした答えしか返ってこないから無駄だと思うよ」

「夏織お前まで、」

「だいぶ前に私このくだりやってるから」

「このくだり！？」

この土地の非常識にひとり翻弄され丸め込まれてきた私にとって、

共通の価値観を持つ者は貴重な仲間であり、その存在を歓迎しないわけはない。父が魔王を真正面から突っぱねたおかげで、あ、やっぱり魔王って世間的にさほどメジャーじゃないんだな、と改めて認識したところである。

だがしかし、残念ながら父は登場が遅すぎた。初見では目を疑うような奇抜な柄も毎日目にすれば風景の一部となるように、角が生えた隣人も日々に混ぜれば徐々に馴染む。もちろん違和感は消えることはないし、今でも腑に落ちないことは山ほどあるが、確実に話題としての鮮度は落ちた。もう私は父のように新鮮に驚くことは出来ない。同じだけの熱と温度で分かち合うには、旬はとうに過ぎ去ってしまったのである。正直この援軍、私がまだ魔王に神経をすり減らしていた頃に欲しかった。

「お父さんにはあと数ヶ月早く帰ってきて欲しかったな……」

憂いを込めて呟くと、父は一瞬怯み、いや父さんだって何も好き好んでだとか、できることなら早く帰ってやりたかったとか、しかし身を粉にして勤めに精を出すのもひとえに家族の為だとか、ばつの悪そうな口調で眼鏡のフレームを押し上げた。あの日の自分をほんの少し哀れんだだけで、別に父を糾弾したいわけではない。湿気始めた海苔を手に取って、割り切るように縦に破る。

「まあ誰に聞いても同じだから、慣れた方が楽だよたぶん……魔王に関しては私たち圧倒的少数派だから」

父の眉間に皺が寄る。

「異を唱える者がいないとでも？」

異を唱えるどころではない。私以外はみんなイエスの札しか持っていなかった。そうだよと答えると、眉間の皺はますます深くなった。私は魔王がちょくちょく訪れる土地柄であるらしいことを伝え、誰も戸惑いを示していなかった事実やすんなり町内会に加わった件など、これまで私が味わったアウェイ感を話して聞かせた。父がごくりと喉を鳴らす。

「まさか……三枝さんもか」

「むしろ……親しい」
重い沈黙。
昔から父は、気風が良く頼もしい三枝さんにどこか一目置いている節がある。父は瞼を下ろし、すっかり温くなったビールをゆっくりとあおった。
「そうだインドに行こう」
それは仏像のように極めて静かな横顔だった。
「お父さん？」
「ガンジス川は全て不浄を清めてくれるそうだ」
父は真面目な人である。もちろんそれは美点に他ならないが、柔軟性に乏しいとも言える。母ほど大雑把ではないにせよ、半分その血が体に流れている私と比べて、理屈に合わないことを消化するのが不得手だ。
道を踏み外そうとしている父を刺激しないよう、私はできうる限り穏やかで凪いだ声で語りかけた。
「繊細な人はインドに向かないんじゃないでしょうか。水は合わないし治安も悪いし」
「魔王がいる時点で日本の治安も推して知るべし」
「大丈夫、見た目ほど害はないから」
「害がない癖になぜ魔王を名乗る。悪逆の限りを尽くしてこそ魔王じゃないのか」
「遠征先では大人しくするのがマナーなんじゃないの……知らんけど……」
私が誘致したわけでもないのだから、魔王業の方針について追及されても困る。本人に聞けとしか言いようがない。
その時、来客を知らせる呼び鈴が高らかに響いた。おそらく鈴木さんが回覧板を持って来たのだろうとお茶を一杯ひっかけてから玄関に向かうと「まだ話は終わっていない」などと言いながら父が追いかけてきた。何もついてこなくても良さそうなものだが、次元が違う二人のいる食卓に残されたくはなかったのだろうと思い、特に

止めはしなかった。しかしそれは判断ミスだった。私は父を椅子に縛りつけてでも留めておくべきだった。

何しろ現れたのは回覧板を携えた鈴木さんではなく――

「無警戒に開くなと申しておろうが」

「うわっ」

現在、話題沸騰のご本人様の登場に、私は本気でびっくりして後ろにのけぞってしまった。だが私以上のびっくりに襲われている人がいるのでおちおち動揺もしていられない。慌てて背後を振り返ると父は棒立ちで凍結していた。瞬きもなく、悲鳴を上げた口をそのまま半開きにして。ああ、私の父親が古いＰＣのごとき動作不良に。

「日が落ちれば闇にまぎれて魔が跋扈する。気を引き締めよ」

人を一人凍りつかせたとも知らず、魔を司る当人は夜更けを背後に朗々と用心を語った。高く伸びる禍々しい角も月ほど白い肌も、暗幕のような夜につくづく映えるものだと幾度見ても感心する。と、魔王で占められていた視界が壁に遮られた。

「む、むむ、娘から離れなさい！」

眼前に父の背中がある。完全フリーズしていたと思われた父は、私の姿を隠すように魔王の前に立ちふさがっていた。勇ましい言動とは裏腹に、声と肩が尋常ではないほどに震えている。いつかの三枝家のチワワを思い出した。

お父さん、と袖を引く私にこたえることなく、父は震えたまま魔王にこう言い放った。

「生贄ならば娘ではなく、わ、私を連れていくがいい。その代わり娘や家族に手を出さないと、今ここで約束したまえ」

どうやら父の中で魔王を元凶とする悲壮な物語が展開されているようだった。魔王自ら生贄を回収に来るとは相当に逼迫した局面である。思い込みとはいえ危機に瀕しても怯まず家族の盾となろうとする父の愛に私はじんと胸を打たれてしまったが、浸っている暇はない。誤解と勇み足が掛け合わさっていらぬ揉め事を招いている。

一方、突然見知らぬ男に難癖をつけられた魔王といえば、訝しげ

に睨めつけてから、背後の私にその視線を遣わした。遥か高みから見渡す魔王にしてみれば、父が築いた城壁など目隠しにもなるまい。

「これは誰か」

「すいません父です」

魔王の瞳が意外そうに瞬いた。

「ほう……まさか生きているとはな」

「だから最初っから生きてるって言ってたじゃないですか」

神に誓って父の死亡説など一度たりとも流していない。

「ふ、よくぞのこのこと現れたものよ……そなたの一族はすでに余の手中に落ちた。今更羽虫が一匹増えたとて何の足しにもならぬが、仕えることを許そう。せいぜい忠誠を尽くすがいい」

魔王にとっておそらく挨拶に過ぎないのだろうし、住民たちも抵抗なく聞き流していた。が、これまでとはメンツが違う。この町では「異端」、広い世界でとらえれば「普通」の感覚の持ち主が、この台詞を好意的に解釈できるだろうか？

答えは否である。聞き慣れた私でさえ、悪役の無慈悲な宣告としか響かない。

恐る恐る目をやれば、元より良いとは言えない父の顔色がますます青ざめていった。それが怒りか絶望かまでは判断でないものの、ご機嫌な色合いではないことはそう賢くない私でもわかる。

不穏だ。どう贔屓目にみても和やかではない。私は妙な空気を叩き割らんと父と魔王の間に滑り込んだ。

「ところで！　魔王さんは！　今日何のご用で！」

威勢よく切り込むと、魔王は父への興味をあっさり手放し、うむと頷きながら懐を探った。安堵する間もなく、背後でヒッと声がする。

「じゅ、銃を出す気だな」

「ちょっとお父さん黙って」

父の魔王像は即席のせいか、どうも方向性が定まっていない様子である。ファンタジーなのか近代的なのかどちらなんだ。

ほどなく魔王が闇色のマントから取り出して見せたのは、当然父が懸念した物騒な銃などではなく、もっと薄くて小さいものだった。掌におさまる、カードが一枚。

「往来にこのような紙片が落ちていた」

差し出されるまま受け取ると、見覚えのある名前と写真が目に入った。父の免許証だ。泡を食って引き返してきた際、迂闊にも落としたのだろう。

「わざわざありがとうございます、助かりました」

紛失すれば大事になる。礼を告げたあと、背後を振り返れば、父は態度を改めるどころか唇を噛みながら顔を敵意に歪めていた。さすがに目に余り、私は父に耳打ちをした。

「礼くらい言いなよ。届けてもらってそんな」

真剣な小声が返る。

「馬鹿、個人情報が敵の手に渡ってしまったんだぞ」

隣家に住んでいる時点で大方の情報はすでに割れていると思うのだがどうか。

若さの差か、持って生まれた性質か、はたまたタイミングの良し悪しか、父はかつての私よりも魔王の存在を頑なに拒んでいる。宮間君も結構尖った態度ではあったが、あれは魔王への畏怖がそうさせたのではなく、なんだこいつ気に食わねえ、というチンピラの威嚇みたいなものだった。

対して、父の目つきは天敵に対するそれである。怯えながらも抵抗する気満々なのである。ひょろりと細く、昔キャッチボール一球目で肩を外したというもやしっ子らしい経歴を持つ父の、思いもよらぬ闘志に正直驚きを隠せない。人は見かけによらないものだ。しかしここでゴングを鳴らすわけにはいかないのである。勇者ＶＳ魔王の組み合わせは世の摂理として仕方がないとしても、父ＶＳ魔王の対戦カードは歓迎できない。

私は魔王と並ぶように立ち、咳払いを一つ。

「お父さん、まあちょっと受け入れがたいかも知れないし、どうか

してると思うかも知れないし私も半分くらいどうかとは思ってるんだけど、何だかんだ魔王さんにはお世話になっていてね」

上司に気を遣う部下にも似た気持ちで、切々と父に有害ではないと訴えた。横でその様子を見ていた魔王は援護のつもりか得たりとばかりに頷き、不敵な笑みで花を添えた。

「人間ふぜいと侮っておったが、そなたの娘は余の片腕として存外よく働いておる。誉れと思え」

無駄だとはわかっているが、せめて、今だけでも、もう少し人間界でも通用するマイルドな物言いを、と願わずにはいられない。

「片腕？」

父の片眉が大きく跳ね上がる。そのまま私を視線で詰問した。後ろめたさもあり、私の口調は自然と言い訳がましいものに。

「あーそんな大層なもんじゃなくて、お隣さんとして少しお手伝いとしたとかその程度のことで、」

「策や企てがカオリの主な務めよ」

「ワー」

あたりさわりなく伝えようとした私の気遣いは魔王の親切な補足によって砕け散った。予想通り父の表情はますます曇ってしまった。

「関わっている時点で感心しないというのに、悪事の片棒をかつがされるとは……」

額に手を当てて悄然とする姿は、非行に走った娘を嘆く父親といった趣である。まあ我が子が魔王の手下と知れば、大抵の親御さんは心穏やかではないだろう。悪い仲間と付き合うな、とは多くの親が口にする定番の説教ではあるが、魔王となると悪さのスケールが違う。盗んだバイクで走り出すくらいならば頬を打って止めることは出来ても、魔の軍勢を率いて城を襲うまで行ってしまった場合、いくら親の愛を駆使しても制止するのは難しい。

「娘には将来がある。その妨げになるような真似はよしてもらいたい」

先ほどの震えはどこへやら。父は気丈にもまっすぐと魔族の長を

見据えている。
　私が何か言うより先に、魔王が一歩踏み出した。見下ろすその笑みは邪悪そのもの。
「案ずるでない。いかにふつつかな娘であろうと一度召し抱えた以上、余が責任を持って引き取ろうぞ」
　途端、青ざめていた父の顔が紅潮した。
「なっ……！　だ、だれか嫁にやるかぁ！」
　目が点になった。
　娘を持つ男親の想像力は油田よりも豊かなのだと知った秋の夜。
「違うから、多分そういう意味じゃないから、お父さんクールダウンクールダウン」
　背後からなだめるも、頭に血が上ってしまった父の興奮はなかなか冷めやらず、魔王だけが一貫してクールの様相である。発想が一足飛びの父に非があるとはいえ、元凶である魔の手先が最も落ち着きを払っている状況、どこか腑に落ちない。
「爽やかで誠実そうな青年が娘さんを下さいと来るならまだしも、こ、こんな禍々しい、住民票もどこにあるかわからないような男に！　誰が！」
　そう吠えたあと、肩で息をしながらよろけるようにして父は一歩後退した。少し頭が冷えたのか、興奮の残る震えた眼鏡を押さえ、短く息を吐く。
「そもそも、うちの夏織は公務員試験を受けて役所に勤めると決まっている」
「愚かな。そなたの娘は血塗られた道を歩む運命（さだめ）」
「そうはさせるか。むざむざ魔物の餌食になるくらいならいっそ尼寺に」
「いやだから私農協狙いなんだって」
　こんなに為にならない三者面談も珍しい。公務員も血塗られた道も尼寺も、私の将来設計に組み込まれる予定は今のところないのである。人の進路で勝手に盛り上がらないで頂きたい。

「あっそうだ、お土産」
少しでも空気を変えるつもりで私は大袈裟に手を打った。父がお隣さんにと用意したものの、魔王の手には渡らず（引き返してきたのだから当たり前だが）棚の上に放置されている。賄賂ではないが、今日のところはとりあえず菓子折りに免じてこの場を引いて頂こう。
「これさっき届けに行くつもりだったんですけど色々ありまして」
見た目よりずしりとしたその包みを恭しく魔王に捧げる。傍らで父はいかにも嫌そうな声を出した。
「夏織それは」
「もともとお隣さんに渡すつもりだったんだからいいじゃん、余らせても仕方ないし」
遮るように言うと、父は伏し目がちになった。
「お隣さんがもっと想像を超えない平凡な姿だったなら……どんなに良かったか……」
せめて人類、と父が小さく呟いた。
それが聞こえなかったのか、聞こえていてもどうでも良いのか、魔王は私の手から躊躇いなく菓子折りを受け取った。
「ほう貢物か」
天井のライトに当てるように掲げ、しげしげと透視するように眺めている。
「焼き菓子では及びもつかぬ重み……中身は何と心得る」
「この包装紙から見るに……羊羹かな」
魔王の口の端が上がった。琴線に触れたらしい。今となっては不本意だろうが、父の土産選びのセンス、魔王にクリティカルヒット。菓子折りを片手に、魔王は爪で顎をさすりながら高慢に告げた。
「絶望で染め上げた漆黒の菓子は甘美なものよ。愚民ごときがその曇った眼でよくぞ選んだ」
父のこめかみに青筋が浮いた。これを魔王なりの礼だと理解するには、少々父にはキャリアが足りない。
「買ってきたのは父なんで、礼なら父に」

そうか、と存外素直に魔王は父へと向き直った。
「父よ」
「君に父と呼ばれる筋合いはない」
「ならば、ひょうろく玉とでも呼べばよいか」
青筋の数が増した。
ああ、うん、無理だな。
この二人の関係修復は無理だな。
私は心中で匙を投げた。助走をつけて槍投げの要領で投げた。空を割り雲を裂き、どこまでも飛んでゆけ。
この町の住民達による魔王への大らかさはやはり不思議で普通とは思えないが、父のように常識的に向き合い過ぎて大いにこじれるというのも、これはこれで面倒くさい。やはり人生には多少のアバウトさが必要だ。
「私が留守にしていたばかりにこんな……この先しばらくまた家を離れることを思うと気が気じゃない」
「大丈夫だよ案外うまくやってるから」
「よくこの環境で大丈夫と言い切れるな。お前は母さんの血が濃い」
父はかぶりを振った。
「また犬でも飼うか……魔王を追い返す番犬として」
残念ながらそれはまったくの逆効果である。魔除けどころか余計入り浸ることになろう。
魔王の目がぎらりと鋭く光った。
「今、犬と申したな」
食いついてきたあ！
「いるのか。どこだ。余に隠れて畜生を囲うとは良い度胸ではないか。さあ今すぐにこの場へ引っ立てよ」
表情は剣呑だが確実にテンションが高くなっている。普段よりもやや早口で詰め寄って来る魔王を私は両手で押しとどめた。
「昔ですよ昔、犬飼ってたのは過去の話！　今はいません隠してもいません」

すると魔王はみるみる冷めたような顔つきになり、つまらんとばかりに舌打ちをした。勝手に早とちりをしておいてそれはないんじゃないか。

「もしかして犬、好きなのか……？」

耳元で父が囁く。

父は犬が好きだ。すでに老衰でこの世を去ったが、以前柴犬を飼っていたことがあり、それはそれは可愛がっていた。共通点は人を近づけるものである。犬好き同士親近感がわくか知れないとほのかな期待を抱き「大好きらしいよ」と答えると、予想に反して父の顔がさっと強張った。

この時私は気が付かなかったが、父が尋ねていたのは、愛玩動物としてラブの意味ではなく、食糧としてイートかどうかという意味であり、私はそれを全力で肯定してしまったのである。大好物！くらいの勢いで。親近感どころか、二人の間に横たわる溝がマリアナ海溝より深まったのは言うまでもない。

「夏織、塩だ、塩を撒きなさいっ」

「お父さん落ち着いて、たぶん塩が効く相手じゃない」

「塩？　さては土俵入りか」

「違う！　ていうか相撲見てるんですね！」

騒ぎを聞きつけてか、どたどたと賑やかな足音が近づいてきた。遅れて控えめな足音も追ってくる。

「誰かと思ったら魔王さんが来てたの？　なに？　落し物？　あらすいませんもうお手数おかけしちゃって」

父のただならぬ様子を一顧だにせず、母は至って朗らかに対応した。しゃもじを布巾で拭っているところを見ると、後片付けでもしていたようだ。あの、まだ私たち食べてる途中だったんですけど。

母のよく通る声の後ろから、小柄な祖母が顔を出した。ちょうど良かった、これからメロン切るところで、と言いながら、倍ほどの背丈の魔王を見上げる。

「ご迷惑でなかったら魔王さんもご一緒に」

「なっ、お義母さん!?」
父がぎょっと目を剥いた。
「なぜこんな怪しい奴を招くんです」
「そりゃあメロンよく冷えてるから～」
「説明になってない……！　あ、こらっ私は許可してないぞ！　待ちなさい、勝手に上がるんじゃない！　裾！　引きずるな！　何の意味があってそんなに長い服着てるんだ！」
お取り寄せまでしてグルメを楽しむ貪欲な魔物が、よく冷えたメロンという魅惑の誘いを断るわけもない。憤慨する父をよそに魔王はいそいそと我が家の居間へと吸い込まれていった。家を長く空けると発言権も失われてゆくのだなと、と私はしみじみ思いながら父の背中を追った。

よく冷えたメロンの果肉は甘く、不協和音を若干和らげてくれた。
余談だが、その時見ていた旅番組の背景に失踪した工場長が映りこんでいるのを父が発見した。ガンジス川で沐浴する彼はとても澄んだ瞳をしていた。

鵺の巻

回覧板が届けられたのは、ついに明日で父の短い休暇が終わる、という時である。

父が不在だったのは都合が良かった。

ちょうど少し前に、コンビニに牛乳を買いに出たところだったのである。散歩がてら、という軽い気持ちで出かけて行ったあたり、父が赴任先で都会の絵具に染まってしまったことがうかがえる。なぜ徒歩を選んでしまったのか。距離を考えて一時間弱は帰れるまい。

ともかくおかげで回覧板は父の目に触れずに済んだ。

万が一居合わせていたなら、回覧板を回す!?　馬鹿を言うんじゃない、魔王の根城だぞ！　こんなもの！　こうして！　こうだ！と魔王宅を飛ばして三枝さんのお宅へ届けていたかも知れない。

町内会費を納めている以上、等しく情報を共有する権利を有しているのである。魔王であれなんであれ、つまはじきはよろしくない。

あれから父と魔王の間柄に、とりたてて変化はない。一度できてしまった二人の溝は、そのまま埋まることはなかった。

あの日のやり取りで、すっかり父の心は天の岩戸のごとく閉ざされてしまい、びくともしない。

魔王が夏織をたぶらかそうとしている、という切迫した父の訴えに対して、母が「うけるー」の一言だったのも、天野岩戸の立てつけが悪くなる原因のひとつだったのではないかと思う。

家族が総出で宥めたりすかしたりすれば良かったのかも知れないが、あいにく我が家にはアマノウズメの役割を担う者は誰一人としておらず、岩戸は頑なにロックされたままである。もはや岩戸ごと爆破でもしない限り開くまい。

狭い町内、隣近所との関係を悪化させるのは好ましいことではない。

しかし休暇とはいっても五日ほどの短い帰還だ。その程度であれば直接顔を合わせる機会も少ないし、無理につついても更にこじらせるだけだろう。

困ったもんだなと思いつつも、私はあえてあまり隣人の件には触れぬまま、買い物に出かけたり賞味期限切れの食品を捨てたりと父との遅い夏休みを謳歌した。

幸い魔王はその間、訪ねてくることも私を呼びつけることもなかったので、比較的穏やかな時間を過ごした。

しかし回覧板が来たからには届けねばならない。

受け取ったばかりのバインダーを開いてぺらりとめくる。

白い用紙に踊る「廃品回収のお知らせ」の文字。

珍しく大事なお知らせである。ゆるい内容、平たく言えば見過ごしても支障なしとされる告知が多々ある中、重要な部類ではないか。

改めて父の不在に胸をなでおろし、玄関先で鈴木さんと話し込んでいる祖母に一声かけて、私は隣家へと小走りで向かった。

近所仲がどうのとは言っても、一方的に父が騒ぎ立てているだけにすぎない。

魔王の方は砂粒ほども相手にしていないのは先日の様子でわかっていたので、私はいつも通りの心構えで隣家を訪ねた。

が、予想に反して、出迎えた隣人はいつも通りではなかった。扉から覗いたその顔には、普段よりやや濃い目の悪そうな笑みが浮かんでいたのである。

「飛んで火にいる夏の虫」

口の端を持ち上げた魔王は、身なりにふさわしく悪役らしいことを言った。

のっけから不吉なお出迎えに、私の足は自然と一歩後退した。魔

王の縁起の悪い笑みはずいぶんと見慣れているが、その分悪い予感もよく働くのである。炎に身投げする前に、夏の虫は退散しよう。

「回覧板どうぞ。じゃあ、私このあと予定があるんで。もやしのひげ取りとか」

「待て」

魔王の手は回覧板を通り越して、私の手首をつかんだ。無論まだチェーンがかかっており扉はわずかしか開いていない。おかげで隙間から伸びた青白い手に引っ張られるという、十中八九怪談として通用するであろう絵面が展開された。

「五体満足で帰れるなどと思わぬことだ」

「たかだか回覧板でその覚悟いりますかね」

扉の前で押し問答（いや引かれているけど）をすれども、魔王を振り切れる力など私にあろうはずもなく。

「潔く現世に別れを告げよ」

「わかったわかりましたからまずチェーン外して！」

このままでは腕だけ持っていかれる。

いくら熱心にお招きを受けても、１５？の隙間からお邪魔するのはそれこそ五体満足では無理だった。

「それでなんなんですか」

のこのこと魔王の居城に上がった私は、いつものように例のスリ

ッパに足を入れて玄関を抜けた。

「ついて来るがよい。見ればわかる」

魔王はそう言って、リビングの扉をゆっくりと開けた。

目の前に、これまでの見知ったものとは違う光景が現れた。丈夫そうなつくりの黒くがっしりとした一人掛けの椅子が一台。ソファから離れた位置に置かれている。私は一目で悟った。

「マッサージチェア……！」

圧倒的な存在感がそこにはある。ベージュやモスグリーンなど落ち着いた色調でまとめられている室内に、どんと居座っているような風格すら漂っていた。

目新しさに私は駆け寄った。届いたばかりと思われるそれは、横にぶら下がっている説明書さえもぴかぴかと艶を放ち、背もたれからは真新しい革の香りさえした。

中古などではない。これは確実に新品。更にいえば最新型。

「買ったんですかーうわー」

興奮のまま思わず撫でまわす。店頭に並べられているのを目にしたことはあれど、身近な知り合いが持っていたことはない。ピンキリとはいえ、決して安い買い物ではないだろう。

「カオリ、ひとつ忠告してやろう」

振り返った先で、悟りに近い静かな表情をした魔王が言った。

「草木も眠る丑三つ時に浮かれた通信販売の電波など決して見ては

ならぬ。あれは魔の刻限」

「ああ……そういうノリで買ったんだ……」

早寝が常である魔王だが、たまたま目が冴えて床から抜け出した夜更けに起こった事故であったという。深夜の通販チャンネルは思考や感覚を麻痺させると聞く。太陽の下であればじっくり熟考するであろう買い物も、助走なしで購買意欲に火がつき、受話器を取らせるのだそうだ。

愚鈍な人の子はおろか、魔王の心の隙までついて購入に至らせるとは通販の魔性に戦慄するしかない。

私の生暖かい目線に気づいた魔王は、ひとつ大袈裟に咳払いをした。

「早合点するでない。こたびは敵の策と承知で乗ってやっただけのこと。倦み疲れた身をほぐす為、前々より買い入れる算段は整えていた」

だから衝動買いじゃないもんね、と主張したいのだろうが、歯切れも悪いし言い訳がましい。常日頃、人をつかまえてやれ貧弱だ脆弱だと罵っておきながら、自分はマッサージチェアに頼っているという矛盾も気になる。疲れてるじゃん。もみほぐされたいと思うほどには疲れてるじゃん。

しかしこのマッサージチェアの高級感ときたらどうだろう。背中や肩はもちろんのこと、二の腕やふくらはぎ、果ては足の裏までコースが用意されている。これは、もしかしなくても、相当なお値段。

「大丈夫ですか、これすごい、高い」

人の買い物の金額を尋ねるなんて野暮な真似はするつもりはないが、こんなものを勢いにまかせて買ってしまう隣人の懐具合が心配

にはなる。つい片言になるくらいには。
魔王は目を眇めた。
「そなた魔王という立場をなんと心得ている。腰掛のひとつやふたつで揺らぐ身代ではないぞ」
「そうなんですか？」
「余の蓄えを知らぬのか」
そう高圧的に質されても知るわけがないのだった。魔王の手取りが月いくらなのかと思いを馳せる瞬間はこれまでの私の人生に一度たりとも舞い降りなかったし、知る機会も訪れなかった。
「お、おいくらほど」
「おいそれと明かせるわけがなかろう痴れ者」
じゃあ話を振るなよ、という思いを込めて私は心で瓦を割った。
食費を節約するかと思えばぜいたく品には糸目をつけない、魔王の一貫性のない金の使い方には日ごろから首をかしげていたが、それは経済的な事情というわけではなく性格的なもののようだ。懐自体はずいぶんと余裕があるとみえる。
高級車の座席のようにも見えるそれを感嘆しつつ眺めてから、私はちらっと視線で魔王を窺った。
「あのう、これ乗ってみてもいいですか」
一度ためしてみたかったのである。
ご自由にお試しくださいと書かれている店頭マッサージ機は、心からくたびれた風情の中高年の男女が本当にご自由にお試ししているのが常なので、割って入るには相応の勇気がいるのだ。

「まあよかろう」

案外あっさりと使用の許可が下りたので、おそるおそる乗り込んで体を預けてみた。スイッチを入れると座席部分が蠢き、頼んでもいないのに全身の測定が開始される。これはすごいぞ、話が早い。

おおまかな操作はリモコンで行うらしいので、探してみるも見当たらない。手元をきょろきょろと二度ほど見回して気が付いた。魔王が持っている。

「あ、それ貸してくださ」

ぴっ。

言い終わる前に、魔王の指はなんらかのボタンを押した。途端、マッサージチェアは作動音を響かせて、私の二の腕やふくらはぎ、つま先に至るまで拘束した。

「え」

なぜ押した。そして何を押した。

「リモコン、リモコン貸してください」

声をあげるも魔王に手離す気配はない。

もしやまるきり初心者である私に代わって操作してくれているのだろうか。椅子にホールドされつつ、そう前向きに考えてみたりもした。

いや違う。絶対違う。そんな紳士の顔してない。どう考えても、新しいおもちゃを手にした子供の顔の方が近い。

手足は頼もしいまでにしっかりと固定されている。動けない。椅子側でも解除はできるのだろうが、初めて乗った身ではそんなもの

見つけられない。
気付けば椅子の横にかけられていた説明書まで魔王の手元にあるではないか。
羨望のマッサージチェアが急に拷問器具に思えてきた。
目の前の邪悪な黒づくめにリモコンという名の運命を握られている。

「案じるな。全てを余に委ねよ」
「これが案じずにいられようか。自由をください」
「贅沢なやつめ。ならばせめてそなたには施術の過程を選ばせてやろう」

死に方を選べ、みたいな不吉な調子で言われた。
魔王の低い声が、説明書に記載されたコースを朗々と読み上げる。

眠りにいざなう心地よさ、リラクゼーションコース。気になる部位を集中ケア、徹底もみほぐしコース。疲れた体を隅々まで、全身コース。従来のマッサージでは物足りない力強さを追求した刺激的なハードコース。

「リラクゼーション！　リラクゼーションで！」

果たして私の強い訴えは届いたのだろうか。
ぴっ。
魔王の手元が動いた。何を押したか、こちら側からリモコンの裏側しか見えない。
耳元で機械じみた音声が囁いた。

――ハードコースを開始いたします

「おい！！」

思わず敬語が屋根まで飛んだ。屋根まで飛んで壊れて消えた。

「選ばせてくれるって話はどこにいっちゃったんだよ！」

「余は未だその施術の威力を身に受けておらぬのだ」

「答えにも理由にもなってないね！？　とにかく今すぐ止めイッテエエエ」

ハードコースは看板に偽りなく、まことにハードなコースだった。揉むというより握りつぶすといったパワフルな衝撃が私の肩と言わず背中と言わず襲った。十代の、まだ凝りの真髄をしらぬ若い肉体には理不尽な暴力でしかなかった。

私の断末魔の叫びにさすがの魔王も仏心を出したか、数分で中断してくれた。逆に言えば数分は様子を見ていたということである。あの体には何色の血が流れているのだろう。

ようやく解き放たれた私は、生まれたての仔馬よりも震えた足取りで脱出した。マッサージを受ける前の方が身も心も絶対に健やかだったと断言できる。

「どうだ、その身で味わった、はーどこーすとやらは」

「見ればわかるでしょう……修羅の味でした」

魔王は特に驚くでもなく、あ、やっぱりとでも言いたげな顔で見下ろしていた。私はやはり生贄だったようだ。

この魔王め覚えてろ、と歯噛みする思いとは反して足腰ががくがくしている。今なら豆まきの豆を食らっても撃破されかねない。

私はずるずると這いつくばるようにマッサージチェアから離れて、それからふと気づいた。その存在感に惹かれて目に入らなかったが、椅子を置くには位置が不自然だ。ソファと重なるような、ともかく

適したとはいえない場所にある。

「どうしてわざわざこの場所に？」

邪魔にならないかと問えば大いに邪魔になるのだと魔王は答えた。

「だが障りあるゆえ致し方ない」

そう魔王が指さしたのはコンセントからピンと伸びたコードだった。なるほど電力を得るのにコードの長さが足りないのか。

「延長コード使えばいいのに」

「なに……？」

「持ってないなら、うち何個か余ってるからあげますよ」

あっさり私が口にした一言に、魔王はうむうむと満足げに頷いていた。うちよりもはるかに大きなテレビがあり、贅沢を極めたマッサージ器を所有し、ブルーレイまで導入しているくせに延長コードの恩恵に預かることなく過ごしてきたようだ。それは地味ながらもなかなか不便だったことだろう。

「私に用ってこのことだったんですね」

酷い目に遭わされたものの、案外簡単にカタがついたなと私は安堵した。が、魔王は頷いてはくれず、そのような些末事ではないと断じた。

「そなたに任ずるはこれよ」

魔王は無造作に置かれていた紙袋をつかんだかと思えば、ひっく

り返して中身をばらまいた。様々な色紙をぐしゃりと握りつぶしたような塊が、いくつかテーブルの上に転がりながら落ちる。

「なんですかこれ」
「見てわからぬか」

わからないから聞いている。私の目には紙くずにしか見えないのだが、ゴミと言ってはいけない空気を感じた。

「物知らずな。折鶴も知らぬとは」
「折鶴……折鶴!?」

思わず二度見した。つまみ上げてよく観察してみれば、嘴らしき鋭利なものが飛び出しているし、三角っぽい部位は羽に見えなくもない。折鶴は知っているが、こういうタイプとは初めて出会った。

折鶴という噂の物体を見つめながら、うわごとのように繰り返す。

「折鶴……」
「然様、折鶴」

本人が折鶴だと譲らないのだから折鶴なのだろう。

しかし初対面でこれを折鶴と認識できる人がいるだろうか。折鶴と申します、と自己紹介されても尚疑う完成度である。

魔王の主張通り、仮にこれを折鶴だとしよう。しかしこの鶴は決して羽ばたくことはない。余命わずかの瀕死の鶴。むしろ折られ鶴といった惨さがある。

そもそも何故、魔王ともあろう者が折鶴を作っているのか。

「どうしちゃったんですかこれ」

どうして急に鶴を折ってるんですか、どうしたらこんな鶴に仕上がるんですか、と二種の思いを込めた問いになってしまった。前者として受け止めたであろう魔王は重々しくこう言い渡した。

「カオリよ、そなた千羽鶴という呪術を知っておるか」

呪術。

「知ってるはずでしたが急にわからなくなりました」

ならば聞くがいい、と語りだした魔王の口からまず飛び出したのは、やはりと言おうか三枝さんの名前であった。

主に犬がらみで、普段からこの二人には交流がある。どこで覚えたんだ、という魔王の知識の半分は三枝さん経由であるといってよいだろう。妙なことを吹き込まれているのか、魔王が独自の解釈で原型を歪めているのかは定かではない。

千羽鶴を知ったのは、たまたま魔王が回覧板を回した時に居合わせた町内会の役員と三枝さんの会話であったらしい。

三枝さんは顔が広く、家に人を招いては麻雀やら酒盛りやらに興じているのだが、その仲間の内の一人である山形さんという方が、先ごろ体調を崩して入院したのだという。彼はまめな人物で、親しい誰かが入院すると千羽鶴を手によく見舞いに訪れていたのだそうだ。それで今度は我々が彼に千羽鶴を、という提案がなされたらしい。

いい話だ。

いい話には違いないのだが、山形さんと何の面識もない、たまたまそこに居ただけの魔王まで頭数に入れることはないんじゃないかと思った。

半ば巻き込まれる形で千羽鶴の会に加えられた魔王に与えられたノルマは百羽。

なに簡単だからと年寄り連中に丸め込まれて折り紙を押し付けられ、手引き通り折ってみたところ、考えていた以上に難航し、今に至るというわけである。

「一羽一羽に積年の恨みと魂を吹き込んで折るのであろう。これを呪術と呼ばずしてなんと呼ぶ」

「治癒を願って折るんですよ。積年の恨みを搭載した鶴千羽ってなんなんですか恐ろしい」

とはいえ、これは確かに呪術を感じさせる。

私は魔王作・ひしゃげた折鶴を見下ろした。聞けば魔王は、折り紙という遊び自体が初めてだという。幼い頃から親しんでいる身にとっては定番の折鶴も、触れてこなかった者にしてみれば複雑怪奇かも知れない。

私は一枚の赤い折り紙を手に取った。

「慣れてしまえば簡単ですよ」

しばらく折る機会はなかったが、それでも体は覚えているものですいすいと指が動く。瞬く間に一羽の鶴が卓上に舞い降りた。

横に並べてみると先ほどの鶴がいかに悲惨であるかが浮き彫りになる。これが千羽集まった様を想像しかけて、即座に振り払った。

魔王は私の折鶴を見て瞠目した。

「何とそなた……」

驚愕の色をのせた瞳が、私と赤い折鶴を交互に見る。それから魔王は感じ入ったような息を吐いた。

「人間ひとつくらいは取り柄があるものよ。天もそこまで無慈悲で

はないとみえる」

一瞬褒められたと錯覚しそうになったが壮大に貶められていた。私にだって、他に取り柄くらいある。もっと沢山あるはずだ。今すぐ思いつかないだけで。

「折鶴くらいじゃ取り柄にカウントされませんよ。教えますから一緒に折りましょう」

ソファにではなく絨毯に直接座ると、魔王もそれに倣って隣に腰を下ろした。工程を追いながらの作業は、向かいよりも横に並んで確認するほうがわかりやすい。

それぞれ一枚ずつの色紙を手にして、私と魔王は最初の一折を手掛けた。

「まず、こうです」

「こうか」

「そうじゃない」

初手から躓いた。

ただ半分に折るだけだというのに、早くも豪快に三角形を破壊してきた。紳士のポケットから覗くハンカチーフのような形を成している。角と角を合わせようという意識がまるでない。どうして見ながら折ってこうなるんだ。

私は再び魔王の目の前でゆっくりと三角を折った。線に沿って、なるべくズレのないように、と口で説明しながら。

魔王はふむふむと大層生真面目にうなずいているのだが、先ほどもその顔だったことを考えるとあまり信用できない。

じゃあもう一度、と促すと、魔王は先ほどとそっくり同じハンカチーフ崩れをその手で生み出した。今のやり取りからいったい何を

学んだの。

結局魔王が三角と呼べる形に折れたのは、六回目の挑戦ことだった。まだ序盤も序盤、ＲＰＧで言えばまだ家から出ていない地点である。この先、口で説明するのもややこしい繊細な指使いが求められる難所が待ち構えているというのに、この調子で大丈夫なのだろうか。

正直、魔王に教え込むより私が代わりに全部折った方が断然早いような気はする。しかしそれでは魔王のやる気を削ぐことになろうし、私も百羽分代行していられない。

それに下手でも歪でも、相手への真心を込めてこそ千羽鶴であろう。

果たして魔王にとっての山形さんへの思い入れがいかほどかということは、この際置いておくとする。

失敗を物語る皺だらけの色紙を見ながら私は魔王に尋ねた。

「いつまでに用意するんですか」

「早急に。時がない」

早くしねえと先にお迎えが来ちまうかも知れねえだろ？

そう言った三枝さんは、げらげら笑いながら魔王の背中を叩いたという。

お年寄りジョークは、スナック菓子感覚の軽い歯触りで死に踏みこんでくるので笑うに笑えない。尻の青い若造にはまだその領域は遠すぎる。

お迎え云々は冗談としても、確かに早いにこしたことはない。完成はしたものの、すでに病院から出たあとでは意味をなさないだろう。

魔王はとにかく鶴を百羽用意することしか聞いておらず、山形さんとやらがどのような病状なのかも、いつ退院するのかも、ついで

に言えば山形さんが誰なのかもわからないのである。ちょっとわからな過ぎるんじゃないか。

かくいう私もまた、実のところ山形さんが誰であったか思い出せない。たぶん山形さんにとって我々も「誰だ」状態であろう。双方がよく知らない関係の中、なりゆきで折られる千羽鶴の効果やいかに。

頭を捻ったところでフレッシュな答えが出る気はしない、考えるのはよそう。とりあえずいけるところまでいこう。

そう私が腹をくくって腕まくりした時である。

魔王宅の呼び鈴が鳴った。

それも尋常じゃない勢いで。ピンポンのポンの出番がかき消されるほど激しく連打されている。

私はけたたましさにぎょっとした。そして間をおかず、とある予感が背に触れた。

悲鳴のような音色は途切れない。

魔王は眉をしかめながらも玄関へと向かった。運び屋であろうかと呟きながら。違う、それ絶対宅急便じゃない。

私はハッと我に返って、先を行く黒い背中を追いかけた。魔王は扉にべたりと顔を寄せ、覗き穴から外を窺っている。

「魔王さん。多分その客は、」

そう私が後ろから言いかけた瞬間。

「娘を返したまえ！」

大変馴染みのある声が、悲壮感にまみれながらドアの向かうから響いて来た。意外性はなかった。九分九厘、間違いないだろうと予感していた。コンビニから、我が父が帰還してしまったのだ。

「隠しても無駄だぞ！　ここにいるのはお見通しだ！」

ちょっと隣に行ってくると言伝を残して来たのだからお見通しも何もない。扉越しの絶叫は続く。

「夏織ー！　私だ！　お父さんが来たぞ！　安心しなさい！」

何やら相当に盛り上がっているのである。

父は声を張り上げてはノブをつかんで揺らし、ドアを荒々しく叩いた。さながら取り立て屋か痺れを切らしたＤＶ夫。普段は、本を読むか眼鏡を拭くかくらいの大人しい人だというのに、家族の危機となれば変わるものだ。父として頼もしい限りだが今は誤解と思い込みという不幸しかない。

玄関前の蛮勇は続いている。

この間ずっとピンポンは鳴りっぱなしである。リズムとしては、読経が佳境に入った時の木魚と考えてもらえれば良い。木魚ならありがたいビートも、インターホンではまごうことなき騒音。

「ここを開けなさい！　早く！　今すぐに！」

「お父さんとりあえずピンポンやめてうるさい」

「夏織！　生きてたか！」

「死ぬ要素ないよ！　だからピンポンやめてって！」

それでようやく凶器のような呼び鈴責めは止んだ。鼓膜がまだじんじんとしている気がするのは、残響というやつだろうか。隣近所がある程度離れた田舎で良かったと心から思う。

私は向こう側の父に聞こえない程度の声で家主に詫びた。

「すいませんうちの父が……」

「そなたの父は騒がしい男だな」
「普段は冷蔵庫より物静かなんですよ」

隣人による理不尽な特攻にもひるまず、顔色ひとつ変えない魔王のスルー力も今は救いだ。場合によっては警察を呼ばれていてもおかしくない。

一応私の身内だと判明したことで魔王の警戒はとけたらしく、その手がドアチェーンにかけられようとしていた。

そこで私は部屋でのやり取りを思い出した。

「家に入ってもらう前に延長コード持ってきてもらいましょうか、さっき言ってたやつ」

丁度よい。この無礼な振る舞いを延長コードの貢物でチャラにしてもらおうと私は考えたのである。魔王はその提案に頷きひとつで応じた。そしてその重低音でもって、礼を逸した来客に告げた。

「よくその不出来な耳を傾けて聞くがいい。延命の細引きを余に差し出せ。さすれば生きた娘に会わせてやろうぞ」

ただの脅しだった。しまったこれではまるで誘拐犯の身代金要求。訂正を入れる間もなく、扉の向こうで想像通りの声がした。

「こ、この悪党……延命の細引きとはなんだ！　聞いたことがないぞ！　さては無理難題をふっかけて私達親子の命を弄ぼうという腹だな！」
「延長コード、お父さん延長コードだから」
「え、延長コード！？」
「テレビ台のところの引き出しに入ってるからそれ一束持ってきて。あとピンポンやめて」

父はなんで延長コード、首でも絞めるのか、とどこまでも悪い想像を膨らまてブツブツと言っていたようだが、娘の命には代えられないとばかりに走り去っていった。私の命と延長コードがイコールの価値であると考えると、少しばかり心に秋風がふく。

魔王は相変わらず何の感慨もなさそうな瞳で私を見下ろし、二度目の台詞を吐いた。

「そなたの父はまこと騒がしい」

「魔王さんにも責任ありますからね今のは」

父はものの数十秒で戻って来た。覗き穴から見ると、肩で息をしている。一束でいいと言ったのに手には三つくらい持っていた。選んでいる暇もないほど急いでくれたのだろうが、うちから延長コードがなくなる。

「よかろう、卑しい足を踏み入れることを許す」

魔王が施錠をといた途端、隙間から父がなだれ込んできた。閉じられないよう真っ先に足で扉をガードしながら中に入るという、百戦錬磨の悪質な訪問販売みたいなやり口だったのが静かな衝撃だった。やるときはやる男、瀬野春彦。私の父です。

「無事だったか夏織、何もされてないか」

青ざめた顔の父は私の姿を見るなり肩にしがみついた。

「大丈夫だよ、何もされて……」

言いかけた途中、マッサージのハードコースによる洗礼が頭をよ

ぎる。何もされてないということはなかった。そこそこ酷い目に遭っていた。しかし話がこじれるのは間違いないので黙っておくほうが賢明。

そういう結論に落ち着いたのだが、一瞬の迷いのせいで、返事の語尾が不穏な形で姿を消してしまっていた。おかげで父の血圧がまたも上がってしまったようだった。家の中に呼び鈴がなくてよかった。

魔王はというと、私と引き換えに得た延長コードを手にしてさっさとリビングに引き上げていた。人の親のテンションをこんな風に狂わせておいてクールにもほどがある。私は適当になだめてから、渋る父を引っ張って魔王の後を追った。

魔王は予想通り、移動の自由がきくようになったマッサージチェアを動かしていた。あれほど重量感ある椅子を軽々と運んでみせるのだから、やはり只者ではない。人の子とは根本的につくりが違うのであろう。

私の隣でその様子を観察していた父が、短い声を上げた。

魔王の魔王たる力を目の当たりにして畏怖を深めたのだと私はそう思った。しかしそうではなかった。

「マッサージチェア……！」

父の目線は釘づけだ。来た時の私と同じように、いやそれ以上の関心の強さで設置され直したマッサージチェア見ている。

「お父さん」

「夏織、あれはな今年の夏に発表されたばかりのモデルで、より人の手に近い揉みほぐしを追求した」

それから父はどこのメーカーでどの部位が洗練されていて、など

とおおよそ私には理解できそうもないことを一方的にとくとくと語ってくれた。ちなみに父の仕事はマッサージ器とはなんの関係もない。つまりこれは個人的な趣味による知識である。

さっきとは打って変わって、きらきらと輝きだした眼鏡と瞳にやや及び腰になったものの、蟷螂の斧を振りかざす悲壮感よりはずっといい。私は横目で父を見た。

「乗せてもらえば」

「なに？」

多分頼めば貸してくれるよ、と更に囁く。父は明らかに動揺を示し、葛藤で眼鏡を曇らせた。

ここは憎き魔王の城であり、マッサージチェアはほかならぬ怨敵の所有物。そんなものにむざむざ身を預けられようか、という意地と、まじで乗れんのかよラッキー、という素直な欲とが父の中で激しい衝突を繰り広げているのは明白だった。

「魔王さん、父がそれ乗ってみたいらしいんですけど」

「おい、」

父の代わりにそう声をかけると、延長コードを無事コンセントにつなげた魔王がゆっくりと振り返った。傍らにいる父の身に緊張感が走ったのがわかった。

「構わぬ。ひょうろく玉、ここへ」

傍らにいる父の血圧が更に上昇したのがわかった。確かに父と呼ぶなと突っぱねたのは父自身であるが。もはやただの悪口である。ミヤマメ以下の。

しかしそれでもマッサージチェアは強い。絶対に「この野郎」と

思っているはずなのに、父の足は魔王に呼ばれるがまま近付いて行った。

とはいえやはり抵抗はぬぐえないと見える。乗る寸前になって、立ち尽くしては後ずさるなど後ろ姿が躊躇っていた。が、人は誘惑には弱いもので、結局最後には体を横たえた。

私で威力を試したことで気が済んだのか、魔王がリモコンを取り上げることはなかった。説明書とリモコンを与えられた父は、魔王の手前、厳しい顔をつくってはいたものの、レンズの奥の瞳の輝きは隠せない。

散々迷った末、父が選んだコースはリラクゼーション。解説によると、耳元から癒しの音楽が流れ、森林浴でもしているような心地よさに魅了される、らしい。私もできれば恩恵に預かりたかった。

その効果のほどは確かなようで、マッサージが始まるやいなや、父の顔面から険しさが失われた。ぼろぼろと垢すりのように剥がれ落ち、代わりに悟りを開くにも似た穏やかさが全身を包んでゆく。インドの工場長がこんな顔だった気がする。

やがて瞼は静かに閉じ、開始五分で父は眠った。

仕事に追われ、里帰りでも精神をすり減らし、さぞやお疲れだったのだろう。前門の工場長、後門の魔王、生身で戦うにはあまりに過酷。家族はあの通り、味方のようであてにならないし。

せめて今だけでも、父にやすらぎのひと時を。

私は手から落ちそうになっているリモコンをそっと取り上げて、父が立てる寝息から離れた。

と、その先には色紙を持って待ち構える魔王がいた。

まだ何も終わっていなかったことを私は思い出した。むしろスタートを切ったばかりだったことも。

「カオリ」

「そ、そうでしたね」

言葉少なに促され、私は再び鶴と向き合うことになった。どうせ寝入った父を置いて帰ることはできないのだから、同じと言えば同じだ。

ただ、完成させる前に私の精神が持つかどうか。先の長い登山を始めるような気合と心構えで息を吐き、私は色紙を手に取った。

私は一折一折、根気よく教えた。

魔王は一折一折、例外なく躓いてくれた。

一つとしてスムーズに進んだ工程はなかった。失敗の度に捨てていては勿体ないと、一枚の色紙をいじましく使い倒していたせいで、終盤に差し掛かる頃には縮緬のような手触りになっていた。なかなかおしゃれ。折り紙には全く向いていないが。

それでも腐らず諦めず続けてみるものだ。長い時間をかけて、ようやく折鶴は完成した。

お世辞にも美しいとはいえない仕上がりであるものの、鶴かどうか判定できない代物ではない。少なくとも死んでいない。全体的によれよれで、元気でもなさそうだが生きてはいる。

魔王も達成感を覚えているのか、自ら作った鶴を感慨深げに眺めている。

「できましたね……」

「うむ……」

心情としては、この満ち足りた気持ちのままパーッと打ち上げにでも行きたい。そして解散したい。

けれども忘れるべからず、これはまだ一羽目。

あと９９羽か……と現実を考えると、見えていたはずの頂上が、雲に隠れる思いである。

ふ、と静かに理解が舞い降りる。

無理だよ。絶対無理だよ。入院とか関係なく、寿命が山形さんを迎えに来るよ。

そんな思いに駆られて、私は次の色紙に手を伸ばした。そもそもが方向性のよくわからない好意の産物である。全部とはいかないが、少しくらい助勢しても構わないだろう。

私が猛然と折り始めたのを見て、魔王もつられるように作業にとりかかった。横目で見ていると、一度完成させている分だけ先ほどよりましになっているが、ちょいちょい危なっかしい。

魔王も別にふざけているわけではなく、顔つきが邪悪に歪んでしまうほどに真剣に取り組んではいるのである。その気合が、結果になかなか結び付かないだけで。

私は魔王の鈍い手の動きに目をやった。器用不器用は生まれついてのものだとしても、彼には決定的な欠点がひとつある。しかしそれについて言及していいものかどうか。

その時、魔王の手が突然止まった。追って、閃きを含んだ呟きがもれた。

「爪か」

「えっ」

思考を読まれたかと思わず頭を押さえてしまった。

そう、指先を飾る長い爪はいかにも魔王らしくあるが、細かな作業に向くとは思えない。これで米をといだり野菜の皮を剥いたりよくできるものだと日頃から感じていた。

「余の爪が、この呪術を阻んでいるのか」

「まあ、うん、全部の原因ではないですけど、そうですね」

「ならば削り落とすのみ」

「決断早っ」

言うが早いか、魔王はどこからか出してきた爪切りでパチパチと切り始めてしまった。そんな簡単に切っていいものなのか。しきたりとか魔力とか威厳とか、よくわからないがしがらみがあるのではないか。

私がおずおずと問えば、魔王は涼しい顔で、明日には伸びると答えたのであった。さすが魔王は爪まで生命力が強い。

爪を切った新生魔王の効率は、ほんの少しましになった。不器用には違いなかったが、爪が邪魔にならないだけスピードが上がった。私が十羽折る頃、魔王がやっと一羽くらいのペースだったのが、二羽折れるか折れないかほどになったのである。二倍の速度と思えば目覚ましい成長といえよう。

ただし肩に入った力は抜けないらしく、顔は恐ろしいままだ。一折一折の気合が尋常ではない。本当に、呪に近い念を込めて折っているのではあるまいな。

「ちょっと休憩しましょう！」

おそらく目標数の半数に達したであろう折鶴が、目の前に積み重なっている。長いこと座っていたせいか、私は足のしびれや疲労に襲われ、限界を迎えていた。

折鶴を数える気にもならずそのまま後ろにひっくり返る。よそのお宅でみっともないとは思うが、疲れには勝てない。魔王は私を目線で刺した。

「この程度で音を上げるとはだらしのない奴」

「この程度もなにも魔王さんの十倍は折ってますよ……」

発声は弱々しくなったが、その言葉は魔王の胸にしっかりと届いたようだ。魔王はすっと立ち上がり、水分をくれてやろう、ありが

たく思え、と吐き捨てて台所に向かった。
言われてみれば家に上がってから、茶の一杯ももらっていないことに気づいた。そりゃあ喉も乾くし疲れもするだろう。今日の魔王はいつにも増して人使いが荒い。
仰向けの視界には天井が見える。白い広がりをぼんやりと見上げていると、チラチラと何か色が動いているのが目に入った。疲れ目だろうかと両手で目をこする。が、消えることなく色は、ひとつ、ふたつ、みっつ、と数を増しながら羽ばたいている。小さな羽を動かして。
私は飛び跳ねるように身を起こした。

「飛んでる！」

先ほど折った鶴の群れが、リビングをひらひらと舞っていた。それも少し不格好で、嘴のよれた鶴ばかり。
明らかに魔王の折った鶴だけが、翼を得て本物の鳥のごとく自由に飛んでいる。
慌てて捕まえようとしても、不細工な鶴の癖に俊敏で、触れることすらできない。
私の声を聞きつけて、匙を片手に駆け付けた魔王もまた同様であった。ちっとも捕まえられない。初めて虫捕りに来た都会っ子のようにかすりもしない。

「ちょ、これなんなんですか！」
「知らぬ。身に覚えがない」
「いや魔王さん念こめすぎたんでしょ！　あ、そっちいった！」

どの鶴もすいすいと手を避けて、リビングを華麗に飛び回った。
軽やかに舞いながらも、人を挑発するように目の前を通過する様は、夏場の蠅のように鬱陶しい。

我々が鈍いという以前に、鶴があまりにも早すぎる。捕まえたと思いきや、それは残像。実際は一メートルも先にいたりする。だんだんと腹が立ってきた。

頭に血が上ったまま必死に追いかけ、手を伸ばし、飛び上がっている内に、足元に注意を払うという意識が私の頭からするりと抜けた。

だから、思い切り踏んでしまったのだ。

リモコンを。

かかとが踏みしめたと思しき箇所は奇しくも覚えのある。

ハードコース開始ボタン。

あ、と思う間もなく、寝込みを襲われた父の悲鳴がリビングにこだました。

折鶴の一行はどさくさに紛れて魔王宅から脱出し、空へと消えていった。行方が案じられたが、山形さんの病室に自力でたどり着いたそうである。飛び去った分は千羽の内にカウントされないという三枝さんルールが発動してしまったので、結局魔王と二人でまた折った。

そして未だ、山形さんが誰かはわからないままなのであった。

真贋の巻

父の休暇が終わった。

あっという間の五日間を過ごし、父はよろよろと仕事先赴任先に戻って行った。

本来心身に安らぎをもたらすはずの休暇が、父の残り少ない体力ゲージを削り取ってしまったのは言うまでもない。帰って来た日よりも更にげっそりとして、どことなく顔色もワントーン悪くなっていた。

これまで幾度も見送って来たが、あれほど家を不安そうに去っていく父の姿は見たことがない。

隣に気を許すんじゃない。根城に単身で乗り込むのは勿論、招き入れるなんて言語道断だ。次は戦争だ。

マッサージハードコースの洗礼を受けたあとの父の言葉である。珍しく一人で缶ビールを五本開けたあたり、魔王の残した爪痕の大きさが窺える。

家族を残していくのがよほど心配だったのだろう、去り際にも、何かあったらすぐに連絡しなさい、母さんたちも、夏織も、工場長もだ、と血走った眼で父は念を押した。

工場長の分までまとめて語り掛けられても請け負えないので私達も困る。心意気を伝えるにはインドは遠い。未だにあれから工場長とは連絡がつかないのだそうだ。魔王との接触が痛ましいものになったただけに、せめて工場長だけでも父に優しい出来事になって頂きたい。

父が去り、瀬野家は再び三人暮らしに戻った。幸か不幸か、大黒柱の不在に慣れた私達にとってはこちらが日常と言っても差支えない。父は傷つくかも知れないが、いなければいないように上手くまわるようになってゆくものだ。女だけでも大抵のことは何とかなる。

が、やはり男手が欲しくなる時もやはり来るわけで。
例えば今のように、瓶の蓋と格闘している時だとか。
「だめ？　開かない？　滑り止め巻いても？」
「だめ。びくともしない。これ無理だって。手首ねじきれそう」
「湯せんで温めて開けるっていう方法もあるらしいよ」
「それ最初にやった」
力を込めすぎたせいで右手がじんじんと痺れる。一向に出てこない筍の水煮を睨みながら、私は瓶をテーブルに返した。
下処理まで済ませた筍を知り合いから頂いたそうなのだが、どう閉めたものか、この瓶の蓋が恐ろしく固かった。最初に祖母が開けようとして断念し、次に母が挑むも結果は変わらず、若い力に期待しようと最後に私に託された。
とはいえ私も特別腕力に自信があるわけではない。何しろ何の筋肉も鍛えられない活動皆無の茶道部所属である。当然蓋が動いてくれるはずもなく、様々な知恵を絞ってみたが全く効果がない。
私は匙を投げて座り込んだ。代わりに私のものではない腕が瓶へとするする伸びていく。
「もう叩き割ろっか」
母の提案は時々やんちゃである。
「待って、手段が乱暴すぎる」
「だって今夜土佐煮食べたい」
そう言うと母は両手で抱え上げる。いつスローインよろしく瓶を床に叩き付けるか気が気ではない。貯金箱でもあるまいし、それは最終手段でお願いしたい。
「春彦さんがいてくれたらねえ。開けてもらうんだけど」
私達のチャレンジを見守っていた祖母が惜しむように呟いた。母がそれに対して、あははと声を上げて笑う。
「お父さんいても開かないわよきっとー！　むしろ無理して蓋より肩外しそう」
それは私も思ったが、あえて言わなかったというのに遠慮のない

人である。
「男手は男手だけどちょっと力仕事向きじゃないから」
と、更に明るく父を貶めた母は「あ」と閃いたような顔で私を見た。そのまま屈託のない笑顔で、瓶を私に押し付けた。
「魔王さんに開けてもらってきてよ」
「ねえその便利屋扱いやめない？」
先日も私の家族は、かの隣人を呼びつけたばかりである。
学校から帰ってきたら、魔王が居間の蛍光灯を取り換えていたのでびっくりした。脚立が壊れていたからだそうだが、それにしても気安い。ついでとばかりに玄関の電球まで交換させられた魔王は、お礼のカステラを召し上がって帰って行かれた。何を隠そう、私のカステラだった。
「いいじゃないせっかくお隣同士なんだから助け合わないと。美味しくできたらおすそ分けしますってお伝えしといて」
母に強引に背を押され、私は筍を瓶詰とともに家を追い出された。あれほど口酸っぱく説かれたというのに魔王を家に招き入れるわ、娘を単身で住処に送りだすわ、父の教えは何一つ守られていない瀬野家である。

隣人の人間離れした力については私もよくよく心得ている。私たちでは太刀打ちできなかった蓋の一つや二つ、魔王にかかれば造作もないだろう。こんなことでいちいち手を借りるのも気が引けるが、追い出された以上頼るほかない。
「こんにちはー」
普段であれば「何奴」とすかさずドアに詰問されるというのに、今日はインターホンを押せども応答がない。留守にしているのだろうか。
「すいません夏織ですー。ちょっとお願いしたいことがあるんですけど」

念の為もう一度呼びかければ、今度は反応があった。例の疑り深い誰何の声より先にドアノブが回ったのだ。驚くことに、開かれたドアにはチェーンもない。

あの施錠の鬼がワンクッションもなく客を出迎えた、と私は一瞬呆気にとられた。しかし施錠の鬼は更に呆気にとられる台詞を私に向かって放った。

「そなたカオリか」

「えっ。ええ？　ええ」

言語機能が困惑して返答が「え」のみになってしまった。

ドアを閉じた段階ならまだわかる。全開にして目視を済ませた後に問いかけられるとはどういうことだ。昨日一昨日は顔を合わせる機会がなかったが、まさかのその二日で人の顔を忘れたのか。

私が抱える戸惑いという荷を、魔王はほどくどころか低い声で上乗せした。

「名を名乗れ」

思わず声がひっくり返る。

「名を？　名乗れ？」

今更？

訪問した時点で名乗っている上に、先ほどカオリかという確認作業を終えた今、更に？

いよいよおかしい。風呂場で頭でも打ちましたか。

私も相当訝しい顔で魔王を見上げていたと思うが、私を見下ろす魔王の目は更にその上を行っていた。名乗らねば斬るとでも言わんばかりの眼光と睨み合うほど肝は太くない。

「瀬野夏織と申します」

私は言われるがまま、面接のようにお辞儀付きで名乗った。顔を上げてちらりと窺うと、どこか疑心の晴れない目の色がこちらに向いている。

「カオリ」

「はい」

「そなたいつ魂分断の術を会得した」
「してませんよそんな術」
そしてこの先会得する予定もない。
魔王はその巨躯を折り曲げて顔を近づけた。それから検分でもするように私を睨めつけてから、ふうむと一つ息を吐いた。
「まあよかろう。入れ」
「いや上がるつもりは」
「入れ」
私はただ瓶の蓋を。
しかし瓶の話題など差し込む暇もなく、私は魔王邸に半ば引きずり込まれる形でお邪魔することになった。予定外ではあるが、この上司が言葉足らずな上に強引なのは今に始まったことでもない。

魔王は目配せをして私をソファに腰掛けさせた。その向かいに魔王が陣取る。
そう、座るという寛いだ雰囲気ではなく、陣取るという言葉がふさわしい威圧感だった。普段から気さくな雰囲気かと問われれば「いいえ」のボタンを１０連射するところだが、今日はいつにも増して穏やかではない。目が据わっている。
知らぬ間に何か仕出かしてしまったのだろうか。私は寄る辺ない気持ちで筍の瓶を両手で抱いた。不安な気持ちのせいか、カサカサと妙な音まで耳が拾う。屋内で風など吹くわけもない。まさか大きな虫でも這っているのかと床を見回したがそれらしいものはなかった。ささいな違和感を遮断するように魔王の低い声がした。
「先ほどそなたから電話が入った」
「電話？」
私はきょとんと目を瞬かせて、それから首を捻った。
「してませんけど……」
垂らされた前髪の隙間から銀色の目がぎらりと光る。
「嘘を申すな。余に助力を求めたではないか」

「ほんとにしてませんよ電話なんて。何かの間違いじゃないですか？」

全く身に覚えがない。母か祖母と勘違いでもしているのかと一瞬考えたものの、さっきまで瀬野家は総出で筍の水煮と格闘していたのである。誰も魔王と連絡など取っている様子はなかった。ある意味、こうして頼み事をするならばむしろ取れという気はする。

けれど対峙する魔王の表情は和らがない。詰問は続く。

「ならば何用で参った」

「あ、ちょっとお願い事が」

やっと本題に入れる。私はやや前のめりの姿勢で瓶詰を披露しようとしたのだが、魔王の方がわずか早かった。

「そら見るがいい。やはりそなたではないか。誇りをかなぐり捨て愚かに這いつくばり縋りついてきたのであろう」

ふふん、と魔王はどこか勝ち誇ったような笑みを口の端に乗せた。誰がいつ瓶の蓋ごときで愚かに這いつくばってきたというのか。だが魔王は断定して譲ろうとしなかった。

「電話って、どんな電話だったんですか」

いたずら電話でも受けたのではなかろうか。

今では殆どなくなったが、取った直後に切れたり応答がなかったりといわゆる無言電話に悩まされていた時期が私にもあった。一度始まると、相手が飽きるまで続くのが厄介な点である。我が家の場合、苛立ちのピークに達した母が「次かけてきたらお前の眼球で卓球するぞ」と叫んだ挙句、受話器をメンコのように叩き付けて以来、途絶えた。

記憶を辿っているのか、思案顔の魔王は指先で顎をなぞった。鶴を折る際に切り揃えられた爪は今やすっかり禍々しい長さを誇っている。すぐに伸びるという弁は嘘ではなかったようだ。やがて爪は顎から離れ、私の方を指し示した。

「カオリ、そなたが」

「私が」

「大層取り乱した様子で」
「取り乱した様子」
「これに限らず落ち着きがないのはそなたの常であるが。全く嘆かわしいことよ」
「ここで説教はいいので続きを」
風向きがよからぬ方へと変わるのを制し、私は先を促した。魔王は一度私を冷ややかに見つめた後、視線を切った。
そして、静かにこう告げた。
「至急、１００万ほど用立てて欲しいと」
「詐欺だー！」
人は驚いた時、言葉を失うか、自然と腹から声が出るものだ。本日は後者だった。私のやけに正しい発声が耳障りだったのか、眉間にわずか皺を寄せた魔王は騒々しいと言った。
「騒々しくもなりますよ。詐欺ですよ。お金騙しとられるんですよ」
誰もがよく知る、世にもポピュラーな詐欺である。オレオレ詐欺だの振り込め詐欺だの名称は様々な変遷を辿ったが、中身はそう変わらない。電話で相手の家族や知人になりすまし金品を奪う。当たり前だが悪質な犯行だ。
私がまくしたてると魔王の顔はますます怪訝なものになった。
「カオリそなた詐欺を働くまで堕ちたか」
「なんで私か！」
思い余ってテーブルを殴ってしまった。とんでもない濡れ衣を頭から被せられたものである。
連日のようにニュースで取り上げられ、回覧板でも注意喚起のお知らせが配られるなど、周知は徹底していたはずだった。
これだけ騒がれているのに被害が後を絶たないとはと報道の度に首をかしげていたのだが、今まさにその実例がここに。忍び寄る犯罪の足音に顔が自然と強張った。
「いいですか魔王さんは騙されるところだったんですよ」
「馬鹿を申すな。人間風情に余が出し抜かれるはずもない」

年寄りの口車に乗せられて鶴１００羽折らされたのは一体誰だったかを少し考えた方がいい。

「だいたい考えてもみてください。私が魔王さんに１００万もの大金を電話一本で都合させるわけないじゃないですか」

魔王に返す当てのない借金。世間に極力手を出してはいけない悪質な消費者金融は数あれど、それを上回るリスクに満ちた選択肢である。臓器を売る以前に魂を差し押さえられること請け合い。

有り得ない、と主張する私を見つめる魔王の目は秋風よりも冷えている。

「そんなことはわかるまい。人間という生き物は差し迫ればどのような真似もする」

魔王の目線が逸れた。その先には沈黙している電話機がある。

「電話口のカオリは申していた」

「だから私じゃないというのに……何て？」

「商談相手の車で横転事故を起こした上、その伴侶を孕ませたと」

「よくそれ信じましたね」

むしろ何故信じた。もしかして、と判断を迷わせる要素はどう聞いても皆無。おとい来やがれと叩き切っても罰は当たらなかったろうに。

「事故はともかく孕ませたのあたりで疑って下さい」

「さてはそなた本人ではなくひょうろく玉が起こした不始末かと」

「う、うちのお父さんはそんなことしないもん！」

カッとして声が上擦ってしまった。

それにしても盛りすぎた感のあるその不祥事、始末をつけるのに果たして１００万で済むのだろうか。

「ところで、何で私だと思ったんですか？　名乗ったんですか？」

落ち着いて考えてみると気味が悪い。こんな詐欺を働くような輩に素性や魔王との関係を把握されていることになる。どこから漏れたのだろう。田舎は都会に比べて警戒心がゆるくプライバシーに疎いせいか、個人情報は守られにくいのかも知れない。

「ふむ。最初の第一声は」
少しばかり不安げな私の問いかけに、魔王は淡々と返す。
「もしもし俺だよ俺、と」
「ねえ本当に何で私だと思ったんですか」
一人称おかしくないか。
更にいえば、時々言葉遣いが乱れる自覚があるとはいえ、三枝さんでもあるまいし魔王に対してここまでフランクな呼びかけは私にはまだできない。
魔王はよく見せる例のドヤ顔で「勘が働いた」と謎の発言を残した。いや、確実にその勘、休暇を取っている。
「それだけで私だと判断するのはあまりにも、」
そう言いかけたところで、魔王はぴしゃりと「それだけではない」と断じた。
「一向に名乗らず俺を繰り返すゆえ、カオリかと問えばそうだと答えた」
何のことはなかった。敵が巧妙でも入念でもなかった。獲物が自分から罠に飛び込んで行っていただけのことだった。
「カオリそなた男のような声であったぞ」
「カオリ違う」
ずいぶんと野太くガサついた声だったという。それは男のようなではなく男だ、間違いなく。違和感はなかったのかと詰るように言うと魔王は小首をかしげて見せた。
「風邪を激しくこじらせたと」
「相手も攻めますね……」
聞くところによると、急に過剰な女言葉になったらしい。設定に無理が生じても尚も諦めず食らいつくとはなかなか根性があるが、商談相手だの孕ませただのシナリオの修正を図れなかったあたり、お粗末と言わざるを得ない。しかし今回、騙される側のお粗末のレベルがカンストしていた。

――どうしよう、もう駄目かもしれないわ、わたし、ああ、わたし
（泣き出す）
――無様に取り乱すでない。這いずりさんが来るぞ。
――え、は？　這いずりさん？
――そなたカオリであろう。
――カ、カオリ。そう私カオリ。這いずりさんね、うん、そうそう這いずりさん、超知ってるわ。
――ぐずぐずと泣き崩れる前に用件を申せ。
――カオリお金が要るのすぐに要るの。お願いすぐに必要なの。
――いくほどか。
――五十万よ。すぐ用意できる？
――そのようなはした金、造作もない。
――マジで？　やっぱ百万。
――よかろう。首を洗って待っていろ。

「チョロすぎると思います」
会話の一部を聞かされた私の、簡潔かつ総合的な感想である。言いたいことは山ほどあれど、ひとまず口にしなければ気が済まない。
「丁度そなたがやってきたゆえ、その旨を述べたところで切れた」
「まあそうでしょうね切るでしょうね」
なりすましていた最中にご本人様登場のサプライズとなれば、いかに厚かましくとも押し通すのは難しいだろう。ここで更に「私カオリ？」が貫けたら、敵ながら天晴であると褒めてつかわしたい。
そして殴打したい。
「別の地から助けを求めてきたはずの娘が余の屋敷の呼び鈴を鳴らす、とは妙なことだと」
それで開口一番「魂分断の術」などと頓珍漢なことを尋ねてきたわけである。そこで騙されたと思わないのが流石は魔王。己に自信がありすぎる。
「繰り返しますがそれ私じゃないです。別人。偽物」

「同一ではないと」
「だから何度もそういっているのに」
しかし危ういところだった。
話だけ聞くとこの犯人、あまり手練れとは呼べないようなので、いずれどこかでボロを出して犯行は未遂に終わっていたかも知れないが、魔王による器の大きすぎる応答を考えると最悪のエンディングを迎える可能性も否定できない。こうして私が訪ねてこなければ、母が私を追い出さなければ、更に言えば筍の瓶の蓋がかたくなければ、魔王は大金を悪漢どもにむしりられていたかも知れないのである。結果として、私は魔王を助けたことになる。ギリギリのタイミングで隣人の貯蓄は守られた。お手柄と言っても過言ではなかろう。

だいぶ慣れてきたとはいえ、未だ魔王の生態は不思議が多い。
来客に関しては不必要なまだの猜疑心を見せるというのに、どうして電話では砂糖菓子のように甘くゆるくなってしまうのであろうか。

経済観念と同じく、警戒心のバランスも崩れているのかと遠い眼差しでマッサージチェアを眺めてしまった。私も少しは学習したので、あれに乗りたいなんてもう言わないよ絶対。
「となれば見極めねばならぬな」
ようやく騙されかけたことを自覚したのか、魔王は神妙な面立ちで頷いた。私はいくらかほっとした。人を疑わないということはある意味才能であるし長所でもある。
魔王の与しやすさがあまりにも酷かったのでつい忘れそうになってしまったが、部下の窮地に１００万もの大金を躊躇なくぽんと貸し付ける上司としての一面、これはちょっと感動なのではないか。美談として語られてもいいのではないか。ただし利率がいくらかは考えないものとする。
「そうですね。ここらへんはのんきなもんですけど、それでもやっぱり物騒になってきたので」

気を付けてくださいよ、と私は続けようとした。が、しかし、魔王の発言によって、のちに続く言葉を奪われた。
「果たしてどちらが真のカオリか」
「え」
もう一度言おう。
え？
瞠目した私を見据える魔王の瞳は、先に出迎えた時と同じ冷え冷えとした温度を孕んでいた。
「今なんとおっしゃいましたか」
「風邪をこじらせたと」
「いつの話してんですか、もっとその先、もっと直近」
テーブルを叩いて促せば、魔王は機械仕掛けのように繰り返した。
「果たしてどちらが真のカオリか」
「そうそこ。真のカオリとは」
当人を目の前にして、魔族の長は何を言っているのか。何を言ってくれちゃっているのか。
それとも今の私はまだ進化前の状態で、いずれ真・瀬野夏織という風にレアリティでもあがるのだろうか。
私の方に首を伸ばした魔王は鑑定士のように目を細め、重々しく告げた。
「電話のカオリと今ここにあるカオリ、本物を見定めねばならぬ」
事件は何も終わってはいなかったのである。
疑惑は晴れたと思っていた。この話はここでピリオドが打たれるのだと思っていた。しかし魔王の中ではまだ決着がついていなかった。
「なんでそうなっちゃうんですか！　見ればわかるじゃないですか！　どう見てもこっちが本物でしょう」
「知らぬのかカオリ。いやカオリ仮よ」
「カ、カオリ仮？」
言いにくい。

「魔の国では姿形を真似て誑かすなど悪しきものなど珍しくもない」
「魔の国の常識を語られても」
魔王の地元ではどうか知らないが、ここでは私が知る限り、魔王以外はだいたいが人間と呼ばれる種族で、羽もなければ目も光らず、擬態するスキルは持ち合わせていないのが一般的である。見たままを信じてもらうしかない。
「擬態も何もこの姿で16年瀬野夏織として生きてきた身としては、信用して下さいとしか言えないんですけど」
曇りなき眼で訴えかけてはみたものの、魔王の値踏みするような目つきは変わらない。瓜二つの相手が現れたならまだしも、何が悲しくてろくすっぽ演技もままならぬような安い詐欺師（しかも野太い声）と張り合わねばならないのか。私は腹立たしくなってきた。いや正直に言えば、結構前から腹立たしかった。
「部下の見分けもつかないとは魔王さんの見る目はどうなっているんですか」
チクリと刺せば、魔王はわずか顔をしかめた。
「そなた風情には考えが及ばぬだろうが、余のような立場ともなれば慎重さが求められる」
まず怪しさしか搭載していなかった電話に対して慎重さを発揮するすべきだった。物言いたげな視線を送ると、魔王はそれを払い落とすがごとくその場に立ち上がった。
「余の臣であるならば」
何故か大仰にマントを大きくひらめかせて。
「ここで身の潔白を証明してみせよ」
君臨した魔王は過剰なほどふんぞり返った。
「ど、どうやって」
たじろぎ答えると、見下ろしたままの魔王は瞬きを一つ返した。魔の色を乗せた目が思いあぐねるように宙をなぞる。威勢よく口走ったものの、具体的な案はなかったようだ。
魔王の視線が天井にはりついてから数秒。やがてゆっくりと落ち

着きを含みながら下りてきた。
「カオリ、そなた好む食物は何か」
なるほど。本人である証明として質疑応答は有効かもしれない。
一旦納得しかけて、ふと気付いた。
「……そもそも魔王さんは私の好きな物しってるんですか」
「知らぬ」
意味ねえ……。
「いいから答えぬか」
そうせつかれても咄嗟に出てくるものではない。私は最近の夕食の献立やよく出るおやつなど、思い浮かべては唸った。
「えーと、酢豚かな……レンコン入りの……あと、こしあんとか、カステラとか、魚卵です」
「ほう……」
返事したきり、魔王にこれといった反応はない。それもそのはず。私の好物ランキングなど魔王が知る由もないのである。
私の回答を前に沈黙していた魔王は、やおら口を開いた。
「余は鶏の串刺しを好んで食す」
聞いてもいないのに唐突に自分の好物をアピールしてきた。
「焼き鳥なら……私はネギまが好きです」
「はらわたの寄せ集めも悪くない」
「モツ串と言ってください」
基本的に塩派だが、モツ串とつくねに限ってはタレを所望する、というようなことを魔王は語った。同感だったので、私も静かに頷いた。つくねとモツ、それからレバーは少し濃いくらいのタレにたっぷりと絡めて頂きたい。贅沢を言うなら、つくねには卵黄を添えて頂きたい。
これはただの雑談である。食の好みを発表するだけの会。
ひとしきり串物に思いを馳せた後、私はおもむろに魔王を見上げた。
「これ、身の潔白に繋がったんでしょうか」

「繋がるわけがなかろう」
そうですね、と、誰のせいだ、という二種類の思いが心の交差点を行き交う。
魔王は少し考える素振りを見せてから、私に新たな問いを寄越した。
「ならば不得手な食は」
またも成果が期待できなさそうなのが来た。
「いやだからお互いに答えを知らない問答をしても」
「余が好まぬのは、」
「そしてなんで魔王さんから発表しちゃうの？」
言いたいことを言う時の魔王は、人の話が耳に入らない。こういうところは近所のお年寄りと通じるものがある。
魔王は世の終末がよく映えそうな邪悪な美貌を歪めながら語り始めた。
「いつかサエグサが寄越した異形の胡瓜のごとき作物があったであろう」
まだ夏の頃、三枝さんが幾度が袋詰めの野菜を配っていたことがあった。このあたりの家庭ではあまり育てていない野菜ばかりだったこともあり我が家は喜んで頂戴したのだが、異形の胡瓜？
「ズッキーニ……？」
形として色として最も似てると思われる野菜を上げれば、もっと悪辣な名だ、と魔王は首を振った。悪辣な名の野菜とは果たして。
その時、ズッキーニとともに袋の中におさまっていたゴツゴツとした手触りの南国の実が私の記憶を刺激した。
「あ、ゴーヤ」
「然様」
言い当てなければ良かったと後悔の念を抱かせる、それはそれは嫌そうな頷きが返った。
「ゴーヤ嫌いなんですか」
「嫌い？　は、生ぬるい。怨敵と呼べ」

たかだか野菜相手に、吐き捨てるような言い方が子どもじみていて、私は少しだけ笑ってしまった。
「ちょっと苦いけど爽やかでおいしいじゃないですか。うちはチャンプルーにして食べましたよ」
魔王は忌々しそうに顔を歪めた。
「おぞましい。自ら嬉々として貪るとは気が知れぬ」
「でもピーマン好きなんじゃなかったでしたっけ。あれも苦いのに」

「同列に語るか愚か者。あれは苦味などではない、地の果ての沼地をも枯らす、死によく似た不死の毒草よ」
結局死なのか死じゃないのかなんだか全然よくわからないが、とにかく毛嫌いしているのは間違いないようだ。実は一度、我が家でゴーヤチャンプルーを作りすぎてしまった際、おすそ分けしようかという話が出たことがあったのである。私のお弁当に大量に詰めることで立ち消えとなったのだが、今となれば本当に持っていかなくて正解だった。怨敵とまで称する対象を皿に持って運んできた日には、最悪その場で石にされる。
「して、そなたは」
ゴーヤへの呪詛を吐き切って満足したのだろうか。魔王は尊大に顎で私をさした。次はお前だと目線が促す。
「私はアボガドがだめです」
「何故」
「なんかまったりしてるじゃないですか口あたりが。野菜にあるまじき食感」
美容にもいいとのことで女性から支持を集めていると聞くが、あいにく私には当てはまらぬ話である。森のバターと世間ではもてやされているものの、少々野菜としてフレッシュさが足りないのではないか。何かと海老とタッグを組まされている点も気に食わないひとつである。海老は好きだというのにアボガドのせいで。
「あの滑らかさがわからぬとは未熟な舌よ」

苦いという理由でゴーヤを目の仇にする御仁がそれを言うのだ。説得力も裸足で逃げる。

しかしアボガドを擁護する者は皆口をそろえて滑らかだとか濃厚だとかいうので、私は少し面白くない。反論する口は自然と尖る。

「滑らかっていうか、押しつけがましいクリーミーさっていうか。呼んでないのに来る客みたいな」

「ふっ……」

魔王は短く蔑みの笑みを漏らしたあと、アボガドと海鮮との相性の良さを回りくどく説いた。西洋かぶれの簀巻き（カリフォルニアロールと判明）がなかなか美味なのだという。いつ食べたんだ、出前の寿司屋が一軒しかないこの町で。

そして魔王は最後に海老との組み合わせのハーモニーを称え、悦に入っていた。私が一番許せない組み合わせである。

焼き鳥については概ね一致したが、アボガドとゴーヤについては意見は合わない。相違を知るのは無駄ではない。お互いを知るには良い機会ではあったと思う。それは違いないが。

「あの、私が本物とわかっていただけたのでしょうか」

今の主題はそこなのである。ゴーヤとアボガドについて意見を戦わせたいわけでも串物の好みを語りたいわけでもない。

魔王の目の動きが一度だけ止まった。その後、妙に大きく発せられた「ふうむ」という唸り声に、どこか芝居がかったものを感じた。さては途中から主旨を忘れていたな。妙にゆっくりとした所作で腕を組んで見せた魔王は私を尊大に見下ろして。

「愚か極まりない応答の数々、カオリに似てぬこともない」

似てるも何も本人である。半ば忘れていたようだし、そろそろ認めてくれてもよいのではないか。

「じゃあもう本人ってことでいいですよね？」

しかし魔王は大人しく首を縦に振ってはくれない。

すでに目の前の私が本物と勘づいているのだろうが、一度大々的に疑ってかかった手前引くに引けなくなったのだろう。なし崩しに

取り消すのは、魔王としてもプライドが許さないというところか。
何かきっかけとなる、わかりやすい証明と考えて見回すと、テーブルの隅で重ねられているいつぞやの折り紙が目に入った。これだと膝を打つ。
「魔王さん、本物である私は折鶴が折れます」
我ながら妙案だ。質疑応答が身の潔白を証明する前にグダグダになるということは先ほどの一件で知れたし、折鶴なら恩を売った最近の出来事として比較的記憶に新しいだろう。何より形としてわかりやすい。
私は折り紙を手に取って、返事も待たず折り始めた。さして時もかからぬ内に一羽が完成した。
恭しく捧げると、魔王は手に取って深く頷いた。薄い唇から感嘆の声が漏れる。
「ふむ、この皺ひとつない造形美。確かにカオリ唯一の取り柄」
「唯一じゃないし。もっとあるし」
私が手ずから折った鶴を魔王が眺めているその時である。
再びカサカサと音がした。
今度は聞き間違いではない。はっきりと両耳で拾った。風の音でもない。虫が這う音でもない。それは質量を増し、存在を伝えながらやがて姿を現した。
魔王の背後に、小鳥の群れ。
いや、いつかこの邸宅から飛び去って行った折鶴の群れ。
「魔王さん、それ」
私が目を丸くしながら指をさすと、魔王は飛び回る鶴達を一瞥し、何でもないように「ああ」と言った。
魔王が無意識の内に魔力をこめてしまったせいで意思を持ち飛び立ってしまった折鶴らだったが、山形さんが退院したのち、仕事は果たしたとばかりに勝手に戻って来たそうである。病院のベッドに伏せっている間、これがずっと周囲で羽ばたいていたのだと思うとなかなか気が休まらなかったと思うが、山形さんの体は大丈夫だっ

たのだろうか。
鶴は忙しなく魔王の周りを飛び回る。魔王は片手を振ってうるさそうにそれらを払った。
「恐れずともよい。いくらも力を持たぬ使い魔以下よ」
「超ついばまれてますけど」
小さな嘴が魔王の髪といわず角と言わずつつきまわしており、主と従者という上下関係はいまいち感じられない。魔王も一応、大人しくせぬか、と凄んではいるのだが、のれんに腕押し。幼児の集団のように一つも言うことを聞く気配がないのである。常に従順であるカラスとは雲泥の差だ。半端に入れてしまった魂は、魔王も扱いきれないということだろうか。
それにしても、少々たかられすぎである。まるで夏場に放置した果物の皮と蠅。先ほどまで存在を感じなかったほど大人しくしていたというのに、と首を傾げる思いで見ていたが、鶴が興味を示しているのは魔王そのものではないことに気が付いた。
折り鶴だ。私が折ったばかりの鶴である。
魔王も同じタイミングでそれを察したのか、鶴と私に目線を投げた。
「ほう……そなたの折鶴が気に入ったとみえる」
「ほ、ほほう……？」
折鶴に見初められたのは初めての経験なので、若干反応が鈍る。誉と思うべきなのか？
「それは、良かった？」
と言いかけて、あまり良くないことだと正面の顔を見て悟った。魔王はやや微笑んでいたのである。口角を薄らと持ち上げて。
こういう表情を見せる時の多くは、魔王にとって都合が良く、私にとって都合が悪い。
弧を描いた唇は言葉を引き連れて開かれた。
「鶴は鶴に従う」
魔王は手にしていた赤い鶴をゆっくりと私に差し出した。

「そなたの鶴に従うということは、この一軍はカオリ、そなたが率いるが道理」
「ちょっと待って」
　託された途端、魔王の傍で羽ばたいていた蠅、いや鶴が一斉にこちらに飛んできた。勢いのあまり、顔面に2、3羽衝突した。
「なんでそうなるフグウ」
　口を開けば遅れて1羽突っ込んでくる。この群れ、統率というものがまるで取れていない！
「こんなの任されても困ります」
「それ決めるのは余ではない。奴らよ」
　苦み走った台詞とは裏腹に、魔王の顔には、厄介払いできた、という正直すぎる心情がありありと描かれていた。駄目だ。相当嬉しそうだ。憎たらしいほどだ。
「さ……さっきまで人のこと散々偽物とか言っておいて！」
「姦しい。そなたの鶴が怯えるぞ」
「私のじゃない！　勝手に譲渡やめて！」
　紙の翼の羽ばたきが何重にも聞こえる。巣を守る蜂の兵隊のようにぐるぐると飛んでいるのだ。このままでは本当にこのわけのわからないチーム鶴のオーナーにされてしまう。私は手の中の折鶴を魔王に放り投げて、逃げるように魔王の屋敷から出た。
「次は助けてあげませんからね！　１００万でも２００万でも根こそぎむしりとられてしまえ！」
　捨て台詞を吐きながら、そのまま家まで走って帰った。髪や肩を払い、鶴が絡みついていないのを確かめ、ほっとしながらドアを開いて数歩、コードレスの受話器を手にした祖母が慌てて飛んできた。
「ねえ大変、魔王さんがバイクで新宿のビルに突っ込んだから３０万至急用立ててほしいって！」
「詐欺だ―！」

そして数刻後、瓶の蓋を開けてもらうのを忘れたことに気付いた。
そもそも、瓶を魔王宅に置き忘れていた。
母にせつかれ引き取りに戻った私は、結局鶴にたかられるのであった。

連絡手段の巻

連絡手段は多い方がいい。

先日の詐欺騒動で私は思い知った。

詐欺騒動とは言っても『騒動』の大部分は詐欺以外のところにあったような気もするが。しかしそのあたりは魔王に生まれ直してもらわねば改善しないことは目に見えていたので、とりあえず今とれる策を講じるべきであろう。

魔王と連絡を取れる手段を、ひとつでも増やしておかねば。

私は配下でありながら、魔王に携帯の番号を伝えてはいなかった。教えたくなかったわけでも隠していたわけでもない。そもそも発想がなかった。

基本的に隣近所に住んでいれば、電話を寄越すより来た方が早い。ましてや魔王はどこのご家庭よりも近い、すぐお隣である。町内の名簿で、家に引いている電話の番号はお互いに把握はしているが、緊急の用件でもない限りそう使うことはない。

ゆえにこれまで、必要性を感じていなかったのだが、いつどこで予想だにしないトラブルが起こるかわからない。実際もう起きている。黒い羽付きの御仁がおいでになる、という人生の五本指に入る驚きの出来事がもう起きている。これより先、この激震を越えるサプライズはないとは思うが、備えあれば憂いなし。

「魔王さん、これ私の携帯の番号です」

そうメモ紙に書いて渡したのが三日前。

何かあれば連絡して下さい、と言うと、魔王はほう？　という顔で頷いた。

そして私が手にしている携帯電話そのものに目配せをした。

それに繋がるのか、という目をしていたので、そうです私に直接、と携帯電話を振って見せると、更に納得したように頷いた。

何かあれば、とは言ったものの具体的に想定していたわけではない。何かは何かだ。

例えば、私を名乗る電話が来たときとか、男の声で私を名乗る電話が来た時だとか、偽の私から電話が来た時だとか。

過ぎた事として水に流した顔をしているが、私の中のもう一人の自分が、案外なかなかどうして、許していないのだった。

授業が終わり、部活も用もなければ私は早々に帰宅することにしている。帰りたい時に帰れるほどバスは走っていないので、乗れる時に乗る。

校舎からそう離れていない停留所についた頃、携帯電話を取り出した。

基本的に、校内では開いてはならないことになっている。手帳の校則の欄に記されているのだ。勿論お構いなしに使用している生徒はいるが、私はこまめにチェックするほど見るべきものはないので、帰宅の途中に開くくらいで丁度いい。たまに母や友人から、しょうもないメールが届いていたりする程度だ。

が、その日の通知欄が、大変なことになっていた。

精々『１』や『２』を奥ゆかしくも表示している画面が、今日は『２８』と暴力的な数字を叩き出している。

しかも、普段はあまり光ることのないアイコンが。メールではなく、通話記録。つまりは不在着信。

２８件！？

何事かと慌てて開く。

親類縁者に不幸があれば、親から学校に直接連絡が来るだろうからそうではないとしても、と冷や汗を覚えた私の目が見たものは。

『不在着信：魔王（自宅）』

これが２８件えんえんずらりと並んでいた。

「ヒュウッ」
私は怯えて、一瞬携帯をお手玉みたいに放り投げてしまった。すぐに我に返ってキャッチに走ったので、落下、そして破損へ、という惨事には至らず済んだ。
改めて手にした私は、まじまじと画面を眺め、やや震える手でもう一度確かめた。スクロールすれどもすれども途切れない魔王の文字。着信履歴が、完全に蝕まれて埋め尽くされている。
控えめに見ても、巷でよく見聞きするストーカー基本の一手。誤操作でもない限り、こんな恐ろしい画面はない。自分で登録しておいてなんだが、魔王（自宅）から着信あり、というただならぬ迫力よ。
くわばらくわばら、と念じながら私は手汗を拭い、それから迷った。
ともかく魔王が、私に何やら接触を図って来たのは間違いない。すぐにでも連絡を返すべきだろう。が。
ここまでの勢いだと、逆に折り返すのをためらう。
通話アイコンの手前で、私の指は行ったり来たりを繰り返していた。
とその時、携帯が大きく震えた。
「ぎゃっ」
驚いて短い悲鳴が出た。
「ぎゃあぁ……」
更に画面を見て、ややロングな悲鳴が出た。先ほど嫌というほど見ていた文字が、着信を知らせながら踊っている。
まるで見張っていたかのごとき絶妙なタイミングに、拭ったはずの手汗が再起動した。湿る。いくらなんでも、かかってきた電話まで無視はできない。えいや、と起爆スイッチのような心持ちで通話ボタンを押した。
「も、もしも」
「カオリはいるか」

「いません」
咄嗟に豪快な嘘が飛び出した。
「なに」
「すいません手違いです、います。夏織います」
「ならば出せ」
「私が夏織です」
「ほう」
威厳はあれどもこちらの言いなり。
ああ、この調子で騙されたのだろうな……と私は改めてしみじみと実感した。声を聞き分ける、という才に見放されているのか、はたまた聞き分けようと言う意思がそもそもないのか。
機械を通しても軽減されることのない、低い低い恐ろしげな声が耳に直接問いかける。
「そなた一体どういうつもりか」
「ど、どういうとは？」
「余の再三の呼び出しに応じぬとは」
来た。
見られているわけではないのに、私の背筋はシャッと伸びた。
「主の伝令を無視とは良い度胸だ」
「いえ無視してたわけじゃなくて」
弁解を挟もうとすると、電話の向こうが凄んだ声を出す。
「現にそなた出なかったであろう」
「そりゃ出れませんよ授業中に……」
下手に音が鳴っても困るので、消音にして鞄の底に突っ込んでいる。いくら着信があっても、目にするまでは気づかない。
「いつ何時も繋がるなど、果たしてどの口が申したか」
「そのあたりはもうちょっと柔軟に考えて下さい」
そして多分、そこまで極端なことは言ってない。
２４時間いつでも応対可なんてコンビニ感覚で考えられても、私にも都合というものが。

「ところでどんなご用事で」
２８回、そして今の通話含めて２９回コールする用件とは一体何かと怖々尋ねれば、電話口は一瞬黙った。表情が窺えない分、予想がつかず緊張感が増す。見えていたとしても読めない時は全く読めない顔ではあるが。
携帯が満を持して、魔王の言葉を私の耳に届けた。
「ない」
「え」
「これと言ってないが」
何だと。
「そなたの通信機がいかほど機能するものか、見極めてやろうとしたまでよ」
ふふん、と実際は見えない偉そうなお顔が私の脳裏に浮かんだ。この台詞を意訳すると、特に用はないけどちょっと使ってみたかった、ということか。
至急申し伝えたい何かがあるわけでもなく、試してみたい、というそれだけの軽い動機で計２９回。
暇なのか？
「あのね、魔王さんあのね？」
驚き怯えた分だけ脱力し、そして怒りもわいてくる。
「普通こんな勢いで電話が来たら何事かと」
「そなたの都合次第とは使えぬな。別の手を講じる」
まだこちらが喋っている途中だと言うのに、魔王はお構いなしに遮って喋り、しかも一方的に切った。
「ちょ……魔、切れた！」
ツーツーと切断を物語る音が虚しく響いていた。かけ直してやろうかと思ったが、通話料を発生させてまで言いたいこともなかったので、唇を噛みながら携帯をしまいこんだ。
そして、いつの間にか来ていたバスに乗り遅れたことに気付いた。

魔王から携帯に連絡は来なくなった。

一方的に通話を切られた時、使えぬ、と吐き捨てていたので、恐らく見切りをつけたのだろう（ちなみにあのあと私は一時間遅れのバスに乗って帰る羽目になった。許しがたい）

私が知る限り、一番手っ取り早く当人と連絡を取れる手段だと思うのだが、お気に召さなかったようだ。

今回の問題はどう考えても、携帯という手段ではなく魔王という理不尽である。今回は、ではなかった。結構いつものことだった。

とはいえ魔王から電話が来ないからといって、何か困ることがあるかと言えばノーである。それまで番号も教えていなかったくらいだ、特別不便を感じるわけもない。

ゆえに私は、魔王に対して何かアクションを起こすでもなく過ごした。捨て置いたともいう。

別に仲たがいをしたというわけでもないが、着信履歴を埋められ途中で電話を切られ、挙句バスを乗り過ごした、というコンボはそれなりに腹立たしかったのである。

魔王との連絡についてはまたおいおい考えればいいだろうと思い、私はぼんやりと授業を聞いていた。

ちょうど私の席は窓際に位置しており、時間は昼休みを終えたばかりの五時限目。教科書の例文を読み上げる、おっとりとした現国の教師の声は、完全に子守唄だった。

うつらうつらと頬杖をついたまま船をこぎ、はっと目を覚ます。顔が正面ではなく窓の方を向いているので、目が覚める度にガラスに映った自分の寝ぼけまなこがうつる。

うつらうつら、はっ。

うつらうつら、はっ。

これを三度ほど繰り返して、うつらうつらが深く、そして支えに委ねた頭の揺れが一番大きくなった時、私は再び、はっと目をあけた。

それまでと同じく窓ガラスの自分と目が合う、はずだったのだが。

そこに見えたのは羽を持つ黒い塊。
カラスだった。
一瞬理解ができず、朦朧とした意識の中で「カラスだな……」と感想を抱いていたのだが、次の瞬間「カラス？」と目が頭が飛び起きた。
どうつかまっているものか、わずかな窓枠に足をのせて、じっとこちらを窺っている。私が覚醒して、存在を認識したことを察したのだろうか。
カラスはこちらに向けた嘴で、窓ガラスをつつき始めた。
カツコツ、なんて可愛らしい物音ではない。その穿ち方は、木肌を容赦なく抉るキツツキをほうふつとさせる激しいものだった。
本格的に目が覚めた。
目が覚めたのは私ばかりではなく、同じく舟を漕ぎに漕いでいたクラスメイトも皆一様にオールを手放した。教科書に目を落としていた教師も顔を上げた。
忙しないドアノックともマシンガンとも呼べる騒音が、神聖なる学び舎の、寝息にまみれたひと時を荒々しく乱した。教室内の注目が私に集まる。
「うるせえ！」
真っ先に叫んだのは斜め前の席の宮間くんだ。声に滲んだ怒りが、授業を邪魔されたことに対してではなく、安眠妨害であることは顔についたノートの跡が物語っている。
「瀬野お前なにしてんだよ！　授業中だぞ！」
「私じゃないよ！」
「寝れねえだろ！」
「堂々と言うな！　仮にも授業中に！」
その間も、カラスによる窓ガラス襲撃はやまない。その内教科書を読みあげていた手を止めて教師も近付いて来た。
「瀬野さんどうしたんですか」
「いや私ではなくカラスが」

割らんばかりの勢いのカラスを見て、老いた国語教師はおいたする子供をみたような風情で「おや」と言った。それから、ははは と鷹揚に笑った。

「これはまたずいぶん熱心ですねえ」

「先生そんな前向きな評価を」

さすが生徒を教育指導する立場、いきなり長所から入る。そういえばこの金子先生は、虫も殺さないことで有名だったことを私は思い出した。

通称、釈迦。

迷い込んだ蜂をも逃がそうとする許しの人がカラスを無下にするわけもない。クラスメイト達も何となく席を立ち、カラスを見てやろうと集まり始めてきた。

「すっげめっちゃつついてる」

「ちょっと怖くない？」

「気つけた方がいいよーうちの犬とばあちゃんカラスに追いかけられてさあ」

「えーどしたのそれ」

「猟師の人に撃ってもらった。じいちゃんがせっかくだからって食べた」

「食えないこともないけど、あんまり美味しくないよ」

山に囲まれて育ってきただけあって、最初怖がってただけの会話もそこそこにハードなものになってきた。カラスよ、猟師の銃がズドンと火を噴く前に帰った方がいいのではないか。

「あれ？」

と、私の前の席の五十嵐さんが、何かに気づいたように声を上げた。

「なんか咥えてない？」

その一言で、てんでばらばらになりつつある視線が嘴に集中した。指摘の通り、体の色と同化して見落としていたが、黒い紙きれのようなものを挟んでいる。

「何かな？」
そう言って、金子先生は躊躇なく窓を開けた。少しくらい迷ってもいいのでは、と私は思わず身を引いた。が、カラスは飛びかかることもなく、さっきまで忙しなく動かしていた嘴を私の方に突き出して来た。受け取れ、と言わんばかりの動作に、恐る恐る手を伸ばす。折りたたまれていた黒い紙を広げると、白いインクに彩られたおどろおどろしい字体が書かれていた。

【これならば伝令も受けとれよう／魔王】

「魔王だ」
「魔王の手下だったのか」
「魔王のお使いだ」
私が何か言うより先に、物見高く覗きこんでいたクラスメイト達が口々に納得したような台詞を吐き、そしてばらばらと席に帰っていく。
特に私から申告はしていないが、すでに知れている宮間くんや担任の口から伝わっているのかも知れない。それにしても解散が早すぎはしないだろうか。カラスには面白がって群がっていたくせに、魔王に対して興味や関心が無脂肪乳のように薄い。
なんとなく教室全体が授業に戻ろうとしている空気の中、宮間くんが私の机の前から去ろうとしない。首を傾げると、彼は窓の方に顎を動かした。
「返事待ってんじゃね？」
振り返れば、窓でじっとカラスが黒目を光らせて待っている。鳴くことも私をつつくこともないが、完全に待機の構えだった。受け取るまで引き返す様子がない。
果たしてなんと送ればいいものか。逡巡している私の視界に、制服のズボンではない柄が見えた。宮間くんではない。顔を上げると、仏のような微笑みがあった。

「瀬野さんさえ構わなければ私からも文を差し上げてもよろしいですか？」
「え？　は、はい」

【授業の妨げになるので控えて頂けると助かります／金子】

言いたいことが全て集約されていたので、私は筆をとらずそれだけ渡してカラスを帰した。

伝書鳩ならぬ伝書カラスはやんわりと出禁になってしまった。
放課後、魔王宅を訪ねたのだが「むむ」と唸り、難しい顔をして文（ｆｒｏｍ釈迦）を読んでいた。
致し方ない、次の手を考えると言っていたから、しぶしぶながらも了承したのだろう。こういう物わかりだけはいいのが、取り柄というか不幸中の幸いというか。全身の骨が折れたけど、右腕だけセーフだったというくらいの救いではある。
しかし次の手を考える、という不穏さで残った右腕まで折られそうな予感は拭えない。自分から始めたことではあるが、もう諦めてくれないかな、と思ってしまうのは私が薄情なせいではあるまい。
次の手とは何だろうなあ。
狼煙とかだったらどうしよう。
私が案じながら、自分の席に着席した瞬間、それは来た。
頭全体が押しつぶされるように重くなる。
衝撃に耐えられず、机の上に突っ伏す形になってしまった。結構な物音を立ててしまったが、小テストが返されている最中の為、教室内はざわついており、誰にも見とがめられることはなかった。
頭が割れるように痛い。みしみしと音がするような、感じたことのない圧迫感に支配され、とても顔を上げられない。
まるで孫悟空の輪のように締め上げられ、苦悶の表情で机にかじ

りつく。
息も絶え絶えになり、このまま死ぬのではないかと気が遠くなりかけた時である。
――……リ
脳が揺れた。地響きにも似た音が頭の中で反響する。
――カオリ……
振動は私の名前を呼んだ。
呼ぶという言葉がふさわしいのかわからない。耳ではなく直に意識へと囁く声は、こう続いた。
――余である……
お前か。
私はお馴染みの声音と特徴的な一人称で確信した。
冷静に考えてみれば、最初から一人しか心当たりはなかった。こんなダイレクトメールよりダイレクトな手段を講じてくる相手が人間界生まれであるわけがない。
魔王が言っていた『次の手』が果たしてどのような手であるか、私は現在進行形で知った。
――聞こえるか
一音一音が、バールで殴られるように響く。過去殴られたためしはないので誇張表現かも知れないが、それほどまでに衝撃がすさまじい。
死相の度合いが深まったところで、再び声がした。
――聞こえているなら答えよ
教えて欲しい。
どうやって。
脳内に呼びかけられること自体が人生初の体験で、白目を剥くのが関の山だというのに、当然のごとくレスポンスまで要求されても。習っていない。そのスキルは会得していない。
免許も持たない相手に車庫入れを要求するのは順番として間違っている。何より頭が破滅的に痛くてそれどころではない。

しかし尚も魔王は、私に声の限りを尽くして囁きかける。いや、バールで無慈悲に後頭部をぶん殴り続ける。

――カオリ……カオリよ……聞こえるか

聞こえてます聞こえてますから。

私は額に脂汗をにじませながら必死で念じた。頭の中に呼びかけてくるなら、こちらも頭の中から応戦するほかない。

――聞こえるならば返事をせよ

やり方が間違っていたのか、魔王には届かなかったようだ。やり方も何も、正しい念の届け方など知るか。何かを新たに始める時には、必ず打ち合わせが必要ではないか。職務怠慢だ。せめて事前にマニュアルを寄越すなどの備えが欲しかった。

――繰り返す、応答をせよ

聞こえてますって一旦やめて下さい頭割れる！

先ほどより強く、叫びにも似た心の声を放った。が、頭痛は引かない。

――カオリ、余の声を忘れたか

苛立ちを含んだその音は一層強く脳を揺らした。

耐えがたく、私は机に崩れ落ちた。

だから聞こえてるっつうの！！　むしろ忘れたいよ！！

――何だと

届いてた。

思いの強さが必要だったのだろうか。確かにどの思いよりも強く、やけくそのような熱量で念じたのは間違いない。

――忘れたいとはそなた

意思が通じたからといって、頭痛が引くわけではない。

何一つ変わらず、声は脳震盪レベルの衝撃を食らわせてくる。私は机に突っ伏しながら魔王へ念じた。

とにかく、頭が痛いんでやめてもらえますか。

一瞬の空白。

私はようやく呼吸にありつけた。煉獄から解放されたように、机

の表面から顔を剥がす。
が、直後、脳の揺れが襲った。
――どうした返答が聞こえぬぞ
再び激しい頭痛とともに、ぐしゃりと机へと潰された。
今の声は届いていなかったようだ。強く強く、それこそ力の限りに念じなければ、魔王には伝わらない。
頭が！！　痛いので！！　やめてください！！
――応答せよ
してる！　してます！　何で聞こえないんだよ！
――そなた風情が沈黙を美徳とする気か、愚かな
すげー腹立つ！！
――何だと
なにゆえ悪態だけ正確に伝わるのか。
念じ方はそう変わらぬというのに、魔王のアンテナは拾わなくていい心の叫びばかりを拾う。精度が低いのか高いのか定かではないが、効率が悪いし私にも都合が悪い。
苦悶の表情を浮かべている私に、魔王は重厚な地響きをもたらした。
――聞こえているならそう言わぬか
これ以上私にどうしろというのか。
最も熱いとされる十代の心の叫びをほぼ費やしているというのに、まだ足りぬと言うのである。貴重な若さをこんなところで無為に消費して枯れたくはない。
早く話を切り上げて終わらせよう。でなければ、頭蓋骨の形が変わってしまう。
私は抉れるほどに眉間の皺を深く刻み、こぶしを握り締め、心で吠えた。
今日はどういったご用件で！！
――聞こえぬ
ちくしょうー！

――娘がそのような口の利き方、感心せぬな
どうしてそれは聞こえるかな！！　ええいとにかく何の用ですか！！！
私の訴えの後、声が途切れた。
束の間の沈黙を破り、地響きをともなって魔王は告げた。
――そなたが寄越した毒々しい赤い果実を覚えているか。
少し前、魔王に持っていった林檎が瞬時によぎる。親戚から大量にもらい受け、隣近所へと配り歩いたことは記憶に新しい。
我が家のおすそわけが、何か魔王に災いでももたらしたのかと、私は痛みに揺れながらも息を呑んだ。
暴力的な魔王の声が頭に注ぎ込まれる。
――芋の類とともに保存せよ。さすれば忌まわしい芽が出にくい。
いわゆるひとつの生活の知恵。
「それ今する話かなあ！！？」
これまでで最も苛烈な叫びが出た。その苛烈さは、心の内を破り、念を越えた。平たく言うと、肉声として表に出た。ついでに、勢い余って椅子から立ち上がるアクションまで追加してしまった。
頭の声は止んだ。
静けさが訪れたのは、何も脳内ばかりではない。私を取り囲む、状況という名の空気も、静かに冷えた。
魔王との交信で命を削っていたせいですっかり失念していたが私の現在地は学び舎である。
授業中である。
テスト返却はとうに終わり、答え合わせの真っ最中である。
更に言うなら、今黒板の前で教鞭を振るっている歴史の担当をしている轟先生は、金子先生とは対極の存在である。
金子先生を釈迦とするなら、彼は軍曹。
魔王ほどの畏怖ではないにせよ、ヒュッと投げナイフのごとき鋭

い声が私に向かって放たれた。
「瀬野」
「はっ」
岩のような強面が教壇から私を見下ろしている。
「今しないでいつする話だ？　それともどうしても述べたい意見でもあるのか」
「ございません」
背筋は自然と球児のようにまっすぐと。冷汗は滝のように。
かつて、カラスだカラスだと砂糖にむらがるアリのごとく集まってきた級友は、誰一人として助けてくれる気配がない。
「寝ぼけてたか」
「いえあの、魔王が、直接頭に声を……」
轟先生は、いかつい顔をしかめた。
「授業中だぞ。休み時間にすませるように。まあいい、立ったついでだ。問題文を読め。問１２の、」
うまく事がおさまりそうな風向きの中、脳内の地響きが轟先生の声を遮った。
――カオリ、芋の芽は毒が
「今取り込み中なので後にして下さい！」
腹から出した声は、教室の端まで響いた。
私は高校生にもなって廊下に立たされるという屈辱を味わった。

怒りのテンションを保ったまま帰宅した私は、素直に携帯を買ってくれと魔王に詰め寄り、追い立てるようにショップに出向いたが、保護者の承諾がないと購入できませんとけんもほろろに断られてしまった。
携帯も契約できない御仁が、果たしてどうやって家を借りたのだろうかとふんわりした疑問が温泉のように湧きかけたものの、考えるだけ無駄だと埋め立てた。
そして後日、授業を受けていた私宛に電報が届いた。

【サエグサノ　イヌ　ダッソウ】と書かれていた。
授業は歴史だった。
私は二度目の廊下の風景を味わうことになった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4868bt/

となりの魔王

2015年10月18日13時45分発行